狂気の決着!! 青木真也vs川尻達也 徹底解剖!!

kamipro 紙のプロレス

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE

enterbrain MOOK

大会速報、選手ブログは携帯で! kamiproMove

2010 149

特別定価940yen

アチョーな闘いを感じたい!!

特集 映画と格闘技

宇多丸／大槻ケンヂ
ドン・フライ／ショー・コスギ
玉ちゃんの変態座談会
宇梶剛士／船木誠勝

闘う映画に殴られたい!

燃えよ格闘技

アチョー!!

角界に"PRIDEフジショック"襲来!

第2特集 大相撲と反社会的勢力

やくみつる／堀辺正史
デンジャー松永

『DREAM.15』総括
俺たちの格闘技ワールドカップ決勝戦!

青木真也
小見川道大
スコット・コーカー
谷川貞治／笹原圭一

表紙写真提供■Photofest／アフロ

強さとファンタジーが入り交じる！
特集 闘う映画

MMA & K-1

kamipro Special

MOVIE

Columns

2010.6.20-7.10
テン年代のうねり
～時代が動いた歴史的20日間～

文／橋本宗洋

「寿命が縮む」とか「命がいくつあっても足りない」なんて表現はありがちだが、本当にそう感じたんだから仕方ない。緊張と興奮と、あと何がなんだか整理がつかない感情に揺り動かされて、ジェットコースターにシートベルトなしで乗ったような気分になった。

▼『SRC13』で、マルロン・サンドロが金原正徳を1ラウンド38秒でノックアウト。フェザー級タイトルを奪取。

▼同大会で真騎士がブラジルの強豪ホドリゴ・ダムをKO。ライト級トップ戦線に割って入る。

▼『ストライクフォース』サンノゼ大会で〝皇帝〟エメリヤーエンコ・ヒョードルがファブリシオ・ヴェウドゥムと対戦。1ラウンド1分9秒、三角絞めとアームバーの複合技でヒョードルがタップアウトし、〝最強幻想〟が崩壊。

▼ヒョードル陥落の一週間後、『UFC116』で行なわれたヘビー級王座統一戦において、ブロック・レスナーがシェーン・カーウィンに大逆転勝利。新たな〝最強幻想〟の担い手となる。

▼同じく『UFC116』、秋山成勲がヴァンダレイ・シウバの〝代打〟であるクリス・リーベンと対戦。優位に試合を進めながらも徐々に体力を削られ、試合終了間際に三角絞めでキャリア初の一本負け。

▼『K―1MAX』63キロ級トーナメント、決勝に進出した新世代ファイターの久保優太と大和哲也が凄まじい打ち合いを展開。ダウンの応酬の末、大和がKOで優勝をはたし、新カテゴリーの扉を開く。

▼『DREAM15』、メインの青木真也vs川尻達也のライト級タイトルマッチは青木が勝利。開始直後にアキレス腱固めに捕えると、そのまま足を離さず1ラウンド1分53秒で川尻をタップさせる。運命のライバル対決を制した青木は「PRIDEは今日で終わり」と宣言。

この密度はなんだろうか。『SRC13』が6月20日で、『DREAM15』が7月10日だから、わずか3週間でこれだけのことが起こり、我々はそれを目撃したのである。「真騎士きたっ！　サンドロ強すぎ！」→「嘘だろ、ヒョードル……」→「えっ、秋山が⁉」&「新〝60億分の1〟はレスナー！」→「大和も久保きゅんもよくやった！」→「青木スゲェ、川尻切ない……え、結婚⁉」で3週間。これに大塚隆史を下して松本晃市郎が新フェザー級王者となった7月3日のDEEPや7月4日のパンクラス&SRCディファ大会、7月9日の『Krush』まで含めると、密度はさらに濃くなってくる。

そして、これらの大会は、それぞれがリンクしていたように思えるのである。ヒョードルの敗北とレスナーの激勝は言うまでもなく、そこに青木vs川尻を絡めれば〝PRIDE史観の終焉と新たな時代の本格的スタート〟という構図が見えてくる。

青木を頂点とする日本MMAライト級には真騎士という新たなトップ候補が誕生し、サンドロはフェザー級における〝象徴〟の一人になった。一方でDREAMには小見川道大が参戦し、同時に石田光洋もフェザーに転向。UFCからの〝出戻り〟となる宇野薫もフェザー級に下げることを明言している。今後、フェザー級は最注目の階級になるのではないか。

そしてK―1では、63キロというカテゴリーが確立された。ヘビー級が常識だったところにミドル級（70キロ）ができ、今度はさらにその下の階級が認知されたわけだ。K―1の世界観が広がり、そのことで実力や魅力とは関係のない部分で〝マイナー〟扱いに甘んじていた選手にスポットが当たったのである。いや、むしろ選手たちが自力で観客の首根っこを引っつかんだと言うべきか。

間違いなく言えるのは、この3週間で格闘技界の歴史が大きく動いたということだ。10年後、20年後も語り継がれるような名勝負や事件が、立て続けに起きたのである。

ボクシングを除く〝プロ格闘技〟が成立したのは、1993年のことだった。K―1とUFCのスタート、パンクラスの旗揚げなどによって、この年に〝真剣勝負を観て楽しむ〟という文化が本格的に誕生したのである。2000年には、PRIDEがメジャーイベントとして認知された。桜庭和志の活躍によって、〝グレイシー最強幻想〟に終止符が打たれたのも、この20世紀最後の年だ。

そして今年、2010年に格闘技の歴史はまた大きく転換している。我々がこの3週間で観てきたのは、個々の大会や試合にとどまらない。約10年周期で訪れる、巨大な時代のうねりを目撃したのだ。

それからもう一つ、言っておかなければいけないことがある。これはもうベタにもほどがあるというか、わざわざ誌面使って何を言ってんだと思われるかもしれないが、そう思ったんだから仕方ない。

それは「格闘技って、どんだけおもしろいんだ⁉」ということである。

日本の格闘技界には、まだまだおもしろいものがある。世界に目を向ければ〝冬の時代〟どころか、いまが世界最大のブーム真っ最中だ。実力と個性、現実と幻想の百花繚乱。いくら寿命が縮まっても、こんなおもしろいものを観ないわけにはいかないってもんだ。

青木真也、狂気の足関で王座防衛!!
DREAM第一章、これにて完結!

さらばゼロゼロ年代!
ありがとうPRIDE!!
オレたちはDREAMだ!!

［10.7.10 DREAM.15］
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
［DREAMライト級タイトルマッチ］

［王者］◯青木真也 vs 川尻達也×［挑戦者］

（1R 1分53秒 アキレス腱固め）

1ラウンド、ジャブで牽制する川尻に、青木はタックルから足関節を取る。逃れようとした川尻だが、青木は離さず渾身の力で締め上げる。カカトで青木の顔面を蹴って打開しようとする川尻だが、青木は足を離さず回転。川尻はうつぶせの状態でしばらく耐えていたが、やがてタップ。

俺は俺をコントロールできないんです

狂気のグラップラー 青木真也

聞き手／ジャン斉藤　撮影／タイコウクニヨシ

青木　（いきなり）やっぱ追い詰められたときの俺、強いわ!!

――青木さん、そんなに追い詰められてたんですか？

青木　追い詰められてたでしょう。（ギルバート・）メレンデスに負けてから、みんなが敵に見えましたからね。

――みんなが敵!!

青木　いちいち「うるせーよ！」って。さんざん人に乗っておいて、負けたら手のひら返しやがったと思った。

――そんなことないでしょ。じゃあ、具体的にどういう手のひら返しがあったんですか？

青木　いろいろ。

――いろいろって。でも、それはしょうがなくないですか？　プロってそういう商売じゃないですか。

青木　なんでも言われていい存在だからこそ、ムカついて全員が敵に見えたんですね。超極端に言うと「味方なんていない!!」と思ってましたから。全員が敵に見えたし、"クソ雑誌"とかも本当に殺してやろうと思いましたからね。

――ウチも？

青木　アンタのところは大丈夫（笑）。

――そうかい（笑）。

青木　『kamipro』にはむしろ助けられたし、そこまでバッシングしなかったし。

――でも、『ゴン格』もバッシングはしてないでしょ？

青木　んなことないですよ。今回だって、くだらない勝敗予想みたいなのがあったじゃないですか。

――確かにどうかと思う発言はあったけど、あれは『ゴン格』が言わしてるわけじゃない。むしろ横田（一則）選手や廣田（瑞人）選手のマネージメントがちゃんと内容をチェックすればいいのにって思いましたけどね。

青木　いや、なんで僕や川尻さんに完敗した二人があんなこと言えるのかがわからない。おまけに今回だけじゃないから凄くムカついた。

――青木さんの怨念的パワーって前から凄いですよね。でも、今回は大晦日の廣田戦より怒りの着火点がファンはわかりづらかった。

青木　なんかイヤだったのは「練習環境が悪い」とか言われたりさ。自分が信じてやってることに横から口出すなよ、結果次第でいちいち言いやがって。

――そういうもんですって。

青木のアキレス腱固めで川尻の左足首が伸びきってるのがわかる。青木いわく「ボクはアキレスが得意だからあのかたちにこだわったけど、今成さんならアンクルホールドに切り替えてもっと早く終わらせていた」とのこと。

青木　いや、「おまえらがいちいち口を出すな！」みたいな。それでムカついてて。

――気持ちはわかるんですけど、そういう姿勢をとることによって、青木真也を応援してるファンすらも巻き込んでる印象があるんですよ。

青木　それも含めて関係ないって思ってました。だって全員が敵だったんですから。誰彼かまわず「なんだ、この野郎!!」という怒りはありましたからね。

――う～ん、誤解するファンが絶対いたと思いますけどね。

青木　誤解けっこう。ちゃんとすべての人に対して青木真也の思ってることがすべてそのまま伝わるとは思ってないし、伝えようとも思ってないし。自分は自分だから。つまるところ「いちいちうるせえよ！」ってことですよね。

――青木さんは何かを言われたりするのはイヤなんですか？

青木　リスクを背負わずに言ってくる人には、やぱっりムカつきますよ。

――たとえばファンは最初からリスクないでしょ。リスクあるのはそれを生業にしてる人だけ。

青木　だったら練習のことや競技のことに対して、口を挟まないでほしい、という気になりますよ。

――でも、それはほんの一部のファンや関係者でしょ？

青木　一部だろうが全員だろうがいいんです。そういうものがすべて僕の究極の怨念的なものが詰まってたんですよ。まあ、すべてを含めて力になってるからいいんですよ。

――それは今回、勝利の原動力になったという。

青木　怨念が溜まってましたからね。しかし、『kamipro』は僕をネガティブにとらえてますね。

――ネガティブにとらえるでしょ（苦笑）。繰り返しますけど、けっこう誤解する人は多いと思いますよ。

青木　誤解は誤解でいいですよ。

――でも、その誤解はあまりメリットないなって気はしますけど。

青木　僕は損得でやってませんから。とにかく試合はおもしろかった。おもしろかったでしょ？

――おもしろかったです。格闘技の残酷さを身震いするほど感じた。今回ロングスパッツを脱いだのはどうしてなんですか？

青木　経費削減！

――ハハハハハ！　確か一着10万くらいするみたいですもんね。

青木　経費削減もあるし、いちいち「スパッツがないと極められない」とか外野が騒ぐじゃないですか。そいつらを黙らせてやろうと思って。「この試合を観てろよ、この野郎!!」って。

――それってけっこうリスクありますよね。それで極められなかったら……。

青木　リスクはないですよ。極めるんですから。本気で極めてやろうと思いましたからね。

――なるほど。やっぱり、今回の青木さんの怨念のマトって小さかったんですよ。たとえばメレンデスや川尻さんに対して怒りを燃やしてんだったらわかるけど。

青木　そういう小さい敵でもいちいちボクは向き合います。文句あるんなら直接、言ってこいみたいな。

――それは横田選手とかに対しての言葉だろうけど、ファンも自分のことだと受け取りますよ。そして調印式のときも超キ

青木真也

ラーだったじゃないですか。
青木 いや、あそこ、キレですよ。あのレベルの全員が敵に見えてたですよ。大会オープニングには川尻さんと握手してたし、けっこう余裕があったように見えたんですけど。
青木 あれは開き直った余裕ですよね。川尻さんが余裕しゃくしゃくな感じだったんで、それにまたムカついてたってい う。
――なんにでも噛みつくなあ。
青木 「絶対に極めてやる！」と思ってましたからね。
――会場入りしたときTBSのクルーに取材されてたじゃないですか。あのときもけっこうカリカリしてましたよね。
青木 してました。「うるせえ、いちいち！」みたいな。
――要は試合前の青木真也に触るなってことですか？
青木 そうそう。ギザギザハートの子守唄だよね。触るものみな傷つけるというか……。
そこはもうコントロールできない、と。
青木 コントロールできないです。自分で言うのもなんですけど、試合前は狂気なんですよ。もう何がなんだかわからなくなる。これだけ狂気持って試合してる人、いないと思いますよ。
会見はできるなら出たくなかった？
青木 出たくないですよ、何もしたくないですよ。試合前にさわやかな青木真也を

求めないんだったら無理ですね。
ーかで、まずは足関で極めるしかと思っでもなかったですけど。
青木 身体が勝手に動いたんですよ。タックルを仕掛けたらマットでそうなったんです。で、そのままバッと足を抱えてアキレスをやろうと思って。あと〝足関の神様〟が降りてたんですよ。試合映像を振り返ったら北岡悟チックだった。目つきとか。
――足を抱えてどの時点でガッチリ極まったと思ってました？
青木 最初に足を抱えて裏になった時点で終わったと思ったんですけどね。
――じゃあ、ギブアップしないことには驚きました？
青木 「そういうことなんだな」と思いました。だったら左足を極限まで極めて歩けないようにして、次は右足を極めて戦闘不能にしてやろうと思った。
――す、凄いな……。
青木 そうしたらギブアップしなくてもいいですよ。それで1ラウンド終わりに起き上がれず僕の勝ちでいいやと思った。でも、正直言うとあそこで余裕があるときの自分だったら、足首が鳴った時点で「足首なったどー!!」って言いますね（笑）
――またわかりづらいネタを。あのアキレスは抜けられたとしても、川尻さんは戦闘不能な状態だったんですか？
青木 そうしてやろうと思って闘ってましたけどね。もう真剣で斬り合おうと思ったんですよ。たとえば、格闘技でボクは斉藤さんを殺す能力あるんですよ。

タップしないなら両足を極めて戦闘不能にしてやろうと思った

——そ、そうでしょうね。

青木　斉藤さんがプロ選手だったらボクを殺す能力があるんですよ。それでお互い殺すことをし合うわけじゃないですか。レフェリーが「一本です、やめなさい」って言うから殺しはしないですけど、格闘技はそういうスポーツなんです。冷静はムリ。

——メレンデス戦では斬り合えなかったと思ってます？

青木　そうですね、斬り合えなかった。ちょっとゲームに傾倒した部分がある。でも、「男の子は一本取り合う！」ってことを桜庭さんのところに出稽古したときに強く言われたし。

——あの試合はメレンデスが攻めてこなかったというよりも、青木さんも踏み込めなかったんですか？

青木　そういう部分も多少はあると思います。踏み込んでこない相手にどう斬り合うかっていうことも考えないといけない。僕が寝技したいのに相手が寝技しないから負けたっていうなら、○○○○と同じなんですよ。そんなクソみたいな選手になりたくないんで、自分は絶対に勝つためにやるんですよ。だから、極めないとダメなんですよ。絶対一本で極めてやろうと思って。

——ロングスパッツの件も桜庭さんのとこに行ったのもそうですけど、青木さんの意識の持ち方が変わったという気がするんですけど。

青木　いろいろと考えたし、技術は確実に伸びてますね。立ち合いのバランスとか雰囲気がよくなってる。そして斬り合うって感覚ですよね。殺し合う、極めるって感覚。誰だろうかどういう状況だろうが関係ない。やってやるっていう。覚悟が違うみたいな感じですね。

——じゃあ結婚宣言も覚悟を決めて（笑）。

青木　あれは誰にも言ってなかったですけど。4月以降ずっと仲間がいなかったんですよ。北岡さんとか中井さんとかそういう人たちだけですよ。いまの彼女とか。きわめて身近にしか仲間がいないんですよ。負けた自分を信じた人を大事にしたいし。

待望の王座戦で無念の完敗を喫してしまった川尻。締切時点でケガの詳細は伝わってきてないが、ここから這い上がる姿が見たい!!

——ファンも信じたんじゃないんですか。

青木　近い距離の話です。

——笹原さんとかは違うんだ。

青木　あの人は、わからない。

——わからない（笑）。青木さん、ちょっと疑心暗鬼になってるじゃないですか。

青木　だから、言ってるじゃん。全員が敵に見えたって。

——その中で支えてくれた彼女だからこそ結婚したい、と。

青木　メレンデスとやる以前に3月から結婚するって決まってたんですけど。軽くマリッジブルーですけどね。もうちょっと一人でもいいかなっていう。ボクの人生、基本的に勢いなんで。

——勢いでやっちゃったなっていう感じですか。

青木　すべり感はありますよね（笑）。みんなに言われてるのは、離婚した人からは「離婚のことなら聞いてくれ」っていうのは10件くらい連絡が来て。斉藤さんくれなかったですけど。

——ボクも再婚しようと思ってね（笑）。しかし青木さん、童貞じゃなかったんですね。

青木　童貞幻想は守りますよ！

——ダハハハハ！　あとPRIDE幻想も終わりだって。

青木　終わりですね。

それは青木さんのなかで？

青木　すべての面で終わってほしいですけどね。

——あの言葉だけでは勘違いする人もいると思うんですけど、あれはPRIDEの幻想にすがるのは終わりだって意味ですよね？

青木　そうです。あのときはどうだったとか、昔といまを比べてイジイジするのはやめにしたい。

——でも、ファンは思い出話はしてもいいと思うんだけど。

青木　ダメ［illegible］。

——［illegible］

青木　なんか［illegible］

——［illegible］いうのは［illegible］

ない［illegible］

青木　僕もイヤだもん。いまやってるのはDREAMだし。五味（隆典）選手と比べられるのもイヤですよ。

——もう誰も比べてないんじゃないですかねえ。

青木　昨日、五味さん会場に来てたんでしょ？

——来てましたね。青木さんは五味さんや川尻さんを「兄弟」と言ってましたよね。自分は末っ子だ、と。長男にあたる五味さんにはいまどんな思いがあるんですか？

青木　長男に対しては悪い感じはないです。できることなら一緒にやりたいです。本音の気持ち。

——バランスいいですもんね、3人揃ったら。

青木　できるなら仲良くやりたいし、一緒にやりたいし、正直試合もしたいし、そうすれば格闘技は盛り上がると思います。自分は五味さん好きですからね。五味選手は日本に戻ってくるべきだと思いますけどね。

——会場に来てくれたことは嬉しいですか？

青木　「興味あるんだ」と思った。「格闘技好きなんだ」って思った。

——いままでの五味さんのスタンスだと、興味あっても絶対に来ないんだろうなというのはあったから、ビックリしたんですよね。

青木　五味さんって謎。

——青木さんのほうが謎ですけど。

青木　いやいや、ホントに。ファッションで格闘技やってるのか、ガチなのか。

——［illegible］

［illegible］

［illegible］が絡むとどうなるか

わ［illegible］ね。

青木　頑張ってくださいって感じですね。そんなことよりも、あと川尻さんも頑張ってほしい。やっぱり川尻さんが相手だからこんなにも盛り上がったし、凄く感謝してます。いつもは相手のケガなんて気にならないんですけど、凄く心配ですね。川尻さんは、いまの日本に絶対に必[illegible]し。

――青木さんはこれから[illegible]すか？

青木　与えられたことを与えられたように、一生懸命あたりまえにやる。

――いままでどおり「来た球、打つ！」[illegible]って感じですね。

青木　「来た球、打つ！」。変わらずです。

――10月のDEEP10周年大会にも「出たい」って言ってましたけど。

青木　出たいんですよ。ガチで出たいです。本当◯◯万のギャラでやります。

――具体的な数字はいいですから（笑）。

青木　DEEPのプロデビュー戦◯万円だったんですけど、◯万円でも出たいです。佐伯さんにそう言ったら「馬鹿言うな！」って言われましたけど。どんどん試合したいです。ヒマなんですよね。

――結婚式の準備って大変らしいですよ。

青木　でも、それはプライベートじゃないですか。格闘家として。

――ツイッターも試合直後に一度は「やめる」宣言したのに、また復活しましたね。

青木　移り気なんですよ。

――女性に対してはそうならないようにお願いします。「女、全員が敵に見える！」とか言いださないように（笑）。

青木　大事にはしてます！　彼女もファンも！

――ホントかなあ……（笑）。

【10年7月11日／都内・某所にて収録】

五味選手とはできることなら一緒にやりたいです。試合もしたい

あおきしんや●1983年5月9日、静岡県出身。柔道、柔術をバックボーンとする中軽量級屈指のグラップラー。DEEPでプロデビュー。修斗、PRIDEを経てDREAMに参戦。現DREAMライト級チャンピオン。180cm、70kg。

“世界のTK”髙阪剛が解説する

青木の勝因 菊野の敗因

DREAMのライト級頂上対決と、“3位決定戦”的な意味合いがあった、7.10『DREAM.15』のメインイベントとセミファイナル。この青木vs川尻、菊野vsカルバンの2試合をおなじみ“TK”髙阪剛に語ってもらった。菊野の師匠でもあるTKは、日本格闘技界の今後を担う2試合をどう見たのか?

聞き手/高崎計三 試合写真/小林鎮 構成/堀江ガンツ

今回はセコンドとしても活躍

——髙阪さん、今日は『DREAM.15』のメインとセミについてお話を聞かせてください!

髙阪 いいんですけど、セミの試合についてはグチになるかもしれませんよ(笑)。

——了解しました(笑)。では、セミは後回しにして、まずメインのライト級タイトルマッチですが、あんな展開、結果になることは予想の範囲内でしたか?

髙阪 いや、予想はしてなかったですねえ、正直(笑)。足関節でねえ。自分は青木がタックルからテイクダウンを取られてしっかり抱きついて、そこから上半身の攻めにいくかなあと思ったんです。テイクダウンされるってことには、そこまで固執しないと思ったんで。

——青木選手のほうが、ですか。

髙阪 自分が仰向けになることをそこまでイヤがらないだろうな、と。普通なら川尻を相手に仰向けになるのはイヤなものなんですけど、仰向けから上半身への寝技を仕掛けるだろうなと予想してました。ガードから脚を上げての三角絞めとかオモプラッタとか。でも今回は先に青木が片足タックルにいった。そして川尻が寝技を嫌ったんでしょうね。立ってパウンドを落とそうとしたのか、もしくは完全に離れようとしたのかという状態だったので、足に巻きつかれてしまって。その後は青木の試合でしたよね。

——足関節を狙うのはやっぱりリスキーですよね。

髙阪 失敗したらパウンドを落とされますからね。それだけ、無心になれてたってところがあるんじゃないかなあ。身体が反応して動いたあのシーンが、じつはあの試合のすべてだと思うんですよね。川尻のほうは寝技はやりたくなかったから、押さえ込みにはいかなかったと思うんですよ。そこのちょっとしたところが分かれ目になったんじゃないかと……終わってから思いましたけどね(笑)。

——青木選手が足を取ってからは、川尻選手にできることって……。

髙阪 正直、なかったと思います。ポイントの入れ方とか脇の絞りとか、完璧なかたちだったので。あと、腕の組み方ですよね。腕組みするようなかたち。普通の選手があれをやったら、アキレス腱はなかなか極まらないんですよ。スペースができすぎちゃうんですよね。だけど、青木はしっかり締めてくる。スペースをなくして密着させるテクニックも持ってるし、あとは微妙な腕の太さとかも関係があるんですよ。

——腕の太さですか?

髙阪 あんまり腕が太いと、骨の硬い部分がアキレス腱に当たらないんですよ。青木はそこまで腕が太くないけど、力が強いっていう。ノゲイラが同じくそうなんですよ。青木だからこそ、あの腕の組み方でアキレス腱がしっかり取れたっていうのはありますね。

——いやぁ厄介な選手ですね、青木真也は!(笑)

髙阪 厄介ですよ! ああいう展開に持っていかせたら、敵はいないですね。あと、アキレス腱固めですけど、実際に極まったのは足首だと思いますね。

——足首ですか。

セミファイナルの菊野vsカルバン戦

ると思ったんですよ。

動きがバレてるなというのは1ラウ

ないですね。負けたこっちには言う

——足首ですか。

高阪　サンボの「筋肉潰し系」じゃなく、アキレス腱に支点は置いてるけど、足の甲をホールドして足首を伸ばしてますよね。あのアキレスは危ないですね～。

——危ないですか。

高阪　試合だからあそこまで我慢しますけどね。足首の靱帯が切れたかと思いましたよ。青木は組んで足関節を取りにいくことにリスクという感覚すらなく、どこか自身の持つ感覚で動いてたんじゃないですか。「これ失敗したら顔面殴られてまずいな」というのが少しでもあったら、あそこまでおもいきって入れなかったでしょう。対する川尻は寝技はやりたくないということで、警戒する気持ちが強かったと思うんですよ。そこの気持ちのズレというか、そこにつきるんじゃないかなあ。

——そこが勝負を分けたと。

高阪　お互い、勝負を決めるものを持ってる選手なんで、青木に少しでも迷いがあったら逆に川尻がパンチでKOしてたかもしれない。そのへん、けっこう微妙な狭間で闘ってた感じがしますけどね。やっぱりDREAMの舞台だし、川尻には「いい試合をしよう」という気持ちがあったと思うんですよ。だから、逃げるように寝技を嫌うとかはしたくなかったんじゃないかと。勝負論からすれば甘いかもしれないけど、あの舞台であの二人だったら仕方ないところでしょう。

——なるほど。トップ同士のメインイベントだったからああなった部分もあるんですよね。ではもう1試合、セミファイナルの菊野vsカルバン戦ですが。

高阪　結果として見たら、まだまだやらなきゃいけないことがあるなということを感じました。攻め方に関しては、考えてた戦略の6～7割はできてたんですよ、1ラウンドは。要は、腹を効かせるのが一つと、それと連動して強いパンチを打てなくさせること。ジャブに合わせて、ショートレンジでパンチを当てるとか。それで嫌がって、タックルに来るだろうなというのもわかってはいたんですけどね。

——いたんだけど……。

高阪　1ラウンドにタックルを取られて、立ったあとの展開で蹴りが腹に入ったんですよ。カルバンが下がりだして、カウンターのパンチも入りだしたんで、腕も足も力が入らなくなってきてるのは見えたんです。それで1ラウンドが終わったんですよね。

——では、1ラウンド終了時はかなり手応えがあった、と。

高阪　ありましたね。だけどカルバンは底力を持ってるし、セコンドもそこから戦略を立て直す力があるから、そこですよね。セコンドの言うことを忠実にやろうとしてるのは感じましたから。だから裏を突ければとは思いました。飛び道具を出してくると思ったんですよ。

試合のたびに大きな責任感を背負って強くなる
それこそが日本格闘技界の文化だと思いますね

遠い間合いからの蹴りと、至近距離からのパンチで1ラウンドはJZカルバンを相手に試合を支配した菊野克紀。結局は逆転負けを喫してしまったが、この敗北が菊野をさらに強くするか。

——跳びヒザとか。

高阪　そう、あとスーパーマンパンチっぽいのとか。あとは必ずテイクダウンを取りに来るだろうとは思ってましたけどね。

——飛び道具で来たら、思うツボだったわけですね。

高阪　そうなんですよ（笑）。まあ試合で出してるから隠す必要もないけど、克紀は10センチぐらいの隙間があれば、倒すパンチが打てるんですよね。だから飛び込んできてくれたらそれが当たるし、距離を取ったら足が当たるし。その二本立てでいけるなというのはあったんです。ただ、動きがバレてるなというのは1ラウンドの後半からありました。スイッチする動きに合わせてタックルにきたりとか。

——スイッチしたときにテイクダウンされましたよね。で、2ラウンドが始まってみたらタックル一辺倒で。

高阪　完全にそれを狙ってたんでしょうね。それが向こうのうまさですよ。動きを読まれたなと言うしかないですね。

——そこからはカルバンの押さえ込み&バック地獄。

高阪　逃げなきゃいけないんですけどね。……正直、キツいですよ（笑）。さらに、マウント取ってもパウンドを打ちにくるわけでもないし。自分の選手だから言うわけじゃなくて、あそこから勝ちにきてほしかったんですよね。極めにきてほしかった。それができなかったのか、やらなかったのかはわかりませんけど。

——勝ちに徹した感はありましたね。力が落ちてるんじゃないかという評価もありますが。

高阪　難しいところですよね。カルバンも、あれでもし納得してるんだったらそれはしょうがないですよ。ただ、「勝つには勝ったけどオレはあんなもんじゃない」と思えば、次はメッチャメチャ強いカルバンで帰ってくるかもしれないし。そこはわからないですね。負けたこっちには言う資格もないし。ただ、1ラウンドにガクンと落ちたのは見えたんで、次が生き残りというか。それは克紀もそうなんですけど（笑）。

——これを踏まえて、菊野選手はこれから？

高阪　正直、持っているものをまだまだ引き出せる部分があるんじゃないかというのを、自分は感じたんですよね。それと、力のある選手に押さえ込まれない技術が必要でしょうね。またああいう試合をすれば克紀の打撃を封じれるんだというのを公にしたわけで、それを逆にフェイントに使えるぐらいの練習を積まないとなと思いましたね。

——2試合並んでみて菊野選手と青木選手、川尻選手というメインの三人の差については？

高阪　もちろん技術的なところもそうですけど、積み重ねてきたものもあるんじゃないかと思いましたけどね。気持ちの部分だとか、試合のたびに背負わされていく重みだったりとか。そこは一歩一歩やっていくしかないんだけど、あまり時間をかけてはいられないですから。そういう矛盾したところでもがいてる感じでしょうかね。メインは、そうやってもがき苦しんできた二人の試合でしたよね。それがまさに日本の格闘技の文化だと思うんですよ。団体の歴史とともに選手も強くなっていくというか。これは海外にはないですから。そこである意味、責任感を持って強くなるという。それがここから先、克紀には必要ですね。

［10年7月14日／電話取材にて収録］

青木復活勝利によって、ストライクフォースとDREAMの今後の関係はどうなっていくのか？

9月に青木vsメレンデスの再戦はありえないが、ジョシュ・トムソンを派遣する用意はある！

ストライクフォースCEO スコット・コーカー

DREAMと提携関係にあるストライクフォースのスコット・コーカーCEOが『DREAM.15』に合わせて来日。そこでDREAMの幹部と会談が持たれたが、はたしてどんな話になったのか？　青木真也の次期対戦相手候補なども含めてコーカーCEOを直撃した！

聞き手／石井史彦　試合写真／小林靖、Esther Lin（STRIKEFORCE）　構成／堀江ガンツ

――前回のインタビューで「日本に行ったら、叙々苑で食事がしたい」と言ってましたが、もう行かれましたか？

コーカー　もちろんだよ。私は日本に来るたびに西麻布にある叙々苑に行くんだよ。今回もEAスポーツ（ストライクフォースを中心としたテレビゲームを発売しているゲーム会社）から来ているランディと一緒に1日前に行ってきたけど、期待どおり最高だったよ。ランディにも気に入ってもらえたし、ここのホテルのレストランより財布に優しいしね（笑）。

――ここは東京でも有数の高級ホテルですからね。

コーカー　今日もこのインタビューのあと、ランディたちと鎌倉観光をする予定なんだけど、夜はまた叙々苑で食事することになるだろうね（笑）。

――そんな最高の焼肉を食べたあとの『DREAM.15』はいかがでしたか？

コーカー　DREAMは素晴らしい試合ばかりで、叙々苑同様に満喫させてもらったよ（笑）。メインのアオキvsカワジリ戦はもちろんのことだけど、マヌーフとミズノ（水野竜也）の試合も最高にエキサイティングだった。ミズノの勝利はマット・ヒュームの素晴らしいトレーニングの結果が証明されたことにもなるだろうね。

――今大会一番のビッグアップセットですからね。

コーカー　あとJZとキクノの接戦も楽しませてもらったよ。あの試合はキクノが勝つべきだったし、自分の採点ではキクノが勝ったと思っているんだ。

――菊野の勝ちですか。

コーカー　キクノは1ラウンドの10分間、試合をコントロールしていたんだよ。2ラウンドの5分間はJZが取っているけど、2ラウンドは半分の時間なんだから、キクノが勝って当然じゃないのかい？

――ラウンドごとに考えれば、そうなりますよね。

コーカー　まあ、ジャッジについて口出しするつもりはないけど、私はキクノが勝った試合に見えたんだよ。キクノは素晴らしいファイターでスタイルも大好きだから、ぜひストライクフォースに呼んでジョシュ・トムソンやギルバート・メレンデス、ストライカーであるKJヌーンらとの試合を組みたいね。

――菊野選手の評価は高いんですね。

コーカー　キクノは試合中も落ち着いているし、一撃必殺の素晴らしいフロントラウンドキック（三日月蹴り）も持っている。MMAはミックスド・マーシャルアーツなんだから、キクノのような〝マーシャルアーティスト〟の活躍が見れるのはうれしいことなんだ。最近の傾向のである〝レスリング&ボクシング〟ではない〝マーシャルアーツ〟をね。やっぱりレスラーがテイクダウンして上でコントロール、それを繰り返していれば試合に勝つなんて観てて退屈だろう？　それもあってUFCに興味を示していたジェイク・シールズをリリースしてあげたんだよ。

敗れたものの、1ラウンドはJZ相手に試合を優位に進め、コーカーCEOから高い評価を得た菊野克紀。ストライクフォース出場もありえるか？

――なるほど（笑）。青木vs川尻戦はどう思いましたか？

コーカー　まず、このマッチアップは歴史に残るビッグファイトだったよね。同じカードをアメリカでプロモーションしたいぐらいだよ。アオキは最高のサブミッションマスターであることをあらためて証明した。カワジリだってアオキがテイクダウンを取りにくるのを予測していたはずなのに、ラウンド開始早々に足を取られ、そこから抜け出せなかった。カワジリは足に相当なダメージを受けてるんじゃないかな。でもカワジリは真の戦士だからね、また一段と強くなって戻ってくることを信じているよ。

――青木選手がロングスパッツではなくショートパンツで試合をしたことについてどう思いますか？

コーカー　ショーツ姿を見たときには驚いたよ。おそらくロングスパッツが許されるのは日本だけなんで、世界を見据えてその基準に合わせてきたんじゃないかな？　アメリカへの再上陸を早く実現させてあげたいね。

――今回の勝利で、青木選手をストライクフォースへ再招聘する考えは高まりましたか？

コーカー　もちろんさ。ジョシュ・トムソンやKJヌーンと闘わせたいし、JZとの再戦をアメリカで組むのもいい。当然、メレンデスとの再戦もプランにはあるけど、実現するとしても〝今〟ではないよ。DREAMとはアオキのことも含め、いろんな可能性を話しているんだよ。

――青木選手とメレンデスの再戦が今年中に実現する可能性は？

コーカー　アオキが「9月25日のDREAMのリングでメレンデスと再戦する」って言っていたらしいけど（※青木がリング上で「みんなの夢をまた背負う」「9月、名古屋、元気な顔で会おう！」と言ったのが、アメリカ向けPPV放送では「9月の名古屋でみんなの夢をまた背負う」＝「メレンデスと再戦する」と誤訳されていた）、それは間違いだし、事実メレンデスはまだケガが治っていない状態なんだ。同じケガの再発を防ぐ意味でも100パーセントのコンディションじゃないと試合をさせたくないので、最低でも向こう3～4カ月は試合を組めないと思うよ。

――たとえば、ケガが治ればメレンデスを日本の大晦日に派遣するような考えは持っていますか？

コーカー　DREAMとの話し合い次第だね。メレンデス本人は日本のファンの前で試合ができることを楽しみにしているので、大晦日に間に合わなくても、ぜひ

私の採点ではキクノの勝利。ぜひストライクフォースに呼びたいね

実現させたいね。
――青木vsメレンデス戦をリングでやった場合、青木vs川尻戦のような結果になってしまう危惧はありませんか？
コーカー　確かにケージに押しつけられるという利点は使えないけど、メレンデスはそんなに簡単じゃないよ。彼は素晴らしいレスリングテクニックを持っているし、常に新しい戦略を立ててくる。それに、度アオキを倒しているからね。両者にとってはタフな、ファンにとってはとても興味深いファイトになるのは間違いないよ。
――DREAMとは今後について、どのような話し合いを行ないましたか？
コーカー　いままで以上に深い関係を築こうというのはもちろんだけど、我々としてはストライクフォース日本大会を開催する方向での話も進めているんだ。
――ストライクフォース日本大会ですか！
コーカー　最初のステップとしては、ストライクフォースvsDREAM全面対抗戦というカードで、将来的にはストライクフォースのカードそのものを日本で行ないたいんだよ。ケージでストライクフォースのルールでね。スポンサーもロックスター・エナジードリンク、EAスポーツなども引き連れて、アメリカにはSHOWTIMEを通してライブで放映するようにしてね。
すでにそこまで考えてますか。
コーカー　まだまだ解決すべきことはたくさんあるけど、その一つとしてアメリカでのテレビ放送が、我々ストライクフォースはSHOWTIME、DREAMはHD NETであるという、ちょっと複雑な問題を抱えていることも事実なんだけどね。

ストライクフォース日本大会を開催する方向で話を進めている

ショートパンツ姿で川尻を足関で極め、"アメリカ" への再挑戦権を得たかたちになった青木真也。9.25『DREAM.16』では、ホームリングでストライクフォースの選手と対戦が実現か？

ストライクフォース世界ライト級前王者であり、メレンデスのライバルであるジョシュ・トムソン（左）。青木との対戦が決まれば、非常に興味深い闘いとなるだろう。

――なるほど。DREAMのファイターで、ストライクフォースに上げたい選手はいますか？
コーカー　たくさんいるけど、まずはカワジリだね。昨日負けたといってもトップファイターであることに変わりはないし、カワジリのファイトスタイルは間違いなくアメリカのファンに受け入れられる。KJとのマッチアップは最高のショーになるんじゃないかと思っているんだ。また、マッハ・サクライvsエバンゲリスタ・サイボーグ戦というのも最高のカードだろう？　ストライクフォースとDREAMのリーグにはたくさんの素晴らしいファイターがいるから、ファンが喜んでくれるマッチアップがいくらでも考えられるんだよ。
――逆に9月の『DREAM．16』にストライクフォースから派遣されそうな選手はいますか？
コーカー　いまDREAMから言われているのは「誰」ということではなく、「アオキの対戦相手を派遣してくれ」って頼まれているんだ。いまは誰がいいのか、DREAMからのリクエストを待っているところだよ。ジョシュ・トムソンはPRIDE武士道の名古屋大会で日本デビューをしているから、おもしろいと思うけどね。
――トムソンはメレンデスの前のチャンピオンですから、青木選手の相手としては最高ですね！
コーカー　こちらとしては派遣の用意はあると伝えてあるので、実現する可能性は高いかもしれないね。
――楽しみにしてます！　DREAM系の選手でいうとJZカルバンと契約したそうですが、ストライクフォースデビューはいつになりますか？
コーカー　9月か10月にはデビューさせたいけど、今回キクノに勝ったこともあるんで、もしDREAMが必要としていればそれも考慮して決めたいね。
――ベラトールFCがクローズするという噂がありますが、ストライクフォースで契約に動こうと思っている選手は誰かいますか？
コーカー　ベラトールがクローズする噂かい？（笑）。ハハハハ、君たちのほうが、自分よりそういうことに関しては詳しいんじゃないかい？　本当にクローズするかどうか知らないけど、エディ・アルバレスは間違いなくストライクフォースでもトップ戦線に絡んでこれるだろうし、最近の戦績は思わしくないけど、条件さえ合えばロジャー・フエルタにも興味があるね。
――またその後、M-1グローバルとは次のヒョードルの試合について、話し合いは進みましたか？
コーカー　ヒョードルとはあと1試合の契約が残っているんで、いまはその試合に関して話をしているところなんだ。ヒョ

コーカー　ファブリシオはヒョードルを

二人のチャンピオンが存在するというこ

があったって死ぬことはないからね。コ

なるんじゃないかと思っているんだ。ま

いるのは「誰」ということではなく、「アオ

契約が残っているんで、いまはその試合に

関して話をしているところなんだ。ヒョードル陣営としては、ファブリシオとの再戦を望んでいるんだけど、解約まであと1試合だろう？　とにかく次の試合をしてもらって、そのあと最低でも2～3試合の契約更新ができるのであればファブリシオとの再戦をすぐに実現させるって提案をしているんだよ。

――ストライクフォースとしては、やはりそのあとの契約のことも当然考えるわけですよね。

コーカー　だから次の相手はアリスター・オーフレイムとの可能性が一番高いけど、アリスターとの試合もかなりタフなものになるだろうからね。その試合でもしヒョードルが負けたら、彼の価値はどうなってしまうと思うんだい？　もちろんランディ・クートゥアーやチェック・リデルのように試合を続けていくことは可能だろうけど、いままでの「世界最強」の称号や「生きるレジェンド」のステータスも失なってしまうだろうからね。

――ヒョードルにとっても正念場になるわけですね。

コーカー　ヒョードルは対戦相手を選ばずに誰とでも試合をするだろうけど、これからのキャリアを考慮すると、かなり厳しい状況にあるのでマネージメントサイドは非常に神経質になっている状況なんだよ。

――なるほど。M-1グローバル側の問題なわけですね。ヒョードルvsアリスターを組みたいと思っている理由はなんですか？

ヒョードルは2～3試合の再契約が結べるならファブリシオと再戦させる

コーカー　ファブリシオはヒョードルをタップアウトさせたんだから、再戦をする前にまずはアリスターと闘ってほしいんだ。それでヒョードルが勝てばファブリシオとの再戦。アリスターが勝てば、アリスターvsファブリシオというシナリオだよ。

――アリスターはストライクフォースのヘビー級王者ですけど、ファブリシオへの挑戦者決定戦のようになるわけですか？

コーカー　正式にはアリスターがヘビー級のチャンピオンでも、ヒョードルというレジェンドを倒しているファブリシオもチャビオンを名乗る権利があるから、現在二人のチャンピオンが存在するということなんだよ。

キング・モーに敗れ、ストライクフォース世界ライトヘビー級王座から転落したムサシだが、再浮上を懸けて大物ダン・ヘンダーソンとの対戦が持ち上がっている。観たい！

Scott Coker

――では、そのほか今年後半のストライクフォースは、どんなビッグカードを考えていますか？

コーカー　205パウンドクラス（ライトヘビー級）に戻ることを決めた、ダン・ヘンダーソンと、レナート・ババル、またはゲガール・ムサシの試合。それから10月から8人のファイターによる185パウンドクラス（ミドル級）のトーナメントを予定している。10月21日にはテキサス州ヒューストンでホナウド・ジャカレイvsティム・ケネディも行なう予定だ。ティム・ケネディは日本では無名だけど、アメリカでは元アーミー・レンジャー部隊に属し最前線でアメリカのために闘っていたヒーローなんだよ。じつは2年前にストライクフォースが契約しようとしたときに、イラク戦争に行かなくてはいけなくなり、契約時期が流れてしまったという過去があるんだ。ジャカレイvsティム・ケネディの試合は、みんなが思うよりタフなファイトになることは間違いないからぜひ注目してほしいカードの一つなんだ。

――そのほかはどうですか？

コーカー　そのほかだと、キング・モー、ボビー・ラシュリーのカードも組まれる予定だよ。明日アメリカに戻り現地時間の火曜日（7月13日）にヒューストンでのプレスカンファレンスで、ミドル級のトーナメントも含め、10月21日のヒューストン大会でのファイトカードを正式発表する予定だから楽しみにしてほしいんだ。そういえば昔、ティム・ケネディに「ケージの中でファイトすることと、〝リアル〟コンバットはどこが違うんだい？」って聞いたら、「ケージなんて〝ナッシング〟だよ、何があたったって死ぬことはないからね。コンバットは〝死〟が隣り合わせだからね」って言ってたよ（笑）。また戦場では、300メートル離れた建物の上から敵の兵士をライフルで狙うとき、深呼吸をして気持ちを落ち着かせ、トリガーにかかっている指に神経を集中させるんだけど、身体中にアドレナリンを感じるそうだよ。

――そういった本物のファイターも参戦するわけですね。今後のDREAMとの関係は、どのように深めていきたいですか？

コーカー　DREAMはのルーツは当時世界最大でベストのMMAのリーグであったPRIDEだし、それを引き継いでいる素晴らしいリーグとして尊敬しているんだ。今後、昔の格闘技熱をよみがえらせるだけでなく、再び世界最大のリーグに成長させるためお互いに協力、サポートし合いファンや関係者に喜んでもらえる存在を築いていきたいと思ってるんだ。UFCのように自分だけのリーグ内で試合をするのでなく、「世界最強は誰なのか？」というファンが一番興味のある質問に答えるため、世界各地のリーグと協力関係を広げていきたいと思ってるよ。

――DREAMを含めて大きなリーグなわけですね。

コーカー　そのとおり。昨夜もDREAMと今後の協力関係の内容やマッチメイクに関して話をしてるんだ。日本のショーは素晴らしいし、日本のファンも大好きなんで毎回日本に来ることが楽しみなんだ。今回はとくに素晴らしいショーを観れたんで満喫してるよ。

――では、お時間を割いていただきありがとうございます。これから鎌倉観光と叙々苑を満喫してください（笑）。

【10年7月11日／都内・某ホテルにて収録】

7月10日、五味隆典は青木vs川尻を観ていた

7月10日、さいたまスーパーアリーナの客席に、五味隆典の姿があった。中継のカメラに〝抜かれた〟わけではなく、あくまでファンや関係者の目撃情報ではあるのだが、五味が青木真也vs川尻達也戦を会場で観ている光景を想像すれば、誰だって胸が熱くなるというものだ。彼はまぎれもなく、青木vs川尻にいたる物語の〝登場人物〟なのだから。

青木と川尻の闘いは、PRIDE活動休止から『やれんのか！』、そしてDREAMへとつながる歴史の集大成であり最終回、同時に新たな物語のスタートでもあったと言える。

彼らはあらゆる面で過去と比較されながら、〝PRIDEの歴史を受け継ぎつつ新しい時代を切り拓いていく〟という難題に取り組んできた。川尻は、PRIDE時代は決して〝主役〟にはなれなかった男である。青木は、フジテレビによる中継が打ち切られたあとにPRIDEに登場した選手だ。それでも、彼らは〝PRIDE後の時代〟を引き受けた。そのことで、時代に終止符を打ち、新たな時代をスタートさせる権利を得たのだ。

だが、と思う。もしかしたら、五味隆典がその役割を担っていてもおかしくなかったのではないか。青木や川尻だけでなく、五味もまたPRIDEへの強烈なこだわりを持って〝PRIDE後の時代〟を生きてきたのである。ただ、そのこだわり方が7月10日にチャンピオンシップを争った二人よりもうしろ向きだったことは否めない。こだわったというより、引きずってしまったという表現のほうがふさわしいかもしれない。

自分はPRIDEのチャンピオンだった。軽量級のエースだった。その自負が、その後の五味の歩みを大きく左右したのだ。俺は青木や川尻とは立場が違う。比べられてたまるか。五味はそういう意地の張り方をした。新しい時代に、真正面から向き合おうとしなかった。その結果が『戦極』における北岡悟戦での完敗であり、修斗への〝里帰り〟であり、UFC参戦だったのだろう。五味は常に「ここじゃない」と思い続けてきたのだと言ってもいい。

しかし、過去を引きずる人間に勝利の女神は微笑まない。未来を切り拓こうとする人間にしか、時代は味方しない。

つまり五味は、受け継ぐべき歴史、切り拓くべき未来を拒否したままなのだ。さまざまな事情があることをわかったうえであえて書くのだが、彼は青木や川尻とともに歴史を受け継ぎ、未来を切り拓くこともできたのに、それをしなかった。

それでも、五味のことを忘れているファンなどいない。その存在は、やはり大きいのだ。PRIDE軽量級の礎となったのは、五味vs川尻だった。青木はスタッフから「五味のようになれ」と教育されて育った。また、青木は試合の煽りVの中で、こう語っている。

「五味隆典が長男で川尻達也が次男。僕が末っ子」

青木真也と川尻達也の闘いを語るうえで、五味隆典は欠かせない存在だということだ。しかし彼は、この一戦にいたる流れのなかで、常に部外者だった。〝主要キャスト〟なのにスクリーンには登場しなかった。リング上にいてもおかしくなかったし、リングサイドで見守っていてもおかしくなかったのに、彼が実際にいたのは客席だったのである。

五味は、自分が言及された煽りVを観てどう思ったのだろう。青木がアキレス腱固めを極める瞬間（五味が北岡に負けた試合と同じフィニッシュだ）を観て、何を感じたのだろう。

彼は、試合が終わるとすぐに会場を後にしたそうだ。だから、青木の「今日でPRIDEは終わりです」という言葉を聞いていない。できることなら、聞いていてほしかったと思う。そして、この試合から何を感じたのかを語ってほしいとも思う。自分がこだわり、引きずってきたPRIDEを、比較されることさえ嫌な人間が〝終わらせた〟のはどういう気分なのだろうか。

青木vs川尻によって、PRIDEと〝PRIDE後の時代〟には終止符が打たれた。これからは完全に新しい時代が始まる。過去と比較したり、こだわったりする必要はない。前だけを見て進んでいけばいい時代だ。

しかし、一人だけ終止符を打てていない人間がいる。ほかならぬ五味だ。彼の歴史には、まだ区切りがついていない。世界中でたった一人、五味隆典だけが、まだ〝PRIDE後の時代〟を生きているのである。だから、いつかは彼自身が歴史へのけじめをつける必要があるはずだ。

もちろん、いま五味がやらなければいけないのはUFCで勝つことである。彼自身の〝現在〟を精一杯生きることである。ただ、それだけでは完璧ではないと思うのだ。日本でやり残したことが、彼にはある。

いつか、五味と青木の行く道が交わることはあるのだろうか。いまは想像もできないが、その日が来ることを信じたいという気持ちを抱いているファンは多いはずだ。歴史への責任を棚上げにして、未来へ向かうことなどできないのである。そして〝五味隆典がいない未来〟は、あまりにも寂しい。

（橋本宗洋）

日本MMAの格闘交差点
フェザー級
新章突入!

――今日は『kamipro』だけの一夜

それはどうしてだったんですか？

くらいから入ってたんですか？

かったわけじゃないですか。

DREAM初参戦で貫禄の快勝！
「クソッタレ！」劇場、新章へ――

いきなり王者ビビアーノ戦を熱望！

「日本人ファイターはもう眼中にないですよ」

小見川道大

ミッチーがDREAMで大暴れ！『DREAM.15』でいきなり一本勝ちを披露した小見川は
さいたまスーパーアリーナでも抜群の声援を浴びていたが、今後はどういう道を進んでいくのか!?
そして「日本人に興味なし！」と言いきる小見川の男前すぎる格闘技観とは？

聞き手　松下ミワ　撮影／タイコウクニヨシ

――今日は『kamipro』だけの一夜明け独占取材ということで、よろしくお願いします！

マネージャー　ええ。もうたっぷりお願いします！

小見川　たっぷりぃ？　……チッ（といってギロッと広報をにらむ）。

マネージャー　あ、あの……。いや、せっかくの勝利者インタビューですし……。

小見川　クッソー。ハラ減ってるっつーの！

――ワハハハ！　ちょっといまブラックな小見川さんを見てしまいました。柔道時代はそうやってシメてたんですね。

小見川　フフフフ……。

――しかし、昨日はまた素晴らしい勝ちっぷりでした！

小見川　ありがとうございます。

――初めてのDREAMのリングはいかがでした？

小見川　そうですねえ。ファンの受け入れがけっこうみんなよかったんで、気持ちよかったですね。自分としては外敵だと思われてると思ってたんですけど、そうじゃなかったというか。

――入場はもちろん、オープニングで小見川さんが出てきたときはかなり歓声が飛んでました。

小見川　ありがたいですよね。ま、おかげでやりやすかったです。

――ただ、勝手な印象かもしれないんですけど、小見川さんのDREAM参戦を発表した会見があったじゃないですか。

小見川　カズと一緒に出た会見ですか？

――あのときに、あんまりワクワクしてないというか、そういう印象でした。

小見川　……まあ、正直そうでしたけどね。

――それはどうしてだったんですか？

小見川　うーん……。まず、試合が決まったのが急だったってのがあるし、相手もどんな選手になるかもわからないし、そのー、ワクワクというよりもピリピリした感じだったんですよね。

――結局、名前を言われてもどんな選手なのかわからないという状態だったみたいですが（苦笑）。

小見川　そうですよ。ネットにも何も載ってないし。で、オレの調整の仕方だったりというのは、いままでだったら「こういう問題があるから、それを解いてこう闘おう」みたいな感じで準備をしてたんですよ。『戦極』とかだったらね、カード出すのも早かったから早めの準備という感じでできてたんですけど。そういうことがあって、まあピリピリしてたんですよね。

――DREAMに出場するかもしれないという話自体は、小見川さんの耳にはどのくらいから入ってたんですか？

小見川　大会の1ヵ月前すぎぐらいかなあ。出るかもしれないというのはそのくらいだと思うんですけど、そこで提示されてた相手はオレの闘いたい相手じゃなかったし。まあ今回、実際に闘った相手も正直大好物ではなかったんですけどね。

――小見川選手としてはどんな選手を希望されてたんでしょう。

小見川　（さえぎるように）そんなの、一人しかいないっしょ。

――むむっ!?　ということは、もうDREAM初戦からビビアーノ（・フェルナンデス）と闘いたいと言ってたんですか。

小見川　そりゃそうですよ。それをファンは望んでるんですよ。オレはそう思うんですけど。

――凄い！　それは確かに観たい気持ちでいっぱいですけど、逆にいきなりすぎてドキドキしちゃいますね。

小見川　いきなりでいいじゃないですか。

――べつに新しいリングでの感触を確かめたいとか、そういうのもなしにですか？

小見川　それはないですよ。もう、いきなりでいいでしょ、そんなの。ただ、そんなカードを1週間とか2週間前に言われるんだったら、それはちょっと考えますけど。

――となると、小見川さんがピリピリしてたのは、そのテンションの差だったんですね。結局ビビアーノじゃなかったというか。

小見川　そういうことですね。

――で、実際に闘ったのはジョン・ヨンサム選手だったわけですけど、全然情報がなかったわけじゃないですか。

小見川　そう。オレ、そういうのってトラウマがあったんですよね。昔、グラディエーターという大会でジョン・チャンソンって選手と闘ったんですけど、彼もデータがなくて、映像もなくて、何もわからずに闘ったんですよ。そのときのオレはかなり甘い気持ちで闘ったからよくなかったというか。

――それで判定負けを喫してしまったんですよねえ。

小見川　でも、今回の試合はそういう気持ちもなかったんでね。ちゃんと引き締めて「どうしても勝たなきゃいけない」というのがあったし、その勝ち方の内容も大事だって思ってましたから。すべての面でオレの力を出さないといけなかった試合だったから、その気持ちで闘いましたよ。

――相手選手の情報がないというのはそれだけで不安要素になると思うんですけど、実際の話、どのくらいないんですか？

小見川　だから、オレが知ってたのは名前と、あとは右か左かぐらいですよ。

――えー！　相手が得意なスタイルもまったく不明だ、と。

小見川　なんもないっす。

――よく闘えますね（笑）。

小見川　やっぱそれはそういう状態でも、やんないといけないって気持ちはありますからね。自分もわがままというか、ビビアーノとやりたいというのはずっと言ってるんですけど、あともう一つは日本の格闘技界が不況と言われているなかで、やっ

［10.7.10「DREAM.15」］
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
○小見川道大 vs ジョン・ヨンサム×
（1R 7分31秒 フロントチョーク）
対戦相手はほぼ名前しか情報がなかったというジョン・ヨンサムだったが、試合をコントロールしたのはもちろん小見川。片手で首を絞め上げ、貫禄の一本勝ちだ。試合後は「不景気なんかクソッタレ！」と景気のいいマイク！

DREAM初参戦で王者ビビアーノ戦
それをファンは望んでいるんですよ

ぱりオレが盛り上げたいという気持ちもあったんで。

――それをいうと、ここ最近の発言からはあきらかにWEC移籍を匂わせてましたけど、上がったのは日本のリングでした。

小見川　フフフ……。まあそういうのもあったんですけど、日本でね、とりあえず盛り上げて。というよりも、まあオレが盛り上がっていかないといけないなって。

――それはどういう気持ちの切り替えだったんですか？

小見川　やっぱりこのままじゃ日本は死んじゃうというのもありますよ。それはそうなんですけど、個人的な話でいうと、試合間をあんまり空けたくなかったというのもあったんですよね。

――ああ、なるほど。

小見川　たぶんWECだったらなかなか試合が決まらなかったりもするじゃないですか。それがちょっとイヤだったんで。大きな理由はその二つですよね。

――その二つの欲がある小見川さんにとって、トップファイターがいて、なおかつ試合間を空けずに上がれそうだったのがDREAMだった、と。ただ、先ほどの会見で「世界最高峰、頂を目指して頑張る」と言われていましたが、その一つがビビアーノということですか？

小見川　いや、ビビアーノだけじゃないですよ。ほかにもWECのチャンピオンとかいますよね。

――現在はジョセ・アルドがWECフェザー級の頂点です。

小見川　なんですけど、まずはオレがやりたいのはビビアーノなんですよ。一番近場だし、それが一番実現の可能性が高いじゃないですか。組みやすいのはビビアーノじゃないかなって。

――ただビビアーノというと、相当厳しい相手になりますね。

小見川　そうっすか？　そうは思わないですけどね。

――おお。というと、小見川選手のなかではどういう印象ですか？

DREAMで小見川が虎視眈々と狙っているのは、フェザー級王者ビビアーノ・フェルナンデスの首ただ一つ「打撃に勝算あり」と言いきるだけに早く試合を観てみたいが、やはりそのほかの日本人選手との対決も興味アリアリだ。

小見川　フィジカルとかは強いなあと思うんですけど、打撃……（試合を想像しながら）。打撃に勝算ありという感じですね。だから、負ける気はしないですよ。早く頭を取りたいですし。

――〝頭〟というと、それはベルトのことですか？

小見川　まあ、ベルトを懸けるというか……プププッ。

――どうしたんですか、急に笑いだして（笑）。

小見川　だって、63キロですよね？　オレ、63キロなんか落ちないんだよなあ。

――あ、そういう問題ですね。

小見川　もう、問題はそれだけですよ。

――そうですよねえ。ただ、最近は65キロと61キロあたりを分けてフェザーとバンタムを作るというような雰囲気も出てきてますよね。フェザー級の選手からは分けてほしいという声が噴出してますし。

小見川　あ、そうなんすか？

――そう考えると、勝手な妄想になりますが、65キロには小見川さんがいて、ビビアーノがいて、階級を下げてきた石田選手、宇野選手、ヨアキム・ハンセンがいてという感じで、小見川さん周辺で夢のカードが続々と実現しそうな雰囲気があるんですよ。

小見川　ふーん。まあ、盛り上がりそうですよね。

――そのへんのメンツはどういう印象ですか？

小見川　盛り上がると思うんですけど……でも、そうは言っても、ねえ。まあ悪いんですけど、石田選手も宇野選手も70キロで負けたからフェザーに来たという印象じゃないですか。フェザーでちゃんと勝ち上がってる宮田選手みたいな感じじゃないじゃないですか。

――石田選手もヨアキムもまだ一、二回しか試合してないですし。

小見川　そこなんですよ。

――というと、最近は階級を落としてくる選手が多いですけど、あまり印象はよくない、と。

小見川　印象がよくないというよりも……あんまり見てないかな（笑）。

――そうなんですか（笑）。いや、去年から今年にかけて、ホントに小見川選手がフェザー級を盛り上げてるじゃないですか。その小見川さんからすると、階級を落として挑戦しようとしてくる選手には「そんな簡単なもんじゃないぞ」という気持ちがあるのかなと思ったんですよ。

小見川　それはそうですよ。実際、そんな簡単なもんじゃないと思うし。

――でも、ビビアーノと闘いたいということは、1試合契約だと言われてましたけど、今後もDREAMでやってみたいということですか？

小見川　それは対戦相手によりますね。

――あ、もしかして、そういうのがあるから常に1試合契約でいこうという感じなんですか？

小見川　そうです（キッパリ）。

――ワハハハハ！　それは主催者にはプレッシャーですね。

小見川　フフフ、すいません（笑）。それはホントにオレのワガママですいませんって感じですけどね。

――それはでもワガママを通したい感じなんですね。ただ、その一方で日本の格闘技を盛り上げたいという気持ちもあるわけですよね。

“番長”高谷が小見川に激怒!?

高谷裕之がミノチーの煽りVに大激怒!?　DREAM.15で流された小見川の煽りVでは、09年「Dynamite!!」高谷戦の映像が流されていたが、高谷との再戦について質問されたミノチーは「この前やったばっかりでしょ？　そんなにすぐ強くならないっしょ」とさすがの一言。これをPPV解説席で聞いていた高谷は、解説を忘れるぐらい激怒していたとか。二人の絡みにも要注目だ！

日本格闘技を盛り上げたいとは思う。だから強い選手をこっちに呼んでほしい

小見川道大

小見川　そうですね。それはありますよ、もちろん。

——それで小見川選手が海外に行っちゃうと、我々はちょっと寂しいなあというふうに思っちゃうんですよ。

小見川　ま、だからこっちに呼んでくれてもいいですしね、そういう強い選手を。呼べるんであれば。

——また主催者にプレッシャーを！

小見川　いやいや、でも正直それが理想的ですよ。

——なるほど。ところで、昨日の試合が終わったあとは中村カズ選手とはお話しされました？

小見川　しました。まあ、もうずっとカズとは試合決まったときからともに勝ちを誓ってたんで、終わって二人で抱き合いながら喜びましたね。

——ハハハハ！　今回は、吉田選手が引退されて初めての試合だったと思うんですけど、その後の道場の雰囲気はどんな感じだったんですか？

小見川　吉田さんがいなくなってからですか？　まあ、カズが中心になって後輩をまとめたりする感じですよね。ま、オレも。だからオレとカズで引っぱってる感じというか。

——なんかやっぱり違いますか？　吉田さんがいなくなって。

小見川　うーん……あんまり（笑）。

——ワハハハハ！　そんなこと言っていいんですか？

小見川　いやでも、あんまりですね（笑）。

——そうなんですか（笑）。ちなみに、カズさんといえば、今年の春先におでん屋「中村屋」をオープンされたじゃないですか。小見川選手は行かれました？

小見川　はい、行きましたよ。

——小見川選手から見て、繁盛されてましたでしょうか？

小見川　うーん、まあボチボチなんじゃないですか？　なんでですか？

——いや、一度『kamipro』で「中村屋」を取材させていただいてるんですけど、そのときはおでん屋だったのに、何か急に方向転換をされたというお話を耳に挟んだんで、ちょっと心配というか。

おみがわ・みちひろ■1975年12月19日、茨城県出身。柔道からMMAに転向し、05年5月に『PRIDE武士道』でプロデビュー。09年『戦極』フェザー級GPでは現王者マルロン・サンドロを判定で下し準優勝。MVP級の活躍をはたした。同年大晦日には高谷裕之を撃破。『DREAM 15』でいきなり衝撃の一本勝ちを見せた。168cm、65kg。

小見川　ハハハハハ！　そうっすよね。

マネージャー　ちなみに、今度は土手煮屋になるって話なんですよ。

——ど、土手煮屋に！

小見川　いや、土手煮というか、まあ居酒屋ですよ、あそこは。おでん屋っていうよりも居酒屋という感じでまとめたほうがいいんじゃないですか？

——へんに種類分けしないほうがいい[illegible]じゃないか、と。

小見川　だから、おでん屋って最初から[illegible]くんないほうがよかったんですよね。もう居酒屋で。

——わかりました。ちなみに、小見川さん[illegible]にはそういう展望はないんですか？

小見川　なんすか？　展望って。

——いや、「小見川屋」を出す計画はな[illegible]かなって。

小見川　ないっすよ！（笑）。オレはいい[illegible]っす。いまこっちのほうが忙しいん[illegible]

——失礼しました。マジメな話に戻すと、昨日の煽りVでも小見川さんは「遅咲きの～」という感じで紹介されてました[illegible]も、ずっと柔道をされてて、総合で爆発したのがホントに去年の『戦極』フェザー級GPだと思うんですけど、これからというか、残りの格闘技人生はどういうふうにやっていくのが理想だと考えてますか[illegible]

小見川　うーん……「残りの」ってのが、ねえ。なんて言うんだろう、もうできないとか全然そんなこと思ってないんですよね。それで制限しちゃうことによってパフォーマンスも制限されちゃうんで。だから、もとから「これからの」とか「残りの」とかいうのは制限してないんですよ。

——「どのくらいまでできるんだろう」とかそういうのも考えてないというか。

小見川　いや、考えてないですよ。でもそうだと思いますよ、人間なんか。「残り何年やって……」とか考えちゃうと、もうその時点で終わりですよ。そっから成長する度合いが絶対に少なくなりますから。

——突っ走ったほうが強くなれる、と。

小見川　あの～、アフリカのどっかの民族なんか、自分の年齢知らないヤツとかいる[illegible]いですからね。

——ほう（笑）。といいますと？

小見川　いや、もう60歳ぐらいなのに、自[illegible]こと20歳だと思ってるヤツもいるみた[illegible]ですから。

——ワハハハハ！　そんな民族がいるん[illegible]か。というか、そんな話、どっから仕入れてくるんですか？（笑）。

小見川　いや、わかんないんですけど、い[illegible]ですよ。だからもう歳なんか数えな[illegible]んでしょうね。1年とかいうくくりもないんじゃないですか？

——そうか。四季がない国だったら、なおさらそのへんはあやふやでしょうね。

小見川　だからビンビンですよ、そういうヤツらは。ま、アフリカかどうか忘れちゃ[illegible]ましたけどね。

——じゃあ、小見川さんもそういうのは気にしてない、と。

小見川　考えたことないっす。オレも歳なんかどうでもいいですから。

——では、やはりまずはビンビンのビビアーノ戦というわけですね。

小見川　もうビンビンっすよ。

——いや、こちらもぜひ実現することを楽しみにしてます！　というわけで、まずはお腹を満たしてきてください（笑）。

小見川　あ、いいっすか？　じゃ、行ってきます（笑）。

【10年7月11日／都内・某ホテルにて収録】

水野、

マヌーフから大殊勲勝利!!

〔10.7.10 DREAM.15〕
埼玉・さいたまスーパーアリーナ
〔ライトヘビー級王座挑戦者決定戦〕

○水野竜也 vs メルヴィン・マヌーフ×
（1R 7分38秒 アームロック）

アメリカ修行を終えた水野竜也は、マヌーフの打撃に苦しみながらも粘り強い闘いを続け、最後は渾身のアームロックでマヌーフはたまらずタップ！ 水野が殊勲の星を挙げ、ライトヘビー級王座決定戦への進出を決めた。

ナメてて
正直
スマン!!

日本重量級に
とてつもなく“いい人”が現われた!

「勝てるかなじゃなくて、ムサシに勝つつもりでいきます!」

水野竜也

水野がやったど〜!!!!　戦前、圧倒的不利をささやかれてい[illegible]が、
猛獣マヌーフのラッシングパワーに苦しみながらも大逆転勝[illegible]
場内に感動の渦を巻き起こした“新・風雲昇り龍”が劇的一[illegible]振り返る

聞き手／橋本宗洋　撮影／タイコウクニヨシ　試合写真／小林靖

――まずはメルヴィン・マヌーフ戦での勝利、本当におめでとうございます。正直に言わせてもらうと、失礼ながらメチャクチャ驚きました（笑）。

水野　あぁ、そうでしょうね（笑）。下馬評はマヌーフ選手だっていうのは、僕もわかってました。でも、そういうのは見ないようにしてましたね。やっぱりモチベーション下がっちゃうんで。

――ちょっと試合を振り返っていただきたいんですけど、僕が印象に残ったのは、最後のグラウンドの展開の直前、マヌーフのラッシュにパンチを返してダウンさせたところなんですよ。「よく、あそこで打ち返したな」と。

水野　ゲームプラン的には、打撃でいくつもりは全然なかったんですけど、気持ちがノッてきたというか。やられたんで、無我夢中で打ち返したって感じですね。

――その前のテイクダウンでは、アームロックを極めきれなかったじゃないですか。あそこで気持ちが切れてしまうような選手も多いと思うんですよ。

水野　そうですね。でも、僕は気持ちでは負けない自信があったので。気持ちと、あとスタミナですね。アームロックも極めることはできなかったんですけど、あのあとでマヌーフ選手が疲れてるだろうってことは想定してたんで。「ここからだぞ」って自分に言い聞かせてました。無我夢中でパンチを打ち返したんですけど、冷静な部分も多かったです。

――マヌーフ相手に冷静に試合を進めることができたっていうのは、アメリカ武者修行の成果ですかね。

水野　練習をやり込んだっていうのは感じてますね。

――アメリカでは、どんな練習をされてたんですか？

水野　基本的に、午前中は1時間半から2時間、フィジカルトレーニング。午後はテクニックの練習とかスパーリングですね。フィジカルのトレーナーが凄く専門的で、「信じてついていけば、絶対に自分は変われる」って思ってました。

マヌーフはいつものような圧倒的なパワーで水野をコーナーまで追い詰めると、左右パンチを振るってラッシュ！ 場内が悲鳴に包まれるなかでも水野は勝負を捨てず、劇的な逆転勝利にこぎ着けた。

――以前は、フィジカルトレーニングは自己流だったんですか。

水野　そうですね。だから、それが本当に効果的なのかどうかもわかってなかったですし。だから自信にもつながらなかったんですよね。でも、アメリカでは専門のトレーナーがメニューを考えてくれるし、健康管理もしてくれるんで。こっちは信じてやるだけでした。

――そのへんは、アメリカの選手やアメリカで練習したことのある選手に聞くと、みんな強調するんですよね。「練習内容や作戦はコーチが考えてくれるから、自分はひたすらそれについていくだけだ」っていう。

水野　選手は練習だけすればいい、闘うだけでいい、ほかのことは考えなくていいっていう環境なんですよね。そこが凄く大きいと思います。

――練習メニューそのものも、いろんな工夫がされてそうですよね。

水野　基本的に、メニューは毎回違うんですよ。同じ筋肉を使うにしても、違うことをやって鍛える感じで。だから飽きることがないし、集中してできました。

――たとえば、前の日に走ったら、次の日は水泳とか。

水野　あとは、走るにしてもおもりを持って走ったり、ステップを使って小刻みに走ったり。同じメニューがないんですよ。

――その成果もあってか、見た目もかなりシャープになった感じがしますね。

水野　でも通常体重でいうと、逆に増えたんですよ。

――あ、そうなんですか。

水野　ただ、脂肪が減って筋肉が増えたんで、見た目も変わったのかもしれないです。

――スパーリングも、向こうは相手が凄そうですよね。

水野　そうですね。大きい相手がいっぱいいますし。リッチ・フランクリンも短期間だけど練習に来てたんで、スパーリングしてもらいました。あとジョシュ（・バーネット）ですね。ジョシュはもうほんっとに強くて、「自分がヘビー級で闘うのは無理だな」って思いました（笑）。

――逆に日本だと、自分より小さい選手とのスパーリングがほとんどでしょうからね。

水野　日本でスパーリングやってると、不安が大きかったですね。いざ試合になると、スパーリングのときより相手が大きいので。

――試合でいきなり、自分と同じ体格の相手とやるわけですからね。

水野　だからパンチの距離も全然違いますし。そういう点でも、今回はスパーリングパートナーにもマヌーフ選手と同じような体格の選手を選んでもらったり、ファイトスタイル的にもマヌーフ選手を演じてもらったりして。そういう不安もなかったですね。

――練習してるうちに、どんどん不安がなくなるというか、自信がつくというか。

水野　マヌーフ選手とやることになったときは、正直ビビったんですよ。あんまり得意なタイプじゃないですし。でも、みんなで映像を観て研究して、練習を繰り返してるうちに「いけるんじゃないかな」って心境に変わってきましたね。だから試合のときも落ち着いてました。熱くはなったんですけど、パニックにはならなかった

マヌーフ選手とやることになったときは正直ビビったんですよ

勝利の瞬間、顔をクシャクシャにさせて喜びを爆発させる水野。試合後には「僕の力は10%くらいで、マット先生やチームのみんな、お金を払って観に来てくれた皆さんのおかげです」とマイク。

んで。相手が疲れてるのもわかりました し。

――じゃあもう、アメリカで選手として一変して帰ってきたという感じですね。ちなみに、練習以外の時間はどんなことをしてたんですか？

水野　基本、寝てました。遊びに行っても、英語がしゃべれないですし。

――ひたすら格闘技漬けの生活というか。

水野　それがよかったんだと思います。アメリカに行くことにした時点で、そのつもりだったので。

――ここで、ちょっとこれまでのことを振り返っていただきたいんですけども。もともと、水野選手は「日本期待の重量級ファイター」だったと思うんですよ。パンクラスではヘビー級タイトル挑戦者決定戦をやってますし、M-1チャレンジの日本代表にも選ばれたり。ただ、どうしてもミルコ戦の惨敗が目立ってしまうところがあって。

水野　格闘技が好きで、小さい試合も観てくれてる人とか、自分を応援してくれてる人じゃなければ、どうしてもミルコ戦しか知らないですから。僕の印象はあの試合だけっていう。いつか、それを払拭したいっていう気持ちはありました。ミルコ戦で止まってる時間を動かしたいっていうか。だから、本格的に格闘家として始まったのが、あの試合だったと思ってます。そして、DREAMでの闘いが本格的に始まったのが、今回の試合だったのかなって。

――ミルコ戦とマヌーフ戦が、大きな分岐点だった、と。

水野　ミルコ戦の前は、サラリーマンやりながら、趣味の延長って言ったらおかしいですけど、自分のためだけにやってた感じだったんですよ。でも、ミルコ戦のちょっ

ベルトを巻いて初めて嫁や周りの人に恩返しできると思います

水野竜也

だったんですよ。でも、ミルコ戦のちょっと前に仕事を辞めて、いろんなものを背負うようになって。そこから変わりましたね。

——そして試合直前のミルコ戦のオファーを受けて、負けてっていう。もの凄い転機ですよね。

水野　あの試合は、いままでで一番ダメでしたね。完全に飲まれてたし、試合ができる身体じゃなかったですし。なんとか自分をごまかそうとしてたんですけど、身体はごまかせなかったです。

——ちなみにDEEPの佐伯さんは、ツイッターで「ミルコとやらせてしまったことには責任を感じてました」とつぶやいてましたね。

水野　あっ、そうなんですか（笑）。でも、あの屈辱というか、プロの洗礼がなければ、いま自分がこれだけ頑張ったり、背負ったりできてないと思うんですよ。だから、ミルコ戦をやらせてもらったことは感謝してますね。あそこで厳しさを思い知らされてよかったと思ってます。

——話はちょっと逸れますけど、水野選手は大学まで柔道をやってたんですよね。

水野　はい。高校は土浦日大で。マッハさんと小見川さんの後輩ですね。

——で、卒業してからは綜合警備保障に就職して。非常に安定したというか、真っ当な生き方じゃないですか。そこからプロの道へっていうのも勇気がいるなと思うんですけど……。

水野　そうですね、結婚もしてましたし。

——あ、その時点で結婚も。じゃあ、周りからはかなり反対されたんじゃないですか。

水野　そうですね……昔から格闘技は好きで、漠然と憧れはあったんですけど。それでサラリーマンやりながらアマチュアの試合に出て、プロでもやるようになって。でも、アスエリオ・シウバ選手にボコボコにされて「このままじゃ勝てないし、身体自体が危ない」って思ったんですよ。それで「やめるか、プロ一本でやるかしかない」って。それで、プロとしてやることにしたんですけど、親には猛反対されましたね。とくに自分のほうの親は「なんのために結婚したんだ。相手方に顔向けできないじゃないか」って。

——そうなるでしょうね、やっぱり。

水野　「勘当だ」くらい言われたんですけど、そこで嫁が説得してくれて。

——奥様だけは賛成してくれた、と。

水野　だから、自分がこうやって試合できてるのも、嫁のおかげなんですよね。今回、勝ったことで、少しは恩返しができたのかな、と。

——そう考えると、アメリカ武者修行自体も凄い決心ですよね。奥さんもいるのにっていう。

水野　それも、凄く悩んだんですよ。でも、格闘技の道を選んだ時点で、「これで成功しなかったら、自分はダメ人間でしかない」って思ってるんで。「どんなに努力しても、結果が出なかったらゼロと一緒。周りは評価してくれないし、誰もお金を出してくれない。だから我慢してくれ。強くなるため、結果を出すためにできることは全部やりたい」って嫁には言いました。向こうも悩んだみたいですけど、最終的には応援してくれましたね。でも、半年間も離れてたんで、相当まいってたと思います。自分が稼いでればいいんですけど、そういうわけでもないですし。嫁に、よく待っててくれたと思います。

——アメリカにいるあいだは、無収入になるわけですもんね。

水野　あと現地での生活費もあるんで、お金はなくなっていくばっかりでしたね。

——じゃあもう、本当に「勝つしかない」っていう状況だったんですねぇ。そう考えると、試合後の「お金を払って観に来てくれた皆さんに感謝します」って言葉も切実さが感じられますね（笑）。

水野　そうですね（笑）。やっぱり不景気ですし、そういうなかで観に来てもらえるのはありがたいです。プロはお客さんにお金もらってるようなもんですから。

——お金のありがたみが身にしみてわかっているというか（笑）。奥様とは、試合が終わってからどんなお話をされたんですか？

水野　これが案外あっさりしてましたね。「よかったね」くらいの感じで（笑）。

——まだ先があるっていうことを、奥様もわかってるんですかね。

水野　海外武者修行に行く段階で決めてたのは「目指すはベルト」だったんで。トーナメントが決まったときに「ベルトを獲れるだけの練習をしよう」って決めたんです。1回戦で勝つための練習をしてたら、決勝で負けちゃうかもしれないし、もしかしたら1回戦で負ける可能性だってあると思うんですよね。

——ということは、決勝のゲガール・ムサシ戦に向けても臆するところはまったくなし、と。

水野　やっぱり、ベルトを巻いて初めて、嫁なり周りの人に恩返しできると思うんで。「勝てるかな」じゃなくて、勝つつもりでいますね。

——次もアメリカで練習するんですか？

水野　日にちは決まってないんですけど、その予定です。自分はアメリカで、マット（ヒューム）先生を信じてやるだけなんで。マット先生が「やれ」って言えば、自分はケガしてても練習しますし。

——自分の身体はマット先生に預けた、と。

水野　それで今回も結果が出せましたから。もし負けたとしても、それはマット先生のせいにしようと思ってます（笑）。それくらい信じてますし、信じてついていけば勝てると思ってるんで。

【10年7月11日／都内・某所にて収録】

みずの・たつや■19[illegible]年[illegible]月2日、茨城[illegible]出身。06年パンクラスでプロデビュー。08年3月の「DREAM.1」ではミルコ・クロコップの相手に大抜擢。09年10月からマット・ヒュームのもとでトレーニングを開始、今回見事に大舞台でその成果を発揮した。186cm、95.5kg。

激勝の陰にピラニアのサポートあり！

長南亮が語る水野竜也という男

猛獣マヌーフから感動的な逆転勝利を飾った水野竜也。
かつてミルコに秒殺負けした男は、いかにして強さを身につけたのか？
水野の練習仲間であり、当日セコンドも務めた長南亮が、
知られざるエピソードを語ってくれた。

聞き手／長谷川亮　構成／鈴木佑　試合写真／小林靖

――『DREAM.15』で感動の主役となった水野選手のセコンドには長南さんの姿がありましたが、普段から練習もご一緒に？

長南　もともと水野が吉田道場へ来るようになったのも、自分がきっかけになってるんです。2年ぐらい前ですかね、U-FILEでパンクラスにレギュラー参戦して、日本人相手には結果を出せるけど外人にはなかなか勝てない選手っていうんで気になってたんです　それで周りの人にいろいろ話を聞いたら、凄く格闘志向が高いっていうのと練習相手があまりいないっていうのが聞こえてきまして。それで練習相手や環境に困ってるっていうことだったんで、知り合いづてに電話で話をする機会があったから、「ちゃんと格闘技したいんだったら、吉田道場に練習来いよ」って言って。向こうは鎖国状態なので半分脅しですよね（笑）。

――脅しましたか（笑）。

長南　でも小見川さんも、水野は高校でのすれ違いの後輩らしくて、柔道時代の動きは「凄くよかった、極めのある強い奴だった」って知っていて。それで若干圧力かけるふうの言い方をしたから水野も最初は「えぇ～」みたいな感じだったんですけど（笑）、来てみたらやっぱりちゃんと練習できたのか、レギュラー的に参加するようになりました。誘ったのはうちの白井（祐矢）とか中西（良行）にとっても、吉田道場の軍団にとっても練習仲間が増えたほうがいいだろうし、もちろんそれは水野にとってもいいことだと思ったからです。ボクシングトレーナーの田代さんからも協力してくれたり、ちゃんとそういう総合のメンバーが揃ったなかで練習してみろ、と。そういうつながり

ですね。

——では長南さんが吉田道場での練習を取り持ってあげた、と。

長南 まぁ、でもそれはみんなのためっていうか。水野にしても、あの階級の日本人ってなかなかいないんで、よりパワーのある人間とやっていかないと練習にならないんじゃないかっていうのがあって。あとパンクラスに出てたときの話を聞いたら、なんかアマチュアから全部自分でエントリーして、それで結果を出して本戦に上がっていったっていうんですよね。田村（潔司）さんの弟子っていうので出たんじゃなくて。純粋にアマチュアから出て結果を出して本戦に参戦して、そこでも勝っていったっていう話を聞いて、真面目な奴なんだなって。それで練習相手がいないのはかわいそうだし、もったいないなと思ったんです。自分もかつては同じところ（U－FILE）にいて、自分と同じ道を歩ませようとか、こっちに引き抜こうとは思わなかったですけど、やっぱり練習はちゃんと本気でやり合える人たちとやってたほうが強くなる近道なんじゃないかと思ったんです。

——最初、水野選手が吉田道場の練習に来始めたときは、どんな感じだったんですか？

長南 100キロぐらいあったんですけど、そのわりにはうちらと組み技も互角に闘ってたし、打撃も全然できなくて。独特のサウスポーでやりづらいっていうのはあったんですけど、スタミナもあまりなくて、自分は普段の体重が85キロぐらいしかないんですけど、100キロにしてはもうちょっと、俺らが相手にならないくらいじゃないとダメだろうっていうのがありました。まぁ、性格的に遠慮してるところもあったんでしょうけど。でも、そこらへんはアメリカへ行って成長したんじゃないかと思います。向こうのライトヘビーとかの選手と練習をやってきて、そういう意識は変わったんじゃないかっていうのは感じました。

普段の水野はリングでしゃべった
マイクのセリフそのままの男です

——なるほど。

長南 やっぱり日本の場合だとミドルの選手とかは多いですけど、いてもミドル級ぐらいまでで、ライトヘビーっていうのはほとんどいないんですよね。しかも動けて技術のあるライトヘビーっていうのは。この前はアメリカへ行ってリッチ・フランクリンとかいろいろ練習してきたみたいですけど、それで身体の作りとかも全然違うっていうのがわかっただろうし、そういうのを目の当たりにしてだいぶ意識が変わったんじゃないかと思います。やっぱり俺ら相手に互角だったらライトヘビーではやってけないよ、っていうのがあるんで。

——そういう意識面以外で、成長が感じられたところはありますか？

長南 もともと大きかったんですけど、身体つきも変わりましたね。前はちょっと絞れてないっていうか、なんかダラっとした体型だったんですけど、それがあっちで追い込んでサプリメントとかもいろいろ摂るようになって、たぶん本人も凄く長く動けるようになったんじゃないかと思います。スタミナも上がりましたし。だからミルコトとやった頃とはまったく別人だと思います 練習仲間もみんな驚いてました。パワーがついて身体が強くなったって。もともと体重はあったんですけど、体重以上に大きさを感じるというか、それは体重のかけ方がよくなったり、骨格・筋肉の質が変わってきたんじゃないかと思います。

——ではやはりアメリカ修業を経て、大きな成長があった、と。

長南 そうですね。でも全部きっかけだと思うんですよね。アメリカに行くことになったのもきっかけだし、自分とそうやってたまたま電話で話したのもきっかけだし、そこで努力し続ける才能があったんじゃないかと思います。やっぱりいろいろ紹介しても来なくなる選手は来なくなりますし、そういうところで続けてやる才能っていうか。体格はありますけど、そういう気持ちもちゃんと持った選手なんじゃないかと思います。

——普段の水野選手というのはどんな人なんですか？

長南 酒も飲まないし真面目で、うちの白井とか中西に似てますよね。凄い控えめな部分もあるし、リングでマイクを持って言ってたような、セリフのまんまの男です。

——では、自分を作って人前に出る選手もいますけど、水野選手に関しては、ああいう発言や振る舞いそのままの人間だ、と。

長南 そうですね。周りのことを考えて遠慮するところがあったり 大会当日も「どうやって会場行くの？」って聞いたら「あ、電車で行きます」とかって言うんです（笑）。だから「おまえ、アマチュアのゴールドジムの試合に出るんじゃねえんだぞ」って（笑）。「俺が迎えに行ってやるから遠慮するな」って言ったら、やっぱり恐縮したんですかね、嫁にお願いして送ってきてもらったって言っていました（笑）。

——素朴な人柄を感じさせる秘話ですね（笑）。でも、そういう部分が会場で生んだ感動と無関係じゃなかったと思います。

長南 あの試合は最初の攻撃で一瞬ミルコ戦みたいになりそうになって、自分も「ヤバい！」と思ったんですけど、やっぱりずっと練習してきてたから、気持ちが切れなかったっていうのがあったんでしょうね。

——作戦としてはどんな感じだったんですか？

長南 これもちょっと秘話があって、フェイントを入れたレスリングっていう作戦だったんですけど、俺とウィッキーとマッハさんは回り込みながら柔道技を使っていけって言ったんです。それで水野が「みんな言うことが違うんで、どうすればいいですか？」って困っちゃって（笑）。

——みんなを立てないといけないし、気を使う人でしょうから困ったでしょうね（笑）。

長南 でも結局はマットをコーチとして一番信頼していたみたいだったんで「じゃあ、マットの言うふうにやってみろ」って言って、自分は通訳しながらセコンドしていたんです。マットが自分にいろいろ言ってきて、それを訳してデカい声で叫んでっていう感じで。

——マヌーフ戦での勝利は日本重量級に希望の星が誕生した瞬間でもありました。

長南 そうですね。逆に「ほかにいるのか？」って言ったらいないと思うんですよね。ライトヘビーで闘える日本人って。だから一人で立ち向かっていかないといけないですけど、そこらへんはうちらも協力しますし頑張ってほしいですよね。練習も秋山（成勲）さんのところへ連れていってもいいのかなとも思ってます。大きい選手が多いので同じような体格で組み合いとかもできるでしょうし。だから、もうちょっと日本人選手の重い階級、近い階級でまとまればもっといい練習ができるんじゃないかっていうのはあります。俺が混ざるのは体格的にしんどいんですけどね。

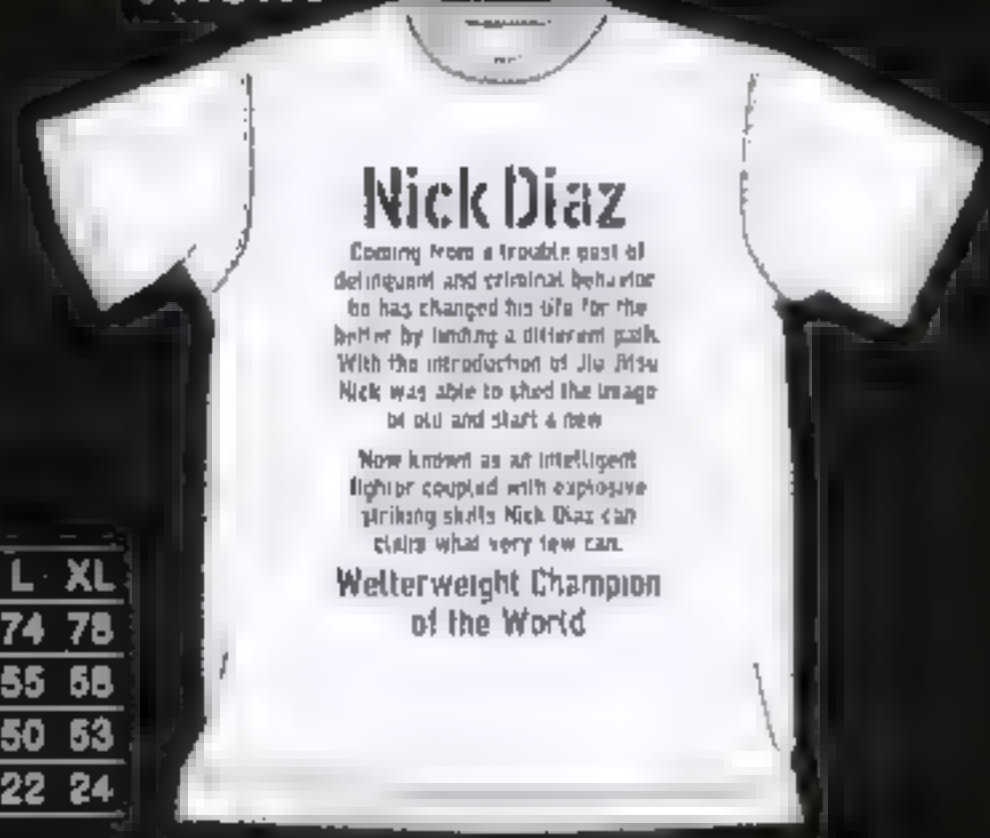
——長南さんとしてもそういうサポートは惜しまない、と。

長南 それが俺らの練習にもなりますし。それで結果を出せて水野が喜べば、自分もうれしいですから。やっぱりそういう後輩とかの頑張りっていうのは自分の試合にも影響するし、練習に関してても気持ちの面でも、みんながいいじゃないですか。だから今回の試合っていうのも練習仲間みんなが凄く感動してましたし、みんなにいい効果があったと思います。水野もメールで「ありがとうございました」とかってお礼を言ってくるんですけど、そういうのはお互いさまだよっていう感じですね。

【10年7月12日 電話取材にて収録】

ちょうなん・りょう■1976年10月8日、山形県出身。01年にプロデビュー。04年からはPRIDE武士道に参戦、アンデウソン・シウバに一本勝ちしたことも。UFC参戦を経て、今年3月にDREAM初参戦。177センチ、77キロ。

暴力柔術

Nick Diaz
Welterweight Champion of the World
暴力柔術

サタハルンバ、好興行続きのマット界を斬る!

「青木くんはなんで弱いんだ」

FEG代表 谷川貞治

SRC、ストライクフォース、UFC [illegible]Xと大爆発の興行が続いたここ一カ月の格闘技界。
そんな喜ぶべき状況をサタハルンバはど[illegible]て眺めていたのか。さらに"ジャニー谷川"出現を
予感させる発言も連発、ひさ[illegible]、ご堪能ください。

聞き手 シャン斉藤 試合写真 [illegible]es(UFC)、Esther Lin(STR KE FORCE) 撮影 タイコウクニヨシ

谷川　（ヒョードル表紙の速報号をパラパラめくりながら）これ、おもしろそうだねぇ……。

――ヒョードル敗戦は10年に一度の大事件ですから！

谷川　大事件だよね～（ボーッとしながら）。

――あんまり大事件って顔してないですけど。

谷川　いやいやいや。（向井SRC代表のページを開いて）へえ～、向井社長もインタビューしたんだ。

――「ボクらは儲からなくていいんです」と言ってました。

谷川　そうなんだあ。でも、やっぱり儲からないとダメですよ!!　うらやましいかぎりだねえ。

――では、今日は谷川さんがいかに儲けてるかをお聞きしましょうか。

谷川　んあ～！　全然儲かってないです。でも、儲からなきゃダメだよぉ！

――俺も儲けたい!!　儲かってるかどうかは別にして、最近はおもしろい格闘技興行が続いてますよね。先陣を切ったのはSRCでしたけど。

谷川　SRCは向井社長になってから方向転換したよね。あんまり高額ファイターを呼ばないで、新しい選手を育てていこうっていう。

――あ、またお金の話。

谷川　そのなかでマルロン・サンドロは凄いねえ～。そんなにギャラも高くないみたいだし。

――ハハハハハ！　ちなみにこないだのSRCで一番高かったのは誰なんですかね？

谷川　誰だろ……？　菊田早苗？

谷川　かもしれないなあ。出てないけど、（ジョルジ・）サンチアゴもボクからすると高そうだねえ。

――SRCの次は、ストライクフォース、UFCとお金がたくさんかかったビッグイベントでしたけど。

谷川　ヒョードルも高いんだよな……。

ヒョードルのファイトマネーを下げるために、いわゆるジミ強のファブリシオと対戦させたと推理するサダハルンバ。もしそうだとしたら、ファンにとっては、いいような悪いような……複雑な気持ちだ

――いつまで続くんだ、お金の話（笑）。

谷川　マジメな話、ヒョードルの負けは本当に驚いたし、格闘技ってこんなもんだなって感じだったよね。ただ、そもそもスコット・コーカーはファブリシオと闘わせちゃダメだよ。

――そこが興味深いんですけど、日本だとまずやらせないですよね。でもUFCのレスナーvsショーン・カーウィン含めて、アメリカでは簡単にそういうマッチメイクが組まれちゃいます。それは時代性の問題ですか？

谷川　いや、時代というよりダナ・ホワイトやスコット・コーカーの資質の問題じゃないの？

――ほほう。これはまた上から目線できましたねぇ。

谷川　いい意味であんまり細かいことを気にしてないというかさ。誰かを上げて誰かを下げたりしてドラマを作るかという、そういう意図は感じられないよね。ヒョードルの一連の対戦相手とか全然そう思うなあ。日本だったらヒョードルに勝ってもいいような選手を育ててマッチメイクしようとするじゃない。

――要はミルコ・クロコップの打倒ヒョードルストーリーとか。

谷川　いまで言うとアリスター・オーフレイムとかね。

――でも、気になるのはスコット・コーカーは「ファブリシオが勝つ」って言ってたらしいんです。

谷川　……なるほど。だとしたら、それはもう「ヒョードルのファイトマネーを下げよう」って意図だね！（鼻息荒く）。

――ガハハハハ！　またお金の話！

谷川　それはプロモーターとしての一つの思惑にはなるなあ　ときどきスコットなんかとしゃべってると、子飼いのカン・リーなんかもちょっと生意気になっちゃうと「どっかで負けさせよう」っていう気持ちが感じられるもんね。

――へえ～、おもしろいですね。

谷川　そこで地味ツヨを当てても、意外とファイターは無頓着に受けたりするんだよね。

――日本のMMAってプロレスの文化から流れてきてるから、安易な言葉で言えば「おいしい、おいしくない」を気にするファイターは多いですよね。

谷川　日本が好きな外国人選手もそこを気にするもんね。ジョシュ・バーネットなんか典型的。基本的に外国人ファイターって、まず稼ぐってことを念頭に置くから、どんなオファーでも案外受けちゃうんだよ　「お金より価値のあるものがある」って考えるのが日本人のファイターだけど、外国人のファイターってのは「その場のお金が大切」っていう考え方をするから。

――谷川さんはどっちなんですか？

谷川　ボクのことはいいの！　しかし、今回のヒョードルはいつもとまったく違う顔に見えたなあ。「あれ、これヒョードルなの？」っていう。負けたって聞いてから観たからかもしれないけど。

――それは結果を知ってるから、先入観があったんじゃないですか？

谷川　まあ、そうなんだけどさぁ。

――そうなんだ（笑）。

谷川　ヒョードルのいいとこって冷静なわりにイケイケなところだけど、それが悪いふうに出てたなっていう。でもね、さっきの話の続きで言うと、最強を作れるのは日本のほうがうまいよ。ヒクソンしかり、ヒョードルしかりだけど。海外のプロモーターは最強を作れるかなあ。

――いわゆる最強という幻想を作れるかどうかですよね。たとえばレスナーはケイン・ヴェラスケスという凄く強い選手と闘うんですけど、日本のプロモーターだったらもっと引っぱりますよね？

谷川　引っぱるねぇ。だから結局、最強

幻想を作るのはボクらだけど、その幻想をアメリカで壊されてる感じがしますよ。ただ、プロモーターサイドとして考えると悪い話ではないんだよね。
――どうしてですか？
谷川　ヒョードルのギャラが安くなるから！
――この"クソプロモーター"！（青木真也調）。
谷川　ところで秋山（成勲）くんはどうだったの？　ヴァンダレイ（・シウバ）が直前に欠場しちゃったんでしょ？
――クリス・リーベンという代役と闘って負けたんですけど、秋山はよく試合を受けたなって。
谷川　もし日本だったら秋山くんは絶対に試合を受けてないだろうね。単純においしくないもん。たぶんボクらに対して「もうちょっと頑張って探してくれ」って言うでしょう。
――もうちょっと頑張ってくれ（笑）
谷川　もっとおいしい相手を用意してくれってことだよ。ただ、ダナは日本やアジアの状況をよく知ってるから、秋山に対してだけはそれでも凄い気を使ってるように見えるよ。やっぱり日本と韓国で唯一興行として頼りになるのが秋山くんしかいないからね。
――クリス・リーベンもアメリカでは有名な選手だから、そこも凄く気を使ってるように思いますよね。ただ、ストライクフォースやUFCみたいなマッチメイクが進むようになれば、幻想を持つ選手はどんどん少なくなってくるわけじゃないですか。
谷川　いなくなるだろうねえ。それと同時に最近は情報があふれてて忘れるのも早いからさ、何かを溜めるってことができないんだよね。たとえば、ヒョードルや秋山くんの試合だってもう忘れちやってる人は多いもん。だから青木vs川尻の試合だって実現のタイミングに賛否両論あったけど、もうその場その場でどんどんやっていくしかないよね。そういう意味ではK-1のワンデートーナメントはよくできてるんだよ。

ヴァンダレイのケガにより、突如対戦相手がクリス・リーベンに変わった秋山。試合はリーベンの大逆転一本勝利となり秋山は負けてしまったが、秋山にとっては同じ負けならヴァンダレイに負けたほうがいいと思っていた可能性は高い。いま思うと、よく試合を受けたものだ。

ヒクソンしかり、ヒョードルしかりだけど 海外のプロモーターは最強を作れるかなあ

――……あんまりお金がかからないから？
谷川　ちが～う！　1日で完結するから!!　もちろん選手の頑張りに大感謝なんだけど、さんざん発破かけたとおりに闘ってくれたという。
――どんな発破をかけたんですか？
谷川　「勝つことばっかり考えた試合をしたら、来年は絶対にないから！」って。だから今回は"チーム63キロ"の大勝利だと思ってるからね
――後楽園レベルだと63キロは一つのブランドとして固まってますけど、一つ上の舞台に上げたときにまだ確立されてないってことですよね。
谷川　そう。代々木第一で開催したということでは、紀左衛門以外はみんなデビュー戦みたいなもんだからね。
――そこは難しいですよね。キック系のマスコミは石川直生目線で見ちゃう人が多いじゃないですか。だけど、K-1 MAX目線で見ちゃうと「誰ですか？」という話になってくる。
谷川　もう前にやってたことなんてどうでもいいんだよ。だって闘うのはK-1のリングでしょ。だったらいかに"K-1頭"になるかどうかだよ。でもすでに"The・新日本キック"みたいな松本選手や裕樹選手なんかも"K-1頭"になってる。それがいいかたちで爆発しましたよ。
――プロになるスイッチを押してくれるんでしょうね、K-1は。
谷川　そうそう、石川くんなんかそこが甘かったですよ。紀左衛門は生意気だけど、最初から正しかったのはK-1とキックの違いをちゃんとわかってたこと。そこが凄く大きかったと思う。あとさあ、大和くんはいい選手だなあ（うっとり）。
――あ、また一目惚れですか。
谷川　大和は好きですね、ボク。ゲガール・ムサシとか、ああいう感じがあって好き。よくあんな強いヤツいるなと思ったよ、名古屋のバラさん（榊原信行氏）の家の近くに。
――バラさんの家はあまり関係ないですけど（笑）。
谷川　（無視して）朝5時からペンキ塗ってんだよ。それであんな強くて、軸がぶれなくて、頭もいいし、たいしたもんだなって。大和くんもどこまで人気出るかわかんないけど、凄くいい。ボクは好きだなあ。
――こうやって谷川さんが「好きだ」っていうファイターはどんどん消費されていって潰れるパターンが……。
谷川　な、な、な、なんてこと言うんだよぉ！
――このプレッシャーに耐えられるかどうかですか？
谷川　そうそう。なんか意地悪なことしないとね、あれだけ強いと。あと久保くんでいうと、K-1という舞台が久保くんを優勝させなかったと思いますよ。久保くんはあんな選手じゃないんだけど、打ち合いにいっちゃったからさ。
――なんで打ち合ったんですかね。
谷川　やっぱりK-1だから"盛り上げなきゃ"と思ったんでしょうね。だからひさびさにうれしかったな。

ーいままでうれしくなかったんですか？
谷川　5月2日とかうれしくないし、3月なんかはまあ盛り上がってたけどね。魔裟斗くんなんかも「63キロ、いいじゃないですか」とか寂しそうでもあり、うれしそうでもあり。なんか印象的だったなあ。
ーそういう意味では魔裟斗の影がなかったですもんね。70キロのほうはまだ引きずってるなって感じはしますけど。
谷川　そうだね。
ー日演乙や佐藤はそのプレッシャーがマイナスになってて、逆に63キロはそういうプレッシャーと闘ったことないか

戦前はもういいだろってくらい石川に舌戦を仕掛けていた紀左衛門。しかし、結果を見るとK-1を理解していたのは、紀左衛門のほうだったということか。それにしてもモンちゃんは口から先に産まれたと思われても仕方がないボーイである。

ら新鮮なんでしょうね。
谷川　でも70キロでも（山本）優弥くんはいいけどね。優弥くんは、一生懸命さが凄く伝わってきて泣けてくるというか。だから視聴率がよくなかったのが非常に残念で。DREAMはよかったんだけどね。
ーなんであんな時間に2・8パーセントも
谷川　深夜3時からだし、ほかの局は0パーセント台だもんね。
ーDREAMも、いい興行が続いてハードルが上がったじゃないですか。一番ズンドコで突入して、絶対こけるなと思ってたんですよ。
谷川　DREAMでしょ？　ボクも不安だった（キッパリ）。
ーワハハハハ！　青木vs川尻も菊野vsJZ（カルバン）もそんなにいい試合にはならないと思ったというか
谷川　それもあったし、ほかのカードで信頼感のあるヤツがいないんだよね。唯一あったのはメルヴィン・マヌーフだけ。それ以外はお約束みたいのがあんまりなかったじゃない。だから第1試合と第2試合を観たときにいたたまれない気持ちになったからね。
ーボクは安心して観てましたけど、「ああ、中村カズってこんな感じだったよな」という（笑）。
谷川　小見川選手もいい選手だと思うけど、対戦相手が信頼性がないから試合を

青木くんが出てきたように若い選手が どんどん出てくる必要があるよねぇ

作れるかわからなかったし。ただ、結果的にはよかったけど、DREAMに関してはもっとマスに伝わるメンバーが必要だよね。若くて可能性があるとかイケメンとかさ。
ー格闘技としてのおもしろさは凄くあるんですけどね。
谷川　それはマニアックなおもしろさでしょ
ー谷川さんが言ってるのは、プロモーション側の問題ですよね？
谷川　そうだね。だから、一般的に売れるようなファイターを作んなくちゃなって思ったのと、あとはいかにわかりやすく伝えるかだよね。階級がたくさん増えちゃうってのもしょうがないっちゃ、しょうがないけど。バンタム、フェザーに分けるってのもわかるんでだけど、ますますわかりづらくなるからねぇ。
ー選手のこと考えたらどうしてもそうなっちゃうんでしょうけど。
谷川　それをいかにわかりやすく伝えるかってのが凄く重要ですよ。それと、どんどん新しいスターを作っていく感覚だよね。だからボクなんかはゲガール・ムサシやエディ・アルバレスが好きだし、ああいう新しい選手が出てくるイメージが必要なんだよね。
ーDREAMには新しい風がちょっと足りないですね
谷川　ある意味、この青木vs川尻で「PRIDEが終わった」と言ってますけど、DREAMも3年間の一区切りだからね。これからは青木くんに対抗できるような選手を作っていかなきゃダメですよ。青木くんが出てきたように若い選手が出てくる必要があるよねぇ。
ーちなみにその青木vs川尻はいかがでした？
谷川　いい試合だったねぇ。ただボクは青木くんしか眼中に入らなかったね、最初から最後まで。
ー川尻の目線はなかったんですか？
谷川　全然!!
ーんあ〜！
谷川　川尻くんに興味がないってよりも、やっぱり青木くんって不思議な選手だなと思って。みんな下馬評から川尻有利とか言ってたけど、ボクは意味がわからなかったもん。川尻選手の勝機ってどんなんだろう……。
ーこれこれ、1年前は「青木くんより川尻くん！」って言ってたでしょ!!
谷川　いや、なんて言うかなぁ。今回はそれよりも青木選手が主役な感じがしないんだよ。青木が調子がいいのか悪いのか、ベルトを投げ出したいのか投げ出したくないのかとか、そういう目線しかないんだよね。その点、川尻くんは凄く普通というかさ。
ー川尻は正統派だから、見やすいというのがあるのかもしれないですね。難しいことを考えずに観られるというか。
谷川　でも青木くんってホントに気持ちが弱いというか、ナイーブな選手だよね。
ー弱いからこそ、何かに狂信的になるっていう。
谷川　そこの弱さも魅力的だね。一回捕まえたらもう放したくないとかさ、そういう弱さというか「ここで放しちゃったら負けちゃうんじゃないか」みたいな。だからサクちゃんに「青木くんとの練習はどうだったの？」って聞いたら、手足が長いのは凄いけど、ガチっときた

ら放さないらしいんだよ。だから「青木くん、残り1分だと思って動いて、動いて」って言っても動かないらしいんだよね。「ここで放して逆にやられちゃうかもしれない」っていう不安があるのかな。
――ヨアキム・ハンセンとの闘い方もそうですもんね。固めて削って削って、最後の3秒でバチンと極めるという。
谷川 で、川尻くんの足はどうだったの？ 相当ひどいんじゃない？ 控室へ歩いてるときブラブラだったよ。
――……ボクに言われても。でも、あの試合は意地でもタップできなかったんでしょうね
谷川 タップできないよね。そしてレフェリーは止められないよね。
――いやいや、あれで止めてたら暴動ですよ！
谷川 しかし、川尻くんにしたらやり直したいだろうね。将棋じゃないけど「ごめん、ごめん。ちょっと待った」って。川尻くんのいいとこがまったく出なかったもんな。でも、悪い試合じゃないんだよね。川尻くんも落ちてもいないし。あれは稀に見る高度な試合ですよ。
――青木もさっき言った幻想でいうとメレンデス戦で失なったものをまた取り戻しましたもんね。
谷川 いまとなっては、4月にアメリカに勝ってたら先があまりないんだけど、負けてるってのがまたいいもんね。ぜひ、もう一回アメリカ行くべきですよ。取り戻したほうがいいと思うよ。
ホント、青木はメレンデスに負けるようなタマじゃないんですけどね、存在感としては。
谷川 ホントそうだよ。そして、また素敵な人と結婚するんだねえ ぜんぜん彼女がいるなんて知らなかったからさ。藤波辰巳以来だなあ、リング上で結婚宣言を聞いたのは。
――いい意味で、ドン引きしましたね、会場は（笑）。
谷川 いや、いいじゃん、なんか。ボク、絡めないけど。……あ、思い出した。当日に青木くんのツイッターを見たら、スパッツがどうのこうのってつぶやきがあったじゃない。
――「スパッツでうだうだ言ってたヤツ、合掌」みたいな。
谷川 あれはおもしろかったなあ。そんなこと気にしてるんだって驚いたよ（笑）。

「おもしろいなあ、僕は絡めないけど」と青木真也に興味津々のサダハルンバ。今後の青木真也ストーリーは非常に興味深いが、遠からずアメリカへのリベンジというのは、きっと本人の頭にもあるだろう。

　だからある意味、現代的なんですよね。
谷川 「こんな大勝負で、なんでそこ？」って。もう何が琴線にひっかかるかわかんないよね。
――まあ、ツイッター上だけじゃなく、海外メディアからもいろいろ言われてるから。
谷川 そうなの？ そんなのどーでもいいじゃん。
――要は滑らないってことなんでしょうね。だから技を極めやすいんじゃないかって。
谷川 ふーん。だから、そのツイッター見て「こんなとこにこだわるんだ」と思ったなあ。
――ただ青木は次の対戦相手が難しいですけどね。
谷川 アメリカ行っちゃったほうがいいんじゃないの？ 年内は難しくても。
――ボクは大晦日に青木vs五味が実現するような気がするんですけど……。
谷川 おもしろいよね！
――ちなみに、大晦日はTBSで放送されるんですよね？
谷川 もちろん。ただ、前回みたいに長い時間やるかどうかはわかんないですね。5時から放送とかはもう無理ですよ。試合数自体が大変だったじゃない。17試合とかだったもんね 休憩もなかったし あれはもう無理だね。
――藤田vsアリスター、ムサシとグッドリッジの煽りVも飛ばしましたし、魔裟斗の試合が時間内に流せない可能性が出てきたからセミの青木の試合とテレコになりかけたし。
谷川 そういう意味ではTBSさんには20時ぐらいから、3時間ぐらいでお願いしたいですね。
　下半期のK-1、DREAMはどんな感じになりそうでしょうか？
谷川 それぞれ違うんですけど、DREAMに関して言うと出たい選手が多いと思うんで、凄く選抜することと、あとはいい外国人が必要だよね。世界に通用するような活きのいい外国人同士の試合とか。そうしないと、日本人同士の試合ってちまちま見えちゃうもんね。いまの日本人は石川（遼）くんとか宮里藍とか、世界に通用する日本人にしか興味がないじゃん。
　ただなかなか外国人は難しいですからね、海外に取られちゃって。
谷川 そこで目を利かせてね。あとはドラマも含めて、若い選手を育てていくことがDREAMは一番ですよ。で、MAXに関しては、あと一回は70キロの世界戦なんで、それは誰が優勝してもいいと思うんだけど、そのなかでMAXの課題は63キロにあれだけいい選手がいるのに来年まで遊んじゃうわけじゃない。それをどうやって育てていくかだよね。あとは、どっかで大きなドラマを作ること。たとえばグレイシーに大惨敗していく格闘技界みたいにね。
――いまは、ドラマ性がないですもんね。
谷川 そういう意味では、大きなドラマ性を作ることをどっかでやらないとダメだね。あの若いと思ってた秋山くんも宇野（薫）くんも意外といい歳だしなあ。若い子を探さなきゃ。
――また"ジャニー谷川"出現ですか。
谷川 うふふふ。そうだよねえ。強くてかわいい子いないかなあ。
――そこはお金次第じゃないですかね。

【10年7月12日 都内・FEGにて収録】

衝撃の青木vs川尻、そして9月大会のヒントもチラリ!

カード発表はもっと早くできるのか?

恒例! DREAM大反省会!

DREAMイベントプロデューサー 笹原圭一

青木vs川尻の名勝負をはじめ、予想をはるかに上回る盛り上がりとなった『DREAM.15』。
しかし! アリスターの欠場を含め、大会前のカード発表はドタバタなことに……。
DREAMにとって“永遠の”課題であるこの問題を笹原EPはどうとらえているのか。
え? 次回大会に向けて公約発表!?

聞き手　シャン斉藤　撮影　タイコウクニヨシ

笹原　こんにちは、ゴミ以下の笹原です。

え？　五味隆典？

笹原　いや、大会前はツイッター上で「笹原はゴミ以下だ！」とか、いろいろ言われたんでね。

終わってみたらゴミ以下じゃなかったんじゃないですか？

笹原　そうですねえ、虫ケラくらいにはなったかもしれないです（笑）。

――昇格おめでとうございます（笑）。というわけで、大会前はゴミ以下でしたが、大会のほうはゴミどころかカミでした！

笹原　ホッとしてます。ここ最近はストライクフォース、UFC、K-1 MAXって凄い大会が続いたじゃないですか。

トリを務めるDREAMにとっては、どんどんハードルが上がってましたね。

笹原　ビックリするぐらい。MAXも観に行って「盛り上がっていて、いい雰囲気だな」と思いながらも、心のどこかで凄いプレッシャーを感じてましたから。でも、ひとまず及第点は出したんじゃないかなというふうには思ってます。

――あら、謙虚ですね。こんなことプロモーターに聞くのもどうかと思いますが、正直コケるんじゃないかなというムードもありましたよね？

笹原　ハハハハ。ただ経験則で言うと、イベントの前にぐちゃぐちゃする大会ってじつは盛り上がることが多いんですよね。

カード発表が遅れれば遅れるほど、成功度が高まっていく。となるほどファンの不満度と成功度は比例しますか！

笹原　……いや、本当にそれは申し訳ないと思ってます。

――あらためて、なぜ遅くなったんでしょう。改善はできないものでしょうか。

笹原　いや、できます。「できない！」ってことではないです。

――いや、ホントにやっていただきたい!!

笹原　もちろん簡単に解決しないこともありますよ。選手との契約だったり、斉藤さんが言われる"興行力"の問題だったり。そこは一朝一夕に変えられないですけど、それ以外のところで変えられることはたくさんありますし、変えなきゃいけないとも思っています。たとえばいままで三日かかっていたところを一日にする。そうした細かいところを蓄積させるだけでも、時間短縮できるところはたくさんありますから。

――では、おうかがいします。『DREAM.16』の全カード発表は何日前でしょうか。

笹原　公約ですか（笑）。選挙前だけに。いや、でも1ヵ月前でしょう。

え～え!?　だ、だ、だ、大丈夫ですか!?!

笹原　じゃあ、1週間ぐらい前にしておきますか（あっさり）。

非常に現実的だ

笹原　でも、1ヵ月前にはほぼ出しね。「1ヵ月前にはほぼ出しきる！」というのが、私のマニフェスト！

当初から参戦予定選手に名前があったアリスターだが、大会前日に欠場が発表された。笹原EPは「お金の問題ではない」と説明したが、いったい何がひっかかっているのか？

© DREAM

ビビアーノを出すこと自体は難しくない。ただ、チャンピオンシップとなると……

――「ほぼ出しきる」なんて曖昧すぎますよ！　その9月大会はゴールデンタイム放送ということで、やっぱりカードも、より名前のある選手が出るようになる感じですか？

笹原　そうですね。名古屋大会というのもありますし、メインにはヘビーを組みたいと思ってます。アリスターもそうですし、アルフロスキーとか、ティム・シルビアとか、あとは忘れちゃいけないのがジョシュですね　それ以外には、桜庭選手、KID選手、所選手、ミノワマンとか、顔になるような選手たちのカード。プラス、フェザーやライトでマニアックなカードが組めればと思います。そうそう、リコには大きな借りを作ってしまったので、どこかでそれを返さなきゃいけませんし。

リコはアリスターと対戦するつもりで来日してたんですよね　あとはフェザー級の物語を転がす感じでしょうか。

笹原　フェザーは本当にテーブルにずらっと選手名を並べてみて、どういうふうに組み合わせられるかを考えただけでも楽しいですからね。来年はフェザー、バンタムに分けることを考えたときに、仮に65キロ、61キロのフェザー、バンタムで分けたときに、65でやっている人が「だったら61にいく」って人もいると思いますし。その部分も含めていよいよ軽量級の黄金時代が到来する感じがしますよね。

――9月は王者のビビアーノ・フェルナンデスは出るんでしょうか？

笹原　いや、出すことは自体はハードルは低いですよ。ただそれがチャンピオンシップってなると、彼が「年間何回タイトルマッチをやんなきゃいけないの？」という感じになるのはよく理解できるんですよね。

ああ、なるほど。

笹原　次にやるのは、小見川選手なのか高谷選手なのかわからないですけど、いずれにしても当然チャンピオンシップじゃないですか。「ちょっと間隔的に短い」って彼が言うのは理解できるというか。

とはいっても、9月だったら前回の防衛戦から半年は経ってますよね？

笹原　そう言われると、まあ、半年だったらアリですかね……。でも、これは僕ら主催者側の不手際なんですけど、フェザーだけタイトルマッチをどんどんやって、ほか

DREAM.15

カード発表の流れ

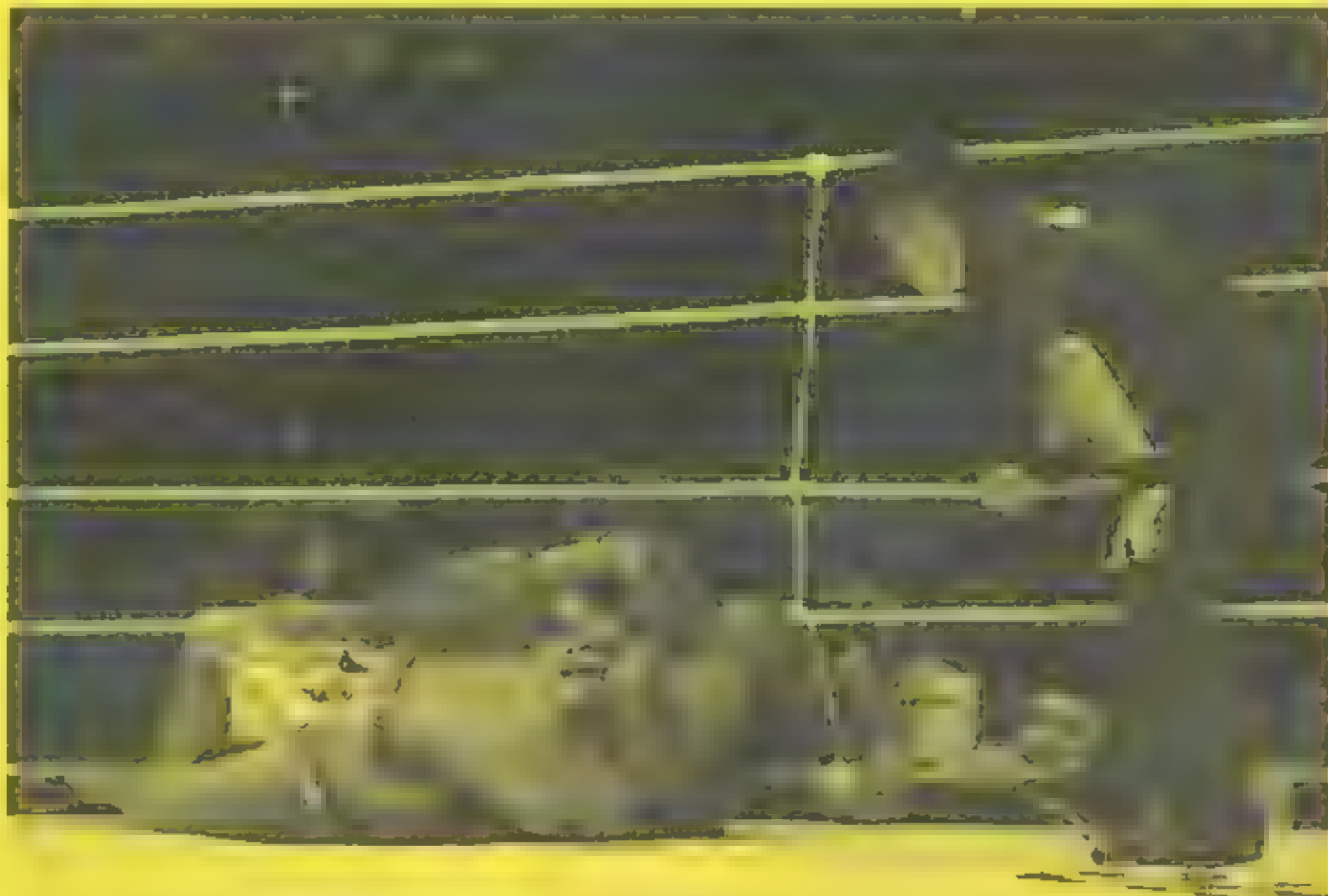
6月15日	青木真也vs川尻達也を発表。当初からアリスターは参戦予定選手で、アンドレイ・アルロフスキー戦が噂されていた。
6月17日	菊野克紀vsJZカルバン、水野竜也vsメルヴィン・マヌーフ、ゲガール・ムサシの参戦を発表。
7月2日	小見川道大、中村和裕のDREAM参戦、およびvsジョン・ヨンサム戦、vsカール・アモーソ戦を発表。
	石田光洋vsDJ.taiki、ゲガール・ムサシvsジェイク・オブライエンを発表。
	このあたりからアリスターvsリコ・ロドリゲスが噂される。
7月8日	アリスター欠場および全7試合での開催を発表。
	アリスターの対戦相手としてアンドレイ・アルロフスキーで両者合意していたが、契約に至らなかったことを説明。
7月10日	ジェイク・オブライエンの規定体重オーバーが当日リング上で発表される。

のところが進んでいないのも……。
——笹原さん、答えは簡単です。ほかの階級の防衛戦をやりましょう！（笑）。
笹原　んあー。って、そのとおりだよなぁウェルター級とミドル級もやんなきゃいけない。で、本来であれば、今回ヘビーの査定試合みたいなことをやって、9月にヘビーのタイトルマッチという流れができればよかったんですけど。
　そのフェザーの目玉のである小見川選手は「日本人選手には興味がない」と言っていましたね。
笹原　そりゃビビアーノとやりたいでしょうね。ただ、これは今後の話次第でしょうけど、やっぱり日本人対決もそうですし、強豪外国人との試合も観たいじゃないですか。でも、いまは彼のなかでテーマが作りづらいですよね。こちらがちゃんと闘う理由や、今後のストーリーみたいなのを提示してあげないと。DREAMの日本人で一番強い高谷選手に勝っているなかで、ほかの選手とやることにどんな意義を見出せるか。小見川選手がよく口にする「フェザーでは、小見川が一番強いと思われるようになりたい」を実現させるには、一直線でチャンピンとやることが近道なのは理解できます。ただ我々としては、小見川選手はフェザーという階級自体を託せるような存在なわけですから、この階級を背負えるような闘いをしてほしい、というのも正直あるわけです。ちなみにですね、昨日の紹介Vで小見川選手ってけっこう言いたいこと言っていたじゃないですか。で、昨日PPVの解説席に高谷選手がいたんですけど、彼は解説を忘れるぐらい怒っていましたよ（笑）。
——ダハハハハ。
笹原　それを見ながら「やっぱ、日本人対決も観たいなあ」と思って聞いていたのですけど、悩ましいですよね。
　ちなみに宇野選手とはどういう話でDREAM参戦に至ったんですか？
笹原　UFCでリリースされたあとから、谷川さんがコンタクトは取り続けていたんですよ。ただ、宇野選手はいい意味で頑固で、自分のなかの気持ちの水位が満潮にならないと、動かない人だと思うんです。そういう意味では、今回のフェザー級への挑戦は、不退転の決意でやる覚悟なんでしょう。もちろんプロとしての嗅覚も働いているでしょうし。
　フェザーが盛り上がってるんじゃないか、と。
笹原　やっぱり石田選手とかヨアキムが

リングを降り、会場から姿を消すまで終始ポーカーフェイスを貫いていた川尻だが、その心中を察するといたたまれない……。その脇で青木の結婚宣言となると、これはもうなおさらだ。

青木真也は怒りをモチベーションに変えるのが上手だなって思いました

階級を落としてきたのを見て、触発されたところがあるんじゃないですか。もう一回自分のチャレンジをする気持ちになっているんだと思います。あのライト級GPのなかで見せてくれた「激情」を、ぜひフェザーでも見せてほしいと思いますし、フェザーの若い選手を跳ね返してほしい
——しかし、そうなるとライト級がなかなか難しくなりますね。
笹原　どうしましょう、次の青木真也の相手は。
——しかし、青木vs川尻は衝撃的な結末でしたね
笹原　ヒドいことしますよねぇ、青木真也は（笑）。でも青木真也は怒りをモチベーションに変えるのが上手だなってあらためて思いましたね。上手というか、自然にそうなっちゃうんでしょうけど。某専門誌の勝敗予想にももの凄く怒っていたじゃないですか。「川尻ばかり応援しやがって、ふざけんな！」っていう。
——ズバリ、怒りの矛先はズレてるとは思うんですけど（笑）。
笹原　普通の人だったら「雑誌の予想だからいいじゃん」ってなるのを、それを真剣に怒れるのはホントに才能だと思いますよ。普通は怒ったふりぐらいですもん、レベル的には
——でも、そこのドラマを観客は共有しづらいですよね。
笹原　そこは僕らが咀嚼して伝えてあげなきゃいけないところもあるでしょうし、青木真也がもう一歩、プロのファイターとしてそこをちゃんとファンの人に伝える努力をしなきゃいけないかもしれないですし。そう説明しても本人はまったく耳を貸してくれないでしょうけど（笑）。
——そんな青木真也の、ある意味、一つの区切りになるような試合が川尻戦でしたけど、思ったのはどこに焦点を絞るのかが非常に難しかった試合でしたね。笹原さんとしてはどう観てもらいたかったですか？
笹原　いや、僕はこの試合はPRIDEでもなく、『やれんのか！』でもなく、DREAMの試合だ、と。そう思って観てもらえるのが一番いいなと思ってました。結果、まさしくそういうふうになったと思いますしね。あの試合はDREAMの試合でしたよ。ただ、そういうふうに理解してもらうためには、PRIDEだったり『やれんのか！』での二人を知らないと感情を共有してもらえない。だからちゃんとそこは煽りVでも伝えられたんじゃないかなと思ってますけどね。
　青木真也は五味選手と比較されたくないみたいですね。そんなことはもう誰も気にしてないんですけど。
笹原　まあ、それは「PRIDEの幻影」に近いような感情で、透けて見えるんでしょうね。五味選手は、会場で観ていたとは聞きましたけど。
——僕は川尻選手が勝ったら客席にいた五味選手に向かって何かアピールしたらおもしろいなって妄想してて、青木が勝ったらたぶんそれどころではないとは思ってたんですけど。で、フタを開けてみたら

結婚宣言ですからね(笑)。
笹原 もう勝手にやってますからねえ。でも、いいんじゃないですか。僕は勝ったら基本だいたいのことは許されると思ってますし。僕のことを突き飛ばしてもらってもかまわない(笑)。で、大会の翌日に結婚される奥さんに「ロッキーとエイドリアンみたいですね」っていう話をしたんですよ。そしたら、奥さん『ロッキー』を知らないらしいんで、僕が「こういうことだよ」と説明しておきました!
DREAMの『ロッキー』は何事も制御不能ですからね(笑)。で、「なんで結婚を意識したんですか?」って聞いたら、4月に負けて以降、周りが敵に見えるなかで支えてくれたのは中井先生と北岡さんと彼女ぐらいだった、と。で、「笹原さんは支えてくれなかったんですか?」と聞いたら「あの人はわからない!」って言ってましたけど。
笹原 ダハハハハ。ヒドいなぁ。僕が彼の知らないところでどれだけ支えたことか。まぁでも、青木真也はそれでいいんじゃないかと思いますね。
——ちなみに川尻さんも新婚でした
笹原 ですね……。周りの人たちや本人の気持ちを考えると、勝負の残酷さに身が切り刻まれるような思いになりますけど。まだ精密検査の結果が出ないのでケガの状態はわからないですが……。
でも難しいですよね、足関を止めるのは。あそこでストップしたらそれはそれで問題になってたでしょうし
笹原 青木選手はレフェリーの島田さんにはアピールしていたらしいんですよ。当然、川尻選手は簡単にはタップしないし、止めづらいですよ。これは桜庭さんが言ってたんですけど、青木選手の脇の締めつけは本当に強いって言ってましたね。「逃げられない」って。
——でも、見込みで一本取るわけにはいかないですもんね。
笹原 だから凄く屈辱だったんじゃないですか、川尻達也にとって今回の敗戦は。川尻達也はここ一番で負けるじゃないですか。今回も彼の人生のなかで最高の負けというか、最大の負けを喫したわけじゃないですか。でも思うんですよ。ファイターとして最大の敗北を体験できるのって、やっぱりそれも選ばれた人間だけだと。僕は川尻達也という人間を、1ミリも疑うことなく信じているので、この最大の敗北から、絶対に立ち上がってくると思っています。何より彼は闘うことでしか、川尻達也でいられない人間ですから。

ライト級トップ戦線参入への登竜門的存在であるJZを相手に菊野は無念の判定負け。1ラウンドは菊野がリードしていたという見方が多いだけに、この敗戦はなんとも悔やまれる。一刻も早く復帰戦を!

ただ、復帰にはちょっと時間がかかりそうですよね。あと、もう一つ注目されてた菊野選手の試合ですが、判定で菊野選手に一票入ったじゃないですか。
笹原 ですね。
——あれって確かに1ラウンドは菊野選手だったと思うんですよ。でも、DREAMの判定の基準というのは……。
笹原 ラウンド・バイ・ラウンドではなく、1ラウンドと2ラウンド全体を通じて、ジャッジしています。
——ですよね。そこは10分、5分というラウンド分けがジャッジをわかりづらくしてるんじゃないかなって。
笹原 うーん、僕は、10分5分は変える気はないんですけどね。判定って、元ファイターとか、試合を知っている人にやらせるべきだといいますが、これは佐伯さんともよくしゃべるんですけど、元ファイターよりも、MMAの試合をたくさん観てる人が、一番的確な判断をするんだと思います。
——と、いいますと?
笹原 たぶんファンの人が観ている目の方が正しいんですよ。大多数でいうと、ほとんどの人がJZが勝っていると思ってるわけです。それが正しいんですよ。
——ただ、ポイントはチェックしてるんですよね
笹原 もちろん。でもポイントをつけていると、そのポイントだけにとらわれちゃうというか。明確に打撃でダメージを与えるポイントならばわかりやすいですけど、たとえばバックを奪ったことがポイントとなるかどうかって微妙な展開もあるし、単純なポイントだけ見ていると皆さんが観ている印象と変わってくることもありえますよね。
——あと、やっぱり10分って長くないですか? ファイターの調整的にもきついですし、観客からすると同じ攻防が続くとダレちゃうというか。
笹原 難しいなあ。5分は戦略が試されないかと言われればそうではないんですけど、10分ってそこで戦略も知力も体力も本当に全部注ぎ込まないと越えられないぐらいの長さがあるんで、10分だからこそ見られる攻防ってあると思うんですよね。いいか悪いかなかなか判断しづらいと思うんですけど。
——中村カズとか石田くんの試合は5分3ラウンドにしたら、最終ラウンドは流しにいってもおかしくないですね。
笹原 ああいう試合になると5分3ラウンドのほうがいいかなとは思いますけどね。ただ、菊野選手の試合でいうと、JZの心理状態は完全に勝ちにいっているので、ある意味ポイントゲームを仕掛けているんですよね。それに対して菊野選手は倒しにいっているので、MMA vs 武道というなかで菊野選手がやられてしまったということかな、と。
——ああ、なるほど。
笹原 だからといって菊野選手にMMAのポイントゲームをやってほしいとは当然思わないじゃないですか。あのままで、武道のままで勝ってほしいし、彼もそこは当然わかっているので。負けは大きかったですけれど、菊野スタイルのままであれを越えていってほしいですよね。だから、大事なのは次ですよ。DREAM自体もそうですけど。
——じゃあ、1ヵ月前にはカードが出そろっている9月大会にも注目します。
笹原 ゴミ以下の汚名を返上できるように頑張りますよ!

【10年7月11日/都内・某ホテルにて収録】

世界規模のMMAビッグマッチ・ラッシュ
最後は青木真也が締めた！

DREAM.15 新章スタート座談会

"PRIDE信者"からの卒業

青木がロングスパッツを脱いで川尻に激勝し、吉田道場勢も参戦と、一つの物語の終わりであり新章の始まりでもあった7.10『DREAM.15』。その試合直後に編集部に戻り、座談会をUSTREAM配信！ その模様をあらためて誌面でもお届けします

構成＝堀江ガンツ　試合写真＝小林[illegible]

斉藤　『kamipro』編集部のジャン斉藤です。今日はさっき終わったばかりの『DREAM.15』をUST配信で語っていこうと思いますが、まずは出席者の自己紹介から

橋本　ライターの橋本宗洋です。

ガンツ　どうも堀江ガンツです。

斉藤　さっそく本題に入りますが、ここ1カ月は格闘技月間で世界規模の興行ラッシュでしたね。

橋本　毎週ビッグマッチがあるというね。

斉藤　SRC両国、ストライクフォース、UFC、K-1MAXとすべてインパクトを残したんだけど、大トリが大問題だったわけですよ。

ガンツ　最後の最後にコケるんじゃないか、という心配も正直あったりして（笑）。

斉藤　直前までカードが出揃わなかったり、リコ・ロドリゲスが出る、出ないの話があったり、某レフェリーがVIP席のチケットをアイドルに渡したり……。

橋本　コラコラコラ！　それは前大会の不祥事！（笑）。

斉藤　（無視して）心配要素がたくさんあったんですけど、終わってみれば、いや～、格闘技ってホントに素晴らしいですね！（水野晴郎調）

ガンツ　では、皆さんまたお会いしましょう、さようなら。

橋本　コラコラ、まだ終わらないよ！（笑）。

斉藤　今回は試合前から会場ができあがってましたよね。やっぱり、こういう熱心なファンを事前にガッカリさせるようなことはやっちゃダメだって思いましたよ

橋本　会場に入ると雰囲気で「今日は招待券多いな」とかわかったりするけど、今回は観たくて来たヤツ率が凄く高い感じがしたね。

ガンツ　変態としても居心地がいい空間でした（笑）。

斉藤　大会を振り返っていきたいと思いますけど、第1試合は中村カズvsカール・アモーゾ。カズはPRIDEで活躍していたこともあって歓迎ムードでしたよね

橋本　顔なじみ的なね。

ガンツ　で、実際に試合が始まってみると、「そういえばPRIDEでもカズの試合ってこんな感じだったよな」と思い出すという（笑）。

斉藤　そういう意味でもなつかしい、と（笑）。

橋本　でも、冷静に考えたらカール・アモーゾに完封勝ちするって、けっこう大変なことなんだけどね。レベル高いことやって、結果も出してるけど……っていう難しさね。

斉藤　第2試合の石田光洋vsDJ.taikiも同じような展開でしたけど、そんなに"塩漬け"って感じはしませんでしたよね？

橋本　常に攻める姿勢が見えたし、一本狙いにいった結果の判定だったからね。

斉藤　あれを塩漬けと言ったら、格

小見川にはDREAMでしか観られない対戦に期待したい

闘技はもう観れないんじゃないかな？　なんかファッションで使ってる雰囲気を凄く感じる。

ガンツ　石田vsDJはいい試合だよ。UFCもそんな試合ばっかりじゃない。

斉藤　そこでUFCと何が違うかというと、DREAMは1ラウンドが10分なのと、ヒジがないことですよね。これが5分3ラウンド制でヒジがあったら、全然違ったと思うんだけど。

橋本　展開が生まれて、フィニッシュに近づく可能性が高かったかもしれないね。

斉藤　だから、そろそろルール改正すべきなんじゃないかな、と。

ガンツ　俺もそう思う。話は先に進んじゃうけど、メインのあと青木真也が「今日でPRIDEは終わり」って言ったじゃない。だったら、PRIDEを引きずってるとしか思えない1ラウンド10分、2ラウンド5分の形式も終わりにする時期だと思う。

斉藤　やるほうも観るほうも、10分間集中力を保つの大変だと思うんですよ。5分でリセットしたほうがエンタメとしては観やすい。セミの菊野vsカルバン戦の判定で、客席から「え〜〜っ！」っていう声が飛んだのも、1ラウンドと2ラウンドの時間が違うことが関係してるんじゃないかと思うんですよ。

橋本　DREAMは15分1本勝負を暫定的に一つに区切るみたいな感じだよね

ガンツ　だったら最初の10分間を支配してた菊野が、後半の5分間を支配したJZより、より高いポイントになっても理論上はおかしくないと思うんだよ

橋本　2ラウンドしかないから、「どっちを取るか」というか、「全体的にどうだったか」っていうことになるんだけど、途中でインターバルが入るものを"全体"で観るのって難しいからね。

ガンツ　いまはUFCやストライクフォースの試合が毎週のようにWOWOWやネットを通じて観られるんだから、ラウンドごとに採点する観方が定着してると思うんだよね　K-1だってそうなんだし。そんななかで、DREAMだけ判定基準が違うって、観てるほうにイレギュラーが起こるよ

橋本　そういえばさ、前にリング・ケージ論争があったじゃん。そのとき青木真也が「マストシステムということは、10−9・9でも10−9をつけるということですよ。それに日本のファンがついてこれますか？」って言ったんだけど、けっこうついていける土壌もできてきつつあると思うんだよ。

斉藤　というか、いまのDREAMの設定にファンがついていけてない気が……　というわけで、ヒジ問題はともかく、このへんはあらためて考えてほしい、と

橋本　問題提起はしておきたいね

斉藤　そして第3試合には小見川道大選手がやってまいりました。

橋本　来たね、クソッタレが。

斉藤　小見川の完勝ではありましたけど、相手の韓国人選手は根性ありましたね。さすが朝から焼き肉食ってる国は違うな。

橋本　思ったより強かったね、韓国はレベル高いね、いま。そして小見川は、相手も臆せず攻めてきたところもよかったけど、しっかり弾き返して、打撃で圧倒して極めて勝ったということで、取り立てて文句はありません。やっぱおもしろいな、小見川いいなっていう。ただ、最後の「クソッタレ」が、「ご唱和ください」ぐらいの勢いになっているところは、ちょっと不安を感じる。

斉藤　小見川がアントニオ猪木化してる、と（笑）。

橋本　「それ言えば盛り上がると思ってないか!?」って。

斉藤　「カードが決まんなくてクソッタレ！」「フェザー級は65キロ以下にしやがれクソッタレ！」ならわかるけど、「不景気なんかクソッタレ！」ですからね（笑）。

ガンツ　あと小見川はもっとDREAMの選手に対して毒づいていいと思う。もっと異物感があったほうがいいというか

橋本　DREAMファンに「イヤなやつ来ちゃったな〜」と思われるぐらいでいいよね。

ガンツ　小見川が「俺は頂点にしか興味ない　DREAMの日本人と一緒にするな」と思ってるんだったら、それを口にしちゃったほうが逆にいいと思うんだ。そうしたら、それにDREAMの選手が反発して活性化するわけだし。

橋本　そうそうそう。「ストップ・ザ・小見川」的なノリも出てくるわけだから。

ガンツ　それでも小見川が「俺は高谷に勝ってるから、やる必要がない」と言うなら、『戦極』らしく"ロード・トゥ・小見川"をやるとかね（笑）。

橋本　"フェザー級グランプリシリーズ"ね（笑）。

斉藤　小見川vsビビアーノ・フェルナンデスももちろん観たいけど、いまはDREAMに乗り込んできたばかりなんだから、やっぱり日本人対決が観たい感じはしますよね。

橋本　ビビアーノとやるなら、それよりWECに行っちゃって、打倒ジョゼ・アルドを目指す道を選んでほしいよ。そうじゃなくてDREAMに来たんだから、ここでしか観られないドラマが観たいよね。DREAMフェザー級には宇野薫も来たし。宇

青の柔道着に"白帯"を巻いて第1試合に登場した中村カズ　吉田道場の"大将"としてキッチリとした勝利がほしかったが、カール・アモーゾを終始圧倒しての判定勝ちとなった。

"やれんのか！三銃士"の一人である石田光洋は、DJ.taiki相手にフェザー級転向第1戦を行なった。こちらも判定に持ち込まれたものの完勝。今後に期待が持てる勝利だった。

昨年、戦極のフェザー級GPでブレイクした小見川道大は韓国のジョン・ヨンサムにキッチリと一本勝ち。本人は「てっぺんしか興味ない」と言うが、DREAM日本勢との対戦はぜひ観たい。

UFCをリリースされた宇野薫が休憩明けにリング上で挨拶。DREAM参戦とフェザー級転向を宣言した。こちらもDREAM日本勢との対戦が興味深い。

野vs石田とか、またやらないかな～。

斉藤　石田くんは『DREAM・3』のとき、宇野薫になんで噛みついたんでしたっけ？

橋本　「どんなつもりなんだろう」みたいなことだよね。

ガンツ　また丁寧語で毒づいてほしいよね（笑）。

橋本　でもいいじゃん。また「どのツラ下げて帰ってきたのかと思います」って言うとかさ（笑）。実際、もうちょっと宇野に対して「何しに帰ってきたんですか？」って言うやつがいたっていいよね。

ガンツ　そうですよ。佐々木健介とか長州力が新日本に帰ってきたときの、永田さんみたいに。

橋本　君はあいかわらず、たとえがそんなだね（笑）。

ガンツ　永田さんばりに「あの男はなんで帰ってきたんですか？　ハッキリ言えばいいんだよ。『生活が苦しいから、DREAMしか働き場がねえ』って」とか言って「おまえ言いすぎだ」と先輩に怒られるという（笑）。

橋本　まあでも、そういう噛みつき方する選手が、格闘技界にもいてほしいよね。そこからドラマが生まれるし。

ガンツ　永田さんが言うから笑っちゃうけど、高谷あたりが「いいんだね、殺っちゃって」とか言ったら、ホントに怖いし（笑）。

橋本　まあ、宇野と高谷は一緒に練習してるんだけどね。でも、高谷としてもフェザー級のトップを獲るためには黙ってられないと思うし、フェザーはおもしろくなってきたよ。

斉藤　というわけで、次は水野竜也vsメルヴィン・マヌーフ。

橋本　これは水野が頑張ったね。

ガンツ　このカードが決まるずいぶん前に「いま水野が凄く強くなってる」っていう話を聞いてたさ、そのときは「ホントかよ!?」って思ってたんだよ（笑）。

橋本　それはシアトルでの特訓で？

ガンツ　いや、その前から。だからたぶん、シアトルだって完全自腹で行くわけないじゃない。普通に考えたら。

斉藤　生活がありますから、DREAMのバックアップなしでは無理ですよね。

ガンツ　だからDREAMが期待を込めて投資して、水野が大舞台でその期待に見事応えたってことだと思うんだよ。

橋本　じゃあ、プロレスの海外武者修行と同じか。

ガンツ　だからSRCに"育成選手"っていう制度があるけど、水野や西浦ウィッキーはいわば"DREAM育成選手"だよね。

橋本　水野はよかったよ。最後の「お金を払って観に来てくれた皆さん」というマイクも含めて。

猛獣マヌーフの猛攻に耐え、アームロックで一本勝ちした水野竜也が歓喜の咆哮。次回はライトヘビー級王座決定戦だ。

斉藤　あれは島田レフェリーに言ったという話もありますね。

橋本　ないない（笑）。水野は次がゲガール・ムサシとのライトヘビー級王座決定戦になるわけでしょ。正直、厳しい試合になると思うけど、ひさしぶりに期待できる重量級の日本人が出てきたことは確かだよ。

斉藤　というわけでムサシvsオブライエンは飛ばして、セミはさっきちょっと語っちゃった菊野vsカルバン。

橋本　菊野はもったいなかったね　でも、1ラウンドはJZ相手に優位に進めてたくらいだから、実力はあらためて証明したと思う。必ず這い上がってくるでしょう。

斉藤　では、一気にメインにいっちゃいますが、試合前の観客の声援がもの凄かったですね。

橋本　「これ観に来たぞ」っていうね。

ガンツ　あの盛り上がりの質をもっと細かく言うと、声援が二分していたというより、新チャンピオン川尻達也誕生への機運が高まってた

橋本　あきらかに川尻への声援が大きかったよね。だからPRIDEから続くストーリーの総決算であり、新章スタートでもあったんだけど、試合前にどちらに風が吹いていたかというと、完全に川尻だったよね

ガンツ　でも、そういうあたりまえのハッピーエンドじゃないところがしびれた。

〝出戻り〟の宇野薫に噛みつく選手がもっと出てきていい

橋本　凄かったね。

ガンツ　なんかね、今回はPRIDEからの総決算といわれながら、青木は見ているところが違うなって試合前から感じたんだよね。

橋本　たぶん川尻は一つの総決算だと思ってただろうけど、青木は違ったよね。それは入場のコスチュームにも現われてた

斉藤　ロングスパッツじゃなかったんですよね。

橋本　トランクス姿で、柔術着も着てなかった。ストライクフォースで試合をしたときと、同じような出で立ちだよね。

斉藤　このタイミングでロングスパッツを脱いだり、試合前は桜庭のところで練習を始めたり、そういう"見せ方"を考えるというのは、いままでの青木にはない感じがした。

ガンツ　見せ方というか、ナッシュビルでの敗戦で、意識が変わったんだと思う

橋本　だから「PRIDEの最終回」という言葉が目立っていたけど、青木はその先の物語がすでに始まってたんだよね。

ガンツ　だから青木自身も、「これでPRIDEの総決算だ」と思いながらも、心の奥底はストライクフォースで負けた気持ちのほうがもう大きくなってると思う。

橋本　川尻のほうが会見やインタビューでのコメントが、一つ一つ筋が通ってるんだよね。それがカッコよかったから、ちゃんと正統派に見えて、俺も試合前は川尻がチャンピオンのほうが収まりがいいのかなと思ってた。青木は頭のなかで全部がゴチャゴチャしてたから。

ガンツ　なんか自分のなかで「この試合っていったいなんなんだ？」みたいな感じになってたよね。

橋本　本人も悩んでたよね。でも、俺がとにかく今日思ったのは、俺が培ってきた常識から青木は完全に逸脱してるってことだよ。入場してきて、そのときは誰だかわからなかった女の人に抱きついて、激勝したあとまたその子のところへ行き抱きついて、「結婚します！」という（笑）。そんなプライベートなことを、あの大舞台でやるような選手は、ぶっちゃけ俺の基準のなかでは出世できないはずなんだよ。

斉藤　「PRIDEは今日で終わり」と言って、次の行動が「結婚します」だからね（笑）

橋本　「青木真也には負けられない理由があった」だよ。TBSに媚びてるのかって（笑）。

斉藤　でも、青木のなかでは、彼女も幸せにするけど、みんなも幸せにするよ」というオチはついてるんだけど、いきなりそんなことやられたら……。

橋本　その落差だよね　あと、青木は「ついてこい！」って言ったけど、青木

今日、青木はロングスパッツを脱いで勝つ必要があった

つまりみんなと一緒に行くんじゃないんだよね。「俺が先に行くから、おまえらついてこい」なんだよね。だから今回思ったのは、青木はファン不在で通したなというか。それはよくも悪くもね。

ガンツ 本来、ファン不在でいいと思ってる人じゃないけど、結果的にそうなったのが功を奏したというか。

斉藤 それはなんでかというと、いままでの青木はカルバンにしても、宇野にしても、『HERO'S』やTBSといった仮想敵ができてたんだよね、廣田戦はリング外の政治に対して怒っていたし、メレンデスはアメリカだし。

橋本 わかりやすい対立構造だよね

斉藤 ただ、一回失敗したのがマッハ戦。あれは『やれんのか!』内での争いだから、いくら青木がいつもの調子で吠えても自家中毒的になってたじゃないですか。

ガンツ 逆にそれに怒るマッハが求心力を増す結果になってね。

斉藤 ファンはそんな煽りは観たくないってことでしょ。今回の川尻戦もやる前は非情にマッハ戦に似てるところがあった。

橋本 だから、内にこもって、性格的にいびつな部分だけが目立っちゃったよね。

ガンツ 孤独というより、寂しがり屋な面が出てた。

橋本 本来、青木が一番収まりやすいのは"孤高"というポジションなんだけど。ツイッターでやたら友だちと絡むし、あまり"個"のイメージじゃないんだよね。

ガンツ 孤独になりきれなさが出ちゃってる。

斉藤 でも、「今日の青木は凄いことになるんじゃないか」と思ったのは、入場式のとき全部スイッチを切り替えて、自分から握手に行ったところ

橋本 あれはグッときたね

ガンツ あの握手こそ、本当の意味での"調印式"だったよ。

斉藤 そうそう。これはあくまで深層心理の話だけど、青木って試合前に何かをぶち上げたり、変わったことをやらなきゃいけないっていう強迫観念があったと思うけど、あの握手は気をてらうことなく、ハマりましたよね

橋本 あそこでこの試合に対する、俺の心のなかの空気は一変したね。

ガンツ そして試合でも青木って怖い選手だって思い出した感じがしたね。4月のメレンデス戦敗北のインパクトが強すぎてみんな忘れちゃってたけど、本来、ああいう"殺し"があるヤバい男ですよ。

橋本 「本当は怖い青木真也」だからね

斉藤 試合前、アンチのファンに「青木はメレンデスに負けたんだから」とかけっこう言われましたけど、その前にどんだけ強かったのかって話ですよね

ガンツ 逆に言うと、その青木が何もできなかったからこそ、メレンデス戦のインパクトは凄かったということなんだけどね。

橋本 今回の川尻戦、もしかしたら青木はあのワンチャンスに賭けてたかもね。あれが取れなかったら、ズルズルとメレンデス戦みたいになるかもしれないと思ってて、勝負にいったのかもしれないね。

斉藤 スパッツ脱いできて、足関で極めるという、まるで脚本があるかのようなかたちですよね

いつものロングスパッツではなく、ショートパンツにTシャツ姿という"ナッシュビル"と同じ出で立ちで登場した青木真也。あの世紀の敗戦でこの男の内面に変化があったか。

ガンツ そこに意味があったよね。

橋本 たとえばさ、去年北岡がスパッツを脱いだときは、「周りの声を気にしすぎだよ」と思ったけど、今回は脱ぐべき理由があったからね。

ガンツ だからロングスパッツの是非はともかく、青木は絶対に今回はトランクスで勝たなきゃいけなかった。なぜなら、メレンデス戦で敗れたことで「やっぱりスパッツなしでは勝てないんじゃない?」みたいに思われた部分もあったでしょ? だからスパッツなしでも極められるって証明しないと、いままでの勝ちはすべて「スパッツのおかげだったから無効」みたいな見え方をする危険性が凄くあった

斉藤 実際にロングスパッツが有効だったかどうかじゃなくて、見え方としての話ですよね

ガンツ そう。周りがそう思ってしまうというね。だから、今回の川尻戦は青木のこれまでのキャリアをすべて賭けた闘いでもあったんだよ

橋本 その賭けはあったよね。

斉藤 だから試合前日に自分と堀江さんで話しましたよね?

ガンツ そう。今回は川尻が勝ったほうがハッピーエンドで盛り上がるし、DREAM自体にとっても一時的にはそっちのほうがいいだろう、と。でも、そうなると青木のナッシュビルでの負けも、青木個人の問題になって、本当なら"ナッシュビルの悲劇"を乗り越えて、日本格闘技界が一段上に向かうチャンスなのに、「いまのままでいい」ってことになることを危惧してたんだよ。

橋本 要するにさっき俺が言った、収まりがいいというやつね。

斉藤 そうそう。川尻が勝ったほうが、ファンとしても凄く消化しやすいんですよね。

橋本 つまり川尻が、試合前に言ってたように「すべての歴史は、俺がチャンピオンになるためにあった」というところに収束されてしまうというね。川尻にとってはいいことなんだけど。

斉藤 リング・ケージ論争でも簡単に「リングでいいじゃん」みたいになるというか、結果としてリングでも全然いいんだけど、過程にドラマがなければ、小さなゴールになっちゃうし、

橋本 そうならなかったという意味でも、今回はなんか凄く残したな。川尻には勝ってほしいけど、終わらせられちゃたまんない。

斉藤 あと青木は試合後、「PRIDEは今日で終わり」って言ってたけど、そういう言葉に対してまた敏感になる人って絶対にいるじゃん。

ガンツ そりゃなるよ(笑)。

斉藤 でも結局、一番PRIDEという宗教に依存してるのは青木なんですよ。これは大会パンフレットにも書いたんですけど、青木というのは、PRIDEファイターなんだけど、本当のPRIDEを知らない。

橋本 全盛期のPRIDEを知らない選手だよね。

斉藤 黄昏のPRIDEは知ってるけど、フジテレビ放映時代のPRIDEは知らず、PRIDEに対する幻想だけが凄くあった選手なんですよね。そこを勝手に受け継いで狂信的に突っ走っているところが青木真

也だから。

橋本 逆に言うと、幻想しか知らないから狂信的になれるんだよね。

斉藤 青木が狂信的なのは、PRIDEに対する幻想なんですよ

ガンツ ある意味さ、田村潔司のUWFと一緒。

斉藤 そうなんだよね！

ガンツ 田村潔司も第二次UWFでは単なる若手でしかなかったわけだから。でも、田村はUWFに入って、苦しい新弟子生活を耐えたあの時代を正当化させるために、一人でUWFを続けるしかなかった。だから青木も、あのPRIDEが潰れたりして、活動休止になって苦しい時期だったりとかさ、それを正当化するために、あれを受け継がなきゃいけないという。

橋本 60億分の1を取り戻そうという。

斉藤 ただ、それは自分で組み立てようとしてるんでしょうけど、まだこなしきれてないということで。その青木が「PRIDEが終わった」と言うのは、「これからは新しい価値観でやっていきたい」という宣言なんですよね

ガンツ それはね、青木がPRIDEじゃない別の大きなものを見ちゃったんだよ。アメリカのMMAというものをね。だから俺、青木の入場を観ながら「なんか青木一人がもう気持ちが先に行っちゃってるな」という気が凄くしたんだよね。青木の気持ちがホントはここにない、もっと先のほうを見てるぞ、というか。

斉藤 以前、菊地成孔さんが「青木真也は信者側である」と言ってたんですよ。前田日明とかアントニオ猪木は教祖型でカリスマ性がある、と。

橋本 みんなを煽動していく力があるよね。

斉藤 で、青木がイマイチ乗りきれない人がいるというのは、青木がまだ信者側の狂気だからだって。

橋本 青木自身がファンと同じようにPRIDE信者。

斉藤 教祖はカリスマの狂気だけど、信者はマインドコントロールの狂気だから。今回の試合は、青木が信者側から教祖側にスイッチできるかというのが、一番のポイントだったと思う。

橋本 そして今回、青木は"信者"を卒業したってことだけど、教祖っていうタイプでもないよね。山ごもりして腕を磨いてる修験者というか。

ガンツ だからね、俺は青木が「またみんなの夢を背負う」って言ってたけど、ちょっと違和感があったというか、そんな必要ないと思うんだわ

斉藤 背負う必要ないと思う。

"信者"を卒業して、青木にはもっと自由勝手に暴れてほしい

ガンツ 青木が大きな勝負に出たら、勝手に俺たちはついていくし、「観るな」と言われても観るからさ。

橋本 青木が自由に暴れたほうが、逆にファンはついていくでしょう

斉藤 それはすなわち「青木真也」という個を確立するということですよね。

橋本 勝手に暴れてくれたら、結果的にそれがみんなのためになるんだから、大丈夫

ガンツ そのほうが勝手にみんな応援するでしょ（笑）。あんだけ強いんだからね それにしても、あの"ぶっ壊しアキレス"は恐ろしかったな。

橋本 怖い 俺たちの世代の想像力は、ちょっと完全に超えてるわ この男は。恐ろしい。ゆとりじゃないけどさ、新世代だよ、完全に という か意味わかんない。

ガンツ 北岡悟が五味隆典を極めたのと一緒だよね。この試合を客席で観ていた五味隆典はあの瞬間、何を思ったか

斉藤 五味はメイン後すぐに帰ったんでしょ？

試合後「またみんなの夢を背負う」という表現で、"アメリカ"再進撃を宣言した青木。ギルバート・メレンデスとの再戦、そしてアメリカ再上陸が期待される。

橋本 試合終了後、あっという間に帰ったらしいよ。

斉藤 複雑な心境だったんでしょうね

ガンツ 煽りVで、青木と川尻の関係をお互い言ってたじゃん。「あいつが勝ちすぎるのはイヤだけど、負ける姿を見るのもイヤ」って。そんなライバル関係の一人に五味もいるんだよね。

橋本 もちろん、そうだよ。

ガンツ だから、おそらく青木と川尻も、五味がUFCで自分の手の届かないスーパースターになるのは腹立つけど、UFCで負けるのはもっとイヤだって。

橋本 だろうね。

斉藤 俺は最初の妄想として、勝ったほうは五味に呼びかけてほしかったなと思った。川尻だったら「五味くん、何やってんだよ」とかでも、青木が勝ったら狂乱乱舞して呼びかけらんないだろうなって思ったけど、まさか結婚宣言するとは思わなかったから（笑）。そういうシーンも観たかったなって

ガンツ でも、青木が勝ってコーナーに立ち上がったのって、あれは五味隆典が勝ったときにやるパフォーマンスだよね。

斉藤 そう考えると、まだ青木は信者側なのかな？

ガンツ 影響は残ってるだろうね。

斉藤 だから青木はずっと「PRIDEを忘れろ、忘れろ」って言い聞かせながら、いい意味で依存していくのかなという気もする。

橋本 結局、完全に忘れるなんてできないからね。

斉藤 そのへんがいい意味で今後のテーマですよね。いい意味でPRIDEを引きずって、PRIDEを忘れさせないファイターとしてやっていくかもしれないし。

橋本 まあ、PRIDEから生まれたPRIDEの息子みたいなもんだから、そこは変えられんでしょう。

ガンツ 結婚して、リアルに息子が誕生したら変わるかもしれないけどね。

斉藤 そういえば、今回は青木真也が童貞じゃなかったことが発覚しましたね（笑）。

ガンツ いや、まだ童貞の可能性はあるでしょ。初夜を迎えてないんだから（笑）。

橋本 そういう古風な男かもしれない（笑） まあでも、結婚おめでとうございますという。

斉藤 僕も再婚に向けてね、頑張ろうかなとは思ってます。

ガンツ 橋本さん、我々はまたずいぶん年下の青木にも先を越されてしまいましたね。

橋本 そうだよ。青木も勝手に俺たちのグループから抜け出しやがってさ。

斉藤 なんのグループですか（笑）。

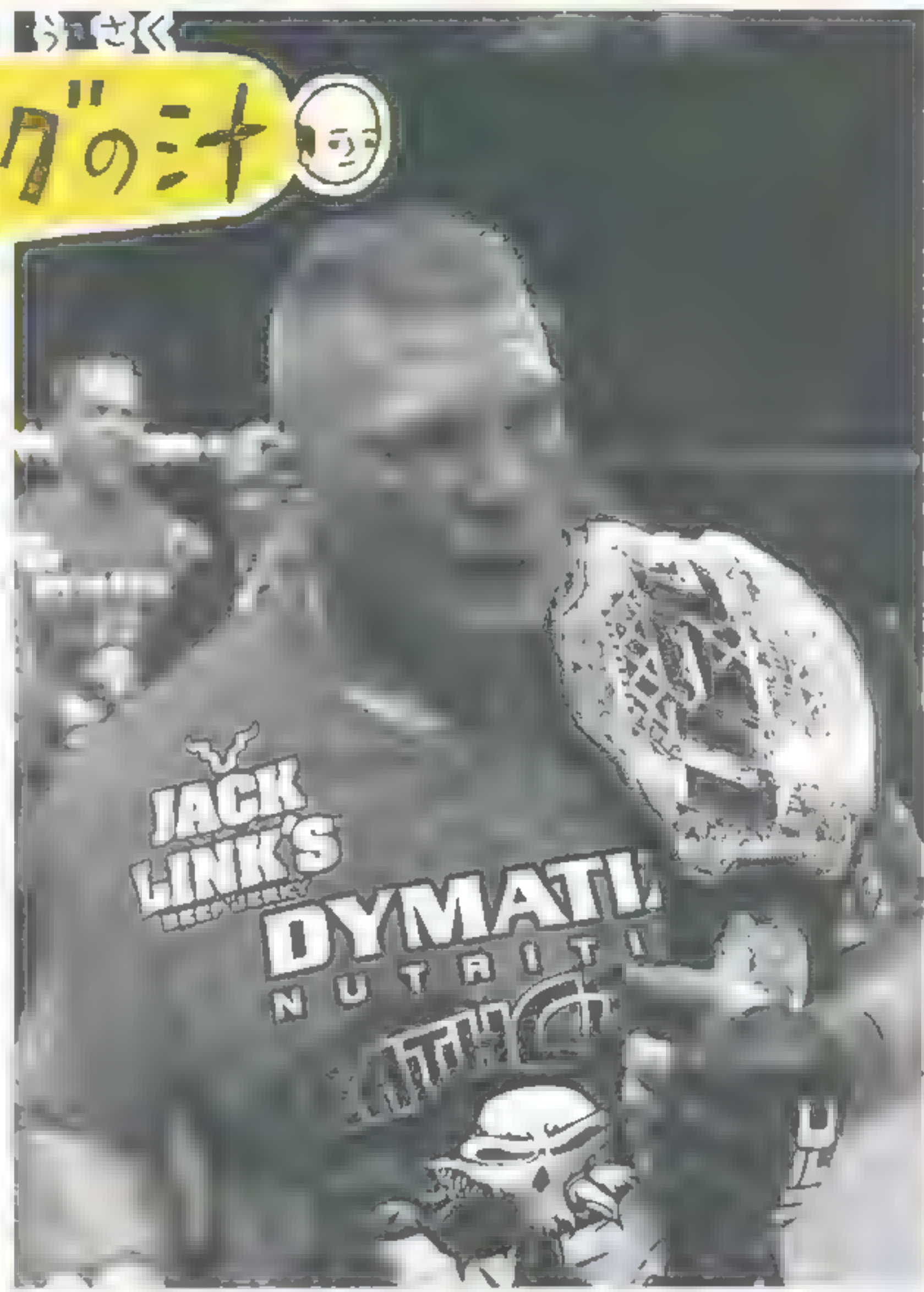
橋本 まあ、青木のこと言う前に、俺たちがもっと頑張らなきゃいけないってことかな。

斉藤 そんなオチですいませんが、今日はお疲れさまでした！

【10年7月10日 都内・kamipro編集部にて収録】

第56回

『TUF』シーズン1組大活躍!

花くまゆうさくの豆リングの汁

ヒョードル一本負け衝撃!! でも勝ったのが柔術なのはうれしい。一度外されたのを、もう一度極めてうまかったね、ヴェウドゥム。この負けで少しは身軽になったヒョードルが、UFC行ってくれないかなぁと、つくづく願う。

アリスターも一緒にUFCに行ってくれないかな。パソコンで観るよりテレビで観たいよ。

こないだの『UFC116』なんてWOWOWで放送された試合全部おもしろくて、当たり大会でしたね。最初の試合のセコンドでエディ・ブラボー映るから、僕的にはつかみはOKで気分上がった(試合もよかったし)。

秋山vsリーベンもおもしろかった。リーベンは『TUF1』の初めでいきなり、人のベッドに小便した嫌な奴のイメージだったけど、この秋山戦で見せた根性に感心しつつも、寝技のよさも出したので完全に好印象キャラになりました。

メインのレスナーvsカーウィンも最高。こんな輝いて世界中も観てるUFCを観てると、やっぱヒョードルとかみんなこの場に集まればいいのにと、つくづく思うよ!

Hanakuma Yusaku
"前回の誤植ありました。×柔道家→○柔術家

金ちゃんのどこまでやるの?

第48回 進化したアキレスの巻

この1カ月は総合格闘技のビッグマッチがたくさんあったね。そのなかでも一番驚いたのは、やっぱりエメリヤーエンコ・ヒョードルがついに負けたことかな。相手がPRIDEにも来てたファブリシオ・ヴェウドゥムだったからさ、この相手ならヒョードルの勝ちだろうと思ってただけに、一本負けしたのはホントにビックリしたよ。

ヒョードルはPRIDE時代、ノゲイラが仕掛ける下からの腕十字や三角絞めにうまく対応してたからさ、下から取られるとは思わなかったんだけど、今回はなぜか不用意だったよね。

俺が思うに、練習環境が問題なんじゃないかな。以前はズーエフさんとか、ホントに関節技をよく知ったコーチがいたけど、いまはボクシングが中心になってるんじゃないかな? グラウンドのトレーニング不足のように感じたよ。

アリスター・オーフレイムとの試合を楽しみにしていたから残念たけど、10年以上やってて事実上の初敗北なんだから、あらためて凄いよね。

いちファンとして言わせてもらえば、ヒョードルにはやっぱりUFCに行ってほしいね。UFCにはブロック・レスナーはいるし、ノゲイラをKOしたケイン・ヴェラスケスや、ミルコを倒したジュニオール・ドス・サントスもいるんだからさ。そこでUFCヘビー級のベルトを獲って、あらためて完全復活してもらいたいよ。俺とヒョードルは同じリングス出身だから(笑)、まだまだ頑張ってほしいよね。

あと今月、もう一つ驚かされたのは、青木くんが川尻くんを極めたアキレス腱固めだね。あれはね、普通のアキレスじゃなくて、"進化したアキレス腱固め"なんだよ。

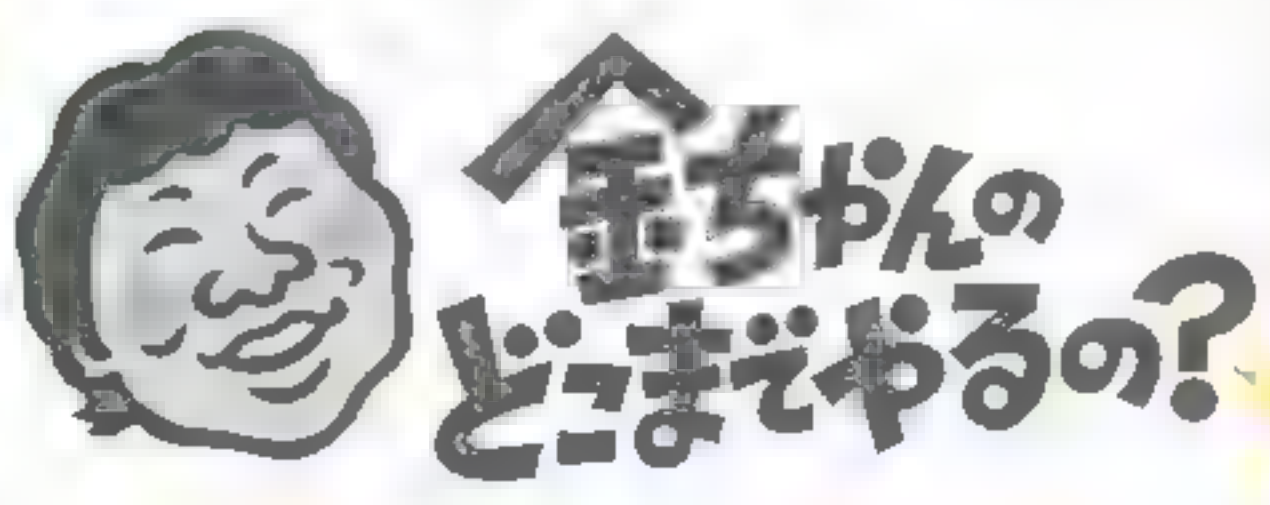
アキレス腱固めってUWFの頃から使われてたけど、あれとは全然違う技になってたね。普通のアキレス腱固めは極められたらもの凄く痛いけど、ヒザ十字やヒールホールドと違って、気持ちが強ければ耐えられる技なんだよ。でも、青木くんが極めたのは、我慢すれば足首やヒザがバキバキいって壊れる、"進化したアキレス腱固め"だったから、凄く感心したよ!

あれは逃げられないね。青木くんが極めたのは、かたちとしては"外アキレス"で自分が腹ばいになって極めるんだけど、あそこからヒールホールドに移行したりするかたちなんだよね。でも、"外ヒール"って回転して逃げられやすいんだよね。だから、青木くんはエディ・アルバレスとやったときも、"内ヒール"を極めてたよね。あと一昨年の大晦日に桜庭が田村さんとやったとき、1ラウンドで外ヒールにいったけど、田村さんに逃げられたじゃん? 普通はああなっちゃうんだよ。

でも、青木くんの技はヒールにいかずに、アキレス腱固めのかたちのまま、足首とヒザを極めて、ヒールホールドと同じ効果を出してた。ホントによく関節技を研究してるなって思ったよ。

きっと、どっちの方向に逃げられたらこう極めるとか、彼のなかでいろんなパターンができてるんだろうね。外アキレスから足首とヒザを極めるって、あの発想は俺たちU系にはなかった。たいしたもんだよ。

あんまり解説すると、ネタばらしになっても悪いからこれくらいにするけど、足関節をよく知ってないと、あれは逃げられないでしょ。自分がデビューした頃から使ってるアキレス腱固めがここまで進化してることに感動したし、俺ももっと勉強しなきゃなって思ったよね。

Hiromitsu Kanehara
◎本音炸裂コラムほぼ毎日更新中!
金原弘光オフィシャルHP
http://www.hiromitsu-kanehara.com/

あの日、あの号のインタビューもまだまだハッスルしてます!

kamipro & kamipro Special バックナンバー絶賛通販中!

kamipro Special 2010 AUGUST

ヒョードル敗れる! 世界規模のヘビー級戦国時代に突入!!

■ブロック・レスナー「最強幻想強奪」■ダナ・ホワイトUFC代表 独占インタビュー「よくわかっただろう? これが現実だ」■エメリヤーエンコ・ヒョードル「ファブリシオとの再戦を実現させてほしい」■ファブリシオ・ヴェウドゥム「いまでも、またヒョードルが世界最強だ」■スコット・コーカー ストライクフォースCEO「契約更新するかどうかはヒョードル次第」■浅草キッドの玉ちゃんと語る俺たちの皇帝ヒョードル変態座談会、ほか

kamipro No.148

マンガみたいなホントがほしい! 「闘うマンガ!!」大特集

■ハロルド作石「やっぱり「何が一番強いのか」に興味があるんです」■車田正美「創作の疲労度は肉体的にも精神的にもプロ格闘家と変わらない」■ゆでたまご嶋田隆司「マンガも格闘技も一番大事なのは"闘う理由・動機づけ"です」■宮下あきら「マンガの醍醐味とは荒唐無稽にあり!!」■みのもけんじ「MMAスターウォーズ」■浅草キッドの玉ちゃんと語る「あしたのジョー」変態座談会」■つの丸「"ファン気質"と作品の関係性」ほか

kamipro No.147

特集!! リングか、ケージか。鎖国か、開国か。幕末のマット界!

■川尻達也 インタビュー「青木くんが負けたいま、とにかくケージで闘いたい」■桜井"マッハ"速人 インタビュー「日本人みんな負けちゃって、俺がやるしかないでしょう」■榊原信行 元PRIDE運営会社DSE代表「日本の格闘技は一度ぶっ壊したほうがいい」■JJサー千葉「日本人が勝つには"忍者の手"しかない」■ビビる大木 インタビュー「幕末浪漫こそもっとも〜」■一又又二インタビュー「竜馬とたけしと猪木と前田」ほか

kamipro Special 2010 JUNE

青木完敗 この現実にどう向き合うべきか?

■青木真也 ロングインタビュー「もう少しだけ格闘技がやりたくなった」■川尻達也 インタビュー「俺がメレンデスをブッ倒すしかないでしょ」■ギルバート・メレンデス 独占インタビュー「ズバ抜けた武器を一つ持っていてもここアメリカで王者にはなれない」■ニック・ディアス「なぜアオキが俺たちに勝てないのか教えてやろう」■北岡悟「青木は日本でぶっちぎりに強いわけで、それが勝てなかったのがすべてです」ほか

kamipro No.146

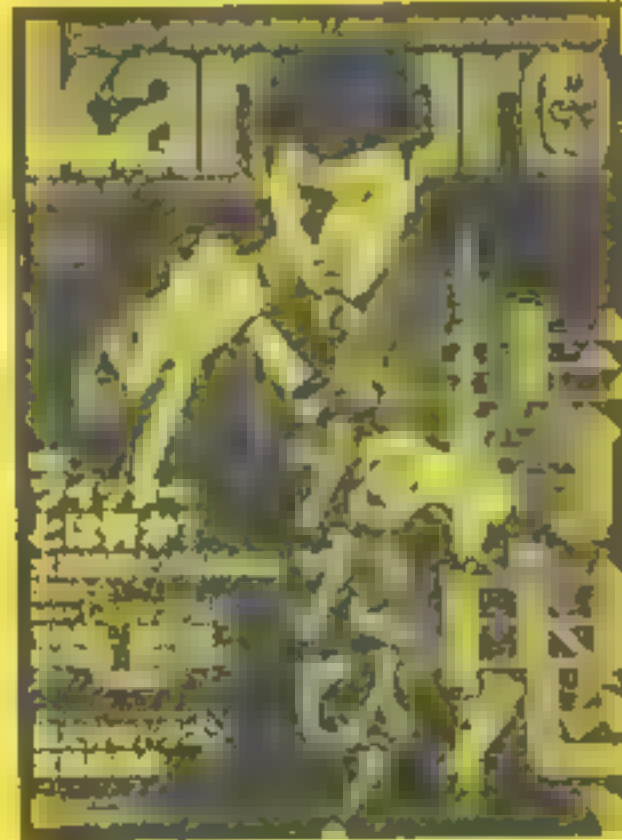
特集・破壊と建設のエンターテインメント 1990年代!!

■北斗晶「アタシがデンジャラス・クイーンと呼ばれていた頃」■福澤朗 アナウンサー「ブ、ブ、ブ、プロレスニュースの秘密を全部語る」■武藤敬司 インタビュー「ファンがUWFの"地味プロ"に飽きてたんだよ」■馳浩 インタビュー「脱ストロングスタイルを図ったこの男はA級戦犯なのか?」■小島聡 インタビュー「本当は恐ろしい佐々木健介」■ザ・グレート・サスケ×ウルティモ・ドラゴン「ジュニア黄金期のルーツはユニバにあり!」ほか

kamipro Special 2010 MAY

五味隆典UFCで完敗! まだ日本には青木真也がいる!!

■五味隆典「逃げ場がなくなった"流れ者"」■"俺たちの"五味座談会■ジョルジュ・サンピエール「その底知れぬ強さ」■全米進出直前インタビュー青木真也■スコット・コーカー ストライクフォースCEO「アオキの次の相手はもう決まっている」■川尻達也 くそったれインタビュー「青木vsメレンデス戦? 答えたくもない」■菊野克紀「今回の勝ちで喜んでいられない」■KJ ヌーン「DREAMとSF両方のライト級、ウェルター級を制覇する」ほか

kamipro No.145

140字のつぶやきでマット界が変わる!? ツイッター大特集!!

■水道橋博士×谷川貞治「谷川さんは日本初の100万人フォロワーを目指すべき!」■津田大介 インタビュー「ツイッターで飲み会が5倍楽しくなります」■噂の「しるこサンド」工場に独占潜入!■プロレス界のツイッター第一人者が語る活用術 高木三四郎インタビュー■船木誠勝 インタビュー「自分がツイッターをできない理由は、ヒクソン戦にあるんです」■菊地成孔が語る"20世紀最強最後のドラッグ"インターネット中毒論、ほか

kamipro Special 2010 APRIL

五味隆典もデビュー! UFCついに日本上陸か!?

■ダナ・ホワイト「ここ数カ月で驚くべきことを発表してやる」■ケニー・フロリアン インタビュー「五味は憧れの存在だった」■トップファイター&関係者が徹底分析 五味隆典は本当にケニー・フロリアンに勝てるのか?■先取り、裏ネタ満載座談会UFC日本上陸 噂の真相■ヘンゾ・グレイシー インタビュー「ボクとアブダビ王子の関係を話そう」■明石家さんまも大注目! オクタゴンガールのグラビア&インタビュー、ほか

kamipro No.144

時代を牽引してきたオヤジたちがいま熱い!! 特集・オヤジよ!

■吉田秀彦「いまの日本人は根性が足りない」■"オヤジの入口対談"が実現!! 内藤大助×所英男■同級生対談 桜庭和志×高阪剛■頑固者が語る四十路からの人生設計 田村潔司 インタビュー■マーク・コールマン インタビュー「熱血オヤジの一番長い一日」■村田兆治(元ロッテ・オリオンズ投手)「プロは奇人、変人、達人までいかなきゃダメよ」■"青木真也の親父"青木正さんインタビュー「あの行為は非難されて当然でしょう」ほか

kamipro No.143

大晦日総括 特集・青木真也とその狂気

■アントニオ猪木ロングインタビュー「闘いには品格が必要」■廣田瑞人「青木選手は気にしなくていい。でも絶対にリベンジする!」■日本格闘競技連盟が青木真也に処分を要求 怒りの「意見書」会見の全容を公開!!■船木誠勝「麻薬をやってるような感覚になるんです」■山田武士 インタビュー「じゃあ、誰が"MMAの品格"を教えてるの?」■谷川貞治FEG代表 インタビュー「青木問題より、なんとかしなきゃいけないのは石井慧選手」ほか

発行 株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 TEL.0570-060-555(代表)
発売 株式会社角川グループパブリッシング
[エンターブレイン総合サイト] http://www.enterbrain.co.jp

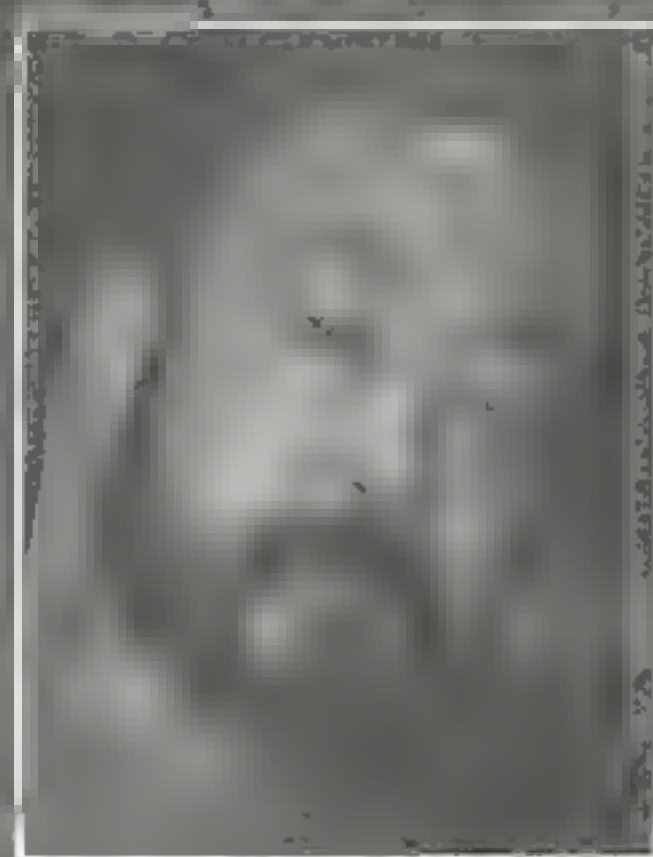
NHKが名古屋場所の生中継中止！
野球賭博問題でまさに土俵際!!

緊急特集

大相撲クライシス

存亡の危機に立つ角界を論客が激語り！

やくみつる

松永光弘

堀辺正史

[illegible]が野球賭博に関与していたと報じられたのを皮切りに、多くの関係者の違法賭博への関与が発覚した角界
不祥事が続く大相撲はいったいどうなってしまうのか――？

角界のご意見番が野球賭博問題をブッタ斬る!

大相撲とグレーな金

漫画家・元日本相撲協会外部委員

やくみつる

さまざまな社会現象や有名人をその鋭い筆致で風刺、
またテレビ番組のコメンテーターとしても活躍するやくみつる
相撲に一家言を持つやくは、今回の野球賭博問題をどうとらえているのか？

聞き手／ジャン斉藤

琴光喜が野球賭博で解雇になるなら大鵬の拳銃所持はどうなんだって話です

――松永さん、相撲界が大変なことになりましたね。

松永 そうですね。自分も相撲好きだから残念ですね。なんだかんだ言って相撲が一番好きなスポーツですから。

――というわけで、今回は元学生相撲出身の松永さんに"本誌専属相撲評論家"として、いろいろと解説していただこうと思うんですよ。

松永 ちょうどいま名古屋場所ですからね。私は中京高校相撲部時代、名古屋場所の場内整備とかやってましたから、中京高校、中京大学の相撲部は、必ずアルバイトのお呼びがかかってたんで。

――そんな松永さんから見て、今回の騒動はいかがですか？

松永 最初にニュースで騒がれ始めたときは「何をいまさらそんなことを言ってるんだ？」って思ったんですよ。だって相撲と暴力団なんてセットみたいなもんじゃないですか。

――セットですか（笑）。

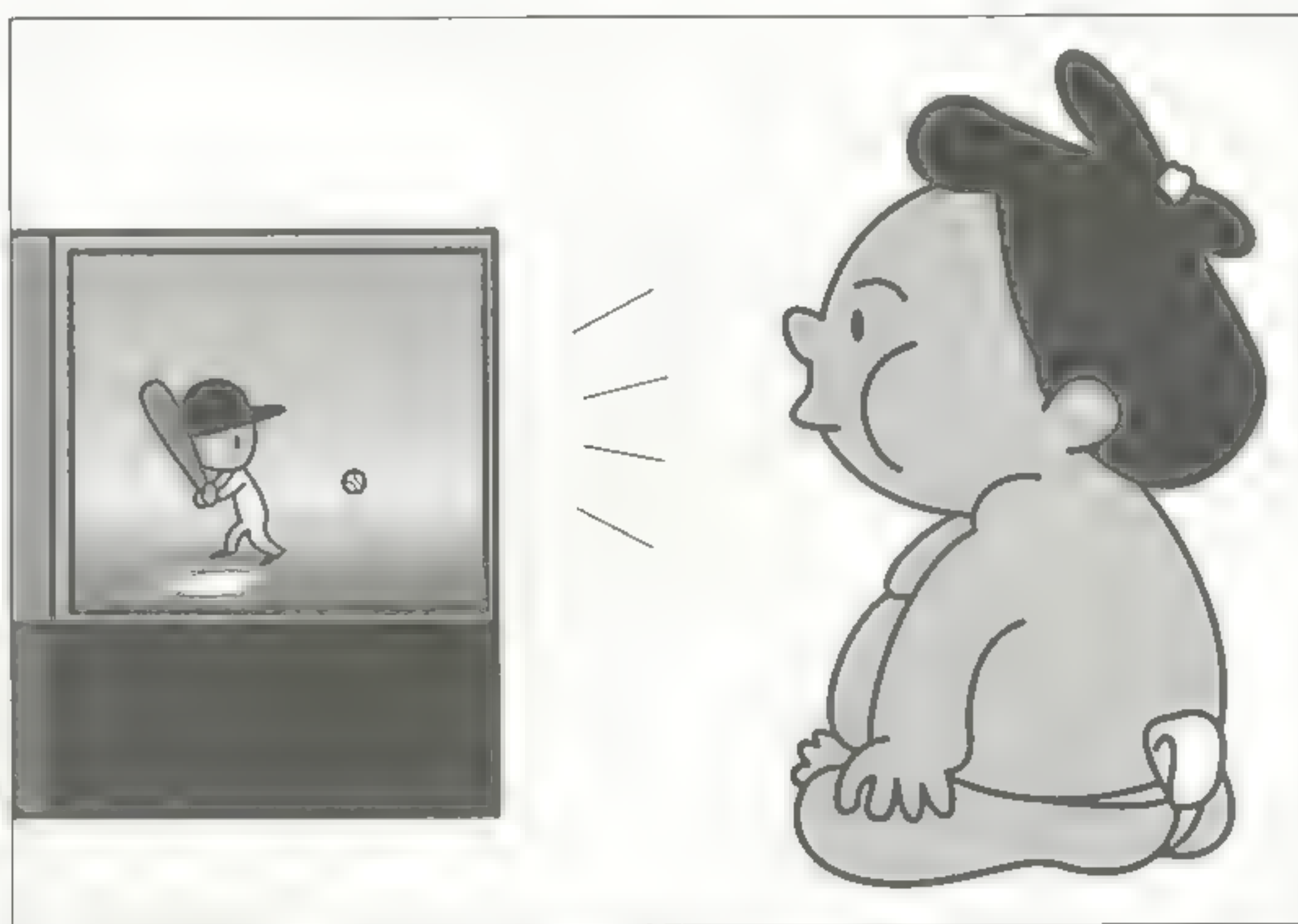
松永 自分は高校時代に一コ下の後輩で大相撲に入ったヤツがいたんですよ。で、そいつがもっと下の後輩で、相撲界に入ったヤツを凄くいじめてるって聞いたんで、ぶん殴ってやろうと思ったんですよ。でも、そのときは思いとどまって殴らなかったんですよね。それは「待てよ、裏で暴力団とつながっていたとしたら、殴ったら面倒なことになるな」って思ってやめましたからね。

――そんな認識でしたか。

松永 しかもそいつ、武蔵川部屋だったんですよ（笑）。

――ダハハハハ！ いま話題の（笑）。

松永 あと、自分の高校時代の先輩で橋本（成一郎）さんという人がいたんですよ。『八百長―相撲協会一刀両断』という暴露本のネタ元になったあと、原因不明の死を遂げた人なんですけど。

――いましたねえ……。二人の告発者が「同日、同じ病院、同じ病気」で急死したっていうやつですよね。

スポーツ中継が好きなお相撲さんのイラスト。いま問題となっている野球賭博も、当の力士たちにとっては野球観戦に付随する楽しみとして罪の意識はなかったのかも。

松永 そうです。その片方の人なんですけど、橋本さんは北の富士の後援会で凄く影響力がある人だったんですよ。それがケンカ別れして、いろいろ暴露しちゃったんですけど、その橋本さんは○○ありませんでしたからね。

――むむむむ、そうでしたか。

松永 だから、"公然の秘密"だと思ってたんですけどね。表沙汰になったらまずいに決まってますけど。

――だから当人たちも、ここまで大変なことになるって気づいてなかった感じがしますよね。とくに直接、反社会的勢力と関わりがあったわけじゃなく、普通に賭博をやってた力士なんかは。

松永 こんなことになるってわかってたらやってないと思います。ほとんど罪の意識なくやってたんでしょうね。博打なんて、普通に受け継がれてきたものだったんじゃないですかね。だから、「何をそんなに」って感じだったと思いますよ。

――普通にみんなやってる余暇の楽しみというか（笑）。だから貴闘力（大嶽親方）が涙ながらの会見をやってましたけど、「麻雀と同じような感覚でやってしまった」って、イコール麻雀ももちろんお金を賭けてやってたことをナチュラルに白状しちゃってるんですよね（笑）。

松永 だから、いろんなことに無知で、罪の意識はまったくなくやってた人も多いと思いますから。いまの時代はそれじゃ済まないのかもしれないですけど、かわいそうだなって気持ちもしますね。だって、賭博で解雇だとか除名になるんだったら、あの大横綱である大鵬さんの拳銃所持はなんなんだって話ですよね。

――よっぽど重罪だろ、と（笑）。

松永 そうですよ。こっちもほうがあきらかに重罪で、あきらかに黒い交際の影がついてくるんだから、琴光喜が解雇処分されるんだったら、大鵬さんの数々の記録が抹消されなきゃおかしいですよ。

――琴光喜が逮捕されてるのに、大鵬さんは当時たしか謹慎だけでしたよね。

松永 いくら時代背景が違うとはいえ、拳銃所持ですよ⁉

――確かにそれはどう考えてもヤバいですよね（笑）。

松永 しかもアメリカから拳銃を密輸したって話もあるんだから。みんな厳罰にするなら、記録抹消ぐらいしなきゃおかしいですよ。だから露鵬と白露山のマリファナだって、解雇は重すぎると思うんですよね。

――まあ、文化の違いがあるんでしょうけど。だから相撲界も、野球賭博や高いレートでの花札なんて、普通に行なわれていたことなんでしょうね。

松永 それこそ勝負勘を養うために、むしろ内部的には推奨されてきたぐらいじゃないですか？ だから一斉に処分されるのは残念だし、かわいそうな気もするんですよね。中学を出てそのまま相撲界に入って、その世界しか知らない人たちが多いわけですから。それこそ子どもみたいな人たちですからね。

――"校則違反"程度の認識だったかもしれないですね（笑）。

松永 自分もミクシィに（ミスター・）ポーゴさんとか、ターザン後藤さんのことを書いてますけど、あの人たちホントに赤ん坊みたいですからね。

――赤ん坊（笑）。ポーゴさんも後藤さんも大相撲出身ですよね。

松永 で、そのあとすぐプロレスですから。もう、赤ちゃんみたいなもんですよ。

[illegible]勝でき[illegible]力を持ちながら引退した朝青龍、もし大相撲新団体が設立されるとしたら、その頂点に立つ[illegible]としてうってつけだろう。

日本相撲協会が分裂したら、朝青龍をエースにした新団体ができてほしい

だからW★ING時代、代表の茨城さんとポーゴさんがよく口論してたんですけど、いつも茨城さんが「子どもみたいなこと言ってんじゃないよ!」って怒ってましたからね（笑）。

——お相撲さんは立派な人ではあるけれど、子どもみたいなところもある、ということですね。

松永　そうですよ。一般社会を通過せず、ホントに相撲界しか知らない少年みたいな人たちですから、更生する機会は与えてほしかったなって思いますけどね。

それこそ少年法を適用してほしい、ぐらいの（笑）。

松永　中身は少年ですから。ここで膿を出しきらなきゃいけないんでしょうけどね。膿を出しきるなら、大鵬さんの拳銃所持についても触れてほしいですけど。

——やはりそこにいきますか（笑）。

松永　大鵬さんって、露鵬と白露山のマリファナ事件以来、表に出てこなくなったじゃないですか。それって、自分の拳銃所持を蒸し返されたくなかったんじゃないかと思ってるんですけどね（笑）。

——「そういえばあなた、マリファナよりよっぽど大変なことしてましたよね？」ということにならないように（笑）。

松永　今回も貴闘力といったら、自分の義理の息子ですからね。それなのに表に出てこないのは、絶対に拳銃所持を蒸し返されたくないんですよ。だから過去、そういうこともあったんだから、相撲界を浄化するいい機会であるとは思いますけど、除名とか解雇はやりすぎだと思います。

——いまは、なんでも袋叩きにするっていう風潮がありますよね。

松永　そうなんですよ。ホントに下手なことできないというか。インターネットの時代ですからね。それに騒いでるヤツらは、マスコミも含めて相撲ファンじゃないヤツばかりですから。

——どうせなら、このままなくなっちまえ、ぐらいの。

松永　でしょうね。我々相撲ファンは場所中止がなくなっただけでほっとしてますけどね。でも、これだけ事が大きくなったら、これはもう完全な分岐点に立ちましたね。いよいよ大相撲二団体目が誕生する時期にきたんじゃないですかね。

——大相撲二団体目!（笑）。松永さん、以前からそれは提唱されてますよね。

松永　日本相撲協会のオポジションができてもおかしくないと思うんですよ。日本相撲協会自体を完全に変えなきゃいけない、みたいな風潮になってますからね。そもそも事業仕分けするなら、相撲協会も財団法人じゃなくて税金払わなきゃダメだと思うし、あとなんで宗教法人が無税なんだっていうね。宗教団体がもの凄いビルを建ててるのはおかしいじゃないですか。でも、宗教票がほしいからできないわけで。まあ、それはともかく、日本相撲協会が株式会社になるなんてこともありえない話じゃないですから。オポジション団体ができて、先に株式会社を作っ

〝新団体〟では黒人力士が誕生してほしい 黒人の瞬発力は絶対に相撲向きですよ

てしまったほうが勝ちかもしれない。

――それはかつて、日本プロレスがゴタゴタして、新日本プロレスができて、そのあと全日本プロレスができるような感じですかね？

松永　まさにそうですよ。これだけゴタゴタしてね、派閥の争いも凄いじゃないですか。これは〝団体分裂〟っていうこともありえると思うんですよね。で、新団体を作ったとしたら、プロレスでいう〝団体エース〟は朝青龍という横綱がいますからね。

――エースとしてうってつけの人がちゃんと控えている（笑）。

松永　ボブ・サップも一番やりたかったのは相撲らしいですからね。実際、サップが一番向いてるのは相撲だと思いますよ。瞬発力は抜群だし、持久力は必要ないし、150キロの身体でほとんど筋肉ですからね。新団体は「髷を結わなくてもいい」というルールにすれば、サップも参戦できますね。デカい外国人ばっかり連れてきたら、もの凄く強くなりますよ。

――確かにいまの大相撲より強くなる可能性はありますね。

松永　ありますよ。曙さん、小錦（KONISHIKI）さん、武蔵丸さんが一緒にテレビに出たとき「ハワイには有望な人材がいますか？」って聞かれて、3人とも口を揃えて「いくらでもいる」って言ってましたからね。

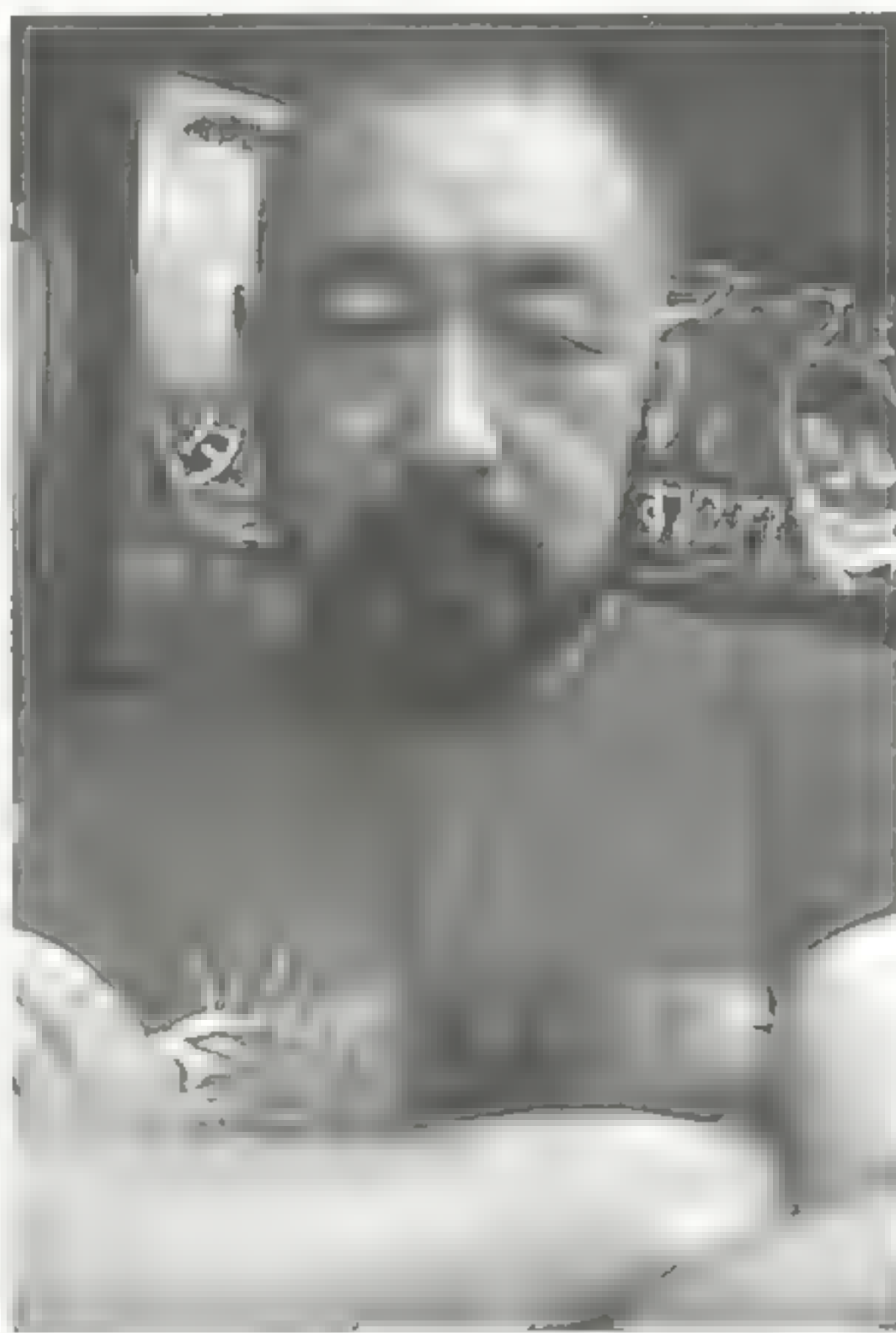
――確かにハワイは、体型からして相撲をやるための体型みたいな人が多いですからね（笑）。

松永　相撲がないから、アメリカンフットボールとかやってるだけですからね。日本人で有望な人材を見つけるのは大変ですけど、ハワイはいくらでもいるわけだから。レベルが違いますよね。

――松永さん的には、そういった相撲の二団体目が観たい、と。

松永　観たいですよ。元横綱・朝青龍がいるし、元大関・雅山が今回の件でクビになったら引っぱればいいし。そして理事長は相撲の天才、輪島さんですね。

――輪島理事長！（笑）。

松永　そして貴闘力も新たな部屋を立ち上げてね。

まつなが・みつひろ■1966年3月24日、愛知県出身。高校時代、相撲でインターハイ・ベスト32。空手を経て89年にFMWでプロレスデビュー。その後、W★INGでデスマッチ開眼し"ミスター・デンジャー"として人気を博す。昨年12月に現役を引退。現在はステーキハウス「ミスター・デンジャー」を経営。

――長州力そっくりな貴闘力が、新団体ワールドジャパン相撲協会設立の中心人物になるっていいですね（笑）。

松永　やっぱり、かつて問題を起こした人たちが、青少年育成のために立ち上がるっていうのは必要だと思うんですよ。不良を更生させるのは、元不良じゃなきゃできませんから。「あなたの気持ちはわかる」というね。

――なるほど。

松永　だからね、自分はミクシィに小学生時代の通知表まで公開してるんですよ。2のなかに3が少し混じってるという成績が載った。

――なんでそんなことを（笑）。

松永　なんでかっていうと、すべての源はコンプレックスなんですよ。不良っていうのは、勉強ができないことで、子どもの頃から差別されるわけですよ。それで荒れちゃうんです。でも、勉強ができるできないっていうのは生まれつきなんですよ。勉強ができるヤツらは、子どもの頃から「頭いいね」っておだてられて、その気になって勉強してますます成績が良くなった連中であって、俺たちみたいな勉強の才能がない人間は、子どもの頃からバカだアホだ、何ほけっとしてるんだってさんざん言われてきた。それで非行に走るわけです。劣等感ですよ。勉強ができて非行に走るヤツってほとんどいないですから。優越感にひたってるわけですからね、「俺は優れてる」っていう。

――確かにそうかもしれませんね。

松永　だから、お相撲さんもみんな相撲しかできないんですから、相撲やったらいいんですよ。それで、痛みを知った人たちが更生する機会を与えるっていうのは、いいと思うんですけどね。もちろん外部の血も入れて、相撲界の悪い部分は一掃しなきゃいけませんけどね。それで新しい相撲を作ってほしいですよ。世界には強豪がゴロゴロいますから。

――それこそ開かれた相撲に（笑）。

松永　黒人力士がもっと出てほしいですよ。外国人力士はたくさんいますけど、黒人力士はあんまりいないじゃないですか？　ハワイアンみたいな浅黒い人はいますけど、ホントの黒人はほとんどいませんからね。でも、陸上なんか見ても瞬発力があるのは黒人ですからね。絶対に強いはずですよ。

――ホントに強そうですね。

松永　ずいぶん昔にブッチャーが全日本アマチュア相撲大会に来てて、リップサービスで「今日、優勝した力士と対戦したい」とか言ってましたけど、若い頃は実際興味あったと思いますよ。ブッチャーって、瞬発力ありますからね。

――小回りも利きますしね。

松永　そうですよ。あの身体でジャンボ鶴田と互角に動きますしね。空手のポーズとかも凄いスピード感があるじゃないですか？　あれって、なかなかできないんですよ。空手をやってた人間からしても、ホントに凄いんです。だから会場が沸くんですよ。あの空手ポーズをTNTもマネしてましたけど、全然遅かったですからね。

――では、そんなことも含めて、いまこそ相撲界がドラスティックに生まれ変わるチャンスだ、と。

松永　ホントいまがチャンスですよ！　相撲を愛する者の一人として、そこに期待したいですね。

【10年6月29日／都内・「ミスター・デンジャー」立花店にて収録】

江戸時代、興行と賭博というのはヤクザが取り仕切るものだった

先生！　大相撲が大変なことになってしまいましたね。

堀辺　なんだか新聞もテレビもみんなニュースは大相撲の野球賭博問題になってますね。

――現役の大関や親方が解雇され、謹慎処分の力士が続出してますからね。

堀辺　博打で身を滅ぼして、暴露本を書いたりしなきゃいいですけどね。

――先生、それはターザン山本です。

堀辺　あ、そうですか（笑）。

あんな競馬ジャンキーの話はともかく、今回は江戸時代から続く歴史的観点から、大相撲と賭博の関係について語っていただきたいんですよ。

堀辺　わかりました。まず賭博というのは、いまの日本には競馬、競輪といった公営競技、公営ギャンブルというものがありますけど、江戸時代には公営の賭博というものはなかったんですよね。

――あ、そうなんですか。

堀辺　公営競技というのは明治に入ってからできたものですから。それもイギリスに競馬という公営ギャンブルがあるということで、それを輸入するようなかたちで認めたわけですね。だから江戸時代においては、やっぱりヤクザ屋さんが完全に仕切ってたわけです。

――完全に裏稼業だったわけですね。

堀辺　そうなんです。ヤクザの語源は「893」、花札でいうところの"ブタ"ですよね。"役に立たないもの""どうしようもないもの"という意味合いのことを、自己卑下するかたちからきてるわけですけど、このヤクザという呼び名からすでに賭博に関係してるんですよ。

――裏稼業と賭博はその頃からも密接な関係があったわけですね。

堀辺　だから当時のヤクザというのは二つの系列があるんですよ。その一つが博徒。博打打ち系統ですね。これがいわゆる本流といわれていて、ヤクザの世界でも博徒系の組というのは肩身が広いんです。

――じゃあ、博打関係っていうのは、裏稼業の本業みたいな感じですか？

堀辺　そういうことですね。また博徒系とは別に、神社仏閣や町の繁華街等で露天を出店する人たちいますね。あの人たちもヤクザではないんだけれども、お店を持てずに簡易店舗で移動しながら祭礼の旅をしている人たちを取り仕切るテキ屋系っていうのが、もう一つの系統であるんです。

――博徒系とテキ屋系ですか

堀辺　その大きく分けて二つがあるんですけど、やっぱり博徒というのが原点なんですね。そういう意味では、現在の暴力団と呼ばれている人たちも、博打は長い歴史の積み重ねのなかで生きているから、野球を博打の対象に作り変えてしまう知恵を持っているわけですね。

――本職ならではのアレンジ能力がある、と。

堀辺　普通、プロ野球でどちらのチームが勝つかなんていうのは、ある程度は野球が好きな人はけっこう読める部分があるじゃないですか。

――確率的には半分以上当たったりしますよね。

堀辺　でも、そこへ巧妙にハンデをつけたりして難しくして、博打にふさわしいものに作り替えるわけです。

――それこそハンデをつけるプロがいるわけですか。

堀辺　博徒系のなかにいるんです。それで胴元が儲かるように仕組むわけですね。しかも、いまはテレビの時代だから、江戸時代のように賭博場がお寺のなかとか、どこか秘密の部屋など小さなところじゃなく、全国規模で一斉に大人数でできるんですね。

――なるほど。全国の人を相手に一気に賭博ができてしまう、と。

堀辺　だから、実際に全国で何人が野球賭博に関わっているのか実体はわかりませんけど、かなりの人数が参加していると思われる。だからやり方によっては、胴元の収入は我々の予想を大きく上回っているかもしれない。みんなが頭に描いているような、仲間内での野球賭博なんて規模じゃなくて、巨大なお金が1試合で動いている可能性があるということを踏まえておいてください。

――なるほど。相撲界のなかでチョコチョコやっているというよりも、全国規模でアンダーグラウンドな野球賭博が行なわれており、その"お得意さん"がお相撲さんということなんですね。

堀辺　そういうことです。

――もっと簡単に言うと、競馬はJRAが全国的に取り仕切ってますけど、野球賭博は暴力団が全国的に取り仕切っているということなんでしょうか。

堀辺　非合法で取り仕切っているわけです。しかもね、博打打ちに言わせると、もちろん競輪や競馬といった公営ギャンブルでも身銭を切るわけだから興奮するんですけど、非合法のギャンブルはよけい興奮するし、燃えられるらしいんですよね。

――動く金額も大きいし、よりギャンブルの危険な魅力が大きいわけですね。

反社会的勢力に関係する問題は根深く、国技の危機とも言われている相撲界。名古屋場所はNHKのテレビ中継さえも中止となったが、両国国技館で行なわれる九月場所は、今後の捜査によっては、場所自体の中止さえも懸念されている。

堀辺　まるで地下プロレスを観るがのような、そんな魅力が野球賭博にはあるわけです。だから、ハマッてしまうんですよね。

――でも、そもそもどうして相撲界と、暴力団の関係というのは始まったんですか？

堀辺　これはね、やっぱり相撲というのは、江戸時代からすでに興行なんですよ。で、最初は神社仏閣の庭なんかを借りて、そこで相撲を取って木戸銭を徴収し、その一部を神社仏閣に寄付するという「勧進相撲」が行なわれていたわけです。ところがそれがだんだん神社仏閣だけじゃなく、人が集まるところだったら、いろんな場所で行なっていくようになったんですね。

神社仏閣以外で興行を打つようになる、と。

堀辺　そうするとやっぱり、公権力が持つ土地以外に、当時のヤクザは"シマ"という領土を持っているわけです。皆さんもご存知だと思いますけど、江戸時代というのは徳川将軍家や藩が土地はすべて仕切っているように見えるんですけど、その隙間を縫ってヤクザが支配しているシマがあったわけです。そしてそのシマのほとんどは、博打に関係することと、興行に関係することだったんですね。

――興行や賭博というのは、いわゆるシマで行なわれていた、と。

堀辺　だから興行というのは、博徒が兼業としてやっていた生業なんですよ。だから興行である相撲と博徒というのは、当時から密接な関係があったんですね。

――いまも興行の世界と、裏稼業の

世界は切っても切り離せないと言われますけど、江戸時代からそうなんですね。

堀辺 だから日本にボクシングが入ってきたとき、アメリカと同じように試合を興行として行なうわけですよね。そうすると、やっぱりヤクザが入ってくるんです。「興行というものは素人が手を出すもんじゃない」ということが、江戸時代から文化というか慣習で形成されちゃってるんですよね。だから興行主が「そんなこと言われても困る」と言ったところで、ヤクザ屋さんのほうでも「俺たちも困る」と言うわけ。「おまえに勝手に興行やられたら、俺たちの顔が立たない」と。「興行を勝手にやられたら俺たちも生きていけない。だからタダじゃ済まないよ。やるんならやってみなさい」っていう話になるわけです。

――暴力団が非合法の興行権を持っているようなことに、事実上なっていた部分があるわけですね。

堀辺 だからだいたい、そういう圧力に屈して、興行をやる場合はそれなりの協力関係を持ってやる〝お付き合い〟というものが必要になってくるんですよね。だから相撲にかぎらず、歌謡ショーを行なう芸能界なんかも、ずっとそういう世界とつながってきたわけです。でも、そのなかでも相撲界はとくに付き合いの歴史が長いんですよ。

――江戸時代から続いてるわけですからね、ヘタしたら〝交際期間〟は300～400年ぐらいあったりするわけですね（笑）。

堀辺 そういう長い慣習みたいなものが、どうしてもあるんですよ。あともう一つ、相撲界と賭博が密接になってしまった理由としては、相撲取りというのは、やっぱり勝負師なんですよね。プロの雀師と同じように、一戦一戦勝負に勝たなきゃいけない。で、勝負というものは水ものですから、勝ち負けを計算できないものに自分を賭けることができなければ、勝負はできないんですよね。

『勧進大相撲興行之図』（陽斎豊国画）。江戸時代の相撲が大観衆を集める興行であることがこの絵からもわかる。

相撲取りは勝負師だから博打をやる精神がどこかで必要になる

――相撲を取るということ自体が、ある種、ギャンブル性を帯びているわけですか。

堀辺 だから相撲取りも、賭博をやるような精神がどこかで必要なんです。これは賭博に手を出した相撲取りを擁護するわけじゃないんですけど、そういう精神も相撲取りは持っているということを知らなければ、この問題の本質はわからないと思いますよ。

――それを格闘技の試合に置き換えると、KOを狙うっていうのは逆にKOされる可能性が高まりますけど、それでも勝つためにはあえて勝負する精神が必要とされるわけですよね。それは選手にとって、〝博打を打つ〟っていうことなわけですね。

堀辺 そうなんです。博打を打たないと、勝ちというものを引き寄せられないんです。一般社会で生活している人たちというのは、なるべく危険に身を置かないようにしますよね。でも、勝負を生業にしている人は、やられる危険性をあえて冒して、でも勝ちにいかなきゃいけない。そういう仕事なんですよ。

――ある意味、平然と高額の博打を打つぐらいの精神がなきゃ、務まらないというか。

堀辺 まさにそうなんです。近代人は日本の相撲が「国技」という立派な冠を被せられていることで、品の高い部分だけで相撲が成り立っていると考えがちなんですね。そういう勝負師の心の奥がわからないんです。でも、本来相撲取りというのは、博打に手を出して、計算できない場にあっても動揺せずに平然としていられる精神、度胸がないとやっていけないんですよ。だから野球賭博で勝負師としての精神を養っている部分もあるわけです。

――賭博は力士にとって、ある意味でメンタルトレーニングの一つでもある、と（笑）。

堀辺 そうなんです。善悪の問題ではなく、そういう精神のなかに身を置いている人たちなんですね。だから「相撲取りがどうして賭博に手を出してしまうのか」という内面的な理由の一つがそこにあるんです。また今回の事件報道を見ると、有識者と呼ばれる人たちは〝勝負師〟じゃない人ばかりなんですよ。

――そりゃそうですね（笑）。

堀辺 勝負なんていう危ない橋は渡らない人たちが論議しているので……

相撲協会に徳川幕府が仇討ちを認めたような政策を提案したい

勝負師たる力士の気持ちにまったく無頓着なんです。そうすると、ただ外面から枠にハメて規制するという対処法しかできないんじゃないかなって思いますね。

――杓子定規なことだけになって、抜本的な解決にならない可能性があるわけですね。

堀辺 そう。良識ある対処、世間が納得する対処は提示できるかもしれないですけど、相撲取り側に立った目というものもないと、また別の問題というものが起こるんじゃないかと危惧しています。

――言い方は悪いかもしれないですけど、不良や犯罪者の気持ちがわからないと、取り締まれないというか。

堀辺 まさにそのとおりなんです。だからえてしてね、犯罪者や不良少年を立ち直させる教会の牧師さんっていうのは、昔、悪かった人が多いんですよ（笑）。

――ヤンキー先生みたいな（笑）。

堀辺 やっぱり自分自身が悪かった人っていうのは、彼らの考えが手に取るようにわかるわけですよ。だから言葉に説得力があり、更生させることができるんです。そういった点も考慮してほしいなって思いますね。

――では、ちょっとまとめますと、力士たちがなぜ野球賭博と関わってしまったかといえば、興行と従系の長い関係性が一つ。また相撲取りに勝負師的な要素があること一つという感じですね。

堀辺 そういう世界の人たちなんですよ。だからそういう彼らを、勝負師の牙を抜くことなく、相撲外のところで勝負師としての勘を訓練する合法的なものを代替物として与えないと、問題は解決しないんじゃないかと思いますね。識者が相撲界を無菌状態にしてクリーンにしても、力士たちはその無菌状態には耐えられませんよ。

――より地下に潜るかもしれませんね。

堀辺 そうなっちゃうんですよ。だから私が相撲協会の幹部であったら、合法的な勝負師としての根性を養えるような、代替物を作るしかないなって思うんです。徳川時代もね、そういった政策を行なったんですよ。

――どういうことですか？

堀辺 侍というのは戦場で人を殺してナンボのものですよね？ 殺傷能力があればあるほど、侍として立派だったわけですよ。ところが江戸時代になると戦乱がなくなって、殺す能力があっても発揮する場所がなくなっちゃったんです。そうすると侍が力を持て余して、乱暴な方向へ走った時期があったんですよ。江戸初期の傾き者なんていうのがそれですよね。

――平和になったことで、侍が荒れだしましたか。

堀辺 だから、その侍魂を満たすために、幕府は戦の代替物を用意しなきゃならなくなった。そうして生まれたのが〝仇討ち〟を許すということなんですね。

――侍の能力のはけ口として仇討ちを認めましたか。

堀辺 厳密にはそれだけが理由じゃないですけど、自分の親族や同じ藩の者が争いに巻き込まれて殺された場合は、ちゃんと届け出を出せば仇討ちを許したんです。

ほりべ・せいし■1941年、茨城県出身。50年にわたる命懸けの求道の末、喧嘩芸骨法、さらに全局面打撃制koppoを創始。格闘技・武道評論の第一人者でもあり、現在は月に一回のペースで漫画家・小林よりのり氏らとともに「ゴー宣道場」も開催している。

堀辺正史

――へえ、仇討ちは届け出制だったんですね。

堀辺 そうです。むやみに殺すのは御法度ですけど、ちゃんと奉行所に届けを出して認めてもらって、仇討ち免許っていうのをもらうんですよ。

――まさに〝殺しのライセンス〟が交付されるわけですか（笑）。

堀辺 そうなんです。だから侍は仇討ちという機会があれば、自分の侍としての能力を公認で発揮することができる。それによって侍全体としてのストレスが取れるわけですね。仇討ちっていうのは、何年も仇敵を探し歩かなきゃならないこともあるし、返り討ちに遭う場合もあるわけですよ。そんなことは庶民にはできない。これも侍の神髄なんだということで、はけ口を与えた。仇討ちを認めることで、平和な時代にあっても侍が修行に励むモチベーションを保ち、侍魂を消失させないようにしたんですね。

――なるほど。

堀辺 だから相撲取りも勝負師だから、土俵に集中させるためには、普段から勝負師の根性をどこかで養っておかなければならない。だから私は徳川幕府のような上手な政策を相撲協会なり識者なりが考えることを提案したいですね。

――いやあ、相撲取りがなぜあんなに賭博に関わってしまうのか、という理由が今日はわかったような気がしますね。

堀辺 やっぱり賭博っていうのは、彼らの人格、心理と非常に相性がいいんですよね。だからこそ狙われるとも言える。

――つけ込まれてしまう、と。

堀辺 そう。暴力団の〝上お得意様〟になるんですよ。しかも、こういう問題が起きちゃいけないから、簡単にペラペラとはしゃべらないわけだから。

――非合法賭博の秘密も守ってくれる顧客なんですね（笑）。

堀辺 ましてやタニマチからごっつぁんする金額が大きいわけだから。もらったお金は、いわゆる〝あぶく銭〟なわけだから、そのお金をまるまる賭けちゃいますよ。

――ターザン山本が自分の給料ではなく、馬場元子さんに無心したお金で競馬をやるのと一緒ですね（笑）。

堀辺 やっぱり男っていうのは、女房に渡さなくていい金があるとギャンブルなんかで使っちゃうんですよね。大嶽親方だってそうですよ。後援者に「これ、部屋のために使ってください」とゲンナマでもらったお金は、おかみさんが知りえないお金ですから。これは賭博で使っちゃいますよ。

――野球賭博の軍資金になりやすいシステムがちゃんとできあがってるんですね（笑）。

堀辺 だからこれは改革といっても、市民社会のルールを相撲界に押しつけるだけじゃ、解決しないと思うんですよね。絵空事になってしまうということを知らなきゃいけないと思いますね。

――今日は、相撲と賭博の関係が仕組みがよくわかりました。ありがとうございました！

【10年6月23日、都内・骨法武術館にて収録】

おいおい、なぜかオレのページに「ツイッター一覧」ってヤツが侵入してきてるじゃないか。しかも、けっこうなスペースじゃないかって話だぜ。いったい誰の許可を取ってこんなことやってるんだい!(怒)。……え? 編集長のお達したって!? ……それならしょうがないじゃないか。てもよお、なせかオレたけのフリースペースをどんどんちっちゃくする作戦に見えるのは気のせいかい?(涙)。

148号へのお便り紹介

ハロルド作石のインタビューがおもしろかった。「ゴリラーマン」は僕の人生のなかで一番好きなマンガなので、ハロルド先生のインタビューが載っているだけでワクワクしました。とくに、トビラのデザインはサイコーです!【東京都・ゴリラーマンさん・会社員・37歳】

D俺も、マンガ好きのボーイに薦められて読んでみたけど、ゴリラーマンはおもしろいよな〜。……い。俺も『kamipro』を読んでるボーイス&ガールスと共通の話ができるように必死で勉強しているんだぜい。

おもしろかったのは特集・闘うマンガ!! リアル系の人だけでなく、宮下あきらやつの丸などのとんでも系の人にもインタビューしているのが面白かったです。どちらも大事だし差別したらいけませんよね。【新潟県・関節痛さん・会社員・22歳】

Dマンガ特集といって、「アレが載ってない」「コレが載ってない」という輩がたくさんいるようだが、そういうヤツはもう完全に『kamipro』の手の上で転がされてるってこった。そういうボーイス&ガールスは、タンスの奥にしまってあるマンガをひさしぶりに読み返したりしてるんじゃないのかい? クックックック

車田正美インタビューがおもしろかった。見出しの「創作の疲労度は格闘家と同じ」というところに痺れました。35年も描いていると、さすがにそういう思いになるんだろうなと思いました。それにしても、当時の『少年ジャンプ』の連載陣はとんでもないなと思いました。【大分県・[illegible]さん・会社員・35歳】

D確かに闘っているのは凄くわかるが、ティーチャー・クルマダがサングラスをかけて歩いているのは……はこうじゃなきゃいけないよな

ハッキリ言って、みのもけんじのマンガには感動した。まさか笹原イベントプロデューサーが殺される役になるとは思わなかったし、谷川さんの鼻水にも笑ってしまいました。でも、この前の調印式からすると、とても青木と川尻がこんなふうに手を結ぶとは思えません。笹原さんが死んだとしても(笑)。【埼玉県・大宮川尻さん・会社員・25歳】

Dおいおい、それはちょっとEPササハラがかわいそうじゃないのかい? ちなみに、俺がこのマンガで……したんだい石田くん。大宮なんか出して……だ。普段、こんなことを言うボーイなんていないからな

ゆでたまごの嶋田隆司インタビューがおもしろかった。「闘う理由、動機づけが一番大事」ってうのは、僕も同感です。【広島県・松川[illegible]さん・会社員・40歳】

D闘うモチベーションが重要ってのはいったいどういうことだい? オレのようにキュートなガールスにキャーキャー言われたいってのもOKかい? え!? オマエは筋肉マン以下だって!?

遠藤浩輝の「オールラウンダー廻」の話がおもしろかった。「オールラウンダー廻」は私が総合格闘技を始めたきっかけになったマンガで、技もストーリーを通じて覚えました。遠藤先生のコメントに「試合に負けても、人生に勝つような話にしたい」とありました。その言葉からも、格闘技愛を感じました。【[illegible]さん・会社員・30歳】

Dティーチャー・エンドウはヤ○ザな世界が好きらしいじゃないか。だからって、ブッチャーの地獄突きなんかはもう勘弁してくれよお。そして、ガールをどんどん登場させることには大賛成だぜ

kamipro148号
おもしろかった記事
RANKING

- NO1 あしたのジョー変態座談会
- NO2 追悼・ラッシャー木村
- NO3 ゆでたまご
- NO4 車田正美
- NO5 才賀紀左衛門

前号のマンガ特集は大盛況だって話しゃないか! やるなあ、編集さんよお。しかし、オレが一番好きなマンガはヒトシ・イワアキの「寄生獣」ってマンガた。え? 意外と渋いラインじゃないかって? クックックック。……ん? オマエの頭は寄生獣に侵略されている? おいおい、ちょっと油断したら言葉の暴力になってるじゃないか!

神奈川県・下口義さん/お、おいおい、これはまたとんだ怪物が現われたもんだぜ……いったいこのマンガはどういう意味なんだい? マンガ特集がピンピンきたからって、いくらなんでもあんまりだぜ

東京都・[illegible]さん/OH!…は今回…クのアー…を描いてくれたのかい? そんなヒロトももちろんサイコーにクールな暴力柔術Tシャツは買うんだよな? クックックック

ファンキーでクレイジーなアイツが
読者のメッセージを
Check it out!!

"読者ペイジ" ジャクソン

闘うマンガ特集で、まさか『ワイルド・ナイツ』の作者インタビューまで出てるとは思いませんでした。しかし、マンガも飛んでますが、作者の人生もかなり飛んでると思いました。自分に降りかかったことを想像すると、ちょっとぐったりしました。【宮城県・オールド・ナイツさん・会社員・30歳】

Dこのストーリーはどうやらドーテーってヤツの話らしいじゃないか。まったくとんでもない[illegible]

あしたのジョー変態座談会がおもしろかった。このメンバーは格闘技のことから『あしたのジョー』まで語れて本当に芯の部分から変態なんだなということがわかりました。でも、僕ら世代の人たちには、本当に痺れる座談会だと思います。ジョーの表紙もサイコーです。[illegible]

Dタマブクロとシイナっていうミスターはまたく何に対してヘンタイじゃないのかを探ったほうが早いくらいだな。ホントに城が築けるくらいの財産だぜ。【大阪府・洞橋さん・会社員・43歳】

KID選手の記事がおもしろかったです。KID選手が勝ってすごいうれしかった。読んでいてKID選手の今後の活躍が凄く楽しみになったから。【福井県・大平一さん・無職・33歳】

Dハジメはいつもハガキを送ってくれるが、ユーは本当にKIDや魔裟斗や、タツヤ・カワジリ[illegible]ボーイが大好きだな。その[illegible]どんどん格闘技を応援してくれよ。[illegible]たまにはオレのことも応援したって[illegible]

ラッシャー木村を語った杉作J太郎インタビューがおもしろかった。私も「男[illegible]」という意見に賛成です。木村氏の座右の銘「耐えろ、そして燃えろ」。北海道室蘭市体育館でみた最後のIWA世界戦、vsジ・エンフォーサー戦は宝物として心のなかに永遠に残っています。【神奈川県・[illegible]さん・会社員・45歳】

Dプロレスをよく知らないオレでもラッシャーっていうレジェンドはよく知ってるぜ。Jタローっていうミスターは「こんばんは」を連発してたといってたが、それはもうみんなのハートの中に建ってるってヤツだ。え？ たまにはいいこと[illegible]

いま思えば、猪木vsラッシャー木村は、プロレス大河ドラマとして芸術でした。もうあんなプロレスは観られません。あの頃、猪木信者として木村さんに罵声を浴びせた無礼、本当にごめんなさい。私の大好きだったプロレスは遠くにいってしまった。【長野県・小川太志さん・会社員・45歳】

Dおいおい、プロレスなんだから罵声を浴びせたってそれがレスラーの糧になるってもんだぜ。でも、ユーたちに言っておくが、オレに[illegible]せる罵声はまったく糧になってないからな。

ニック・ディアスのインタビューがおもしろかったです。ニックは日本でも人気があるのに、日本で嫌われていると思っていると言ってるのを読んで、ますます好きになりました。また日本で試合をするときは、僕は絶対に暴力表術Tシャツを着て応援に行きたいと思います。ほか、ニック・ディアスが好きなものがあったらぜひ教えてください。【千葉県・暴力饒舌さん・自営業・33歳】

D[illegible]言ったけどよお、今回のインタビューを読んで、ますますファンになったってボーイズ&ガールズも多いんじゃないのかい？ しかし、ニックがカツノリ・キクノに注目しているってのはこりゃまた興味深いぜ。クックック。

レックス・ギャングスターが語るMMA改革論がおもしろかった。興味があったことや、知らなかったことがたくさんありました。【千葉県・小林信介さん・理容師・33歳】

D[illegible]ガールズはダイエットしているというわりに[illegible]あっという間に10キロぐらい平気で痩せるもんな。ありゃ一種のマジックの域に達してるぜ。

才賀紀左衛門インタビューがおもしろかった。階級の違う自演乙にまで毒を吐くのがおもしろかったです。こうなったら総合の人にも毒を吐いてほしい。【北海道・安部正典さん・フリーター・37歳】

Dオレは正直ビックリしたぜ。まさかあのナオキックとかいうボーイにキザエモンが勝つとはなあ……。しかし、口は災いの元っていうのは[illegible]たってことが、今回のやりとりでわかったボーイズ&ガールズも多いんじゃないのかい？

おハガキ募集!!

おハガキ、どんどん送ってくれよ!
ケータイからでもOKだぜ!!
とんな意見、感想、苦情、抗議、
お悩み、タメだしでも、ぜーんぜんキャッチするから安心しろって! 待ってるぜ!
こんな情報も24時間どんとこい!
ってヤツだ。
●譲ってほしいもの
●タレコミ情報
●選手に対するコメント、試合の感想
●その他、オールOKだ!!

以上、すべてのお便り・
イラストのあて先は

〒162-0805
東京都新宿区矢来町41-1
ザ・フタカミハウスNo.1
kamipro編集部「ET」係まで。

携帯サイト「kamipro Move」
からの投稿もできます。

[illegible]

★先日、中目黒駅前の横断歩道を渡ろうとしたら、向こうから大声で笑いながら歩いてくるアンちゃんがいました。とこかで聞いたことがある声だと思って振り向くと、なんと長南亮選手でした! さらによく見ると、話している相手は、結婚マイクでおなじみの光岡映二選手でした! 二人ともいい感じで酔っぱらって楽しそうな感じで話していたのですが、それにしてもすんごい目立ってたので、すれ違ったあとに笑ってしまいました。両選手とも飲みすぎには気をつけてください。【東京都・目黒区在住さん】

★神楽坂にある編集部近くのコンビニに買い物に行ったら、なんと川村亮にばったり遭遇しました。そのまま近くのスタジオに入っていったのですが、お互い微妙な顔見知りなので、挨拶はしませんでしたが「アレッ!?」という感じになりました。微妙な顔見知りというのは、以前、友たちを挟んで、川村選手とKEI山宮選手と一緒に小向美奈子のストリップショーを観に行ったことがあるからです。【東京都・スズキィさん】

団体オフィシャルおよび関係者のツイッターアカウント

※オフィシャルや代表者のアカウントを集めたんだが、載ってないものがあったらぜひ教えてくれよな!

谷川貞治 FEG代表「K1 Tany」
FEG宣伝熊「K1_Kuma」
DREAM「dreamPR」
笹原圭一 DREAM EP「sasaharakeiichi」
SRC「SRC mobile」
向井徹 SRC代表「SRCbyWVR」
DEEP「deep official」
佐伯繁 DEEP代表「sigeru saeki」
パンクラス「_PANCRASE_」
UFC「ufc」

ダナ・ホワイト「danawhite」
ジュエルス「JEWELS_info」
ヴァルキリー「valkyrie_cf」
久保豊喜 GCM代表「kubotoyoki」
WWE「WWE」
新日本「njpw1972」
菅林直樹 新日本プロレス代表「NJPWSUGABAYASHI」
武藤敬司「muto_keiji」
DDT「ddtpro」
高木三四郎「t346fire」

マッスル坂井「musclesakai」
ゼロワン「zero1 fos」
ハッスル「321hustlehustle」
山口日昇「hustle yamaaa」
SMASH「SMASH 2010」
酒井正和 SMASH代表「SMASH Sakai」
アイスリボン「ice ribbon」
さくらえみ「sakuraemi」
19時女子プロレス「19pro」
アントニオ猪木「Inoki Kanji」

kamipro books 驚ガク! 衝ゲキ!! kamipro booksシリーズ! 死闘インタビューの歴史的目撃者になれ!!

中邑真輔の一見さんお断り

プロレス界史上最高に難解な男の脳みそを解き明かす!!

昨年、唐突にアントニオ猪木への挑戦をリング上でブチ上げて物議をかもすなど、その行動と発言が刺激的な男・中邑真輔。そんな男が初の単行本をリリース。"プロレス界で最も難解な男"がつぶやく10万字!! その名も「中邑真輔の一見さんお断り」。タイトルとは裏腹に一見さんは大歓迎だったりする内容です!

B6変型判 224ページ
定価=1,890円(本体1,800+税)

悪役道 ヒールたちのブルース

悪の道を歩けるのは選ばしれ者のみ!

"悪の道"に精通する豪華16名が珠玉の"ヒール哲学"を激白! 反則攻撃、挑発行為、ラフファイト、モンスター、エゴイスト、アナーキスト、アンチヒーロー……。悪とは何か? 悪役とは何か? 本書は因縁の内藤大助戦に勝利を収めた亀田興毅をはじめ、『kamipro』誌上に掲載されたさまざまな悪役のインタビューを厳選収録。時代に憎まれし、ヒールたちのブルースを聴け!

B6変型 304ページ
定価=1,890円(本体1,800円+税)

新日本プロレス学習帳

"業界の盟主"の魅力を凝縮したインタビュー12連発!

★鈴木みのる&獣神サンダー・ライガー★小林邦昭★平田淳嗣★金本浩二★山本小鉄★新倉史祐★田中秀和★中西学★天山広吉&金原弘光★マサ斎藤★永田裕志★中邑真輔

「kamipro」に掲載された新日育ちのレスラー&関係者のインタビューが一冊に! これを読めば老舗団体の過去・現在・未来がまるわかり!

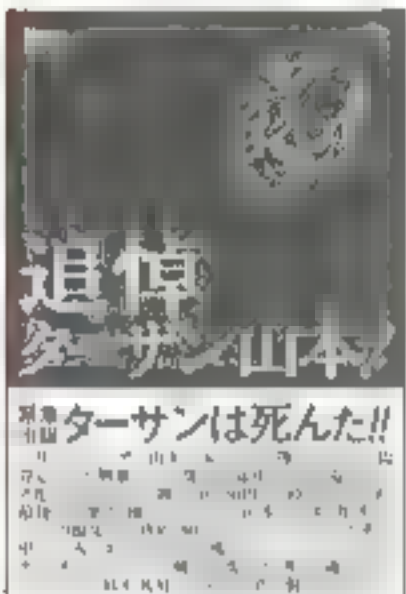
B6変型判 320ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

魔王 秋山成勲 二つの祖国を持つ男

秋山成勲なのか
チュ・ソンフンなのか　　。

2006年12月31日大晦日、秋山成勲vs桜庭和志戦で発生したクリーム塗布事件。この一件以降、秋山は日本では悪質な反則選手、片や韓国では悲劇の元・在日韓国人と、評価が真っ二つに分かれた。本書籍は秋山成勲が、柔道界での挫折ののち、総合格闘技家としてデビューして"魔王"と呼ばれる怪物に至るまでを検証するノンフィクションだ。

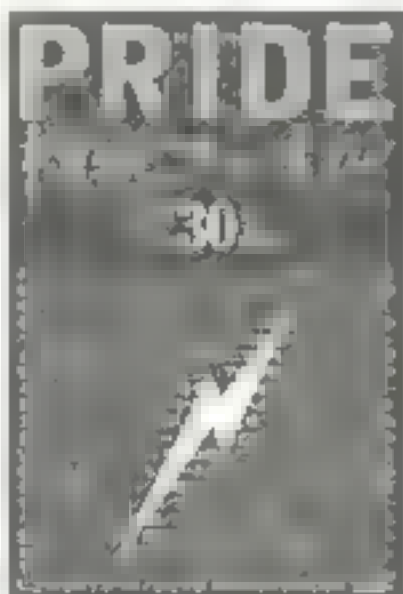
B6変型判 264ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

生前追悼 ターザン山本!

え、ターザンが死んだ!?
90年代プロレスを徹底検証!

★浅草キッド★いしかわじゅん★堀辺正史★更級四郎★松本晴夫★杉山頴男★谷川貞治★山口日昇★金沢克彦★市瀬英俊★小島和宏★菊地成孔★Oka-Chang★原タコヤキ君★椎名基樹 ほか

「週刊プロレス」編集長として辣腕を振るった山本さんの人生を通して、90年代プロレスブーム、はたまたプロレスという生き様を振り返る!

B6変型判 304ページ
定価=1,470円(本体1,400円+税)

PRIDE機密ファイル 封印された30の計画

ついにその秘密のベールを解禁!!
PRIDE幻の超極秘プロジェクト!!

★高田vsヒクソンの前座に前田日明登場!?★長州力、橋本真也、船木誠勝の参戦計画★ホイスvsケアー消滅の計画★PRIDEが小錦獲得に動いた!?★"皇帝"ヒョードルを二度破った男 ほか

その消滅から早2年——世界最高峰のリングに封印された30の計画を発掘! さらに青木真也、三崎和雄ら6大インタビューも同時収録!

B6変型判 296ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

U.W.F.変態新書

ダメな大人たちへ捧げる
"変態"とUWFの晩餐!

★UWF★前田日明★船木誠勝★高田延彦★桜庭和志★ターザン山本!★キン肉マン★PRIDE★プロレス★変態とは何か?(菊地成孔スペシャルインタビュー)★変態解説

プロレス界の一大潮流となったUWF。そのUWFに人生を学び、人生を狂わされた変態的プロレスファンたちが、UWF神話を語り倒す!

B6変型判 296ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

八百長★野郎

ミスター高橋本から7年……
"呪いなき"時代のプロレス再入門書!!

★マッスル坂井★大槻ケンヂ★菊地成孔★森達也★杉作J太郎★ミスター高橋★菊池孝★高木三四郎★ハチミツ二郎★鶴見亜門★プロレス業界初"台本"全文掲載!

カミングアウト当事者から元ファンの知識人まで総動員してプロレスを再考! "プロレスの向こう側、「マッスル」"の世界に迫る!

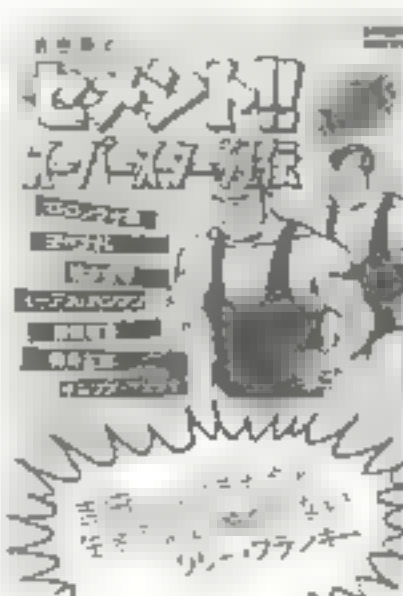
B6変型判 296ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

PRIDEはもう忘れろ!

フジテレビショックから始まった
日本マット界激動の歴史を追う!

フジテレビショックは日本格闘技界に何をもたらしたのか? 本誌でおなじみのライター橋本宗洋が送るMMAクロニクル。本書は、本誌携帯サイト「kamipro Move」で好評連載中の週刊コラムを厳選収録したものである。PRIDE凋落の時期からスタートした連載は、あらためてPRIDEの存在意義、役割を見つめ直し、そしてPRIDE消滅後、それでも生き続ける格闘技のおもしろさを綴っている!

B6変型判 336ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

吉田豪のセメント!! スーパースター列伝 パート1

吉田豪インタビュー11連発!!
インタビュー本の最濃傑作!

★ストロング小林★阿修羅原★鷹芳夫★倉持隆夫★サムソン・クツワダ★猪木快守★イーデス・ハンソン★田中健一★小川宏★鶴見五郎★田代まさし

プロインタビュアーの吉田豪が、『紙のプロレスRADICAL』誌上で聞き手を務めたロングインタビューの一部を完全徹底再録!!

B6変型判 344ページ
定価=1,890円(本体1,800円+税)

発行/株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 TEL.0570-060-555(代表)
発売/株式会社角川グループパブリッシング
[エンターブレイン総合サイト] http://www enterbrain.co.jp/

今回の特集は
イ、イマナ・リー!?
「………。」

映画と

集

今回は映画特集。と聞いてもピンとこない読者も少なくないかもしれない。しかしプロレス・格闘技界と映画界は「興行」「見世物」という同じくくりで発展してきたためか古くから密接に関わっており、多くのプロレスラーや格闘家が映画に出演して見世物的要素を強めてきた。

そしてその嚆矢となった人物が、プロレスブームの火つけ役である力道山であった。力道山は『鉄腕巨人』や『力道山物語』といった自伝映画で主演を務め、映画を自身のパブリックイメージをさらに強固にしていくことに利用している。

そして『力道山物語』に出演していたプロレスラーの一人であるハロルド坂田は、テレビドラマも含めると30本近いフィルモグラフィを誇り、ハリウッド、日本、香港と国際的に成功した最初のプロレスラーだ。とくに『007／ゴールドフィンガー』で殺人山高帽を自在に操る殺し屋オッド・ジョブ役で強烈なインパクトを残している。

時は下って60年代後半から70年代に入ると、プロレス界はジャイアント馬場とアントニオ猪木という両巨頭が君臨する時代に突入。馬場は『あんま太平記』のような作品へのカメオ出演程度だが、猪木は多くの作品に登場している。なかでも『がんばれ！ベアーズ大旋風』では、日本に来たベアーズのマネージャーと猪木が激突。モハメド・アリ戦の直後だけに国際的な知名度があったからこその起用であろう。

ハリウッドではWWF（当時）で絶対的な人気を誇るハルク・ホーガンが映画界に進出。『ロッキー3』ではロッキーと異種格闘技戦を行ない、『マイホーム・コマンドー』などで主演を務めている。同じくWWFのジェシー・ベンチュラは『プレデター』や『バトルランナー』といったアーノルド・シュワルツェネッガー作品で印象的な役を演じているし、アンドレ・ザ・ジャイアントはその巨躯を活かして『プリンセス・ブライド・ストーリー』などで優しい巨人を演じている。ちなみに現在、WWEはWWEフィルムズを設立し、自社でアクション映画を製作している。ザ・ロックの『ランダウン』やジョン・シナの『ネバー・サレンダー』『12ラウンド』、ストーンコールドの『監獄島』など、予想以上にクオリティの高い作品を量産している。

一方、日本のプロレスラーはプロレスファンの映画監督に起用されることも多く、『龍が如く 劇場版』にアレクサンダー大塚が出演していたり、蝶野正洋や天山広吉が北野武の『監督ばんざい！』にコメディリリーフとして出演したり、新垣結衣の『恋するマドリ』には引っ越し屋のプロレスラーとして中西学が登場。そんななかでもプロレスラー映画の決定版は、橋本真也の『あゝ一軒家プロレス』。当時のZERO・1メンバーが大挙出演して、一軒家をプロレスをしながらぶっ壊すオープニングだけでも観る価値はある。

そして90年代以降は総合格闘技が世界で勃興し、その隆盛に従って映画界に人材が進出している。日本ではPRIDEの運営会社であるDSEが設立したドリーム・ステージ・ピクチャーズが『殴者』

格闘技

特

を製作。桜庭和志、ヴァンダレイ・シウバ、クイントン・ランペイジ・ジャクソン、ドン・フライといった人気選手が総動員されているが、その後日本人格闘家は映画への進出が進んでいないのが現状だ。

アメリカではUFC人気が爆発する前夜の2003年に、『ブラック・ダイヤモンド』にランディ・クートゥアー、チャック・リデル、ティト・オーティズという、UFCライトヘビー級を代表する3選手が出演し、金網の中でジェット・リーを追いかけ回している。そして奇しくもこの3人は、この後積極的に映画界へ進出して後進への道を開いていくことになる。クートゥアーは『スコーピオンキング2 レッドベルト』に、リデルは『ボビーZ』『Mr.ボディガード』に、オーティズは『クロウ 真・飛翔伝説』『ゾンビストリッパーズ』に出演している。

ちなみにこの『ブラック・ダイヤモンド』にはもう一人、総合格闘家の映画進出を語るうえで欠かせない人物が出演している。それがヘクター・エチェヴァリアだ。エチェヴァリアは売れないスタントマンであったが、本作でUFCとつながりを作り、UFCが大ブームとなるとUFCファイターを出演させることを条件に映画会社から資金を引き出してアクション映画を連発するようになる。『Never Surrender』にはジョルジュ・サンピエール、BJペン、アンデウソン・シウバを、『Hell's Chain』にはランペイジ、ヒース・ヒーリング、フランク・ミアを、『Death Warrior』にはキース・ジャーディン、ラシャド・エバンスを出演させている。しかしどの映画も似たような内容のB級アクションであり、決して我々が想像するようなハリウッド映画ではないので要注意。

また独自路線として、カン・リーは『鉄拳』や『十月圍城』といった映画で華やかなアクションシーンを演じているし、ミルコ・クロコップは『アルティメット・フォース』というクロアチア産の地味なアクション映画に主演している。

そんななかでこれから公開される注目の作品を3本ほど紹介しておこう。一つはランペイジが出演する『特攻野郎AチームTHE MOVIE』。8月に公開される本作は掛け値なしのハリウッド超大作であり、これほどの超大作に主演級で出演したファイターはランペイジが初めてとなる。ランペイジは本作に出演するためにUFCを離脱したこともあり、この映画にかけた情熱も感じてほしい。

そして10月公開予定の『エクスペンダブルズ』。シルベスター・スタローンが監督・出演し、ジェット・リー、ジェイソン・ステイサム、シュワルツェネッガー、ドルフ・ラングレン、ミッキー・ロークといった「オヤジ」アクションスターが勢揃いする大作で、この作品にはクートゥアーだけでなく、アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラも出演しているとの噂だ。

そして最後に『The 5th Execution』。本作には特殊部隊員役として、なんとエメリヤーエンコ・ヒョードルが出演。また内容はわからないが、カンヌ映画祭のフィルムマーケットに出品されたようなので、近々公開されることになるだろう。

このように他のエンタメ業界に比べて、映画界と非常に親和性が高いのが格闘技業界である。今後も多くの格闘家が映画に出演し、試合とは違った魅力を見せてくれることだろう。

（高橋ターヤン）

RHYMESTER

宇多丸の

格闘ウィークエンドシャッフル！

映画評論を展開しているRHYMESTERの宇多丸さんである。今回は「闘う映画」について語っていただいたが、その話題は

聞き手／高橋タクオ　本文構成／ジャン斉藤　撮影／笹井孝祐

最強の映画&アクションスターをオーケンが分析!?

驚異!

スティーブン・セガール

格闘映画 最狂列伝!

ロックミュージシャンにして『月刊秘伝』愛読家

大槻ケンヂ

映画と格闘技の交差点にいる人物といえば、オーケンもその一人。
今回は「闘う映画」において「誰が一番強いのか」を存分に語っていただいた。
なかでもイチ押しはスティーブン・セガールと語るオーケンだが、はたしてその理由とは!?

聞き手/青柳直弥　構成/松下ミワ　写真/タイコウクニヨシ

—今日は大槻さんに、アクション映画のなかで、「いったい誰が一番強いのか」という妄想を存分に広げていただいてお話をお聞かせいただければと思います。

大槻　そうですか。あまり詳しくないけど。

—いやいや。大槻さんは格闘映画というか、アクション映画は、けっこう好きでご覧になったりとかされますか？

大槻　うーん、5、6年前まではよく観てたんだけど、最近は映画自体をあんまり観なくなっちゃったんで……。格闘映画もそうだけど、最近の映画は画質がよすぎてチラチラしちゃうっていうか（苦笑）、目が疲れちゃって。

—確かに目は疲れますね。暗闇の格闘シーンとかホントに疲れますよね。

大槻　そう。何やってるのか全然わかんないんですよ！

—僕も、「俺、動体視力悪いのかな」って思うぐらい、何やってるのか見えないときがあるんですけど、ありますよね？

大槻　あります。

—よかったです、僕だけじゃなくて（笑）。で、今回、ちょっと代表的なアクションスターのデータを参考資料として、それとなくまとめてきたんですけど。

大槻　（資料に目を通しながら）まあ——俺が思うに、最強はスティーブン・セガールじゃないかな～。

—セガールですか。セガールはちなみに、193センチあるんですよね。

大槻　そう。俺、セガールの娘で、女優の藤谷文子さんと、もう昔から飲み仲間で。

—あ、そうなんですか。

大槻　うん。彼女が15歳のときから知り合いで、パパの伝説をいろいろ聞いてるんですけど、想像以上にスゴいんですよ。

—うわー！興味深いですね～！

大槻　たとえば、家にはマイケルっていう「ブルース・リー」カットの太極拳の先生がいて、さらに、お坊さんが12人いるんですって。

—どういう環境なんですか（苦笑）。

大槻　とにかく、それは都市伝説なる

スティーブン・セガールといえば誰もが知っている「沈黙シリーズ」。オーケンの話を読むと、もっと映画を見る目が変わってくるはずだ。発売元／ギャガ　販売元／ジェネオン・ユニバーサル・エンターテイメント

うと」ってことが、みんなホントだって言うんですよ。お父さんはイタリアマフィアに殺されそうになったことがあって、なんかの映画の撮影のときに、撮影のロープが切れて両脚を複雑骨折したことがあるんだけど、それはその映画関係のマフィアの仕業だとか。え～っ!!とか思うんだけど、その藤谷文子自体は、まあ、飲んべえなんだけど、ちゃんとしゃべる人間なので話を作ったりはしない人なんですよ。

—なるほど。

大槻　あと、セガールは、よくボディガードがいるとか言うじゃないですか。実際、家に帰って車を降りるときも、マシンガンを持った護衛がシャッ、シャッと出たこともあるとか。

—家そのものは、アメリカの家？

大槻　アメリカの。ほかにも、[illegible]電話がかかってきて、「文子、オマエの姉妹って知ってるか～？」って聞かれたんですって。で「まあ、知ってるよ～」って言ったら、「いま、家にいるんだけど、何者だ」「……えっ（笑）。何者って——まあ、叶姉妹っていう生き物だよ」って返したらしいですけど。

—バツグンな説明ですね（笑）。

大槻　うん。一番「スゲーな～」と思った話が、過去に新日本プロレスで猪木vsスティーブン・セガールっていうプロジェクトが立ち上がったことがあったそうなんですよ。

—猪木vsセガールですか～！

大槻　[illegible]猪木[illegible]以上のサプライズというかね。で、それも藤谷文子さんから聞いたんだけど、セガールが断ったんですって。僕も、「そりゃあ、さすがにアクション俳優っていっても、猪木と闘うのはないんじゃない？」[illegible]「いや、そうじゃないんだ」と。パパいわく、「[illegible]猪木を殺しちゃいますから[illegible]」

—はあ～

大槻　[illegible]お父さんは「[illegible]に）やるから」って言ってて。でも、どういう試合になったのかなっていう。

—しかも、ルールとかもね。

大槻　（さえぎって）突如大声で、ガチでしょ！

—ガチですか（笑）。プロレスルールではないんですね。

大槻　お父さんのプロレス観も気になりますよね。だから、俺はガチでしかやらないっていうのか、プロレスをガチだと信じてる昭和の[illegible]セガールは大阪の十三で暮らしてたから、普通に[illegible]元気な昭和のプロレスファンだったのかもわかんないし（笑）。でも、もし猪木vsセガールがあるとしたら、けっこうヴォルク・ハン的な小手返しで猪木がポーンと飛んでいく、それを猪木が「こう」来てみろ！オラ！」みたいなの観たかったですよね（笑）。

—観たかったですね！

大槻　それね、セガールはもともと、[illegible]みたいな[illegible]をしていて、経歴が不明なんですよ。そもそも、なぜ[illegible]でデビューしたのかっていうところが謎に包まれていますね。それと彼はオールドアンプのマニアでもあるのね。ギターが超絶にうまくて、家に行くとボンジョヴィからもらったギターとかいろいろあって、銃器ばっかりある部屋もあるんだって。

—日本刀もコレクションしてるっていう話ですよね。

大槻　らしいね。うん、なかなか。まあ他人のお父さまのことを言うのもアレですけど、腕が立つというか（笑）、とにかく[illegible]

過去に猪木vsセガールって計画が立ち上がったそうなんですよ！

ドではたぶん通用しないって言ってました。

大槻　あー、[illegible]。

——それもあるし、「見せ方がわかってないからムリ」だって。でも、倉田さんの話は、幻想持てますね。

大槻　ねえ。ジェット・リーも嫌でしょ[illegible]。

——でも、ジェット・リーも経歴はスゴいんですよね。中国全国武術大会において5回連続で総合優勝を成し遂げるっていう。いまだに破られていない記録を持ってるみたいですし。で、11歳のときにホワイトハウスに招かれて、当時のニクソン大統領に「大きくなったら私のSPになってくれ」って言われたみたいなんですけど。

大槻　ニクソン大統領に「私のSPになって[illegible]」[illegible]言われた男！　それを、あの赤沢通りを[illegible]歩いている倉田保昭さんは！

——道場があの[illegible]ですよね。

大槻　ええ、[illegible]。そのジェット・リーを倉田さんは「彼は実戦は[illegible]」[illegible]

——最高ですね（笑）。

大槻　ほかにも、[illegible]ト・オブ・サンダー」には千葉真一さんも出てて、谷垣健治さんっていうアクション指導の方が、[illegible]いただいて、「[illegible]」とか指導するなかで、「千葉さん、それできますか？」って言っちゃったんですって。そしたら、千葉さんがギロッて見て[illegible]できるよ。闘うか？」って。つまり、「勝負するか？」って言ってきたらしいんですよ。谷垣さんも「いや、勝負はしないですけど」っていう（笑）。

オーケンの理屈からすると、青木真也はリングに上がってはいけない人なのか!?　そういう目で見ると青木幻想は増すばかりだ

——[illegible]

大槻　あとは、やっぱブルース・リーね。ブルース・リーは最初に出たとき、それはのちのちわかるんだけれども、総合格闘技の、そもそもオープン・フィンガー・グローブとかが総合格闘技の原型というものを、あの『燃えよドラゴン』のオープニングシーンでやってるんですよね。しかも、サモ・ハン・キンポーを相手に。あれは驚きましたよね。

——確かに、あの映画の武術トーナメントも、まさにUFCの原型みたいな感じのところありますもんね。

大槻　うん。UFC自体もそもそも、ホリオン・グレイシーがグレイシー柔術を広めたいということで、『地獄の黙示録』とかのシナリオを書いたジョン・ミリアスのお宅なんかで[illegible]やってるうちに、UFCができあがっていったっていうね。だから、最初の[illegible]の企画発起人のなかに、ジョン・ミリアスとかが関わってるらしいんですよ。

——そうなんですか。

大槻　たぶん、初期のUFCではちょっと[illegible]映画的っていうか、おもしろいんですよ。そういうことでいうと、「リーサル・ウェポン」の2か1かで、[illegible]メル・ギブソンと悪いヤツが闘うんだけど、けっこう総合格闘技的な寝技とかを[illegible]。そこにも武術指導でホリオン・グレイシーが[illegible]。それを観て「あ、おもしろい時代が到来したな」と思ってね。[illegible]現実の格闘界とリンクしたりするじゃないですか。

——なるほど。

大槻　そういうのがあったあとで、セガールが登場してフルコンタクト合気道を見せたワケですよ。実戦合気道を！（合気道の話があまりにマニアックなので、割愛）最近の映画だと、[illegible]が出てる『シャーロック・ホームズ』がまたおもしろかったですね。監督がマドンナの元旦那のガイ・リッチーなんですけど、彼が柔術やってるんですよ。それで、主演のロバート・ダウニーJr.が、詠春拳やってるんですよ。

——詠春拳って、ブルース・リーのルーツですよね？

大槻　そうです。だから、あいつ（ロバート・ダウニーJr.）も中2脳なんですよ。で、シャーロック・ホームズの小説の中に[illegible]という謎の格闘技が出てくるんですね。それは、コナン・ドイルが武術、あるいは馬術、あるいはバーリ・トゥードを聞き間違えたんじゃないかっていう、いろんな説があったんですよ。ターザン山本！さんは、バーリ・トゥードを間違えた説を、一時期、『週プロ』に書いてたんですけど、本当はE・W・バートン＝ライトっていう人がいて、その人が日本の武術とか格闘技が好きで、自分の名前を[illegible]「バーティツ」っていう格闘技を作ったんですよ。それをコナン・ドイルが「バリツ」と間違えたらしいっていう。

——へえ〜。

大槻　このバリツとバーティツに関して

そのあとにセガールが登場してフルコンタクト合気道を見せたわけ！

は、資料があんまりないんだけど、おもしろいことにそれはステイック術などを伴なう、西洋のボクシングや東洋の武術をミックスして自分の名前をつけたものであると。これはつまり、ジュンファンクンフー、ブルース・リーの作った截拳道とすごく似てるのね。そんな妙に近接する地点があるんだけども、そういうことにも、たぶんガイ・リッチーとロバート・ダウニー・Jr.は興味を持ったと思うんですよ。で、2人で「これ、やっぱりシャーロック・ホームズを映画にするなら「マーシャルアーツ、いきたいよね～」って話になって、監督、武術やってんでしょー？　俺、詠春拳やってんですよ。これ合わせたら「バリツじゃないすか」っていう。

——ハハハハハ。そういうノリから始まったと。

大槻 あと、格闘でいうと、昨年公開された「ハイキック・ガール！」っていう日本の映画があるんですが、その監督が以前「黒帯 KURO-OBI」っていう映画も撮ってて、それが伝統空手を啓蒙するための映画なんですよ。僕もそっちはまだ観てないんだけど、「ハイキック・ガール！」は伝統空手の型がいかに実戦的か、ということを伝えたい映画なの。いったい誰に向けての映画なんだっていう。

——狭いですよね。

大槻 狭いんですよ。だから「ドラゴンへの道」なんていうのは截拳道のプロパガンダのための映画っていうのがあったんだけど、「ハイキック・ガール」は伝統空手のプロパガンダ映画っていう。それで、僕、実際に空手をやってる主演の女の子・武田梨奈ちゃんと対談をしたんですよ。監督さんがね、すごく変わった人で、対談の場に来てたんですけど、（低い声で）あー、大槻さん、お会いしたかった。じゃあます、[illegible]主演女優さんの殺陣を見てもらいましょう」って。

——いきなり。

大槻 うん。テーブルがある狭いところでしかも、顔面ありのフルコンタクトアクションで。女のコは、肩口をバシンバシン本気で蹴られて、最終的にはキックで監督の頭をバーンと蹴り飛ばして終わり。っていうのを30秒ぐらい演じてくれて。で、監督が「どうですか？」って、いや、どうもこうもっていう（笑）。こんな狭いところで、まずテーブルどけましょうよ、みたいな。

——スゴいなー（笑）。

大槻 監督いわく、トニー・ジャーの映画「マッハ！」とか、ジージャー（ヤーニン・ウィサミタナン）ってコの「チョコレート・ファイター」とかで顔面も当てちゃうっていうのが出てきたんで、日本でもこれをやらないといけないって思ったらしいですけど。

——なるほど。ほかにも、まだ名前の出ていない実戦系の人でいえば、チャック・ノリス、ドルフ・ラングレン、ジャン＝クロード・ヴァン・ダムなどがいますけど——

大槻 そうですよね。彼らは日本でいえばVシネみたいな、タイトルも内容もごっちゃになっちゃうような作品にもいっぱい出てて、あんまりリスペクトされてない部分がありますよね。ドルフ・ラングレンなんかも、じつは実力はかなりのもんでしょ。

——極真二段ですからね。

大槻 リングスに上がればよかったのになー。ウィリー（・ウィリアムス）とバーターで。

——そうですよね（笑）。いろいろ名前が挙がりましたが、やっぱり大槻さんのイチ押しはセガールになりますかね？

大槻 ええ、やっぱり「オレは猪木を殺す」とまで言った男ですからね。上田馬之助か！　受けをしないですし。

——セガールで決まりですかね。そうなると。

大槻 あと、ブルース・リーの截拳道も目突きと金的が中心の格闘技ですからね、ものの本によれば。

——それこそ、究極のノールールですよね。

大槻 だから、いま、総合もUFCもなんだ言ってるけど、それに出てこれない格闘家、っていうのがいっぱいいるわけですよ。伝統空手を啓蒙する「ハイキック・ガール！」なんかもそういう空手の危険な部分、競技ではない部分のコワさを伝えようとしてたりとかね。アクション映画のおもしろい部分は、そういうのも着目点なんじゃないか。MMAだ、UFCだなんだと言ってるけど、そこにすら上がることのできない格闘家たちが唯一観れるのは、そういうスクリーンなんですよね。じつはね。

——倉田さんみたいに本気でやっちゃう人もいるぐらいですしね。

大槻 [illegible]相手にね（笑）。

——セガールなんかも、UFCに出られないタイプの格闘家なんでしょうね。

大槻 そうですよね。まあ、それを言うと、青木真也選手の腕折りなんていうのはそれに近いものがありますかね。僕は、あのシーンを録画で正月に観ましたけど、あれを観たときに何かこう——まさに「セガロジー」っていうかね。

——セガロジーですか（笑）。

大槻 ええ、感じましたよね。青木真也にスティーブン・セガールを見たっていうね。

——アハハハ。では、最終的にはセガール最強ということで締めさせていただきます！

（10年7月7日　都内・某所にて収録）

青木真也の腕折りなんていうのはまさに「セガロジー」っていうかね

おおつき・けんぢ■1966年2月6日、東京都出身。ロックミュージシャンにして作家、評論家としても活躍。格闘技でいうと『月刊秘伝』をこよなく愛する人物であり、合気道などの話題になるとその知識はあふれんばかり。最強スティーブン・セガールの娘・藤谷文子とは古くからの友人である。

スティーブン・セガール最強列伝！

BRUCE LEE

俺たちのドラゴン❶

ブルース・リーは強かったのか？

© 2009 WADDELL MEDIA All Rights Reserved

ブルース・リーの映画を観て数多くの少年が格闘技を志し、そして少なくない少年がリーの強さを信じ、自らリーたらんとして苦しい練習を耐え抜いて、本物の格闘家となった。しかし、リーを通過していない多くの格闘家や格闘技ファンは、その強さに疑問を感じているのではないだろうか。本稿では「ブルース・リーは本当に強かったのか？」をテーマに、いまに伝わるさまざまなエピソードを元に検証してみたい。

もともとリーはアメリカ生まれで、幼い頃から子役俳優として活躍し、名門・ラサール校に進学したエリート。しかし、ろくに勉強をしないまま、他校の生徒と喧嘩三昧の日々を送っていた。

ある日、格闘技経験のある不良との喧嘩で負けたリーは、「喧嘩に強くなりたい！」という不良にありがちな動機で伝統武術の詠春拳道場の門を叩き、伝説的な達人イップ・マン師から、詠春拳の手ほどきを受けるようになる。

この頃、香港の高校ボクシング選手権に出場。当時の香港はイギリスの植民地であったこともあり、多くの白人生徒も出場する大会を全試合KO勝利で優勝している。この頃からリーの喧嘩はさらに激しくなり、他校の不良だけでなくヤクザ相手の喧嘩までするようになった。

そんななかで対立する高校の番長と租界のアパートで対決したリーは、相手を半殺しの目に遭わせて警察沙汰になってしまう。荒れ狂うリーの将来を心配した両親は、リーをアメリカに送り出すことを決意。リーは高校を中退して100ドルだけをポケットに入れてアメリカに渡った。新聞配達をしながら高卒の資格を得てワシントン州立大学哲学科に進学したリーは、大学の仲間を集めて武術道場「振藩國術館」を開設（リーの本名は李振藩）。

ここで詠春拳の実演中に鈴木という日本人空手家の挑戦を受けて、シアトルのYMCAで対決するも、わずか11秒でリーがKO勝利をあげている（この出来事から「ドラゴン怒りの鉄拳」の敵が鈴木と命名された）。

道場破りを次々と退けたリーの振藩國術館は、中国人だけでなく白人、黒人、日本人と、人種を問わず門戸を開いた珍しい中国武術道場であった。しかし、中国武術を門外不出のものとする中華街の長老会はリーの道場方針を良しとせず、リーに対する刺客を差し向ける。それが白鶴拳の使い手ウォン・ジャックマンだったが、リーはわずか30秒で秒殺KOしてしまった。だが、足を使って距離をとるウォンを仕留めるのに30秒もかかったことに納得できないリーは、自身の武術を根本から見直していくことになる。

こうして詠春拳に空手、ボクシング、柔道、サバットというさまざまな格闘技をミックスした武術・截拳道（ジークンドー）を創始したリーは、各地で開催されていた空手トーナメントでデモンストレーションを行なうようになる。空手大会会場では、多くの腕自慢が小柄なリーへの挑戦を表明。その挑戦者を全員秒殺したため、逆に截拳道の有用性と評判を高めることになっていく。

その後、映画界に再進出したリーだったが、当時の香港映画界はエキストラやスタントマンの仕出しをヤクザ組織が担当していた。『燃えよドラゴン』の撮影中にはそうしたエキストラが次々とリーに喧嘩を売ってきたが、そのなかで最も腕の立つ男の挑戦を受けて一瞬にしてKOしてしまう。そのうえで相手を病院に送り届けて治療費の面倒までみたことから、翌日からエキストラたちは全員リーの舎弟になってしまった。

結局リーの記録に残る実戦は、高校時代のボクシング大会だけである。それはリーの創始した截拳道という武術が、特定の格闘技によらない総合格闘技であったため、特定の格闘技大会に出場する意義を見出さなかったにすぎない。リーと関わった多くの武術家・格闘家がリーの実力を絶賛しており、当時のアメリカのトップ格闘家のほとんどがリーのプライベートレッスンを受けている。リーは当時から傑出した理論家であり、実践者であったのだ。

（高橋ターヤン）

BRUCE LEE 俺たちのドラゴン❷

ブルース・リー語録

『燃えよドラゴン』が日本に上陸した1973年、これまで観たこともないようなブルース・リーの壮絶なアクションに日本の観客はド肝を抜かれた。寡黙なリーが襲いくる敵をバッタバッタとなぎ倒す中盤以降は、まさに映画によって得られるカタルシスのすべてがここに詰まっているかのような、特大のインパクトを観客に与えてきた。

しかし、じつは『燃えドラ』がエポックメイキングであったのは、物語のアヴァンタイトルで少林寺の老僧との会話中挟まれる少年との対話や、劇中のリーのセリフなどそこかしこに、アジア的な価値観や哲学的な考え方をベースにしたセリフが見いだせた点であろう。当時、リー映画に熱狂した多くの少年たちは、長ずるにしたがってこうしたリーの哲学に深い感銘を受けて、30年後のいまでも場末の居酒屋で後輩に開陳して微妙な顔をされることになる。

またリーは映画のなかだけでなく、数々のインタビューや著書で自身の哲学を語っており、その哲学は世界中の人間の進むべき道を照らし続けてきた。本稿では膨大なリー語録のなかから、印象的な言葉を抜き出していってみたい。

リーの創始した截拳道は、さまざまな格闘技のエッセンスを吸収してミックスした、現在のMMAの雛型のようなものである。そんな哲学を語る名言中の名言がこちら。

「心を空にし、水のようになりなさい。水はカップに入れるとカップのかたちになる。ボトルに入れるとボトルのかたちになる。ティーポットに入れるとティーポットのかたちになる。水になりなさい」

これは老子の「上善水如」から影響を受けたと思われるセリフで、「水」という言葉はリーを語るうえで欠かせないキーワードとなっている。

また闘いに関しては『燃えドラ』でハンの島への移動中、空手家に「おまえの流派は?」と聞かれての答えが

「闘わずして闘う流派だ」

こうしてその空手家と「よーし、じゃあ、あの小島で勝負だ。小舟で移動するぞ」と勢い込んで一人小舟に乗りこんだところで小舟をリリース。闘わずして相手を屈辱的な目に遭わせるのだったが、こうした闘わずして勝つ思想は孫子など古くから伝わる兵法の影響であろう。

また実戦志向であった截拳道は、目潰しや金的といった技も積極的に取り入れており(『死亡遊戯』でのハキム戦でも両方やっていた)、いかに効率的に敵を倒すかを深く研究してきた。そんなリーがたどり着いた結論が

「敵を倒したいんだったら拳銃で一発撃てばいい」

とのこと。身も蓋もない話だが、敵を倒すためのあらゆることを考えていたリーだけに銃のような飛び道具ですら截拳道の体系に組み込みそうである。

逆に勝負に関するリーのスタンスを端的に表現した言葉を二つほど。

「皆が皆、勝つ方法を学びたがるが、負ける方法を学ぼうとしない。負けを受け入れること、すなわち死を学ぶことは、死から解放されるということだ」

「敵に打ち負かされることは恥ではない。重要なのは負けそうなときに、自分はなぜやられているのかを自問することだ。もしこれを考えられるのではあれば、その者にはまだ望みがある」

勝利にこだわるリーがこのような発言をしていることは驚くに値するだろう。勝つことを至上におきながらも、常に死と向き合っていたリーならではの言葉と言える。

そしてリーの語録として最も有名なのは、少林寺の少年に蹴りを指導するなかで発したこの言葉であろう。

「考えるな、感じるんだ!」

そしてまさにリーの映画は、考える前にその凄さを感じた観客によって世界的な大ブームとなり、いまもなおフォロワーを増やし続ける偉大な存在となっているのだ。

しかし世界で最も多くの人に真似され、愛されているリーのセリフといえばこれにつきるだろう。

「アチャーッ!」

文字にすると某金権編集長みたいだが……。

(高橋ターヤン)

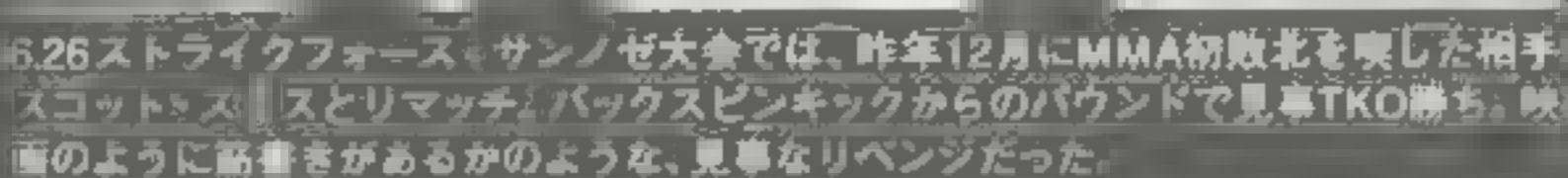
格闘家にして映画スター
元ストライクフォース王者は
現代のブルース・リーだ！

「アジアの人間の一人として
リーの名を汚さぬようにしたい」

“生けるブルース・リー”

カン・リー
CUNG LE

衝撃のヒョードル敗戦があった6.26ストライクフォース[illegible]もう一人大きなインパクトを残した男がいる。
それがカン・リーだ。バックスピンキックやカカ[illegible]ぶりは、まさにリアルなカンフースター。
“生けるブルース・リー”の異名を持ち、[illegible]顔も持つカン・リーを直撃した。

聞き手／石井史彦 [illegible]

○○○○・リー列伝

日本人レスラーが海外武者修行で一定のテリトリーに長期参戦する場合、たいていは「ミステリアスな東洋人」キャラクターが与えられることになる。そのなかでも圧倒的な人気を誇るのが、やっぱりブルース・リー。というわけで海外マットでは、定期的に「リーの親戚の○○・リー」「リーの弟子の××・リー」的な人々が現われていた。

そのなかでも代表格といえば、やっぱり佐山聡がイギリスマットで名乗っていた「サミー・リー」だろう。まだ佐山が初代タイガーマスクに変身する以前、当時やっぱりイギリスで大人気だったブルース・リーの「従弟」という設定に扮したサミー・リーは、現地マット界で大ブームを巻き起こした。

佐山はのちのインタビューで、「初代タイガーマスクは、サミー・リーのファイトに虎の覆面を乗っけただけ」と語っている。日本中を熱狂の渦に巻き込んだあの四次元ファイトを、「ブルース・リーの従弟」がやってのけるのだから人気が出ないわけがない。

サミー・リーのファイトは、なんといまでも当時の中継を動画サイトで観ることができる。いい時代になったものだ。確認してもらえれば一目瞭然だが、サミー・リーは黄色に黒ラインのトラックスーツに全身を包み、頭には漢字が書かれたハチマキ、片手には竹刀。テロップは「SAMMY LEE（TOKYO）」と表示される。香港ですらなく、竹刀も関係ないと思うのだが、そこはご愛敬。最初はヒールだったようで、試合前には相手を竹刀でピシャリ。

試合が始まるとトラックスーツは脱いでオーソドックスな黒のショートタイツと黒のレスリングシューズなのだが（拳に着けた白いグローブだけはそれっぽい）、おなじみのステップワークから繰り出すバックスピンキックやサマーソルトキックは、まさにタイガーの原型。場内からは大歓声だ。

当時、サミー・リーはマーク・ロコ（のちのブラック・タイガー）と抗争を繰り広げ、ダイナマイト・キッドともタッグを結成したことがあったという。ちなみに佐山は97年10月にみちのくプロレス・両国大会でメキシコ遠征時の「サトル・サヤマ」名義で試合をしたことがあるが、「サミー・リー」は国内で名乗っていない。ただしその後に旗揚げしたリアルジャパン・プロレスには「サミー・リーJr」というトラックスーツ姿のマスクマンが参戦している。

その後、佐山は急に帰国を命じられてタイガーマスクに変身するわけだが、イギリスでその穴を埋める役目をはたしたのが、前田日明だった。82年に英マットに参戦した前田は、「サミー・リーの弟」となり、「クイックキック・リー」のリングネームで闘った。ブルース・リーの従弟であるサミー・リーの弟なのだから、やっぱり「ブルース・リーの従弟」でよさそうなもんだが、もはや重要なのは「サミー・リーとのつながり」のほうなのだ。

なんとクイックキック・リーの試合動画もネットで観られるのだが、「東洋風」を感じさせるのは龍の刺繍が入ったショートガウンを着ての入場ぐらいで、試合スタイルもかなりオーソドックスだ。まあ、当時の観客はキックさえ使っていれば「東洋」を感じてくれたのかもしれないが。

余談になるが、04年頃から全日本キックなどのリングに「ハイパーキック・リー」という選手が登場している。北海道育ちで韓国のジムから参戦した逆輸入ファイターで、リングネームの由来は本人が大の前田ファンだったから。「HERO'S」韓国大会で前田が韓国を訪れたとき、ハイパー氏は関係者から前田に「彼はハイパーキック・リーと名乗ってるんですよ」と紹介され、冷や汗をかいたという。

プロレス界のリーに戻ろう。クイックキック・リーから10年以上を経て、94～95年頃に欧州マットに再びリーが現われた。それが「ジョージ・リー」。正体は小島聡だ。

またその少し前、93年前半にはメキシコマットで「キング・リー」という東洋人マスクマンが出現している。こちらの中身は金本浩二。前年に3代目タイガーマスクとして4試合を行なった金本が再び帰国してタイガーとして本格デビューするまでの約半年間、修行期間＆試運転ということで闘っていたもので、マスクもどことなくタイガー風。試合スタイルもカンフーというよりは佐山タイガー的なものだった。

こうして見ると、マット界に現われたリーたちは確かに「ブルース・リーの○○」的な設定を与えられてはいるのだが、プロモーターたちが求めたのはブルース・リーよりもむしろ、サミー・リーの再現だったようだ。

それだけ、サミー・リーこと佐山のインパクトが絶大だったという証明だろう。日本で次から次に「タイガーマスク」が現われるのとまったく同じ構図だ。

最後にもう一人、「リー」ではないがブルース・リーつながりの選手を取り上げておく。

いまも日本とメキシコを股にかけて活躍するウルティモ・ドラゴンだ。「究極龍」と称されるウルティモだが、もともとは「最後の龍」の意味で、「ブルース・リーの最後の弟子」という設定。というわけで、ウルティモは現在のマット界に存在する唯一の「ブルース・リーつながり」ということになる。

ただ、これだけ時を超えて根強い人気を誇るリーのことだから、またどこかで新たな「末裔」が登場することになるのだろう。

次はどこで、誰が新たな「リー」になるのか!?

（高崎計三）

大仁田厚のライバルはブルース・リーだった!?

韓国のブルース・リー
リー・ガクスー(李珏秀)
LEE GAK SOO

キミはリー・ガクスーを知ってるか!? 格闘アクション映画さながらのファイトスタイル、
ブルース・リーばりの怪鳥音を発して初期FMWをおおいに盛り上げた立役者、それがリーだ!
今回は韓国にいるリーを電話でキャッチ、"韓国のブルース・リー"の声に耳を傾けろ! アチョ〜!!

聞き手 大川義之　構成 鈴木佑　試合写真 平工幸雄

浅草キッドの
玉ちゃんと語る!

黄金の70's-80's
「俺たちの映画」変態座談会

本誌前号では『あしたのジョー』がお題になるなど、[illegible]に格闘技から遠ざかりはじめ、なんでもあり化になってきている変態座談会。映画特集の今回は、もちろん変態たちが子どもの頃から観てきた"男の映画"をたっぷりと語りまくる! 70年代から80年代の映画には、プロレス同様、男のロマンが詰まっている作品がたくさんあったのだ。

ガンツ　さて、最近は格闘技から離れがちの変態座談会を始めましょうか。

玉袋　この前は「あしたのジョー変態座談会」だもんな。あれの評判はどうだったんだよ？

ガンツ　読者ハガキの「おもしろかった記事」で1位でした（笑）。

椎名　1位なんだ。なんでもいいんじゃん（笑）。

玉袋　読者も変態だねえ。表紙もよかったもんな。

椎名　やっぱりジョーは男の子の憧れだもんね。

ガンツ　で、今回は格闘技からさらに離れて「俺たちの映画変態座談会」を行ないます（笑）。

玉袋　おいおい冗談じゃねえぞ。そんなの話し始めたら止まんねえよ。

椎名　『あしたのジョー』は一作品だけど、映画は無限にあるもんね。

玉袋　今日はとっ散らかるぞ〜。

ガンツ　まあ、なんとか頑張って構成します（笑）。

玉袋　まず俺が言いてえのはよ、このあいだグアムに行ってきてさ。で、俺がやってる『スナック玉ちゃん』っていうイベントの企画で、「タマカルチョ」っていうお客さんに賭けをしてもらうコーナーがあるんだよ。

ガンツ　いま話題の賭博ですね（笑）。

玉袋　そう、琴光喜も張れよ！っていうね。それで「タマカルチョ」は「玉ちゃんはグアムで何人の女性をナンパできるでしょうか？」っていうお題で、当たった人には景品をあげるってヤツだったんだけどよ、ナンパどころじゃなかったんだよ。

椎名　何やってたんですか？

玉袋　ビーチで寝そべりながら『トラック野郎風雲録』って本を読み始めたら、止まらなくなっちゃったんだよ！

椎名　グアムのビーチで『トラック野郎』！

玉袋　あれ読んでてしびれまくった。

ガンツ　なぜそれをグアムで読んでるんですか（笑）。

椎名　『トラック野郎』って俺らが子どもの頃、流行ってましたもんね。

玉袋　流行ってたよ。

椎名　当時スーパーカーブームがあって、スーパーカーカードっていうのがあったんだけど、一緒に「トラック野郎カード」もあって、俺買ってたもんね。派手でカッコいいから。

ガンツ　小学生が『トラック野郎』のカードを買ってるんですか？

玉袋　そうだよ！

椎名　当たるとでっかいトラック野郎カードがもらえるんだよね。でも、『トラック野郎』って、子ども心に下品でしたよね。

玉袋　下品。でも、あえてそれをやってるんだよ。エロ、ゲロ、野糞な。

椎名　『男はつらいよ』は意識してるのかな？　あっちは正統だから、あっちがやらないことをやろう、とか。

玉袋　いや、本で読むとそうでもねえらしいけどな。それでシリーズの

玉袋筋太郎
1967年6月22日、東京都出身の42歳。子どもの頃から蔵前に通った変態プロレスエリート。そして子どもの頃から新宿ミラノ座に通った変態映画エリートでもある。『トラック野郎』をこよなく愛す

椎名基樹
1968年4月11日、静岡県出身の42歳。本誌の好評長期連載コラム『サムライ　味』でもおなじみ。玉ちゃん同様、子どもの頃からプロレス同様に映画をさんざん観

[illegible]江ガンツ
1973年9月14日、栃木県出身の36歳。変態座談会主宰者。ちっちゃい頃から変態的プロレス&格闘技ファンとして鳴らし、UWF研究家を自称。武田鉄矢の『刑事物語』シリーズをこよなく愛す

『トラック野郎』のあえて下品なことをやるところにしびれるんだよ

前半は「ト●コ風呂」がたくさん出てくるんだよ。

椎名　ホントに「ト●コ、ト●コ」言ってましたもんね（笑）。

玉袋　桃さん（星桃次郎＝菅原文太）がト●コ風呂に住んでるんだからしようがねえんだよ。でも、後半はいろいろ規制が厳しくなって、鈴木則文さんが「俺はトルコ風呂を出してえんだけど出せなくなった」とだって。時代だよう。

ガンツ　山城新伍さんがフロントに「ト●コ風呂」って書いてあるトラックに乗ってましたもんね（笑）。

玉袋　乗ってるよ！　だから映画を話題にするなら、まずは『トラック野郎』だろって思ったんだよ。

椎名　トラックの運転席のうしろの狭い寝るスペースに憧れましたよ。狭いところに寝たい願望ってわかる？（笑）

ガンツ　ドラえもんみたいに押し入れで寝たい、みたいな（笑）。

椎名　そうなんだよ！

玉袋　椎名よぉ、もしそれを成就してえんだったら、カプセルホテル『グリーンプラザ新宿』がおすすめだよ。

椎名　玉ちゃんはいまだにカプセルホテル行くんですか？

玉袋　行くよ！　俺にとって最高のレジャーだから。風呂入って、サウナ入って、ビールね。それにあそこはバイス置いてあるしね。

ガンツ　置いてあるんですか！　今度また行かなきゃ（笑）。

椎名　それはカプセルで寝て帰ってくるんですか？

玉袋　そうだよ。

椎名　凄いタレント（笑）。

玉袋　わざわざ行くんだよ。家の風呂に入ったあとなのに、またサウナ入っちゃうんだから。

椎名　バカですね（笑）。

玉袋　でも、その「バカ」っていうのが俺たちの映画だろ。あのトラックのド派手なデコレーションはプロレスラーの派手なガウンと一緒なんだよ！　同年代の男はこの感覚わかってくれるんだよ。

ガンツ　〝変態世代〟ならわかる、と。

玉袋　そう。『スナック玉ちゃん』の最後はいつもサイン会やってるんだけどよ、そしたら同年代の人が来て「これ受け取ってください」「玉ちゃんならわかってくれる」って、昔の映画雑誌『ロードショー』の付録セットをくれたんだよ！

椎名　付録がプレゼント（笑）。

玉袋　これが俺の好きな映画ばっかりなんだよ。『マッドマックス』、『インディ・ジョーンズ』、それからブルース・リーやジャッキー・チェンの映画ね。これをくれたんだよ。俺は『ニュー・シネマ・パラダイス』のエンディングばりに感動したよ。

ガンツ　いいですねえ。我々と同じ30代後半以降の人たちって、少年時代にプロレスと一緒に映画の影響を受け

た人が多いんじゃないですかね？

玉袋　映画の影響は大きいよ！　俺は『映画秘宝』と『kamipro』で合併号出してほしいくらいだから。

椎名　でも、いま思うと『マッドマックス』って、あれをなんでカッコいいって思ったのか不思議ですよ。モヒカンでフットボールのプロテクターみたいなのして、ロード・ウォリアーズかって（笑）。

玉袋　でも、『マッドマックス』がなかったら、ロード・ウォリアーズも生まれなかったからな。

ガンツ　新日本にマッドマックスってそのままの名前で、ニセウォリアーズみたいなタッグチームが一瞬来ましたよね？（笑）。

椎名　いたね〜。

からプレゼントされた「ロードショー」の付録小冊子の一部。当時の映画ファンはプロレスファン同様、こういった雑誌も愛していたのだ。

ガンツ　全然ダメでしたけどね。しかも、よりによってUWFが新日本に戻ってきた新春シリーズに来日しちゃって（笑）。

玉袋　でも、似ちゃうのはしょうがねえんだよ。ロード・ウォリアーズ自体がマッドマックスの影響を受けてるんだから。

ガンツ　それが『北斗の拳』にもつながるんでしょうね。

玉袋　そうだよ。俺、最初に『北斗の拳』見たとき「マッドマックスじゃねえかよ！」って、ファンとしては納得いかねえ思いがあったからな。

ガンツ　そんな皆さんの映画との出会いはなんですか？

椎名　そりゃ『東映まんがまつり』でしょう。チョ〜、楽しみにしてたもん。校門の前で割引券配ってるんだよ。

ガンツ　そうだ。なぜか校門の前で配ってるんですよね（笑）。

玉袋　俺はね『東映まんがまつり』観てるヤツとは友だちになれねえと思ってた（笑）。子どもかよ！ってな。親が連れていかねえもん、あんなとこ。

椎名　それは東京だからですよ。静岡はみんな『まんがまつり』だもん。

玉袋　俺が親と観に行ったのは、幼稚園の頃、（チャールズ・）ブロンソンの映画に連れてかれたぐらいだもん。しかもオールナイト！

椎名　幼稚園児がブロンソンでオールナイト（笑）。

玉袋　全然覚えてねえけどな。あとは『ジョーズ』を親父に連れてってもらったかな。

ガンツ　ボクは小学1年生になったばかりのとき、両親に『スター・ウォーズ』に連れていかれたんですけど、親は窓口で「大人2枚、あと幼児」って言って、ボクのぶんはタダにしようとしたんですけど横で僕が「幼児じゃない！　1年生だー」って騒いで、子ども料金取られたことがありましたね（笑）。

椎名　タダだったのに（笑）。

玉袋　でも、「スター・ウォーズ」なんていったら、こっちは大変よ。

椎名　超大変ですよね。俺、なんちゅう出来のいいウルトラマンなんだって思ったもん。

玉袋　『スター・ウォーズ』公開なんていったらお祭りだもん。映画館だけじゃねえんだ、俺たち。伊勢丹で公開前から『スター・ウォーズ』売り場なんか作っちゃってよ、Tシャツとか売ってるんだよ。その時点でもう買ってるからね。

椎名　やっぱり東京は地方と情報量が全然違うな。

玉袋　でさ、今度NHKハイビジョンで『スター・ウォーズ』全作一挙放送するんだよ。

椎名　そうなんだよね。しかも『エピソード1』から。

玉袋　俺はそれに怒ってる！　番宣のコメンテーターとして出してもらったけど、これだけは言わせてもらった。「4、5、6、1、2、3」で出さないでどうすんだ！って。

ガンツ　公開順じゃないとダメだろう、と

玉袋　もう決まっちゃってるから変えられねえらしいんだけど、そこは言っちゃったね。「ヤだ！」って。

ガンツ　ヤだ（笑）。

玉袋　なんでぬいぐるみのイウォークで終わっちゃうんだって！　あそこで終わっちゃつまんねえよ。Ⅳから始まって、最後Ⅲのラストにひっくり返ってタトゥィーンで終わるのが一番なんだよ！

椎名　でも、内容もそうだけど『スター・ウォーズ』の魅力って「カッケー！」でしょ？

玉袋　最高最高。だから購買意欲がそそられたんだよ。

椎名　ホントに『スター・ウォーズ』は凄い衝撃だった。いままでの特撮ものは全然違うって。

ガンツ　あの衝撃をいまに置き換えると、いま『アバター』を観た感じですかね

玉袋　あんな感じかな。それ以上かもしれねえな、なんせ、いままでになかった映画だからな。それでアメリカの公開当日、ジョージ・ルーカスがハワイに逃げちゃったのがいいよ。

椎名　逃げちゃったんですか？

玉袋　どんな反響か、ホントに客が入るのかが怖くて逃げちゃったんだって。で、ロサンゼルスのチャイニーズ・シアターで大行列ができているのをルーカスはテレビのニュースで知るんだよ。

椎名　へえ、そうなんだ。

玉袋　あとはよ、俺が何がバカだったって、ジャッキー・チェンの『キャノンボール』をガチだと思ってたから。

椎名　プロレスだけじゃなく、映画もガチ（笑）。

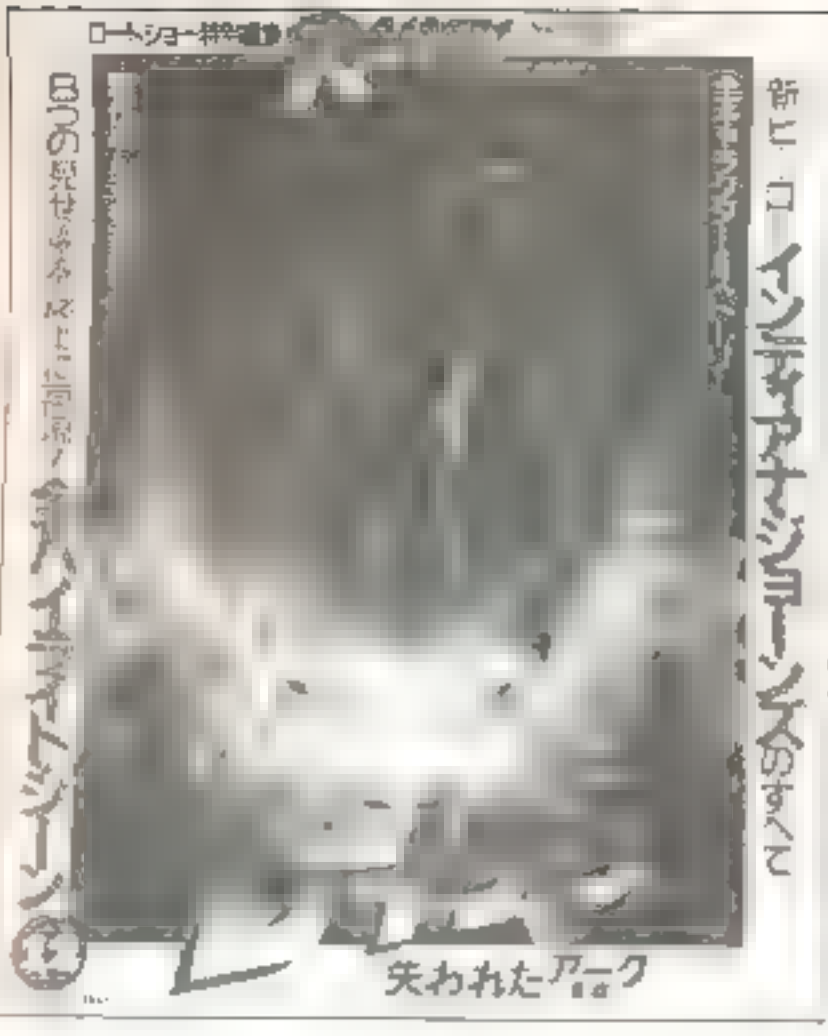
玉袋　「ジャッキーが負けるわけねえ！」とか言ってんの。それで気合い入っちゃって、公開初日に徹夜で並んじゃってね。それで観てみたら、なんてことないバラエティ映画だったからね。

ガンツ　それ何歳ぐらいの話ですか？

玉袋　中1。

ガンツ　けっこう大きくなってますね（笑）。

玉袋　中1の冬ぐらいで、それなんだもん。でも、ジャッキーはその前か

映画史に燦然と輝き、SF映画を変えた「スターウォーズ」。とくに第1作のインパクトは強烈で、その衝撃は公開から30年以上経ったいまも続き、毎年新たなファンを生み出し続けている

ら好きだったからな。

椎名 やっぱりジャッキーといえば『酔拳』でしょう。

玉袋 最高だよ。あの『酔拳』観たときの衝撃ないね。

椎名 俺、1年ぐらい前にもまた観たんだけど、チョ〜〜〜おもしろい！ あれはなんですかね？

玉袋 ちょうど俺たち成長期で、強さとか筋肉に憧れがあったからな。ブルース・リーのトレーニングまねしたヤツとかもいたんだよ。でも、金持ちの歯医者の息子の太田くんがブルース・リーマニアで「ジャッキーは違う」とか言ってるんだよ。当時、ロードショーに西本商事っていう通販のページがあったんだよ。それもビデオテープが一本2万5000円したんだけど。

ガンツ たけえ（笑）。

玉袋 でも、太田は西本商事で全部買ってたからね。これ「西本商事」っていう言葉が出るのは『週プロ』の「アントニオ猪木ブロンズ像」の広告と同じ！

ガンツ だいたい私書箱で局留めなんですよね（笑）。

玉袋 局留めだよ。そいつはブルース・リーマニアだから、同じ髪型にして、ブルース・リーみたいな歩き方してるんだよ。俺はいま酔拳みたいだけどな。

ガンツ 飲みすぎです（笑）。

玉袋 あと昔は映画の宣伝もいいんだよな。ワクワクさせてくれたよ。

椎名 『サスペリア』の「決して、一人では見ないでください」とかですよね（笑）。

玉袋 こええんだよ。

椎名 『八ツ墓村』とかも怖かったですよね。

玉袋 『アリゲーター』っていうワニが暴れる映画があってよ「誰でも必ず13回は席を立ち上がります」って宣伝文句なんだよ。そんなの公開されたら行っちゃうだろ？ で、友だちと行って「何回扉が開くか数えよう」とか言ってたのに、誰も席立たねえの。

椎名 こけおどし（笑）。

玉袋 ワニが一匹出るだけなんだもん。でも煽りといえば、当時の俺たちを一番煽ってた梶原一騎が、マンガだけでは飽き足らず映画にも入ってきて『地上最強のカラテ』を作るじゃない。あれはやばいぞ！

ガンツ あれ玉ちゃんはリアルタイムなんですか？

玉袋 あれリアルタイム！ 『四角いジャングル』もリアルタイム。

ガンツ いいですねえ！

玉袋 『四角いジャングル』も行ったぞお。土曜日の学校帰りに、一番で行ったよ。ホントに格闘技世界一が決まると思ってたからね。そしたら単なる記録映画なんだよな。でも、ポスターとかカッコよくて行っちゃうんだよ。

ガンツ アントニオ猪木、ウィリー・ウィリアムス、藤原敏男とか、錚々たるメンツですよね。

結局、俺たちはマンガは『ジョー』映画は『ロッキー』でいいんだよな

ジャッキー・チェン出世作の呼び声も高い、香港映画の傑作。正式な邦題は『ドランクモンキー酔拳』。当時の子どもたちは映画を観たあと、みんな酔拳のマネをしたのだ

玉袋 あとはアンドレ・ザ・ジャイアント、ベニー・ユキーデだよ。

椎名 マット界と映画界にケレン味があったよね。

玉袋 あのポスター。プロレスと格闘技のオールスターが写ってるもんだから、「格闘技世界一」を決めてるわけじゃないけど、行っちゃうんだよな。しかも、全部テレビで観た試合だからね。でも、あれを映画館の大画面で観るのがいいんだよな。

椎名 へんなナレーションもいいですよね（笑）。

玉袋 でも、梶原映画で一番はやっぱり『地上最強のカラテPART2』だよな。ウィリーVS熊だよ。

ガンツ あれはどんな思いで観てたんですか？

玉袋 もちろん「ウィリーが勝った！」「すげえ！」だよ。

ガンツ そこもガチですか（笑）。

玉袋 ちょっと違うな、とは思ってはいるんだけどね。画面が揺れててよく見えないんだよ。

ガンツ 怪しいですね（笑）。

玉袋 でも、行っちゃうんだよ！

椎名 ハンディカメラの映画といえば『食人族』は行きました？

玉袋 もちろん行ったよ！

椎名 あれ「騙された〜〜〜！」ってなりませんでした？（笑）。

玉袋 あの映画観たあと、友だちと焼肉食べ放題に行ったくらいだよ！ こっちはヤコペッティから見てきて『グレートハンティング』に行ってるからさ。

ガンツ ライオンに襲われるねつ造映像の（笑）。

椎名 『食人族』は女の人がお尻から串刺しにされてるポスターが凄いんだよね。

玉袋 完全に見世物小屋の手口だよ。

椎名 あのポスター見て「これは行かなきゃ」と思って行ったんだけど、一番怖いのは亀の甲羅を剥ぐシーン

75〜79年に東映が制作・公開したシリーズ映画（全10作）。ド派手なデコトラに乗る長距離トラック運転手、一番星桃次郎（菅原文太）とヤモメのジョナサン（愛川欽也）が巻き起こす、下品で猥雑ながら、画面からエネルギーがあふれ出す喜活劇。主題歌の『一番星ブルース』（唄、菅原文太、愛川欽也）も名曲！

『トラック野郎』シリーズの監督。一部でカルト人気を誇る『聖獣学園』や、菊池桃子デビュー作にしてエロコメの傑作『パンツの穴』の監督でもある。今年5月には回顧録兼エッセイ集『トラック野郎風雲録』を刊行。

クリーンプラザ新宿

新宿歌舞伎町にあるカプセルホテル＆サウナ。都内最大級にして最高級の設備を誇り、玉ちゃんや堀江ガンツもたびたび利用。『東スポ』に広告を載せていることでプロレスファンにもおなじみ。謎の飲み物「バイス」も常備！

マッドマックス

1979年公開のオーストラリアのアクション映画。主演を務めたメル・ギブソンの出世作。荒廃した近未来を舞台に、凶悪事件を起こすモヒカンの暴走族と特殊警察のチェイスが見どころで、バイオレンスアクションの傑作との誉れ高い。『マッドマックス2』も81年に公開された。

東映まんがまつり

東映が1969年から子ども向け映画を数本まとめて、春休み、夏休み、冬休みに公開したオムニバスのタイトル。90年代に入り『東映アニメまつり』『東映アニメフェア』に興行名が変更された。

チャールズ・ブロンソン

『荒野の七人』『大脱走』『ウエスタン』などの作品で知られるアメリカの俳優。日本では化粧品マンダムのテレビCMに出

だった（笑）。

玉袋　仲間がゲロ吐くシーンね。あれ観て焼肉食べ放題だから。

椎名　彦麻呂でも断わる！　絶対。

玉袋　それと同じようなのが『カランバ』だよ。「腕がもげる！」ってヤツな。それのデモンストレーションをザ・グレート・カブキがやったんだよ。

ガンツ　カブキが両手をジープに引っぱられるヤツですよね（笑）。

玉袋　インチキな映画とプロレスがリンクした瞬間だよ。やっぱインチキ度合いでは『カランバ』がナンバーワンじゃねえかな？

ガンツ　プロレスと映画と見世物小屋が一体となったような（笑）。

玉袋　だいたい俺たちいくらインチキな映画に金払ってきたか。

ガンツ　インターネットのレビューなんてない時代ですもんね。煽り文句そのままに映画館に行っちゃうという。

玉袋　まんまだよ。ほんとバカ。映画のチラシの横にさ、「気分の悪くなった方のために救護室を用意してあります」とか書いてあってさ、どんだけすげえんだって行ってみたら、劇場の空調がちょうどいい具合で寝ちまったりとか、そういうのが多かったよ。

椎名　あと「ショック死一人」とかね。

玉袋　『バーニング』な。

椎名　あれ全然怖くないんだよ！

玉袋　夏のお化け屋敷の代わりが見世物小屋から映画館になった時代だったんだろうな。行っちゃうんだもん。

椎名　ドーン！とか音だけでかくて、こけおどし（笑）。

玉袋　でも、プロレスもそうだよな。こっちはプロレスの宣伝カー見かけたら、いてもたってもいられねえってなっちゃうんだから。そういう感覚がいまのプロレスや格闘技にないんだよな。

ガンツ　昔の国際プロレスって、そういうモンド映画の煽り文句と一緒でしたよね。流血！血しぶき！生きるか死ぬかの金網デスマッチとか（笑）。

椎名　映画もプロレスもそういう興行だもんね。

玉袋　でも、そういうゲテモノ映画もいいけど、やっぱり一番いいのは『ロッキー』かな。これ恥ずかしいカミングアウトかもしれねえけど、俺は『ロッキー』が一番好きかもしれない。

椎名　俺もそうですよ。『ロッキー』は衝撃でしたもんね。カッコよくて。

玉袋　俺は生卵飲んだぞ。マネしちゃうんだよ。

ガンツ　『ロッキー』は色褪せませんよね。

玉袋　だから映画は『ロッキー』でいいんじゃないの？　俺が高校時代に行ったパチンコ屋も「ロッキーのテーマ」だったからな。CRがねえ時代だから、羽もんでやってよ、玉が一気に出て終わりじゃないから時間かけてさ、ずいぶん飲まれながら、閉店間際に打ち止めして勝ったとき「俺、ロッキーだ」とか思ったもんな。

椎名　パチンコ屋のロッキー（笑）。

玉袋　あのテーマ曲がいいんだよ！

ガンツ　いいですよね。なんで百田光雄があの曲で入場してくるんだって！（笑）。

玉袋　『ひげダンスのテーマ』でいいよ。

ガンツ　違いすぎるだろって（笑）。

椎名　高田（延彦）も『ロッキー』の曲だよね？

梶原一騎原作で『週刊少年マガジン』に連載され、虚実入り交じる内容で大人気を[illegible]ったマンガが映画化。猪木、ウィリー、[illegible]など、当時のプロレス、空手、キックのトップが総出演した

玉袋　『トレーニング・モンタージュ』な。雪山のトレーニングで流れる曲だよ。あれ最高。みんなこっそりiPodに入れてるだろ。だからよ、正直に告白しよう。『ロッキー』が大好きなんだよ。『ロッキー』でいいだろ。

ガンツ　マンガは『あしたのジョー』、映画は『ロッキー』ということでいいでしょうかね。

玉袋　変態は結局、そこに行き着くんだよな。

椎名　でも、こういう俺たちが好きな「カッコいい」って感覚、これって女にわかるのかな？って思うんですよ。女の子の「かわいい」って感覚が俺たちにわかんねえじゃん。それと同じで俺たちの「カッケー！」って感覚は絶対にわかんないと思うんだよね

ガンツ　いわゆる男のロマンですよね。

椎名　だって『ダークナイト』で何が好きかって、バットモービルが好きなんだもん。

玉袋　あれはいいぞ。乗りてえよ。

椎名　ああいうのってわかるのかな？　だって車がカッケーってだけなんだよ。奥さんに「このバッグかわいいと思わない？」って聞かれて「思うわけねえだろ！」って答えたときと一緒だもん。

玉袋　そこは「わかるめえ」でいいんだよ。『トラック野郎』だってわかるめえ。プロレスだってわかるめえ。でも変態たちはわかってくれるんだよ。

ガンツ　というわけで、女にはわかるめえな、「俺たちの映画変態座談会」これにてお開き！

【10年6月30日　都内・「加賀屋」中野坂上店にて収録】

演し「うーん、マンダム」というセリフは日本中で大流行した。口ひげをたくわえたダンディな風貌が人気で、阿修羅・原はデビュー当時「和製ブロンソン」として売り出された。

アントニオ猪木ブロンズ像
熊本県の造型職人、村田善則さんが制作したブロンズ像。『週刊プロレス』にたびたび広告が掲載され、購入したプロレスファンも多数。実際はブロンズ製じゃないという噂。

サスペリア
イタリアのホラー映画。日本では「決して、一人では見ないでください」というキャッチフレーズがあまりにも有名。さらに強烈すぎる恐怖・残酷表現であるため1000万円のショック保険をつけたことも話題を呼び大ヒットした。

イタリアの映画監督、ルッジェロ・デオダートによるホラー映画。ドキュメンタリー調に構成されたフィクションだったが、ドキュメンタリー映画のように宣伝したため、当時は実際に起こった事件だと思う観客が続出した。この方法の映画はほかに『ブレア・ウィッチ・プロジェクト』が有名。

ヤコペッティ
イタリアの映画監督、グァルティエロ・ヤコペッティ。世界中の奇妙な風習、野蛮な風習を描いたドキュメンタリー映画『世界残酷物語』で有名。

カランバ
83年に公開されたイタリア映画。日本での正式名称は『残酷を超えた驚愕ドキュメント・カランバ』。

バーニング
全身火傷を負った殺人鬼が園芸バサミで人々を惨殺する恐怖映画。監督はトニー・メイラム。

アカデミー賞受賞作!! ウワサのイルカ漁映画とは何か?

上映中止騒動を考える

『ザ・コーヴ』とプロレス

「一水会」最高顧問

鈴木邦男

日本のイルカ漁を悪魔の仕業として描くエキセントリックな内容、上映中止運動をめぐる表現問題――ドキュメンタリー部門でアカデミー賞を獲得した『ザ・コーヴ』とは何か? 上映中止運動に立ち向かった"闘う男"鈴木邦男氏に話を聞いた!! 問題はイルカの刺身より、受け身だって!

聞き手 [illegible] 吉田 ©OCEANIC PRESERVATION SOCIETY ALL RIGHTS RESERVED

「映画は、プロレスラーを目指す原点でした」

ブルース・リーから『THE PROPHECY』まで

狂気の映画青春録

プロレスラーにして俳優にして映画監督

船木誠勝

映画といえば、やっぱりこの方。これまでも『レスラー』や自身が監督した『THE PROPHECY』など
たびたび映画を語っていただいているが、あらためて船木誠勝の映画論についてじっくりと話を聞いてみた。
映画との衝撃の出会いから、現在に至るまでの船木誠勝の映画観とは!?

聞き手・長谷川[illegible] 構成・[illegible]

――今日は船木さんの映画論や映画にまつわるお話を聞いていきますので、よろしくお願いします！

船木　よろしくお願いします。

――まずは映画との出会いからお聞きしたいのですが。

船木　生まれて初めて観たのが、幼稚園のときに連れていかれて観た『燃えよドラゴン』だったんです。でも初めてだったから映画館のシステムというのがわかってなくて、劇場へ行ったら人がいっぱい座ってますよね。それでみんな同じ方向を向いていて、目の前にカーテンが閉まってるじゃないですか。それで"なんなんだろうここは？"と思って（笑）。

――なんかおかしなところに来たんじゃないか、と（笑）。

船木　ええ。それが一瞬にして暗くなって、幕が開いたら最初にドキュメンタリーみたいのが始まったんで、ちょっと怖かったですね。で、映画も鉄の爪と素手の男が闘うということで、もう絶対刺されて死ぬだろうと思って、途中でロビーへ出ていっちゃったんです。

――ワハハハハ！　そんなに怖かったんですか。

船木　はい、絶対死ぬだろうと思って。母親もついてきて、母親と自分だけロビーのイスで待ってたんです。そうしたら最後まで観た親父が出てきて「勝った！」って言うんですね。当時はまだ『仮面ライダー』とかを観る前だったんで、"闘う"っていうことを初めて意識させられたのが『燃えよドラゴン』だったんです。しかもそれが素手の男が鉄の爪と闘うっていうありえないシチュエーションだったんで、スゴいなぁと思って。その思いがだんだん憧れに変わっていったんですよね。

――では、それがのちに格闘技を志していく原点になったというか。

船木　まったくそのとおりですね。やっぱり闘うためには強くならなきゃいけないし、強くなるには筋肉を鍛えなきゃいけない。だから『燃えよドラゴン』がそういう教科書になってくれた感じです。それで意味もなく10歳ぐらいから筋肉を鍛え始めました。それもやっぱりブルース・リーの影響ですね。

――なるほど、ブルース・リーを通じて闘うことや強さへの憧れが芽生えた、と。

船木　そうですね。やっぱり憧れたんだと思います。それからも『ロッキー』だったりシュワルツェネッガーの『コナン』、そしてジャッキー・チェンですね。もうそのままアクション映画へ全部つながっていきました。

人生初の映画[illegible]がなんとブルース・リーの『燃えよドラゴン』だ[illegible]という船木。"鉄の爪の男にどうやって勝利したか、父親にしつこく聞き[illegible]たか、なぜか父親はなかなか教えてくれなか[illegible]幼少時代のいい話！

だからプロレスと映画ですね。それは両方とも親父の影響なんです

――王道のラインですね。

船木　当時は日曜、友だちと遊ぶより朝から晩まで映画館にいることのほうが多かったです。昔の映画館って入れ替え制とかないから、朝イチで入ると夕方までいても大丈夫だったんです　だからずっと映画館にいましたね。2週連続で同じ映画をずっと観たりして。

――そんなに！

船木　でも飽きないんですよね。そうしているうちに、今度はスピルバーグの映画を観るようになって。子どもなんで難しい漢字とか字幕はわからないんですけど、もう映像を観てるだけで楽しかったですね。『E.T.』とか、ルーカスですけど『スター・ウォーズ』とか、『未知との遭遇』なんかも観ました。

――映画と並行してプロレスも観てた感じだったんですか？

船木　プロレスも観てました。だから映画とプロレスですね。でもそれは両方とも親父の影響なんです。昔ってテレビは家に一台しかないじゃないですか。で、チャンネル権は親父しか持ってないから、やっぱり自然にその影響を受けるんです。観ざるをえないというか。それでずっと観てると、やっぱりそれに染まっていくっていう感覚がありました。

――格闘家を志す、原点となる気持ちを映画が育んでいたのは意外でした。

船木　最初はやっぱり映画が大きいですね。アクション映画を観ているうちに、自分も憧れてくるじゃないですか。それで現実の世界で探したとき、"闘い"を仕事にしているのがプロレスラーだったっていう。そうやって自分のなかでクロスしたような気がします。

――それでプロレスラーを目指したわけですか。

船木　アクション俳優のなり方もわからなかったし、逆に現実的なものがプロレスだったというか。ジャッキー・チェンやブルース・リーって、観るだけで遠い世界というか、どこにいるかもわからないじゃないですか。でもプロレスは毎年一回興行で来るし、動いてる選手を見て触ることもできる。テレビでもやってるし、ここでもやっている。それでなんか現実を感じたんです。

――では、映画で生まれた憧れに導かれて新日本プロレスへ入門しましたが、それから映画との関わりはどのように？

船木　新弟子のときは練習もありましたし、映画どころじゃないっていう感じで観れなかったですね。でも先輩が借りてきたビデオを観たり、みんなで怖いやつを観ようって集まって『死霊のはらわた』とかを電気を消して観たりはしてました（笑）。

――想像するとおもしろい絵ですね（笑）。

船木　そのあとは海外へ行って帰ってきて、一人暮らしをするようになってから、観てなかったやつをレンタルで借りて観てました。そのなかで一番影響というか、これは凄いなと思ったのが、デ・ニーロの『タクシードライバー』。あれはちょっと「何かやらなきゃな」っていう気分にさせ

られました。

――具体的にはどんなふうに触発されたんですか？

船木　身体を鍛えて頭を剃って政治活動を邪魔しにいったり、それで最後に少女を助けるじゃないですか。ああいうのがなんかカッコよく見えたんですよね。そんな人生だったらいいなっていう願望じゃないですけど。あれは憧れですよね。あと、ちょうど外国から帰ってきたばかりで、20歳になって"団体"というより"個人"になってきたときで、個人になったときには孤独感があるんですけど「自分で行動を起こしてやらなきゃな」って、そういう気分にさせられました。

――『タクシードライバー』がその後の船木さんの人生に影響を与えた部分ってありますか？

船木　とくに『タクシードライバー』のおかげとか、『タクシードライバー』のせいというわけではないんですけど、やっぱり行動は自分で起こすようになっちゃいましたね。でもちょっとはそういう影響はあったと思います。単純に20歳っていうと、もう大人じゃないですか。それでそのとき自分が置かれていた立場もあって「何か一つ新しいことをやらなければ」っていう、そういうへんな使命感を感じたりしました。あの映画を観たのはUWFに入ったあとですね。

――少し話が戻りますが、海外遠征時代、船木さんがブルース・リーふうのキャラクターとして活躍していたという話を聞いたのですが。

船木　キックを使っていたのでハチマキをして、プロモーターに言われて空手やカンフーのキャラクターでやっていたんです。普通の外国人にはできないようなことをやれ、と。でもそういうのをやってるときって、やっぱり自分のなかからブルース・リーとかジャッキー・チェンっていうのが出てきますよね。外国人を蹴っ飛ばして。

――パフォーマンスでヌンチャクをやったりはしませんでした？

船木　そのときはやらなかったですけど、ヌンチャクは小・中学校のときいっぱい作りました。

――やっぱり作りましたか（笑）。

船木　学校の掃除の棒を切って、鎖を買ってきて（笑）。いっぱい作りましたよ、だんだんうまくなっていきましたね。

――ハハハハ。回すのも上手だったんじゃないですか？

「ジャッキー・チェンと闘わせてやるから」という猪木の甘い誘惑を振り切って、UWFへと[illegible]。本当にジャッキーと闘っていたら、映画界もプロレス界もまったく歴史が変わっていたに違いない。

ヌンチャクは小・中学校のときに学校の掃除の棒を切って作りました

船木　けっこううまいですよ。『岸和田少年愚連隊 中華街のロミオとジュリエット』っていう映画のなかで、中国人のカンフー使いの役をやったんですけど、それはモロにブルース・リーで。そのときにヌンチャクを回してるんです。ただ、ブルース・リーの真似って真面目にやればやるほどバカに見えるんですよね（笑）。

――ワハハハハ！

船木　だから自分は真面目にやって決めてるんですけど、「はい、カット」ってカットがかかった瞬間にみんなが笑うんです。あれは不思議でしたね。ブルース・リーってブルース・リー本人じゃないとカッコよくないんです。ほかの人がやるとバカに見える（笑）。

　ちょっとわかる気がします。

船木　それで、いわばブルース・リーになれたんですけどその日でもういいやと思いました。べつに全然うれしいもんじゃないな、と。現実と憧れっていうのは全然違うものだとそのとき思いましたね。

――憧れつながりになりますが、船木さんといえばジャッキー・チェンと対戦の計画があった話が有名です。

船木　ありましたね。あのときは本当に一瞬やってみたいなっていう気持ちになって、それは小学校からずっと観ていた人と一度同じ場所に立ちたいっていう憧れだったんですよね。でも、ライガーの「相手は俳優だぞ」っていう一言で現実に戻されました。「おまえと俳優が闘ってどうするんだ」って。それでなぜか「やっちゃいけないんだな」と思って、真面目な自分が出てきたんです。

――実際、実現には至りませんでしたよね。

船木　そう、それをやってたら、まずいまの自分はいないですよね。UWFには行ってないし、そのまま新日本に残ったらそれができるっていう話だったんで。

――その選択は人生においても分岐点になったわけですね。『タクシードライバー』以外でお好きな映画というと？

船木　いろいろありますけど、日本だったら高倉健さんの映画は好きなんですけど、『夜叉』が一番好きですね。あれを観て健さんのファンになりました。『夜叉』はあの脚本というか物語も凄く好きで。あとデ・ニーロも好きで、なかでもスコセッシと組んでる映画が好きです。ほかにも、デ・ニーロだったら『レナードの朝』。あれはボロ泣きしました。

――いいですよねぇ。

船木　それと『ミッドナイト・ラン』みたいな、少しコミカルなやつも好きです。コミカルでも最後にちょっとホロっと来て。あとベッド・ミドラーも好きですね。『ステラ』っていう映画とか。

――3人名前が上がってきましたけど、船木さんが好む俳優の傾向って何かあるんですか？

船木　やっぱりうまい人が好きですね。うまい人っていうか、味があって影響力の強い人。でも健さんもデ・ニーロも、みんな好きっていうと思うんです。3人とも、なんかその人が出るだけでドラマの中に

くような映画なのだが、観たあとのアノ感じはなんとも言えない　機会があったらぜひ

船木　演者はやっぱりそういう人が好きですね。いま41歳になって"好きな役者"ということで浮かぶのはその3人です。ジャッキー・チェンとかブルース・リーもよかったですけど、それは小さいときに好きになったきっかけだったんですよね。いまはパッと思い浮かべたとき、その3人が出てきます。

――では、最近注目してる俳優というのは誰かいます？

船木　日本だったら松山ケンイチ、阿部寛。この二人は好きですね。個性がある。阿部寛さんなんかはほんとに引き込まれるというか、録画してヒマがあれば『結婚できない男』とかずっと観てます

――『結婚できない男』を船木さんが観てますか（笑）。

船木　一度共演したことがあるんですけど、あんな感じですよ（笑）。寡黙なんだけど、話しだすとユーモアがあって、だけどあまり近寄らないほうがいいような、そういう距離があって。あれはほとんど素なんじゃないですか。凄く心地のいいお芝居をしてると思います。

――観る者を引き込んでしまう力というのは、プロレスや格闘技においても同様に求められてくるものですね。

船木　一緒だと思います。やっぱり人前でやってることを見せるというのは一緒だし、プロレスラーや格闘家もその人が闘ってる姿を観て感じるか感じないかっていうのは同じものだと思います。それは人間がやってるものなので、一緒じゃない

引きずり込まれるじゃないですけど、ウソでも本当に見えてしまうというか、映画とかテレビってそういう瞬間があると思うんです。作り物なんだけど夢中になっているというか。

――なるほど。

船木　そのためにはキャスティングとかも凄く重要だと思うし演出も脚本もあるんですけど、この3人はその引きつける力が断トツであると思います。

――それは船木さんの俳優論ともつながってきそうですね。

悪いことをしたヤツは死んだほうがいい
頑張っているヤツは救われたほうがいい

狂気の映画青春録

ですかね。基本は人気商売じゃないですか。人に演じてる、闘ってる姿を見せるっていう。そこは同じだと思うんで、いかに引き込むか。映画であればフィクションなんですけど、いかにそのフィクションの世界に引き込むか。そういう力を持った人がトップなのかなと思います。一瞬でも現実に引き戻される隙があったら、やっぱり集中できないと思うので。

――確かに映画でも観てるあいだにほかの用事や時間が気になってしまうのは楽しめていないときだったりします。

船木　それはありますね。その時点でもう集中できてないっていうことですから。

――船木さんはご自身で監督もされていて、幻の作品『THE PROPHECY』に関するインタビューのなかで、「"救いと引き換えに死ぬ"というのが好きですね」と言われていたのが印象的でした。やはりそういう何かがめぐっていく世界観だったりがお好みなんですか？

船木　そうですね。たとえば人一人が死んだら赤ちゃんが生まれるとか、そういうなんていうか、続くっていうのがいいですよね。一人が終わっても、もう一人の人生が動くよっていう、先があるほうが、けっこうそういうのは自分のなかであります。悪いことをしたヤツは絶対死んだほうがいいし、頑張ってるヤツは救われたほうがいいし、男は多少バカでも純粋なほうがいいし、女の人は強くて優しいほうがいいなっていう、そういう願望はありますね。

――おもしろいですね。

船木　そうなってほしい、そうであってほしいという願望。それは絶対あるし、映画のなかに込めたりもします。現実だけ描いていても、絶対ダメだと思うんです。みんな現実に疲れてドラマとか映画を観てるわけですから、どこかで現実離れした瞬間があっていいと思う。

――確かにそうですね。

船木　だからそこで説得力のある瞬間があれば、心地よく騙せるし、観てるほうも心地よく騙されると思うので、その瞬間に作品と観てる人が一体になれれば、何をやってもいいと思ってます。それで明日の活力になれれば。それで人生を救われる人もいるかもしれないし、全然それはありだと思います。

でも、そのためには観てる人を引き込んで現実を忘れさせることのできる力が必要になる、と。

船木　そこはやっぱり真剣に取り組むっていうのが第一条件だと思います。一生懸命やるっていうのが。そこはほんとに重要だと思います。

――「人を引き込む」「夢を見せる」という点は、映画といま船木さんがやっているプロレスで通じるところがあるんじゃないですか？

船木　難しいですけどね。でもそうなるよう、やっぱり努力しないといけないと思ってます。

【10年6月25日　神奈川県・たまプラーザにて収録】

ふなき・まさかつ■1969年3月13日、青森県出身。15歳で新日本プロレスに入門し、その後UWFへ。93年にはパンクラスを旗揚げするも、00年、ヒクソン・グレイシーに敗れ引退を宣言。07年桜
Dr.コトー診療所」出演はあまりに有名。182センチ、92キロ

妄想!!
シネマGP 2010
史上最強の映画キャラクターは誰だ!?

これまでのあらすじ

どっかの金持ちが「いい道楽思いついちゃった♥」と巨額を投じて蚊が吸った血液中のDNAから映画のなかの強そうな人たちを再構成、一堂に集めて賞金トーナメントを始めちゃった。場所は開拓中の田舎町リデンプション。トーナメントやるってんだったらやっぱここでしょ、というわけで。

1回戦第1試合 ミルコ・クロコップvs武田鉄矢

「ター」で登場は片山元(武田鉄矢)withタケシ少年、フロム『刑事物語2 りんごの詩』! 対する青コーナーはアクション・レイ、フロム『アルティメット・フォース 孤高のアサシン』!

片山元は先に行なわれた日本代表決定戦で、獅子王(橋本真也)フロム『あゝ!一軒家プロレス』と一軒家マッチで対戦。映画のギャラが支払われな激怒した獅子王が途中棄権したために片山の勝利となり、このトーナメント本戦に駒を進めたのだった。ちなみに、ほかの国で予選が行なわれたかどうかは定かではない(K-1MAX方式)。

ん? 青コーナーが誰かわからない!? 失礼な! PRIDEでは大人気だったミルコ・クロコップですよ! 初の主演映画だからPRIDE会場なんかで大宣伝を打ったはいいが、中身が「トホホ」な出来で、いまやアマゾン・レビューでは星1.5個、新品でも90円で買えちゃうなんてのは内緒だ―

というわけでゴング! と同時に片山の蟷螂拳がレイの首筋に炸裂! まさかの秒殺で片山勝利! 映画同様、ミルコは圧倒的な期待はずれに終わってしまった―

1回戦第2試合 ビリー・ローvsジェイソン・ボーヒーズ

赤コーナーはビリー・ロー(ブルース・リー)、フロム『死亡遊戯』! 青コーナーはジェイソン・ボーヒーズ(いろんな人)、フロム『13日の金曜日』!

この2人は説明の必要がなかろうということでさっさとゴング! 斧を片手に突進したジェイソン、あっという間にローの首を切断! 血を噴き出して飛んでいくローの生首! ジェイソン秒殺!

と思いきや、勝ち誇るジェイソンの背後からもう一人のトラックスーツが忍び寄り。「ジェイソンうしろ～うしろ～!」という子どもたちの叫び声もものともせず指先から水をピューッ! 水が弱点のジェイソンはのたうち回りながら溶け始める! 最初に首チョンパ(古い)されたのは影武者のトニー・バレントさんだったのだ! ドロドロに溶けたジェイソンは土に還っていった。って、途中からウルトラマンvsジャミラになってるけど、まあ気にしない。ビリー・ロー、2回戦進出!

1回戦第3試合 ブッシュマンvsT-800

赤コーナーはキ(ニカウ)、フロム『ミラクル・ワールド ブッシュマン』! 青コーナーはT-800(アーノルド・シュワルツェネッガー)、フロム『ターミネーター』! 「キ」って何なんだとお思いでしょうが、劇中ではこういう役名だったんだって。いま初めて知った。で、ゴング! ニカウさん、逃げる逃げる! 逃げ足速い! 追うターミネーター! 途中、プレス機に挟まったりピアノのフタに挟まって手が階段状になったりドアがバタンと閉まって平べったく

先に行なわれた日本代表決定戦で片山元（武田鉄矢）は獅子王（橋本真也）と二軒家で対戦

なっちゃったりといろいろあったものの、どこまでも走っていくニカウさん、どんなになっても追っていくターミネーター！

ここで審判部長の角田さんが大英断！「闘う魂が感じられない！ 両者失格にします！」というわけで勝敗と関係なくどこまでも追いかけっこを続けることになった両者。仲良くケンカしな。

1回戦第4試合 ロッキー vs 志穂美悦子

向こう（プロローグ）の反対側が意外な結末になったことで場内が動揺するなか、1回戦も最後の試合。赤コーナーはロッキー・バルボア（シルベスター・スタローン）『フロム・ロッキー』！ 青コーナーは今大会の紅一点、李紅竜（志穂美悦子）『女必殺拳』！

赤コーナーはともかく「女も一人出しとくか」的な意図が丸見えの人選だが、気にしない！ 女子代表トーナメントもやったんだよ、どっかで！

（さっさとゴング） リングサイドにはロッキーの闘いを見つめるエイドリアンの姿が！ 優勝したらきっと「私事ですが結婚します！ 幸せにするから！」とマイクで叫びたいのだろう。開始と同時に猛ラッシュをかけるロッキー！ 紅竜は前蹴りで距離を取ろうとするも、相手が男性のプロボクサーではパワーが違いすぎる！

が、次の瞬間！ 紅竜がビジンダーに変身！（お約束）長渕剛も大喜び！ おっぱいから必殺のブラストレザー発射！ 砕け散るロッキー！ 紅竜、KO勝利！ いいのか、これで！

リザーブマッチ 宮田和幸 vs 渡辺一久

リザーブマッチは、宮田和幸と渡辺一久が対戦。宮田が1Rで2度のダウンを奪い、判定勝ちしました。「（今）大会に出場資格があるのか」と批判の声も挙がっていましたが、まあ、やってみたらいい組み合わせだったんじゃないですかね。

準決勝第1試合 武田鉄矢 vs ブルース・リー

片山とビリー・ローの準決勝、奇しくもアジア同士の潰し合い。拳法対決！ つーか、準決勝に残った3人ともアジア代表で拳法の使い手だ！ バランス悪い！ さあゴング！

ジリジリと間合いを詰めるロー！ 壁際に追い詰められる片山。怪鳥音を発してローが飛びかかろうとした瞬間、2階から何かが落ちてきた！ タケシ少年が投げた……だ！

最強の武器を得て目の色が変わる片山！ ローの脳天めがけてハンガーを振り下ろす！

ハキーン！

ハンガー割れたーーっ！ 片山が叫ぶ！「違ーうー！ 木のヤ……」

せっかく最大の見せ場だったが、決めゼリフを最後まで言い終わらせてももらえず、ローの右ハイが片山のテンプルを直撃！ 糸が切れたように崩れ落ちる片山！ ちなみに片山は駆け寄ったタケシ少年に「オレの頭はどこだ!?」と、言ったとか言わなかったとか、ミルコが出るからと観に来ていたPRIDEファンも思わぬ名場面の再現に涙したとかしなかったとか（もういい）。

準決勝第2試合 志穂美悦子 vs ブルース・リー

ニカウさんとターミネーターが両者失格となったため、準決勝第2試合は紅竜が不戦勝で決勝進出。あれ、リザーバーは？ まあいいや、ということで決勝はビリー・ロー vs 李紅竜でゴング！

もう前の試合からビジンダーに変身したままの紅竜、再びブラストレザー発射！ 粉々に砕け散るロー！！ 紅竜（つーかビジンダー）、連続KO勝ちでトーナメント優勝！

えええっ、おんなネタ!?（とあ然とする観客を尻目に、長渕と抱き合って勝利の喜びを分かち合う紅竜！ 女優デビューした娘の長渕文音も祝福だ～（そういや志穂美悦子って、ビジンダー（に変身するマリの）役で「キカイダー01」に出てた頃って高校生だったらしいっすね（豆知識）。

というわけで、意外な展開が次々に繰られたこのトーナメントも、あっという間に閉幕。「いいのか、こんなんで!?」という声も早くも聞こえてきますが、まあ映画だけに……まあ、こんなもんで。……おあとがよろしいようで……。（高崎計三）

スクリーンの中のリング・ケージ論争？

日本の特撮映画に見るガラパゴス現象

うひとしきり議論されて、すっかり落ち着いてしまった感もある日本MMAの「リンク・ケージ論争」。そのなかで、「ガラパゴスMMA」という新しい用語も登場していたが、今号は映画特集ということもあってちょっと似たような状況に思い至ったので、僭越ながら一席ぶたせていただく。ま、そもそも肝心のリンク・ケージ論争にはほとんど参加していなかったのだが（筆者の立ち位置は「どっちでもよい」）。

似たような状況というのは、日本の特撮映画、とくに怪獣映画をめぐるモロモロのことだ。ご存知のとおり、1954年（昭和29年）に発表された『ゴジラ』以来、日本は世界に名だたる怪獣映画大国となった。そして日本の特撮技術は、「着ぐるみ」と呼ばれるスーツアクトを中心に発展してきた。

画像合成や映像表現には日々進歩する内外の技術を取り入れながら、メインとなる怪獣の演技は「着ぐるみ」を着たスーツアクターが演じ続けてきたのである。ゴジラのように直立の怪獣はいうまでもなく、アンギラスのように4本足で歩行する怪獣の場合は四つん這いで演じる。大きな翼と3本の首を持つキングギドラに至っては、身体の部分にスーツアクターが入り、翼と首は上から吊って操る「操演」という技術を併用する。何人もかかっての大仕事だ。

もちろん、当時はほかに方法がなく、そうしなければならなかったから仕方がなかった。そして、着ぐるみでいかに「それらしく」表現するかという技術が編み出されていき、スタッフのあいだで伝承されていくようになる。日本特撮の世界では、「着ぐるみ」怪獣の技術が独自の進化を遂げていったわけだ。

だが、やがて時が経ち、ハリウッドを中心にして怪獣・モンスターの表現はCGで行なわれる時代がやってくる。そこにないものを、実写した背景や人物との絡みに合成することによって、どんなものでも「存在するかのように」見せてしまうことができるようになった。

最近でいえば、『クローバーフィールド』などがいい例だろう。ニューヨークの街を巨大モンスターが破壊しつくす話だが、この映画の撮影で着ぐるみなど一切作られていない。モンスターはすべてCGで表現されている。これなら怪獣の形状も人間が入って動くことも想定しなくていいし、アクションにしても「人間くささ」を取り除くことができる。アメリカだけでなく韓国などとても、怪獣大決戦ヤンガリー』（韓米合作）や『クエムル』などのモンスターはフルCGで作られている。

CGの技術もどんどん発達していき、画面を見ただけでは実写とまったく判別できなくなるまでになった。だが、伝統的な着ぐるみ怪獣に慣れ親しみ、それを愛する日本の特撮ファン、そして何より制作現場の人間たちは、CG怪獣には否定的だった。いわく、「実在感が乏しい」。またいわく、「生物感が足りない」。

象徴的な例がある。ハリウッドで制作されて98年に公開されたアメリカ版『GODZILLA』だ。日本でのの権利を持つ東宝が米トライスター社と提携したことで実現した企画だが、この作品に登場するゴジラはすべてCGだったのだ。

もちろん初の試みだったが、ゴジラの形状が妙に恐竜っぽくなっていたせいもあって、とくに日本の特撮ファンにはまったくと言っていいほど評価されなかった。世界の潮流はCG一辺倒に流れていた時代に、この作品を観た日本のファンは、「やっぱり着ぐるみじゃなきゃ」と口々に語るというオチだった。

アメリカ版制作のために95年の『ゴジラvsデストロイア』でいったん終了したはずのゴジラシリーズは、99年、『ゴジラ2000（ミレニアム）』で復活し、04年の『ゴジラ・ファイナルウォーズ』まで続くことになる。もちろんこれらの作品では、アメリカ版などなかったかのように、怪獣は着ぐるみで表現された。

そうしているあいだにも、アメリカのみならず世界中で、CGをさまざまに活用したスペクタクル映画が作られ続けている。だが、たとえば数年後にゴジラ・シリーズが復活することがあっても、少なくとも日本でフルCGのゴジラが作られることはあるまい。日本では、あくまでも「怪獣＝着ぐるみ」なのである。

そう、世界各国がどれだけケージに傾こうとも、日本の現場があくまでも「MMA＝リンク」にこだわるのと同様だ（いやもちろん、ケージ派の現場関係者もいるだろうが）。日本特撮（とくにゴジラ関係）が着ぐるみにこだわっているのと、日本MMAがリンクを使用し続けている状況は、それによって「ガラパゴス化」と呼ばれていることも合わせて、酷似していると言わざるをえない。

先日、ニック・ディアスが日本のリンクMMAを高く評価してファンを驚かせたが、これを聞いた筆者は当時、スティーブン・スピルバーグやティム・バートンがこの作品に否定的な評価だったことを思い出した。もしかしたらディアスは、「リングMMAを評価する」というより、「やっぱ日本はこうじゃなくちゃね」的な感覚なんじゃないかと思ったりしたのだ。アメリカにもたくさんいる変態的な「日本特撮ファン」（その代表格がバートン）のように。

ガラパゴス化は、イコール悪というわけではない。その世界で完結できるなら、そのなかであくなき進化を続けていけばいい話。

逆にオープンにするなら、価値観が破壊されても耐え忍んで合わせていけばいい話である。おそらくゴジラはまたガラパゴスを突き詰める方向をとるだろう。まさに同じときに、日本MMAはどうするのだろうか？

NINJA見参!!
リアル・ジャパニーズ・センセーション

日本人初のハリウッド100万ドルスター

ショー・コスギ

「僕は自分の器を超えようとは思わない。ただ、その器は絶えずフルにしておきたい」

80〜90年代に全米でニンジャブームを巻き起こしたアクション俳優、ショー・コスギ。長い下積みを経てハリウッドで成功した、日本が世界に誇る銀幕のスターに、その激動の役者人生、そして格闘技者としての哲学を語ってもらった。

聞き手　青柳直弥　構成　鈴木佑　撮影　金山フヒト

格闘技の大会でトロフィーとメダルを663個獲りました

——今回は、『闘う映画』というテーマなんですけど、ハリウッドで初めて"100万ドルスター"になった日本人として、ショーさんの半生を振り返るようなお話をお聞かせいただければ、と……。

ショー　半生、振り返っちゃうんですね（笑）。

——もちろん、全部はムリだと思うんですけど（苦笑）。今回の取材にあたって、ショーさんの自伝を数冊読ませていただいたんですが、もの凄くいろんなエピソードをお持ちなんで、めちゃめちゃ幻想が膨らんでるんですよ。たとえば、アメリカで始めた空手道場に生徒さんを呼び込むために、オープン大会（※空手、カンフー、テコンドー、キックボクシングなどの選手が一堂に集まって勝負する大会。いわば他流試合の場）に出まくった話だったりとか。

ショー　出ましたね、いろいろ。詳しく話すと、最初、空手は自分が通ってた大学で教えてたんですよ。一人10ドル取って、希望者に週2回ずつ教えてたんだけど、けっこう、人数が集まってきたんで「これは金になる」と思って、半年ぐらいで道場を持っちゃおう、と。ところが、いざ道場を開いてみたら街にはすでに、テコンドーの道場とか、カンフーの道場とか、東洋武術の道場がいっぱいあってね。そんななかで、僕みたいなハタチそこそこのガキが道場持ったって、誰も来ないんですよ（苦笑）。来たのは5人か、6人ぐらいで。

——その頃は、まだ無名だったでしょうしね。

ショー　名前もなければ、実績も何もないですよ。そんなとき、生徒の一人だった小学生に、『先生どれぐらい強いんだ？　トーナメントがあるから出てみなよ』って言われてね。それがキッカケで、空手のトーナメントから、オープン大会まで出るようになって。結局、19の終わりから20歳ぐらいのときにやり始めて、約4年から4年半ぐらいかな。全米、カナダ、メキシコと出まくって、トロフィーとメダル合わせて663個取りましたから。

見てみぃ、このズラっと並んだトロフィーの数々！　大会荒らしといえるほどの圧倒的な空手の実力で、ショー・コスギは全米にその名をとどろかせた。

——663個ですか！

ショー　当時、全米では空手のファイトで3本の指に入りましたからね。チャック・ノリスの生徒とも闘ったし、アメリカでは有名なジョー・ルイスとか、ビル・ウォーレスとか、いろんなのとやりましたね。

——オープン大会って、どういうルールなんですか？

ショー　ポイント制なんだけど、もう顔も蹴りオッケーね。で、当時、防具も何もなし。

——フルコンタクトですか？

ショー　フルコンタクトじゃない。止めなくちゃいけないんだけど、歯を折ったり鼻を折るなんてしょっちゅう。僕も鼻は2回折ったし、歯も、前歯は何本ぐらいやっただろう……3本ぐらいやったかな。奥歯もやったし。相手をぶん殴ったときに、自分の拳に相手の歯が刺さったりとかね。ホントは寸止めしなきゃいけないんだけど、もう興奮してくると、お互い入っちゃうんですよ。あの頃はサポーターも何も着けてないから、素手に素足だったしね。

——完全にパイオニアじゃないですか。防具類も全然整備されてなかったんですね。

ショー　うん。金的のサポーターもしてなかったから、蹴られたら、もう大変！　ホントに立てなくなっちゃう。おまけに顔面は打たれるし、コンタクトが割れて、目は潰れそうにもなったし……。

——コンタクトなんですか？

ショー　僕は小学校からコンタクト。いまみたいにレンズがプラスチックになる前の、ガラス（レンズ）の時代から。

——目はあまりよくないんですか？

ショー　うちは兄弟揃って悪いんだね。僕は日本で、高校までは野球やってたからメガネは……ってことで、コンタクトをするようになったんだけど、全然合わなくてね。昔はいまみたいにいいヤツじゃないから、ホントにこうガラス玉みたいなレンズなの。

——もう、ホントに初期のコンタクトなんですね。僕ら知らないですもんね。

ショー　知らないでしょ？　それが目に当たって割れちゃってさ、目が潰れそうになって……。だから、いまも右の視力が弱いんですよ。

Sho Kosugi

——そんなことがありつつも、ショーさんはオープン大会で勝ち続けるワケじゃないですか？　ビックリしたのが、今回は勝てないかもって思ったときは、あえて危険な街に出向いて、闘志をかき立てていたっていう……。

ショー　そう。WATTSって知ってる？　黒人街。過去に暴動があったでしょ？　暴動が起きて一面、火の海になって。そういうとこ。

——そんなところに行かれていたワケですよね？

ショー　行った、行った。闘志をかき立てるために。

——普通、そこまではまずやらないですよね（苦笑）。

ショー　大会に出てると、コワくなっちゃうときがあるんですよ。やっぱり調子がいいとき、悪いときがあって、悪いときはいくらやっても思うような蹴りとか突きが出ないとかあるワケ。そうなってくると、最後はなんで勝負するかっていったら、気持ち。「気」なんですよ。だから、気が失なわれたら絶対にダメ。僕、風邪とか病気のときも何回も（試合を）やりましたもん。気を持ってれば、どんな状態でも平気。まず相手をやっつけるのは気ですよね。もちろんタイミングとかスピードもありますよ。でも、気がないとダメ。

——本のなかでは、そういった危険地帯を歩いていると、殺気を感じるっておっしゃってましたけど。

ショー　感じる。で、そういうとこに行くときは、わざわざ持ってない時計をいっぱい着けたりして行くの。

——普通、逆ですよね。危険なとこに行くときは外していけって言いますけど（笑）。

ショー　そうそう。殺気って、どこから感じるかわかる？　背中なんですよ。

——わかるんですか、歩いてて？

ショー　狙われてると、わかるんですよ。背中から感じるのよ。ゾクゾクゾクってして。

——絶対、それ達人レベルですよね。

ショー　いやいや、そういうレベルにはまだ達してないけど、なんてい

映画の撮影では何回 死にかけてるかわからない

ロスの自宅、通称"忍者御殿"にて次男シェインに空手の指導を行なう若き日のショー。ちなみに次男のシェインも俳優であり、ショー・コスギ塾日本校のスーパーバイザーも務める。

うかな……自分を境地に置くっていうことをやったね。極限に。境地って、いい意味の境地じゃなくね。空手のマスターはよく『無の境地』とかいうけど、そういう場面で、全然、無の境地なんかは入れない。無の境地とか以前の問題であって、自分の格闘心っていうか闘争心を煽るためと、自分の持ってる気を大きくするために気を磨くっていうかね。だから、まず気が鈍いとダメなんですよ。身体も。『気拳体』ってよく言いますけど、気と心が一つになって……これ、空手では気拳体って言うんですよ。

──なるほど。

ショー これが一つになって、相手を葬るっていうか、相手にまい進していくと。要するに、気がないと拳と身体だけになるんですよ。人間、ここがいちばん弱い。たとえば、野球でも2アウト満塁であがっちゃうピッチャーはフォアボール出したりしちゃう。気なんですよ、とにかく。気があれば、100パーセントの力じゃなくても80パーセント出せるんですけど、みんな気がないから本番では緊張しちゃって、100パーセントあるとこ、30パーセントしか出せないとかね。

──その「気」っていうのは、コントロールできるようになるんですか？

ショー うーん、コントロールできるようにはならないと思う。でも、どんな状況でも「気だけは持って」というのを僕は心がけてきましたよね。だから、僕は試合で殴られたら、よけい(向かって)いったもんね。歯なんか折られたら、『こいつの歯、2、3本よけいに折ってやろう』とかすぐ思っちゃうし。鼻折られたら、相手の首も折っちゃおうとか、そのぐらいいきますから、そりゃもう強かったですね(笑)。いま考えると、コワい世界だけど、ホントにそのぐらい持ってたね。

──とはいえ、あえて危険地帯に行ったりとか、ホントにマンガの世界ですよね。

ショー ホントにマンガ。他人から見ると、バカだよね(苦笑)。

──しかも、いつでも襲われる覚悟ができていたワケですよね。

ショー できてた。それが違うよね。だって普通は、みんな襲われるつもりで行ってないじゃない。それなのに襲われたら、その瞬間で負けちゃうよね。

──絶対、負けますよね(苦笑)。そういった経験を積まれて、空手道場は最終的には繁栄したんですもんね。

ショー うん。息子が小さいときは2軒あったし、そのほかに大学でも二つ教えてたし。

──そんな戦場をくぐり抜けてきたショーさんですが、自伝によれば、映画でも5回ぐらい死にかけてるんですよね？

ショー そうそう。もっと死にかけてるね。

──しかも、これ、どれも死んでてもおかしくないですよね。

ショー もうホントに命張った。いまはもう張らない(笑)。そこはもう脱したね。

──いちばん最初の、ショーさんのブレイクのキッカケとなった『燃えよニンジャ』で滝壺に飛び込んだシーンでも、いきなり骨折とかしてるんですよね？

ショー そう。複数骨折だもん、カカト折って、肩も折って。高さ80メートルの崖の上からだったんだけど、僕は主役の吹き替えも担当して、一人二役やってたから、二回飛び込んだんですよ。一回目はオッケーだったんだけど、二回目にやっちゃって。

──でも、カメラ回ってるんですよね？

ショー うん。そのとき、いちばん困ったのが、忍者の服装ってのはマスクじゃないですか？ 水吸うと息できなくなっちゃうの。でも、水を吸っちゃって、それでパニックですよね。もう呼吸のほうが忙しくて、骨折のほうはわかんない(笑)。でも、手とか足が効かないから、途中からズズズズって沈んでいって。すぐスタッフが助けに来てくれたから、一命を取り留めたんだけど。

──そんなに衝撃スゴいんですか、滝って。

ショー スゴい。でも、ケガするときの衝撃っていうのは全然わからない。少しずつ、どこがどうだかっていうのがわかってくるワケ。「あれ？ 手が効かなくなっちゃった」とか、「あれ？ 足が効かなくなっちゃった」とか。

──ショーさんのケガのなかでいちばんヤバかったのって、どのシーンですか？

ショー 僕の初主演作の『REVENGE OF THE NINJA(ニンジャⅡ／修羅ノ章)』で、36回のビルの屋上から足を踏み外して落ちかけたときも死を覚悟したけど、『ブラック・イーグル』っていう作品で、地中海のマルタ島でロケしたときもヤバかったな～。

──どんなシーンだったんですか？

ショー 海に墜落した飛行機から秘密書類を取り出すってシーンで、僕の役は祖先が伊勢志摩で海女をやってたから、水中で5分10分潜って空気なしでも平気だという設定で。僕、

ショーが制作&主演を務めた映画『SHOGUN MAYEDA』(日本では『兜 Kabuto』としてソフト化)は、日本のサムライが西洋へ乗りこみ、刀と剣の闘いを繰り広げるアクション・アドベンチャーだ！

それまでシュノーケルやったことなかったんですけど、うちにあるプールにコーチが来て1回シュノーケルをやったら、「ショーはもう一発だよ。運動神経がいいから、すぐできるんじゃない？」なんていうんですよ。でも、波のないプールでシュノーケルをやっても、海は全然違うんだよね。波もあれば、水も流れてるワケだから。

――そりゃ、そうですよね（苦笑）。

ショー　で、そのまま本番を迎えて。いざ潜ってみたら、5メートルちょっと下まで行って、酸素ボンベもなくてアクションなんかできない！　30秒ももたないんですよ、息が。現場には息が苦しくなったとき用に岩陰に酸素ボンベが用意されてたんですけど、これを吸うとき、ホントは一回吐かないといけないところを、僕は苦しいから、もらった途端にスーッって吸っちゃったワケ。それで、もろに水飲んじゃって、もうパニック状態。スタッフ数人がかりで僕を助けようとしてくれたんだけど、僕も力が強いから抵抗したみたいで。

ショーの俳優としての夢は「黒澤明作品に出演すること」と「三船敏郎と共演すること」だった。残念ながら前者はかなえられなかったが、「SHOGUN MAYEDA」では三船敏郎（徳川家康役）と共演をはたした。

Sho Kosugi

人間は考える時間が長いとそれに対する恐怖心が芽生えてくる

――もうホントにパニックになっちゃったんですね。

ショー　そのパニックが終わるとね、もう死ぬっていうのがわかる。トンネルに入るってのが。実際に、光ってるトンネルが見えたんですよ。あ、これヤバいな、もうダメだなって思っちゃうワケ。

――そこまでいくと完全に死の一歩手前ですよね。

ショー　でも、その瞬間は気持ちよくなっちゃうの。初めは苦しいんだよ。死ぬっていうのは、だいたいそうだと思うんだけど。初め、水飲んでパニクる、「もう息ができない、ダメだ～、苦しい～」ってなるけど、そのあとはホワーって、急に力の抜けた状態になる。そうすると目の前に、光のトンネルがワーッと。

――それって、天国に向かうトンネルというか、臨死体験みたいな感じなんですかね？

ショー　そうそう。サーッとなんか吸い取られていくような感じで。そのとき、これも何か神がかってるのかもわからないけど、なんか小さい魚がね、それも光ってるブルーの熱帯魚が僕の前を泳いだワケ。それを見て「なんでこんな小さい魚が呼吸できて、俺ができないんだ？　誰かがもう一度、リラックスしろって言ってんじゃないか？」と思ってね。で、急に我に返って、「死んじゃダメなんだ。いま、自分の状態はどうなんだ？　まだ借金も払ってないし、家内とか小さい子どももいる。これは戻らなくちゃいけない」って思ったの。だから、人間死ぬときは紙一重っていうのは、「あ、気持ちいいから逝っちゃう」っていうのと、「まだやらなくちゃいけない」って戻ってくるのと、どっちか。これ、絶対そう。

――魚が生還させてくれたっていうのは、まさに映画のワンシーンみたいですね。

ショー　そう、魚。それで戻ってきた。でも、僕は海から上がって水を吐き出してもらって、すぐまた海に戻ったからね。なんでそうしたかっていうと、まず第一にスタッフを何百人って待たせなきゃいけないし、ここでコワがって、一回病院に行っちゃうと、絶対に水に対して恐怖心が出ると思ったから。

――それだけコワい思いしたあとに、よく、すぐ行けますよね？

ショー　誰でも初めはコワいと感じるんだけど、それを乗り越えないと絶対に次はないから。なんでもそうなんだろうけど、考える時間が長くあると、絶対にそれに対する恐怖心が芽生えてくる。

――ちょっとトラウマみたいになっちゃうんですかね。

ショー　そうそう。長ければ長いほど、トラウマってのは出てくるよ。それがわかってるから、すぐその場でやったね。

――確かに、さっきオープン大会の話でも、やられたらその場で倍返しっておっしゃってましたけど、これが逆に、やられてちょっと時間経っちゃうとコワくなっちゃいますもんね。「俺、あいつには勝てないんじゃねえか」みたいな。

ショー　ダメダメ。コワくなっちゃう。自分が鼻折ってると思ったら、コワくなって、やらなくなっちゃうから。もうわかってても行くっていうぐらいじゃないと。

――それに近い話ですよね、その海の話も。

ショー　同じだよね。試合でもね、周りの人が『折れてるからやめろ』とかそういうこと言われると自分が弱くなるのね、必ず。「うわー、こんな曲がってる、大変だよオマエ。鏡見てみろよ」とか言われたら、だいたいそれで、みんなダメになっちゃうよね。

――そうか～。鏡を見ないで行っちゃったほうがいいんですね。

ショー　行っちゃったほうがいい。だって僕、二回鼻折ってるけど、そのうちの一回は医者の先生がいなかったから、自分で割り箸で元に戻した

もん。

——うわー、想像しただけで痛い！　悲鳴上げるような痛さなんじゃないですか？

ショー　あのね、鼻折るときぐらい痛いもんない。よくパチパチッて星が出るって言うでしょ？　折る折らないは別にして、鼻をぶん殴られたら、まず星が飛ぶね。で、目も充血しちゃって（視界も）見えない。もう真っ暗。ホントにこれはスゴい。

——いやー、ショーさんは役者以前に、格闘家ばりに人生を闘ってきてますよね。

ショー　ゼロからのスタートで、東洋人っていう偏見もあるなか、とにかくハリウッドで成功するために必死だったからね。

——並大抵の精神力じゃないですよね。８年間、通行人（エキストラ）で腐らずに。

ショー　でも、僕の場合は日本人の俳優みたいに日本で有名になってからじゃないもん。

——最初にアメリカでブレイクされてますからね。

ショー　そうそう。全然問題ないワケよ。

僕が成功したのは日本での実績やプライドがなかったから

——いま、けっこう日本からも俳優がハリウッド映画に出るような流れになってきてるじゃないですか？　そのへんはどういう感じで見てるんですか？

ショー　いいんじゃないですか。チャンスは誰にだってある。でもね、間違ってもらっちゃ困るのは、アメリカにずっと住んでやるっていうのはなかなか難しいね。ハッキリ言って、そのうち日本の俳優たちも日本に帰ってくるんじゃないかな。どうしてだかわかる？　それだけアメリカは、東洋人に対して映画がないワケ。次のオファーをずっと待ってるお金と、ファミリーとかがいたら、なかなかできない。

——う〜ん、なるほど……。

ショー　ホントにできない。日本から来て、みんな帰っていくのはそこ。１本で凄く有名になったからって、２本目、３本目すぐ来るかっていったら来ない。東洋人にそんなに甘くないもん。だから、そこでアメリカでホントに地に足着けてやるってのは、そんだけの生活力があって、向こうでやってもいいっていう何かがないとムリ。

——忍耐力、精神力が必要ですね。

ショー　うん。まず、精神力で負けちゃうよ。僕がなんでアメリカでやれたかって、日本での実績やプライドが何もなかったから。高校卒業して１年浪人してアメリカ行ったんだから何もないじゃん。映画だって出たことなかったし。だから、いまオファーが来ても、こんな映画やりたくないなんて勝手なこと言ってさ（笑）。ホントは今回、ひさびさに出た『ニンジャ・アサシン』も初めは、やるつもりなかったんだから。

——えー、そうなんですか？

ショー　うん、台本を読むまではね。だって、主役を聞いても全然誰かわからなかったし。「Ｒａｉｎって何、雨？」とかなんか思って（笑）。でも、プロデューサーが『ダイ・ハード』のジョエル・シルバーと、マトリックス三部作のウォシャウスキー兄弟っていうから、それだったら台本見せてもらおうかなと思って、送ってもらった台本を読んだら、「この悪役、おもしろいじゃん」って思って。僕が演じたのは、『小角（おづぬ）』っていう役（えん）の行者なんですけど、これは、もう「俺のために台本書かれてるんじゃないか」っていうぐらいの役だったから、引き受けたんであって。

——『ニンジャ・アサシン』は、かなり話題になったんじゃないですか？

ショー　凄い話題になりましたね、アメリカでは。アメリカは去年の11月ぐらいに公開で、その後、全世界で公開されて……日本が一番最後ぐらいだったのかな（今年３月〜５月に公開）。あの映画は２年前にドイツのベルリンで撮ったんですよ、３ヵ月間。それから僕、14本、ハリウッドからオファーが来たんですけど、全部お断りしました。

——なんで断っちゃったんですか？

ショー　やっぱりホントに自分がこれだと思ったやつじゃないと、あまりやりたくないんだよね、いまは（苦笑）。だけど、僕は、いまでも、日３時間練習してますから。『燃えよニンジャ』に出た32歳からお酒も、一切やってないし、肉類もほとんど食べないし。それは、いつどんな映画のオファーが来ても、すぐパッて出られるようにね。僕は、べつに自分の持ってる器を超えようとは思わない。ただ、自分の器は絶えずフルにしておきたいワケ。いま、ちょっと太ってるとか、足が痛いからとか理由にならないの。撮影するとき、右足が痛いからって言ったって撮影は続行されるんだから。

——今日お話を聞いていて、ハナから覚悟が違うというか、ショーさんがアメリカで成功された理由がよくわかった気がします。

ショー　いやいや、覚悟がどうかっていうより、むしろその状況以外のことができなかったっていうか……。でも、僕はよく占いの人に言われるの。「あなたは一度思ったら、それができるできないは別として、どんなに犠牲を払おうと必ずやる人だ、成し遂げる人だ」って。それはあるね。

——では、最後に今後の抱負をお願いします。

ショー　いま、僕がいちばんやりたいのは、息子のシェインと映画を一本撮りたいってことかな。詳細は話せないけど、いま、企画を練ってイチから全部やってますんで。

——期待してます！　今日は貴重なお話、ありがとうございました！

［10年７月５日／都内・某ホテルにて収録］

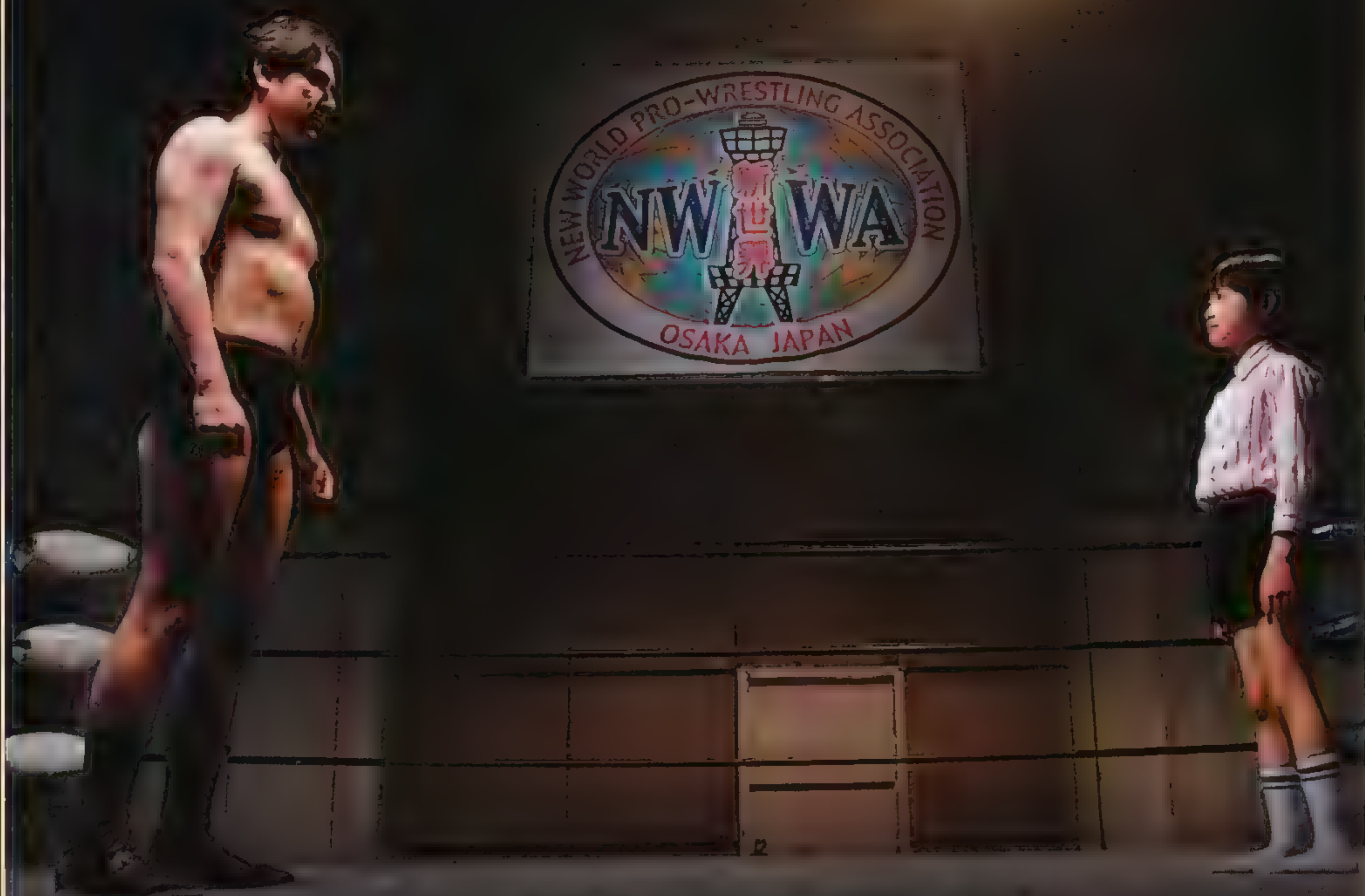
しょー・こすぎ■1948年6月17日、東京都出身。19歳で単身渡米、アルバイトを掛け持ちしながら大学を卒業。8年間の下積みの後、81年スタントマンとして参加した『燃えよニンジャ』で準主役に抜擢。以後、数々のハリウッド映画の主役を張り、日本人唯一のハリウッド100万ドルスターとなる。90年にはアメリカ映画『兜 Kabuto』をプロデュース。

Sho Kosugi

ショー・コスギ最新出演作!!

『ニンジャ・アサシン』

DVD好評発売中（税込3,980円）

韓国ポップス界のスターであるRainが主演（世界屈指の暗殺者・雷蔵役）を務め、今年3月に日本で公開された痛快アクション映画！ コスギは暗殺集団"小角一族"のボス、役小角（えんのおづぬ）役を熱演！

演劇とは人が死なない真剣勝負なんですよ

映画『お父さんのバックドロップ』の120パーセント壮絶な舞台裏とは!

宇梶剛士

プロレス映画を代表する作品といえば『お父さんのバックドロップ』!
というわけで、今回はなんと主演でプロレスラー役を演じられた宇梶剛士に直撃した。
苦難のプロレス修行からプロレスと演劇の意外な接点まで、おもしろ話炸裂。
「風車の理論」がまさかこんなところで……!

聞き手／松下ミワ　撮影／タイコウクニヨシ

——今日は、少し前の話になりますが、中島らも原作の映画『お父さんのバックドロップ』で主人公のプロレスラーを演じられた宇梶剛士さんに当時を振り返ってお話をおうかがいしたいと思います。

宇梶　もう何年前ですか？　5年前？

——04年公開なので、6年前ですね。

宇梶　6年前ね。

——そもそも宇梶さんはプロレスに対してはどんな思いを持たれてましたか？

宇梶　あ、俺、新崎人生の名づけ親なの。

——え、そうなんですか⁉

宇梶　うん。だからもうプロレスやる前からアイツのことは知ってますよ。本名は新崎健介っていうのね、アイツ。で、ちょうど健介さんがブイブイ言わせ始めてた頃だったんですけど、「リングネームつけようと思うんですけど、考えてください」って言われて。

——へえ〜。じゃあ、プロレス界と関わりがあるどころの話じゃないですね。

宇梶　だからあの頃まだユニバーサルで大塚くん、あれ、なんだっけ？　みちプロにいた。ど忘れしちゃった。

——アレクサンダー大塚さんですか？

宇梶　そうそう。彼が学生だった頃とか知ってたりね。そうは言っても、俺自体がプロレスをやるわけじゃなかったんで、新崎の応援だけって感じだったんだけれども、演劇をやりながら正直「プロレスってどうなのよ」ってのはあったんですよ。

——あまり好意的には見てなかった、と。

宇梶　正直ね。ところが、演劇やってるうちに何か自分で「演劇、演劇……」って考えるなかで、要するに「風車の理論」と芝居とが「一緒じゃん！」と思ったんだよね。

——「風車の理論」というと、猪木さんが提唱した闘いの論理ですよね。相手の力を最大限に引き出して、それ以上の力で相手を倒すことで、倒した相手をも輝かせるという。

宇梶　僕は演劇というのを真剣勝負だと思ってる。要するに、演劇は人が死なない、人が傷つかない立ち合いだと思ってるから。それはやっぱり間合いというものが非常に命になってくるし、演技のやりとりをしてると人と人とのあいだに必ずそういうものが介在するというのがわかるし。だから演技は一回必ず人が繰り出したものを受け止めてから相手に返す。相手もそれを要求するというのはまさにプロレスと一緒じゃないですか。

——確かにそうですね。

宇梶　つまり、演技において自分が輝きたいとか、自分をはっきりと人に見せてもらいたいときは、相手のリアクションがとても大事になるんですよ。たとえば俺が下向きながらボソボソとしゃべってるとするじゃん。仮に「昨日さ、スーパー行ったらタマネギが大安売りしてたんだよね」っていう話をしていたとするよね。

——ええ。

宇梶　そのときに聞いてるほうの人が下向いてたり、横向いてたり、枝毛切ってたりすると、引いて観てる人はそこで重要な話が行なわれていないんだなって感じるんですよね。ところが、俺が下向いて話しているのに、相手が「うん、うん、そうか」って神妙な顔でうなずいてたりすると、これがとても大切な話をしているように見える。だから、その場面によって俺の表現を際立たせてくれるのは、相手なんだよ。

——相手あっての自分の存在だ、と。

宇梶　だから俺が仮にもの凄い演技の達人だったとして、いくらいろんなことやっても、相手が受け止めてくれなければ、ど

んなことを表現したいかが霞んでしまうわけ。そういうことをずっと芝居をやりながらね。もう、10代からやってますから。厳しい先輩にも指導を受けたり、いろんな目に遭いながら、あるとき「風車の理論」というのを知って、これだ！ ってね。そういう芝居のやりとりを身近に言いきった言葉であったんで感動しましたよ。

――猪木さんって凄いですね（笑）。

宇梶 そのときに、自分のなかでいろんなものがワーって開いて、プロレスが大好きになってしまったんですよ。フルコンタクトとか格闘技にもいろいろあって、そういうの全部観たけどやっぱりプロレスが好きなんだよね。プロレスが"男の世界"だと感じるわけ。

――当初「プロレスってどうなの？」と思ってたときは……。

宇梶 （さえぎって）「なんでよけないんだ！」って思ってた（笑）。ただ、風車の理論という言葉の意味を理解していくなかで、相手の技を受けるために自分を鍛えるってのが、やっぱり男らしいと思ったんですよね。キツいけどね。

――いや、キツいでしょうね。

宇梶 だからプロレスラーを長くやってる人の身体の痛め方、三沢（光晴）さんのこともあったけども、思い出すたびに本当に心が締めつけられるような気持ちになるんですよ。プロレスという魂の表現というのかな。そういうふうに俺は熱く思ってるんですけどね。

――『お父さんのバックドロップ』の撮影をされてたのは、プロレスが好きになる前だったんですか？

宇梶 それが好きになったのと同じくらいなの。だから、わりと長いあいだ自分も身体が利いたから「俺だって鍛えりゃ～」って、そういうところがあるんだけど、肉体が衰えてくるとともに見えてくるものがあるから、生きるって悪くないんだよね。

――悪くない、ですか？

宇梶 それは、肉体が強いものだけが人間として優れているのならば、理屈で言えば生きれば生きるほど人生は悲しくなるってことでしょう。だけどそうではない、生きるべきなんだよ人間っていうのは。というのは、肉体が弱ったり、たとえば不自由になっていくほど、可能性が減っていくなかで、新たなものが見えてくる。新たな可能性が生まれてくる、それが人間なんだよ。だから、だんだん人間は生きてることが素晴らしいんだって思うようになるんだよね。もちろん若いときの美しさとか、溌剌さとかあるんだけど。だから俺若いときに美輪さんにさ、言われたんですよ。

――美輪さんって、美輪明宏さんですか？

宇梶 うん。「宇梶くん、若さってのは才能じゃないのよ。状態なんだから」って言われたの。俺にとっては当時は謎かけみたいなことだったんだけど。でもまあ、いまになれば謎かけでもなんでもなく、まさにそういうことなんだけれどもね。で、年を取ると、そういうことを誰でも等しく知ることになるわけ。だから磨くこととか、鍛えること、積み重ねていくこと、恋もいじめもみんな生きるためのレッスンってことだね。だから、あきらめたり、挫折もまた必要だし、そういうことを年取ると「なるほどな」ってなるんだよ。その頃にちょうど『お父さんのバックドロップ』と出会ったんですよね。

恋もいじめも生きるためのレッスン そう思えたときにこの作品と出会った

『お父さんのバックドロップ』はプロレスラーである父親とプロレス嫌いな息子の物語。息子になんとかカッコいいところを見せようと、最強の空手家に立ち向かう姿がなんとも感動的な映画となっている。

――じゃあ、宇梶さんにとって絶妙な時期だったんですね。

宇梶 そうですね。で、大日本プロレスの道場に通わせてもらってたんで、本物のプロレスラーというか、AKIRAさんとか大日本プロレスの皆さんに、直に稽古つけてもらうわけですよ。

――贅沢な稽古です。

宇梶 本物のプロレスラーがやってくれるわけ。そのときに、まるでいままで自分が想像していたことの先の先に、レスラーの鍛錬ってのがあるんだなっていうのをその場で見て思いましたよ。そこからは自分とプロレスがいい意味で、なんて言うのかな、自分のなかでプロレスってものが大きくなったよね。

――もっとプロレスが好きになった、と。

宇梶 チョップの練習なんて、「背中のこのへんの筋肉にバシッとやったほうがいいですよ」って教えてくれるんですよ。で、こっちもバシバシ入れてるんだけど、「おもいっきりやっていいですよ」とか「どんどんやっていいですよ」って言うのよ。でも、こっちはもう「イヤです」って。だって痛いんだもん（笑）。

――ワハハハ！ 自分の手のほうがダメージを負ってるんですね。

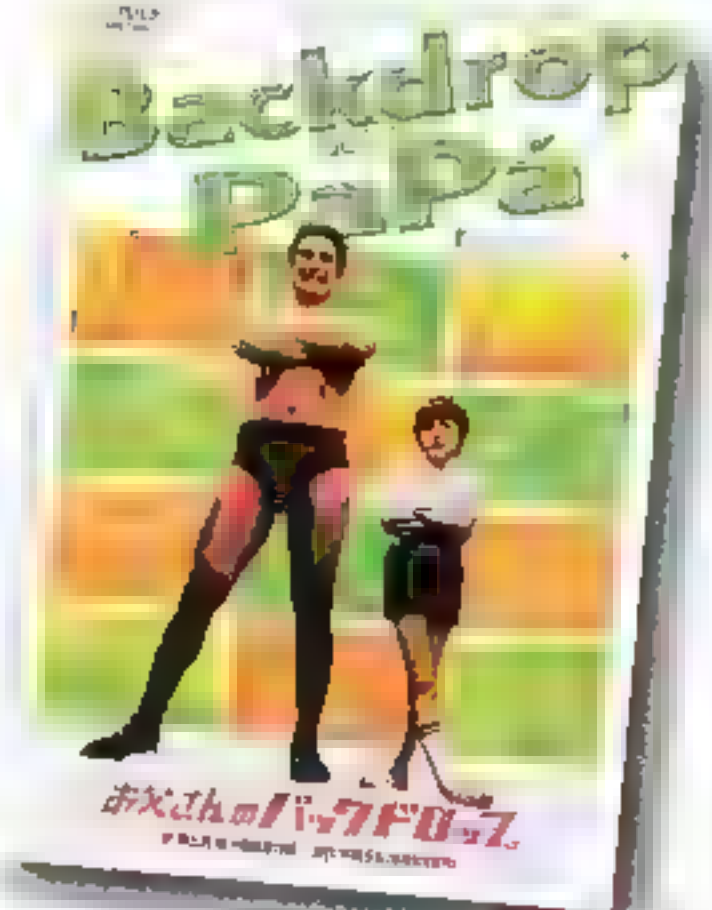
宇梶 だって、板をおもいっきりチョップするようなものだからさ。ヘッドロックなんかしても、こっちの腕が痛くなっちゃうくらいで。向こうはいくら俺がグリグリやっても「もっともっと」って言うわけだから。

――練習になってるんだか、なってないんだか（笑）。

宇梶 だから、好きだったのはドロップキックだけですよ。

――ほう。ドロップキックは得意だったんですか？

宇梶 ドロップキックはやり方を教わってるときに「たぶんこれ、僕できます」って言ったんですよね。「やったことあるんですか？」って言われたんで、「ないけど、凄くイメージのなかでできる気がするから」って言って。「じゃあ、やってみてください」って言われて一発やったときに、もう全員に拍手喝采だったもん。ドロップキ

Takashi Ukaji

ぎっくり腰をおして演じた宇梶剛士（とエキストラ）の熱演をもう一度観たいという方は、ぜひDVDで！ イカした床屋のらもさんもぜひチェックしよう。
発売元／アミューズソフトエンタテインメント株式会社
税込価格／5,040円

ックの天才だって言ってくれました（笑）。

──ワハハハハ！　ちなみに、肝心のバックドロップはどうだったんですか？

宇梶　いやー、ドロップキックは得意でしたけど、バックドロップは凄い練習しましたよ。最初はマットを丸めて人に見立てて練習したんですけど、あれって投げたあとにブリッジみたいなかたちで残らないとダメでしょう。だから、それができてからようやく人とやらせてもらうわけなんだけど、みんなイヤなわけですよ（笑）。

──けっこう危険ですよねえ、いくらプロが受けるとはいえ。

宇梶　それでも皆さん、何も文句言わずに代わる代わる俺の〝生け贄〟じゃないけど、練習台になってくれてね。ちょっと「うーん」って顔は読み取れたけど、本当にありがたかったし、日頃ちゃんと鍛えてる人たちだからこそ受けてくださったのかなと思って、またそこで感動しましたし。

──ただ、プロレスの技って受ける側の人の協力がないと難しいですよね。

宇梶　だから気持ち合わせて「せーの」でいかないとね。相手を殺すためにやってるわけじゃないから。

──そういうふうに技が成り立ってることは、もともとプロレスを観ててご存知だったんですか？

宇梶　歳とともにだんだんわかっていきましたね。でも、「そうなんだ」って頭でわかったくらいのときに、身体でわからなきゃいけない状況になってたんですけどね（笑）。

──なるほど（笑）。そういう意味では身体もだいぶ鍛えられました？

宇梶　ケビン（山崎）さんのところで鍛えましたよ。仕事もやりながら舞台もやりながらだったんだけど、トレーニングが足りないとよくないから、夜わざわざ開けてやってもらってね。そのときに、エンセン井上が隣にいたんだよね。

──おー！　エンセン選手が。

宇梶　誰もいなくなったジムで、エンセンさんと俺とトレーナーさんとで延々トレーニング。

──豪華な画ですねえ。エンセンさんとは何かお話されました？

宇梶　いや、そこで会っただけ。もう入れ墨だらけだし、めちゃめちゃ怖い顔してるから、とにかく知らないふりしようと思って、顔合わせなかったんだけど（笑）。

──宇梶さんの迫力をもってしても（笑）。

宇梶　まあ、トレーナーとかいるから二人っきりではないんだけど、殺意のオーラみたいのが出てるわけだよね。だから「めっちゃこえーな、これ」と思って、汗ふいて顔あげたときに向こうも見てたりして。でも5〜6回会ったら、どちらからともなくあいさつするようになったけどね。

ジリ貧のプロレス団体「新世界プロレス」を救うために、宇梶演じる下田牛之助はやむなくヒール転向をするのだが、そのペイントがまた凄い！　写真の金髪はその名残だが、まさに全身全霊身体を張った作品となっている。

──そんな交流がありましたか（笑）。それで、もっと映画の話をお聞きしたいんですけど、映画のなかでは原作者の中島らもさんとも一緒にご出演されてましたよね。

宇梶　ああ、らもさんね。

──どんな話をされました？

宇梶　どうだったかなあ。

──『kamipro』の昔のインタビューでは武器の話がメインでした（笑）。

宇梶　そうだよね。だから俺「もう、武器はやめたほうがいいよ」って言ったんだけどねえ。らもさんがサックとか持って「ガーッ」ってやってたりしてたからさ。

──そんなことしてたんですか！

宇梶　もう、らもさんとは若いときから行き会った仲なんだけど、俺のことおもしろがってくれてよく酒とか飯とか食わせてくれたんだよね。だからなのかわからないけど、『バックドロップ』もやらせてもらうことになって。

──らもさんが宇梶さんを推薦されたわけですか？

宇梶　詳しくはわからないけど、そこは俺もあまり聞きたいところじゃないからね。『なれずもの』って本が出てて、そのときに『バックドロップ』のことも含めてらもさんと対談してるよ。もしよかったら読んでみて。でも、優しい人だよね。

──プロレス大好きで、この映画公開前にちょうど亡くなられたって感じだったんですよね。

宇梶　そうだったね。もうあれから6年も経つのか。じつは、その『なれずもの』で俺と対談した9日後とかに死んじゃったんだよね、階段から落ちて。

──そうだったんですか……。

宇梶　まさか死ぬとは思ってないし。

──その前にこの作品が生まれたことは本当に奇跡的ですよね。

宇梶　いまとなってはの話だけどね。まあ、らもさんとの話はそれを読んでよ。

──わかりました。その『バックドロップ』で宇梶さんが一番大変だったことはなんでした？

宇梶　そうだなあ。やっぱ、肉体作ることでしたよ。監督の李（闘士男）さんがそういうことは本物同様にやりたい人だったからね。だけど、それで鍛えすぎちゃって本番の数日前に背筋の肉離れやっちゃって。あと、ぎっくり腰も。

──ぎっくり腰⁉　バックドロップをやるには致命的なケガじゃないですか！

宇梶　それで撮影に臨んだからさすがにキツかった。毎日運ばれて帰って、そのまま医者行って。夜中でも診てくれる人がいたのでそこ行って治療を受けてから帰って。で、撮影って朝早いでしょ。だから毎日がそういう日々でしたね。

──じゃあ、注射を打ちながらの撮影だったんですか？

宇梶　いや、注射はしなかったね。整体の先生で身体をゆるめてくれる人がいて。だから悪くしたとこは触らずに、その周りをゆるめることによって自然治癒を図るんだったかな。あと、アイシングとね。

　でも、普通なら完全にドクターストップですよね。

宇梶　もう人間ストップだよ（笑）。

──ワハハハハ！　でも、ぎっくり腰って動けないって聞きますよ。

宇梶　歩けないよ、足が一歩も出ない。

──ましてや、コルセットとかできれば

本番数日前にギックリ腰をやって ほんと「なんの罰だよ」と思って（笑）

いいですけど、レスラーだからコルセットも丸見えになっちゃいますよね。

宇梶　そうそう、試合やるわけだからね。だから、本当「なんの罰だよ」と思って（笑）。いまは試練だったと思えるけど、あのときは、人になったらやっぱ涙が出たもんね、悔しくて。

――そうだったんですか……。

宇梶　せっかく自分のまんま出られるというか、そういう数少ない機会を与えてもらったのに。ただね、そのぶんまた違うものが生まれて、「何くそ」っていうものが自分のなかで生まれたんだよね。そういうものが映ってるなって思うときもあったから。ま、それは俺にわかればいいことなんだけど。

――いや、それを聞いてしまったからにはもう一回観たいですね。

宇梶　ぜひ観てくださいよ。あと、（エヴェルトン・）テイシェイラと最後に試合するんだけど、そのときに当たってはないんだけど、かすっちゃったんだよね。そのときに景色が完全に真っ白になっちゃってるときがある。そのままカメラは回ってて自分も演技してるんだけど、何も見えてないの、貧血みたいになって。

――それはOKテイクのものですか?

宇梶　そうそう。飛んでるわけじゃないんだけど、なんかわかんなくなってるというか。

――そんな状態で一番肝心なラストシーンを撮影してたんですか!

宇梶　あのときはワンカット撮ったらリング下に降ろしてもらって。で、担架台みたいのがあったから、そこでバーって冷やしてマッサージ受けて。映画ってやっぱりライティングとかセッティングに時間がかかるじゃない。だからそのあいだは休憩してるんだけど、そういうのが終わったらまた立って、バンバンバンってやって、「カット」って言われたらまたダウンして（笑）。

――危険すぎます!

宇梶　もうわかんないのよ。よけいなこと考えたらそこで終わってしまうから。だけど、エキストラがいてね、その状況見ながら撮影やってるから普通に応援してくれるわけ（笑）。「宇梶、負けんな!」「頑張れ!」って。だからね、じつは客がいいんだよ。もう一回観てもらったらよくわかるから。

――じゃあ、みんな本気でケガをおしてでも闘っている宇梶さんのことを応援してるわけですね。

宇梶　だって、役者じゃなくてエキストラなのに泣いたりしてるんだもん。そういう人たちにも支えられて『バックドロップ』はできたのかなって思ってますね。

――本当のストーリーとは別物の感動というか。

宇梶　まあ、似たようなもんだよ。

――いやホントに奇跡的な映画ですよ。この役を乗り越えることによっていいステップになったとかありますか?

宇梶　まあ役者だから、若いときは主役になって、スターになりたいとか、誰でも持ってるのかもしれないし、演技とは違うところで個人的に毒々しいものはあったと思うんだけど、芝居やっていくにつれてそういうものがどんどんなくなっていって、やっぱり役をやるというのがまず一歩だよね。その一歩が踏めないかぎり、二歩目、十歩目、百歩目はないっていうことにどうにかなっていったんだけど。

――一歩目を踏んだことで主役にたどり着けた、と。

宇梶　その、いわゆる主役というものはやったことがなかったし、役者やってるんだから「一度はそういうものをやらせてもらってもいいよな」って思ったときにこの話があったから、それはそれで落ち着きができてきたのかもしれないし。また主役から見える景色って違うからね。

――やっぱり違うんですね。

宇梶　構造的には、主役以外の役者ってトップを下から見てる感じなんだよ。だけど、主役はすべての役が自分と関わりのある役じゃん。たとえばいま撮影しているドラマでいえば、俺なんか主役の設定上の家族とは一切関わりがないわけじゃん。だけど、主役の人は家族とも関わりがあるし、俺とも関わりがあるし、出てるすべての人と関わってる。そういうものを体験したときは、「あ、なるほど」と思ったね。

――役割が全然違う、と。

宇梶　うん、それにやりすぎるとかえってわかんなくなるから。主役の人は細かいことやらないほうが際立つのかなとか、そういうことを俳優としての体験としてできたというのは、一つ大きなものを得たというふうに思いましたけどね。

――でも、一つの映画のなかで、これだけの舞台裏があるのをおうかがいすると、役を演じるというのも本当に闘いだなという印象を受けました。

宇梶　そうでしょうね。人を倒すためのじゃなくて、人を活かすための闘い、立ち合いみたいなことがあると思ってますよ。

――なるほど。では最後にくだらない質問ですが、『バックドロップ』でプロレスラーを演じられて、実際にプロレス団体からオファーがきたりしませんでしたか?

宇梶　ワハハハハ! ないない（笑）。さすがにないな。それに俺はやっぱり役者の世界で真剣勝負をしてますからね。

――失礼しました（笑）。では、宇梶さんのこれからの闘いにも刮目してまいりたいと思います!

【10年6月29日／神奈川県・緑山スタジオにて収録】

うかじ・たかし■1962年8月15日、東京都出身。館野旦や菅原文太の付き人を経て、美輪明宏主演『青森県のせむし男』で初舞台を踏む。『ひとつ屋根の下2』「新選組!」などテレビ、映画、舞台問わず出演作品多数。なかでも映画「お父さんのバックドロップ」は見事にプロレスラーを演じきった傑作となっている。

「ゴジラ」に出演できたことは
最高の思い出になっているぜ!

映画『ゴジラFINAL WARS』

地球防衛軍「新・轟天号」荒くれ艦長が語る

映画男塾!

ドン・フライ

PRIDE男塾塾長として、その男っぷりで格闘技ファンを魅了してきた我らがドン・フライ。
口ひげを蓄えた男らしい風貌は映画関係者の目にも止まり、映画『ゴジラ FINAL WARS』に出演。
地球防衛軍「新・轟天号」の荒くれ艦長役を熱演したことをご存知のファンも多いことだろう。
そこで今回は"映画俳優"ドン・フライとして、『ゴジラ FINAL WARS』や
「殴り者」の裏話をたっぷり聞くとともに、フライの映画に対する思いを聞いてみた。

聞き手／石井史彦　撮影／黒田史夫　構成／[illegible]

俺はグッドガイがバッドガイをやっつける映画が好きなんだよ

お元気ですか? 4月にナッシュビル空港で偶然お会いした者です。今日はマサ斎藤さんの紹介でインタビューさせていただきたいと思いますのでよろしくお願いします。

フライ たしかストライクフォースのナッシュビル大会のあと会っただ[illegible]。[illegible]ス・サイトーから「空港で会った日本人からインタビューの電話があるからよろしく」って聞いているよ。

——今日は映画俳優ドン・フライについてうかがいたいんですよ。

フライ 映画俳優の俺かい? ハ、ハッハ。オールライト!

あなたは04年に『ゴジラFINAL WARS』に地球防衛軍の艦長役で出演しましたが、これはどういったいきさつがあって出演することになったんですか?

フライ リュウヘイ・キムラさんという人から電話があって「ゴジラの映画に出ないか?」ってオファーをもらったんだ。それを聞いたとき凄く興奮して、すぐに撮影が始まるように祈ったんだよ。

それまで俳優経験はあったんですか?

フライ まったくないよ(笑)。本当にラッキーの一言だよ。

出演する前から『ゴジラ』は知っていましたか?

フライ もちろんさ! 親父がエアフォースに従事してでね、子どもの頃、沖縄に駐留した家族のテレビが『ゴジラ』の8ミリのフィルムを持って帰国したんで、それをみんなで一緒に観てたんだよ。ゴジラはグレートファイターでありながらユーモアのセンスを持ってるところが大好きだったんだ。

『ゴジラ』出演のときは、どんな思い出がありますか?

フライ みんなにはとてもお世話になった。東宝スタジオで撮影したんだけど、運転手と通訳をつけてくれて、大スターのように[illegible]してくれたんだ。おかげで最高の時間をすごせたよ。

——監督からはどんな演技をしてくれと言われましたか?

フライ まずはちゃんと台詞を覚えろって言われたよ。それにあせらずにしゃべるようにってね。最初は戸惑いもあったけど撮影が進むにつれて上達し、終わる頃には俳優らしく役をこなせるようになったんだ。

『ゴジラ』には船木誠勝選手も出演していましたが、交流はありましたか?

フライ フナキはグレートファイターなんでファンだったんだけど、実際に会ったのは『ゴジラ』が最初だったんだ。それがキッカケとなって、その後アメリカで撮影された『オナー』という映画でも共演している。その映画のなかでは、船木の頭にガンを突きつけているシーンもあるんだよ(笑)。それなのに彼はバカ丁寧な態度で接してくれてたよ。

——『ゴジラ』のチャイニーズ・シアターでのワールドプレミアに出席したとき、どう感じましたか?

フライ 最高だったよ! 東宝のスタッフがカリフォルニアまでの航空券を用意してくれて、最高級ホテルに宿泊し、リムジンで送り迎えをしてくれてたんだ。同行した妻も綺麗に着飾ってね、とても美しかったよ。

まさにハリウッドスターの扱いですね。

フライ まさにそのとおりだよ(笑)。

[illegible]で高山善廣との伝説の殴り合い。お互いが[illegible]シーンを映画『殴り者』でも、本人たちが[illegible]

PRIDE制作会社であるDSEが製作した映画『殴り者』にも出演していますが、どんな思い出がありますか?

フライ 俺はヴァンダレイ・シウバのファイトスタイルが好きだったんだけど、その撮影のとき初めて話したんだ。彼が「チューインガムはどうだい?」って取り出してね。まるで子どもに戻った気分で、二人でチューインガムを噛みながら雑談したのを覚えているよ(笑)。リングでの凶暴なヴァンダレイからはまったく想像できないほどいい奴で、おそらくいままで知り合ったMMAファイターのなかで一番って言ってもいいぐらい[illegible]。

——ヴァンダレイの性格は素晴らしいですよね。あの映画のなかで、PRIDEでの高山善廣選手との壮絶な殴り合いを再現するシーンがありましたが、あのシーンを演じたときの気持ちは?

フライ 最高の気分だったよ! 実際にPRIDEで殴り合っているからね。ディレクターからは「PRIDEのときと同じ試合をもう一度してもらえますか?」って言われてね、お互いに殴り合ったんだよ。タカヤマさんは真のプロなんで、殴り合いのシーンでもお互いを信じ合え、リアルのシーンのようにできあがったんだ。タカヤマさんという素晴らしい男と共演できて光栄だったよ。

映画俳優に転向するプロレスラーは何人もいますが、あなたも本格的に映画俳優になろうとは思いませんでしたか?

フライ 映画の"スター"になりたかったかどうかはわからないけど、保険も含め生活費を稼がなくちゃいけないからいつでもチャンスがあれば俳優という仕事もしていきたいというのは事実だよ。妻にも勧められているしね(笑)。ただし、「俳優」と呼べるようになるまでにはちょうどプロレスリングのファイターになるのと同じように、誰にでもすぐになれるものではないし、また何年もの修行が必要になってくる。またそこからスターという座をつかむには大きな山を登り詰めないといけないんだからね。

——なるほど。ところで子どもの頃はどんな映画を観ていましたか?

フライ グッドガイがバッドガイをやっつける映画が好きだったね。ジョン・ウェイン、チャールズ・ブロンソン、ブルース・リーが出てる映画、それから『七人の侍』も大好きな映画の一つだよ。

憧れていた映画俳優や映画のキャラクターはいますか?

フライ ジョン・ウェイン、チャールズ・ブロンソンら[illegible]クだったね。とにかく常に正直で、決闘でも絶対にうしろから突然拳銃を打つなんて卑怯なことをしない役に憧れたよ。ブルース・リー、チャック・ノリスらは素晴らしいマーシャルアーツの映画を作って世界に広めたよね。これにみんな影響を受けたんじゃないかい?

——今後も映画の仕事は続けていきたいですか?

フライ 今後のチャンスがあればぜひ映画の仕事をしていきたいね。役柄は「正直者」であればなんでもいいんだ、それが善人でも悪人の役でもね。とにかく信用できないようなヤツはもちろんのこと、そういう役自体も大嫌いなんだよ。フェアじゃないのがダメなんだ。ギャングスターという悪役でも、クリーンであればいいんだよ、ガハハッハッハ。

【10年7月10日/国際電話にて収録】

DON FRYE■1965年11月23日、米国アリゾナ州出身。大学時代にレスリング全米選手権を制覇。96年にMMAデビューし、いきなり『UFC8』で優勝。UFCでは計3度の優勝を誇る。その後、PRIDEや新日[illegible]

井筒和幸監督の最新作『ヒーローショー』でのあまりにリアルな暴力に圧倒された。この映画でリアルなのは暴力だけでなく等身大の人物として青年を描いた非常にリアルな青春映画でもあった。ヒリヒリするほど痛く苦い、かつて自分も味わったことのある感覚がよみがえるような作品であり、また自分も一歩間違えると同様の事態に至っていたかもしれなかったと想像し、背筋がゾワゾワした。

この映画の暴力は、デパートの屋上やスーパーのイベントスペースで行なわれる戦隊モノのヒーローショーに端を発する。ヒーローショーのステージで怪人が、ヒーロー戦隊のレッドにマウントパンチで、レッドのマスクからはみ出た口が血だらけになる。ヒーローショーの殺陣にはありえない場面だ。彼らは本当にケンカを始めてしまったのだ。子どもや母親はどん引きでステージは目茶目茶になってしまう。怪人役の男が司会の女の子と恋人同士で、レッドが司会の女の子と浮気をしていて、それが怪人役の男にばれてしまったことが原因であった。怪人はレッドを殴ったものの、やり返されてしまう。

その後、怪人役の男は仲間を呼んでレッドらを脅し金を要求する。レッドらは地元である千葉・勝浦で仲間を集めて、怪人グループを返り討ちにする計画を立てる。こうして暴力の連鎖が進行していくのである。

暴力の連鎖の恐怖は、問題がその場限りで終わらないことだ。その場で相手を負かせたとしても、再びタイマンを挑んでくるならまだ性質のいいほうで、不意打ちを仕掛けてくるかもしれないし、刃物で刺されるかもしれない。味方を何人も呼んで集団暴行で仕返しに現われるかもしれない。さらには車を壊されたり、家に放火されたりする場合だって考えられる。そうなると手の施しようがない。仕返しには仕返しで応じていたら最終的に命のやり取りに行き着いてしまうことだってあり得る。

この映画からはそういった恐怖が、ほんの些細な諍いから地続きであることが示されている。

最終的に怪人役の男は山に生き埋めにされてしまった。こうして彼らは誰も望んでいなかったにもかかわらず殺人の当事者になってしまうのだ。その場の乗りや空気が、法律の何倍もの重さとなるのは、とくに若者集団ではよくあることである。空気を壊す弱気な発言や態度は即座に否定され「フルボッコだぜ」「ぶっ殺す」「勝浦最強」などという言葉が空気を支配しブレーキが効かなくなってしまう。殺されるにしても菅原文太やビートたけしなど、それなりの貫禄や風格のある男に殺されるならまだ納得できるが、殺すのがチンケなギャル男たちだった。

そんなの心底、嫌だ。殴られるだけでも凄くガッカリする。（ここまでが物語の前半部分だった。）

さて、この映画の主人公はお笑いコンビ、ジャルジャルの二人である。ジャルジャル後藤は、勝浦最強と言われた元自衛官で現在配管工、ジャルジャル福徳は売れない漫才師でヒーローショーのバイトをしていて、殺された怪人役の男は漫才の元相方であった。前半、ジャルジャルの二人はまったく物語の中心ではなく、事件の中心人物でもなんでもなかった。後半はやっとこの二人の物語となる。被害者と加害者の立場であるが、同じ決定的な夜をすごした二人としての物語なのだ。

殺人事件が起こっても、世間はまったく

関係なく日常の時間が流れている。その現実の恐ろしさと孤独を痛感させられる。消費者金融の受付の女は、福徳が漫才師だと知って無邪気にネタを見せてくれと要求し、水族館のイルカショーでは普通にイルカがショーをして観客は興奮している。これがリアルな世界だよといわんばかりであった。

この映画では日常世界をリアルに描くばかりでなく、登場人物も徹底的にリアルに描かれている。自分がたまたまジャルジャルを知らなかったという理由もあるが、登場人物が本当にその人そのものにしか思えず、この映画の中以外の時間、いま現在も千葉や東京で何かやっているんじゃないかと想像させる。後藤は暗い目をして警察の厄介になっているんじゃないか、福徳は結局田舎に帰ったが、とくにやることもなく反省も中途半端なままゲームでもしてまた東京に出ようなんて考えているんじゃないだろうか。

この登場人物のリアリティはどこに由来するのかというと、登場人物の意思を尊重していることによる。この人物はどんな言葉を話し、どう行動するのか徹底的に考え抜かれた見事な脚本である。腕のない作家は登場人物の意思を無視して自分の意思を登場人物に押し込もうとする。その結果「なんでこの人をこんな行動を?」と首を傾げたくなる場面が生まれる。しかし、この映画の人物造形はシナリオライターの頭から出た発想だけではないと推察する。

この映画の出演者はジャルジャル以外ほぼ無名の若者ばかりだ。1ヵ月という長いリハーサル期間で、おそらく場面場面、演劇の即興的に役者が自ら自分の役に対して発案して作り込んでいったのではないだろうか。

とくに東京、勝浦ヤンキー同士が一堂に会する場面などで、場面としての方向は決定された上で、演技の内容を役者各自が発案して最終的に井筒監督がOKを出すという形式で練り込まれていったものと想像する。というのもロマンポルシェ。のロマン優光さんが、ユンボのオペレーター役の飯島洋一さんにお会いした際に、セリフは自分で考えたとの裏話を教えてくださったからだ。井筒監督は役者の自発性を促す演出をしていたと思う。

勝浦側のヤンキーが海辺に集合する場面がある。その際、一番下っ端のギャル男がスクーターに自分の女を乗せてくる。これからリンチに行こうというのにどうしようというのか。するとギャル男は「ほら男しかいねえだろ。な、わかったなら帰ってろ」と言って先輩ヤンキーが見ている中で彼女とディープキスをする。「お前、何やってんねん!」というお笑い的な突っ込みが入るわけでもなく、ベチャベチャと長いキスをなんともいえないへんな空気のまま千葉のヤンキー連中全員は黙って見ている。

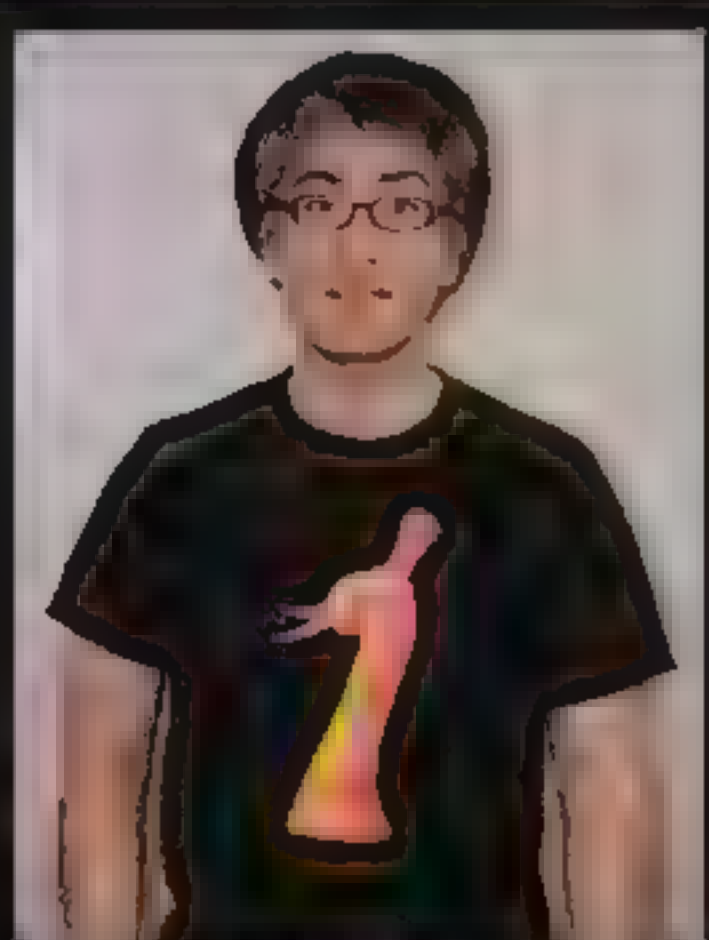
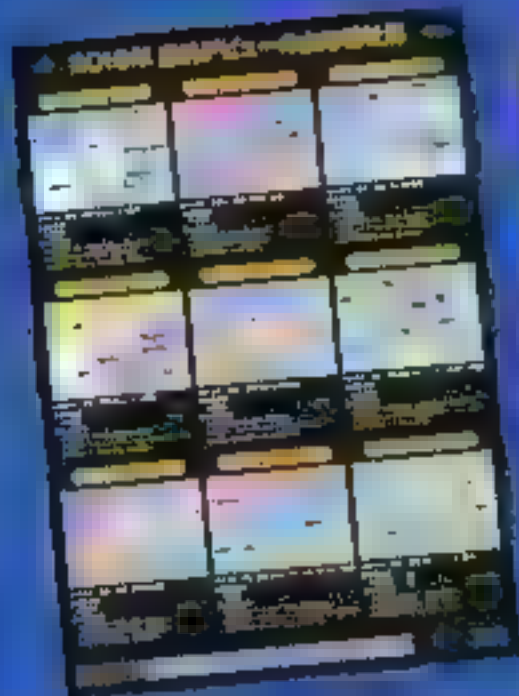
この空気の読めなさ、頭の悪さの表現、全編に渡ってこのようなゾッとする凄い表現が列挙されている。とくに現実社会を舞台にする物語においては、現実の写し絵としての物語と、作者の創作物としての物語のせめぎ合いが存在する。これはリアリティのラインをどこに引くかという問題でもある。井筒監督は他の人の映画作品を鑑賞する際に常にリアルにこだわっていた。極端に言えば「リアルじゃない」=「駄作」という見方をしていた。しかし、創作物は作者のサジ加減でいくらでも、どんな表現でも可能であり、ラインの引き方によっては作者のなんでもありの世界にすることもでき、どんな絵空事のドラマも描ける。しかし鑑賞者は現実を生きていて、その現実社会や実在の人物との問題に向き合っている。『ヒーローショー』は可能な限り、ドラマを現実に寄せて描こうとしている。

暴力の連鎖の恐怖は、問題がその場限りで終わらないことだ

作者には描きたいドラマや場面があり、それを作者の表現の都合で、現実をゆがめる場合が多々ある。ドラマにおける「ご都合主義」と悪く言われる行為である。作家は自分の描きたい場面をできる限り物語における現実の場面にそぐうように工夫を凝らす。それがプロとしての腕の見せどころでもある。腕のない作家はたいしてそんなことに神経を払うこともなく適当に処理してしまう場合が多い。そういった作品には偶然の出来事でドラマが構成されているなどの特徴がある。そうして嘘臭いドラマが完成する。ここは大切なポイントなので作品鑑賞の際には注意を払っていただきたい。『ヒーローショー』は井筒監督がいかに確かな表現をしているのか、現実と誠実に向き合っているのか確認できる作品でもある。

映画『ヒーローショー』は東大阪集団暴行致死事件という二人の学生が9人の若者に集団リンチの上に生き埋めにされた実際の殺人事件をモデルにしているようである。ちょっと調べてみると、確かに事件の骨格がとても似ている。また、井筒監督はヤンキーの喧嘩映画をこれまでも得意としてきたが、ここ数年のヤンキー映画で描かれるお気楽な暴力描写、とくに品川監督の『ドロップ』で、イケメンヤンキーが草野球感覚で繰り広げる暴力に対する批判で『ヒーローショー』を製作したそうだ。かつてヤンキー映画というジャンルを切り開いた井筒監督には絵空事ではない暴力を描く必要があったのだ。暴力が徹底的に陰惨に描かれているのはそのためである。映画の感想をネットで検索すると評価が真っ二つで、印象では7対3の割合で否定的な評価が目立っていた。お笑いコンビ・ジャルジャルを目当てに映画館に出かけたファンがどん引きし、監督の真意がまったく伝わらず地味で退屈な暴力映画と見なされていた。残念だ。

映画に登場する彼らがなぜこのような恐ろしい事態を招いてしまったのかと言えば「調子こいていたから」「だらしなかったから」としか言いようがない。若い時代にだらしなくしたり、調子こいでトラブルを起こすのは極々普通のことだ。たいていの場合は大事に至らずに収束するが時折事件が発生しニュースで報道されることも珍しくない。過去に自分が招いたトラブルが集団リンチ殺人に発展しなかった幸運を噛み締めるばかりだ。へんに血の気が多くなくてよかった。

間違いなくおもしろい、あらゆる意味で大傑作、だけどどうしても好きとは言えない映画である。韓国映画には『チェイサー』『息もできない』『殺人の追憶』『オールドボーイ』など暴力映画の大傑作が何本もあったが国境や字幕といったフィルターのおかげか受け止めやすかった。しかしとうとう国産の凄まじい暴力映画が誕生し、受け止めようにも戸惑いのほうが大きい。映画を見てここまでの戦慄を覚えたのは初めてだ。

こいずみ・ともひろ■前号の闘うマンガ特集にも登場した、童貞青春マンガの第一人者。映画イベントも開催。短編集『青春☆金属バット』は映画化されている。現在は新潟在住。

7.5『K-1 WORLD MAX 2010』

-63kg Japan Tournament FINAL
-70kg World Championship Tournament FINAL16

今年のベスト興行候補！

MAXライト級大、大、大爆発!!

んあ～
泣くな久保きゅん！
おもしろかったぞ!!

K-1の新ジャンルとして誕生した63kg級。
5月の開幕戦こそ盛り上がりはいまいちだったものの、
決勝トーナメントは手に汗握る攻防、そしてKO決着の連続で大盛り上がり!
頼もしい新世代の台頭……K-1の未来は明るいぞ!

K-1の歴史を塗り替えた
闘うペンキ職人
K-1
Champio
中野舗装
JOP
モース

「僕と久保くんはこれから魔裟斗&小比類巻選手みたいなライバルになると思います」

『K-1 WORLD MAX 2010』63kg級日本トーナメント初代王者

早くも今年のベスト興行候補に挙がっている7.5『K-1 MAX』代々木大会。その激戦続きのトーナメントを制したのは、弱冠22歳の"闘うペンキ職人"大和哲也！このK-1ライト級確立の立役者の喜びの声をお届け！

聞き手　高崎計三　構成／鈴木祐　試合写真　今村陽子

——大和選手、優勝おめでとうございます！

大和　ありがとうございます！

——いやあ、昨日のワンデー・トーナメントは凄かったですね。それを制したいまの心境は？

大和　ホッとしたっていうのが一番強いですね。「やったなあ、よかったなあ」と。

——まずは簡単に試合を振り返っていただきたいんですが、大会前、1回戦の裕樹戦はみんなが「ここがカギになるのでは」と言ってました。

大和　僕もそう思ってましたね。いきなりサウスポーでこられて面食らって、最初に左ストレートを目にもらっちゃったんですよね。それで目がかすんじゃって、距離感がわからなくなったんです。それで左ストレートを狙ってるのがわかったんで、絶対左フックを合わせようと思って。途中で目も治ったんで、狙った左フックでKOできました。

——狙ったとおりですか！　あそこで早い時間で勝てて、楽になった部分はあったんじゃないですか？

大和　そうですね。ローのダメージもなかったですし。

——準決勝は才賀紀左衛門選手。紀左衛門選手が上がってくるとは……。

大和　いや、普通にやったらナオキック選手だと思ってたんですけど、トーナメントって何が起きるかわからないじゃないですか？　どっちが来るかわからないなとは思ってました。対策はナオキック戦を中心に練ってましたけどね。

——待っているあいだに試合は観ましたか？

大和　観ました。紀左衛門選手ならいつもどおりやれば勝てると思いましたね。でも、やってみたら強かったですよ。空手上がりだけどジャブも速かったし、パンチも強かったです。

——でもKOしましたよね（笑）。

大和　はい（笑）。左フックが冴えてましたね。キックの頃から僕を見ている人には右ストレートのイメージが強いと思うんですけど、K-1になってからは左ボディと左フックが得意技ですね。僕は右があってこそ左が生きると思ってるんで。

——そして決勝は久保優太選手でした。これは予想どおり？

大和　来るだろうなと思ってましたね。向こうが少しデビューが早くて、もともとは階級が違ったんですけど（大和が05年7月でライト級、久保が同年1月でフェザー級）向こうはバババッと駆け上がって、いつかやるだろうなとは思ってたんですけど、それがK-1という大舞台になったという感じですね。

——感慨深いものがありましたか。

大和　初めてなんですよ。リングに上がったとき、僕は緊張しちゃうんでいつも相手の目を見ることは絶対ないんですけど、今回は無意識に久保くんの目をにらんでて、客観的にもう一人の自分が「気合い入ってるな」っていうふうに見てました。

——久保選手は花道でもの凄くニコニコしながら入場してきたんですけど、それは見えてました？

大和　いや、それは見えてなかったですね。余裕だと思ったんですかね（笑）。

まあ、久保選手なりのリラックスだと思うんですけどね。試合は、いきなり序盤からダウンを奪われて、大ピンチに見舞われましたが。

大和　僕のなかでは効いたつもりはなかったんですよ。僕は倒れるときは、いつもパーンともらって、「あ、倒れちゃった」って感じなんですけど、あのときは倒れるシーンを自分で覚えてたんで大丈夫だと思ってたんですね。そしたら、インターバルにセコンドが「かなり効いてる」って言うんで、「ヤバイ！」と（笑）。でも倒れたときに、「勝てる！」と思ったんですよ。「これで倒せる！」と。

——どうしてですか？

大和　なぜかはわからないんですけど（笑）。そこから打ち合いにいって、ラスト何秒かバーッとラッシュして、戻ったときにジムの会長に「あと全部、いまみたいに打ち合いますんで！」って言って。

——もともと、最初から打ち合うつもりではなかった？

大和　いや、打ち合いに持っていきたかったんですけど、彼は全部いなして闘うタイプだと思ったんで、攻撃が当たらないだろうから散らしていこう、と。それが打ち合ってくれたんで、「こりゃいくしかない！」と。

——2ラウンドに挽回して、どんどん調子が上がっていきましたよね。

大和　必死でしたね。名古屋からもいっぱい応援に来てくれてましたし、ペンキの師匠とか大工さんたちも仕事を休んで来てくれてたんですよ。そういう人たちの気持ちとか、1回戦、2回戦で勝った裕樹選手や紀左衛門選手の気持ちも、勝手にですけど背負ってたつもりなんで、「これじ

【10.7.5 K-1 WORLD MAX 2010】
東京・国立代々木競技場第一体育館
【63kg級日本トーナメント・決勝】
○大和哲也 vs 久保優太×
（3R 1分26秒 KO）

1R、久保が左ストレートでダウンを奪ったが、大和は得意のパンチでペースを奪い返すと、3Rには右フックで二度のダウンを奪う。とくに最後は両者が同時にフックを入れながら、久保が倒れる劇的なエンディングに。試合後、大和は「これからみんなで一切確執無しでK-1を盛り上げていきたい」とマイク。

ゃあ負けられない、負けたら顔合わせられないだろ」と。二人には試合のあと、リング上で「僕、絶対優勝しますから」って約束してましたしね。そういう気持ちが動かしてくれました。

──最後、フックの相打ちでほとんどダブルダウンに近かったですね。

大和　そうですよね。あそこで、みんなの気持ちと声援が僕を倒れないように支えてくれました（笑）。

──舞台も代々木第一という大会場で、あれだけのお客さんに囲まれたなかで。

大和　気持ちよかったですね。僕はお客さんがたくさんいるほうが気持ちよくて、緊張しないんですよ。「大舞台だ！」と思うと、うれしくて。

──以前からそうですが、緊張したり動揺しているような様子を見たことがないですよ（笑）。

大和　ホントに緊張とかしないんで、向いてるんだなと思いますよね（笑）。会場もデカいほど燃えますから。大会前日もメチャクチャ寝られたし、当日も朝早く起きて朝メシ食べて寝て、昼メシ食べて寝て、普通にリラックスしてましたからね。それで、自分でキモが据わってるっていうか、「こういうのに向いてるんだな」とあらためて思いました（笑）。

──しかしK-1に出始めてから、話題はペンキ一色ですよね。

大和　そうですね。インタビューでも、まずペンキ職人の仕事内容から聞かれますから（笑）。でもそれもうれしいですよ。自演乙選手がコスプレであったり、所英男選手が闘うフリーターであったりというのがあるなかで、僕は「闘うペンキ職人」ということで印象に残るじゃないですか。テレビを観た人が、「ああ、強いペンキ屋いるよね」ってなればOKですから。PVでも、ほかの選手は練習風景だけでも、僕は練習だけじゃなく仕事風景も撮ってもらえるんで一石二鳥じゃないですか。もっともっと押していってほしいですね（笑）。

──もっともっと（笑）。そして、ペンキというとどうしても映画『ベスト・キッド』を思い出してしまうんですが。やっぱりペンキを塗る動作が修行になったんですか（笑）。

大和　やっぱりそうなりますよね（笑）。まあ実際、一般建築塗装なんで細かい作業が多いんですよ。だから集中力は養えてるかなと思いますけどね。

ほかのペンキ職人の方たちが「オレもいけんじゃねえか？」と思ってるなんてことは？

大和　いや、それはないです（笑）。「おお、哲ちゃんは凄いねえ！」って言ってくれてますから。

──ちなみに今回、K-1で優勝したわけですが、ペンキ職人は辞めないんですよね？

大和　そうですね。最初からそのつもりなんで。危ないんで、ダメージが抜けるまでは練習は休ませてもらいますけど、そのあとはまたペンキの仕事も続けたいと思ってます。

──いままでのキック時代、「もっと注目されていいはずだ」とずっと言ってましたよね。やっと大注目されることになりましたが。

【10.7.5 K-1 WORLD MAX 2010】
東京・国立代々木競技場第一体育館
【63kg級日本トーナメント・準決勝】
○大和哲也 vs 才賀紀左衛門×
（2R 2分13秒 KO）

1R開始早々、短期決戦を狙いたい才賀は左ハイを放っていく。その後も得意の回し蹴りなどトリッキーな攻撃を繰り出すが空振り。2Rになると大和は前に出ながら左右のストレートで才賀を揺さぶり、最後は前蹴りで活路を見出そうとする才賀に対して狙いざまに左フックを炸裂！ 見事なKO勝ちを収めた。

【10.7.5 K-1 WORLD MAX 2010】
東京・国立代々木競技場第一体育館
【63kg級日本トーナメント・準々決勝】
○大和哲也 vs 裕樹×
（1R 3分03秒 KO）

1R、序盤からいきなり大和は左右フックから左ボディのコンビネーション。裕樹は得意のローと、互いに得意の攻撃を繰り出していく。大和はパンチ主体の攻撃に加えて前蹴りも繰り出し距離を取ると、前進してくる裕樹に強烈な左フック！ これでたまらず崩れ落ちた裕樹は起き上がることができず、大和が戦慄のKO勝利を飾った。

K-1、ムエタイ、ペンキ職人…… 僕は三足のわらじを履きたいです

大和哲也

大和 ホントうれしいですよ。僕はK-1で活躍して、一方で打倒ムエタイも忘れてないんで。K-1とムエタイで二足のわらじを履きたいというのもあるんですよね。

――ペンキ職人と合わせて、三足のわらじですよね。

大和 そうですね（笑）。まあK-1で活躍しながらムエタイもやれば、そっちも注目されて相乗効果もあると思うんですよね。僕の闘いにも両方の経験が生きると思うし。

――決勝を闘った久保選手とは、いいライバル関係になりそうですね。

大和 ホントに僕が思ったのは、魔裟斗選手と小比類巻選手じゃないですけど、22歳同士で決勝を闘って、重なる部分がありますよね。キャラとかは全然違うんですけど、不思議な縁なのかなと思います。

大和選手から見た久保選手は、ファイターとしてだけでなく人間的な面も含めてどんな存在ですか？

大和 どうですかねえ、ファイターとしてはホントにいい選手だと思います。あんまりしゃべったことはないのでよくわからないですけど、いつもニコニコしてるイメージはありますね。

――〝久保きゅん〟と呼ばれて、煽りVでも「かわいい」の大合唱だったじゃないですか。そういう選手と対戦するのはどんな気持ちですか。

大和 いや、気にならないですよ（笑）。

――オレのほうがかわいいだろ、とは？

大和 そんなことは全然（笑）。でも今回出てた8人のなかで、僕がカッコいいと思うのは松本芳道選手みたいな男っぽいタイプなんですよ。石川選手とか上松選手みたいなキレイ顔じゃなくて、男っぽい方ですね。紀左衛門選手はキレイ顔でもカッコいいと思うんですけど、松本選手みたいにゴツゴツした感じのほうがカッコよく感じますね。

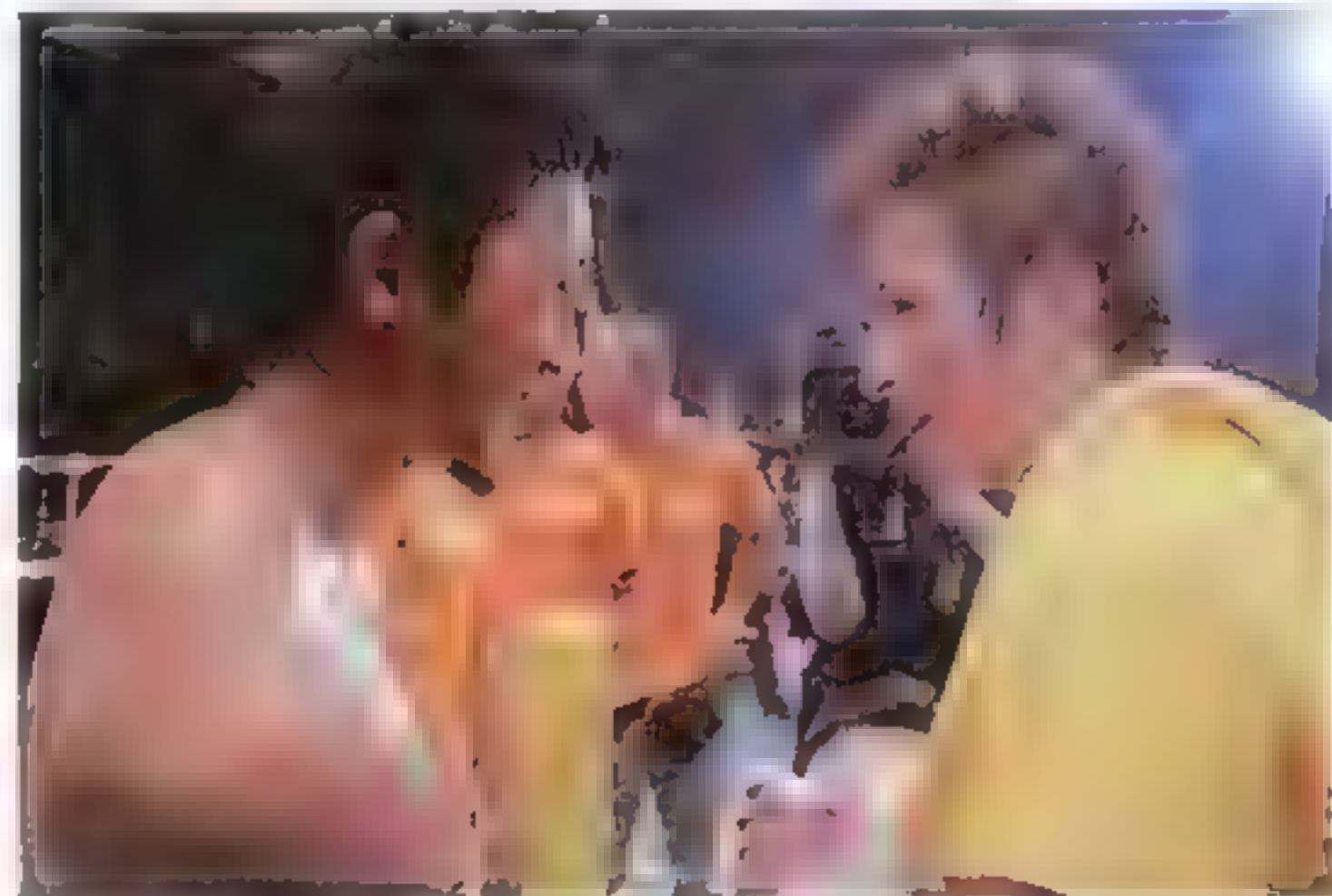
――自分は？

大和 いやいや、だから全然（笑）。K-1に出るようになって「甘いマスクで地元では女性に大人気」とか書かれて、本人が知らないのにどこで人気なんだろうと思って（笑）。みんな周りで笑ってますよ。

――でもこの優勝で一気に変わるんじゃないですか？

大和 そうですかね、そうなったらそれはそれでうれしいですけどね。格闘技は人気商売じゃないけど、人気のある人が取り上げられると思うし。人気が出たほうがうれしいですよね。

大会では佐藤嘉洋選手も勝って、一夜明け会見でも一緒に並んで出てましたね。会見でも質問が出ましたが、名古屋の選手が快進撃しているのは何かあるんですかね？ 食べ物とか水に秘密があるとか？

大和 雰囲気じゃないですかね。嘉洋さんがK-1で勝って、大石ジムの選手たちがそれを追いかけて甲子園とかでチャンピオンになって、それに僕がまたK-1に出られることになったりとか。K-1に出るためにはキックのリングで活躍して、ベルトを獲ったりすれば道が開けるというのを嘉洋さんが示してくれましたからね。また僕の試合を見て、活性化する部分もあると思うんですよ。

やまと・てつや■1987年12月10日、愛知県出身。小学1年から少林寺拳法を学び、05年7月、NJKFでプロデビュー。08年7月、NJKFライト級王座を獲得。09年7月19日、アメリカでゲンサック・ソープランジットをKOしてWMCインターナショナルライト級王座を獲得。10年7月、『K-1 WORLD MAX 2010』63kg級日本トーナメント優勝。大和キックボクシングジム所属。身長171cm、63kg。

――そういえば、『宇宙戦艦ヤマト』の主題歌で入場してますけど、ささきいさおのオリジナルバージョンじゃないですよね？

大和 そうなんですよ！ 以前、ヤマトの曲を使おうと思ってCDを買ってきたんですけど……

――『アニメ主題歌大全集』みたいなヤツですか？

大和 そう、そうなんです。僕、ささきいさおさんが歌ってたって知らなくて、最初に買ってきたCDに入ってたのがアレで、変えるタイミングがないんですよ。変えようかなとは思うんですけど、タイミングがなくて。でも、よくわかりましたね！

――いやいや、モロに世代ですからね（笑）。それでいうと、全然世代が違いますよね？

大和 違いますね。僕、ヤマトのアニメ観たことないですから。

――あ、そうなんだ！

大和 イメージはわかりますけどね。家でテレビ観てたらCMでヤマトの曲が使われてて、「これにしよっかな～」って軽く言ったら、親が「そうしなさいよ」っていう感じで。

――そんな軽い話だったんですか!?

大和 確かに、そのほうが「覚えてもらえるしな」と。イメージが定着しますよね。

――それこそ、今年はキムタク主演で実写版が公開されるじゃないですか！

大和 そうなんですよ！ だから、記者会見とか試写会に呼んでもらえないかと思って画策中なんです（笑）。

――でもそうなったら、観たことないって言えないですよ！

大和 あ、観とかんとマズいですね。まあ、大和哲也って言ったら『宇宙戦艦ヤマト』ってぐらいに定着してくれればいいですよね。大和哲也といえばココイチ、ってぐらいに（笑）。

――ブログでもよく出てくるというココイチですか。そんなに好きなんですか？

大和 好きですねえ。試合終わったら最大の楽しみは、ココイチでカレーを食べることなんですよ。焼肉とかに誘われても、断ってココイチに行きますからね。

――そりゃすげえ！

大和 話してたら、お腹減ってきましたよ（笑）。

――定番のトッピングとかあるんですか？

大和 ありますよ！ パリパリチキンカレーに、チーズと納豆が鉄板なんですよ。それにオムエッグとか、もっといくときはほうれん草とかチキン煮込みとか、ガッツリいっちゃうんですよ。ライス400グラムで、辛さは4とかで。

――それ、けっこう辛いですよ！ しかし、それだけ乗っけたら……？

大和 ビュッフェのランチに行けるくらいですよ（笑）。サラダも食べるから、2000円ぐらいになっちゃいます。

――ココイチでそんなお客さん、いませんよ！

大和 カレーだけだと栄養的にアレかなと思って、野菜も入れたらそんなになっちゃうんですよね。キックを始めてから、ジムの先輩にココイチに連れてってもらったのが出会いで。最初は「カレーは家で食べるモンだろ！」と思ってたんですけど、食べたらもう！

――じゃあ、そっちもタイアップとかつくといいですよね。

大和 期待してます！ 名古屋が本社ですしね。タイアップできたら、減量中でも食べられるカロリーオフカレーをプロデュースしますから（笑）。

――夢は膨らむということで（笑）。今日はありがとうございました！

【10年7月6日／都内・某ホテルにて収録】

な、な、な～んと
優勝候補の石川直生を撃破!

モンちゃんは強かった!!

本誌認定「K-1 WORLD MAX 2010」63kg級日本トーナメント裏MVP

才賀紀左衛門

モンちゃんがやっちゃった! なんとナオキックから下馬評を覆す大勝利!!
惜しくも準決勝で敗退となるも、今回のトーナメントをおおいに盛り上げたモンちゃん。
さあ、今回も好き放題やり放題、本能のままに暴走しちゃってくださ～い!

聞き手&撮影／[illegible]木佑　試合写真／今村陽子

煽りV観てたら「オレが客でもブーイングするわ」って(笑)

――紀左衛門さん、63キロ級トーナメントお疲れさまでした!

紀左衛門　いや〜、懲りずに取材してくれるの『kamipro』さんだけですわ。でもいいんですか? 決勝に残れへんかったのに。

――いえいえ、下馬評を覆して石川直生さんに完勝。それにファイヤー原田戦でも注目を集めた紀左衛門さんは、トーナメントを盛り上げた立役者ですから。

紀左衛門　うれしいこと言ってくれますねえ。でも全然ダメですわ、やっぱ優勝せなね……(元気なく)。

――あ、さすがにいつもと違ってトーンが低いですね。とりあえず大会から一夜明けたわけですけど、試合後はどうすごしました?

紀左衛門　いや、もう大会終わってからは打ち上げとかせず、すぐ帰りましたよ。自分の試合映像も観たかったし。で、そのあとはず〜っと爆睡してましたわ!

――へ〜、試合後は興奮が冷めずに眠れないって選手が多いですけど。

紀左衛門　まあ、僕は並の選手とは違うんでね! ハッハッハー!

――あ、いつもの調子になった(笑)。

紀左衛門　いや〜、でも僕ね、今回の大和(哲也)戦がプロになって初KO負けだったんですよ。映像観たら確かにパンチ効かされたんですけど、それ以前に途中で「ダメだ」って気持ちが折れた気がするんですよね。だからそれがすげえ悔しくて。正直、石川戦で右の拳と左脚を痛めて、集中力がちょっと切れちゃいましたね。

――紀左衛門さんが3ラウンドフルだったのに対して、大和さんは裕樹さんに1ラウンドKOの無傷で上がってきて。

紀左衛門　ホンマ、「嘘やん!?」って思いましたわ(笑)。あのね、自分のいままでの格闘技人生でああいう負け方したのって、中2のときの空手以来だったんですよ。でも、その負けがあったからこそ、僕もここまで強くなれたし。

――じゃあ、今回の負けも糧にする、と。

紀左衛門　もう、あんな恥ずかしい思いはしたないしね。で、試合後に谷川さんに「もっと強くなるんでこれからもK-1出させてください」ってお願いしたんですけど、「期待してるよ〜、頑張れよ〜」って言ってもらえて。だからもっと活躍して、早く養子にしてもらわんとね(笑)。

3位入賞をはたし、谷川EPからねぎらいの言葉をかけられるモンちゃん。『優勝したら谷川さんの養子にしてもらう』と宣言してたモンちゃんだけに、結果こそ残念だったものの、その裏MVP級の活躍に満面の笑みを浮かべるサダハルンバであった。ちなみに激闘の代償として、キザえもんの右手はドラえもんばりに大きく腫れ上がっておりました。名誉の負傷!

――ダハハハ! さて、戦前から舌戦を展開した石川戦を振り返りたいんですけど、入場のときはブーイングが起こってましたね。

紀左衛門　いや、あの煽りVを観てたら「俺が客でもブーイングするわ」って思いましたわ(笑)。でも、全然かまわないんですよ。へんな試合したらもっとヤジってくれていいし。その代わり、こっちがいい試合したらみんな黙るじゃないすか? それはやっぱり気持ちええからね(ニヤリ)。

――大和戦のときには見事に止まってましたもんね。で、ちょっと驚いたのが石川戦の前はあれだけ暴言三昧だったのに、試合後に紀左衛門さんが「怖かった」って言ったことなんですよ。

紀左衛門　いやもう、いまだから言えますけど正味の話、怖かったですよ。試合前はなんだかんだ言いましたけど、やっぱりいままで一番のビッグネームやったし。

――じつは石川さんとはプロになる前に交流があったとか。

紀左衛門　そう、たしかワールドユースのときかな。新空手の会場に石川さんが来てて、僕が「どうやってヒザを蹴ってるんですか?」って聞いたんですわ。あとは一緒にメシ食いに行ったこともあるし。

――あ、そうなんですか?

紀左衛門　それは全日本キックを観に行ったときに、石川さんと山本優弥さんに「ごはん行こうよ」って誘ってもらって。そのときも技術的な話とか聞かせてもらってね。

――そもそも、初めて観たキックの試合が石川さんの村浜(TAKEHERO)戦だったんですよね?

紀左衛門　そうそう。あのね、僕にとって村浜って凄く強いイメージがあったんですよ。あ、そういえば、僕、小5のときに村浜にケンカ売ってるんですけどね(笑)。

――は? なんですか、それ?

紀左衛門　たまたま知り合いがスペル・デルフィンと知り合いで、大阪プロレスを観に行ったことがあったんですよ。で、僕が村浜に「おい、顔面蹴らせてくれや」って言って。

――なぜだ(笑)。

紀左衛門　そしたら向こうが「は? 何言ってんねん。おまえみたいのにサインあげへんからな」って相手にしないから、「おい、村浜、おまえビビってんのか?」って服を引っぱったんですわ。そしたらその知り合いが「紀左衛門、K-1選手相手に何言ってんねん!」って怒られて(笑)。

――あたりまえですよ(笑)。で、話を元に戻しますけど、その村浜さんに勝った石川さんのことがずっと気になってた、と?

紀左衛門　そうですね。それで試合の一日前になって、「ああ、石川さんとホンマやんねんな」と思ったら、一瞬怖なって。いや、違うな……怖いんか怖くないんかよくわからない、いままでに感じたことない気持ちになったんですよ。で、いつもお世話になってる人に電話したら「自分を信じて暴れてこい」って言われて、それで気持ちが凄いラクになってね。

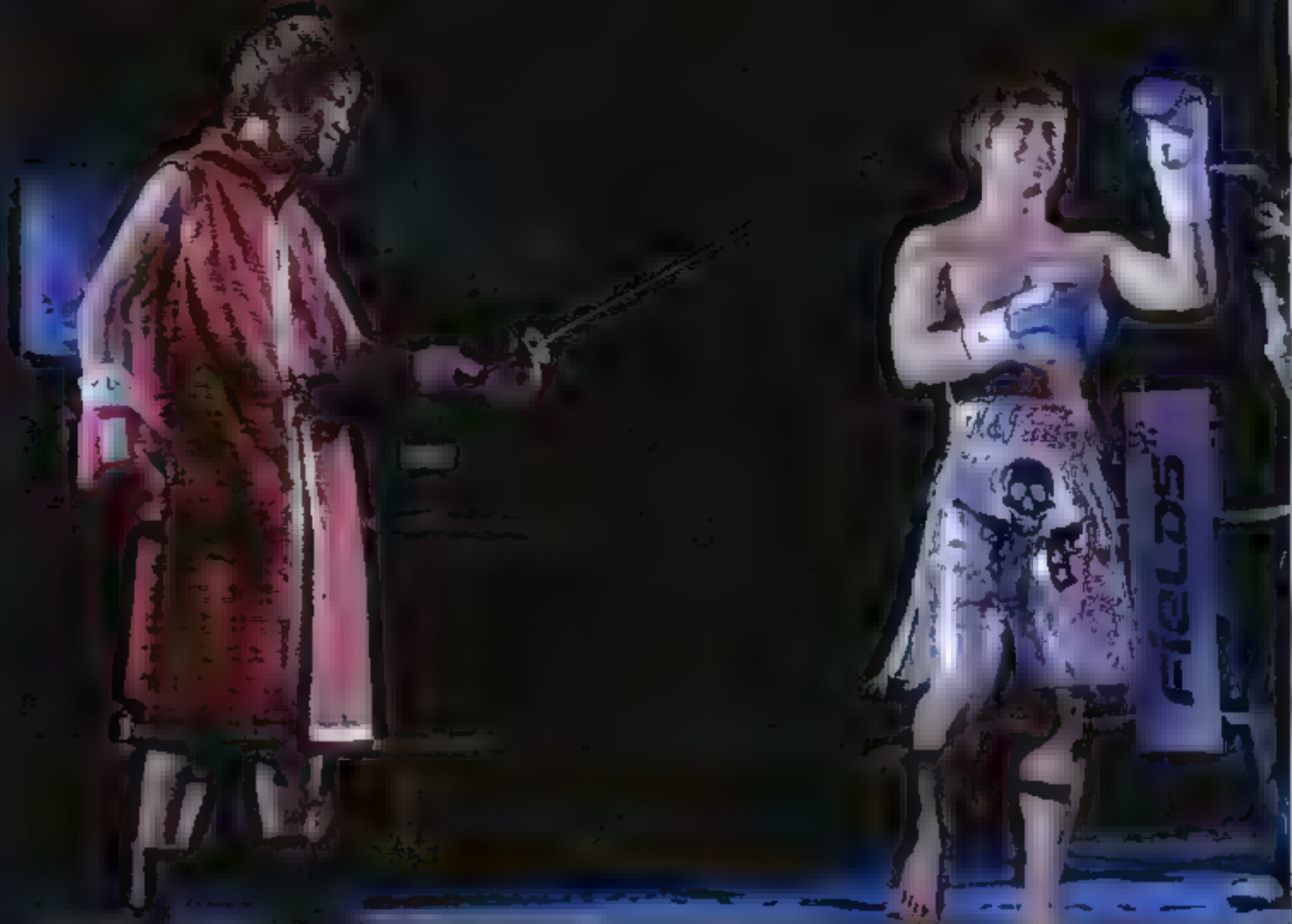
――なるほど。ちなみに少なからず交流のあった石川さんをあれだけ挑発したのは、どういう考えがあって?

紀左衛門　いや、僕は考えて行動したらけっこうダメになってまうんで、あれは本能ですわ(笑)。

――本能(笑)。

紀左衛門　でも、もともと石川さんと試合はずっと前からやりたかったんですよ。正味、同じ階級で自分より目立ってるヤツは邪魔やしね。あとは優勝候補って言われてたし、クサいけど自分の言葉でしゃべる選手やから、狙うなら石川さんしかいないなって。

――試合前日も石川さんは「全日本キックを背負う」「軽量級の象徴になる」ってコメントしてましたね。

紀左衛門　まあ、「カッコイイこと言ってんな」とは思ったし、ホンマにキック界のカリスマというのは認めてますよ。ただ、僕は「キックとK-1は違う」って何回も言ってたじゃないっすか? だから全日本キックを背負ったところで「これはK-1やから」って感じでしたね。じゃあ「全日

［10.7.5 K-1 WORLD MAX 2010］
東京・国立代々木競技場第一体育館
［63kg級日本トーナメント・準決勝］
◯才賀紀左衛門 vs 石川直生×
（3R終了 判定 3-0）

試合前、石川は持ってきた日本刀を突きつけるが、モンちゃんは意に介さず。1R、モンちゃんは石川のハイキックをかわすと、ワンツーでダウン奪取！ 2Rには終了のゴング間際にモンちゃんは胴回し回転蹴りをヒット、石川をグラつかせる。結果は3Rをしのいだモンちゃんが文句なしの判定勝ち。大方の予想を覆し、試合前の毒舌のまま、見事に有言実行をはたした。

本ファンにゴメンナサイって言わなアカンようにしてまうぞ」って。

――下馬評で石川さん有利って聞いてイライラしませんでした？

紀左衛門 まぁ、僕もK−1に上がって徐々に顔面ありの試合に慣れてきた感じやったから、「そう思われるのもしゃーないかな」って。ファイヤー原田戦でようやくコツをつかんだ感じやったしね。でも、「ナオキックが優勝」とか聞くたびに、「えっ？ 目悪いんかな」って思いましたわ（笑）。

――マスコミでも「ナオキック勝利」って声が多かったですからね。

紀左衛門 いや、もう「アホちゃうか？」って（笑）。「プロなのにキックとK−1を一緒にしてんのかな」って思いましたよ。

――やっぱりそれだけ違うもんなんだ、と。

紀左衛門 たとえばヒジありかどうかで間合いとタイミングも全然違うし。言い方は悪いけど、キックってテクニックよりも勢いでガンガンいけば、どうにかなるような気がするんですよ。パンチが流れても、つかんでごまかせるっていうか。

――ごまかせる（笑）。

紀左衛門 でも、K−1はそんなんできへんし、やっぱキックとは別競技やと思う。だから周りはどない思ってんのか知らんかったけど、僕は何回やっても石川さんには勝てるって自信がありましたよ。

――まず1ラウンドできれいにダウンを奪って。

紀左衛門 いやでも、1ラウンドで倒せんかったのはあとで「ホンマ何してんねん」って思いましたけどね。トーナメントだから2ノックダウンなのに3ノックダウンと勘違いしてましたわ（笑）。まぁ、ルールが飛ぶくらいやからやっぱり緊張してたんでしょうね。あれ、強引にいってたら倒せてたな〜（しみじみと）。

――2ラウンド目にはゴング間際に胴回し回転蹴りまで繰り出してましたけど、あれは狙ってたんですか？

紀左衛門 なんかね、僕の知り合いから「石川さんが浴びせ蹴りかなんかで倒すって言ってたぞ」って聞いて、「コノヤロ〜！」って思ったんですよ。「じゃあ、こっちが倒してやるわ」って（ニヤリ）。僕、空手の頃からあれが得意技やから。あのね、こんなん言ったらあれですけど、（尾崎）圭司さんとか小宮山（工介）とかいるじゃないですか？

――見栄えのいい蹴り技を出す選手ですね。

紀左衛門 僕から言わせたら、蹴りヘター（キッパリ）。派手でも倒せる蹴りじゃないからね。僕のは派手で倒せる蹴りやから。石川さんもローブがなかったらダウンやったと思うし。で、あのときは僕、初めは右のパンチを狙ってたんですよ。そしたら向こうがそればっかり警戒してるから、「これ、胴回しやったら当たるんちゃうかな？」って思ったら、「ああ、やっぱり」って。

――は〜。紀左衛門さん、こう見えてじつは頭いいですね？

紀左衛門 よう言いますわ！ まぁ、でも自分で言ったらあれやけど、なんぼキックのチャンピオンやとか言われても、僕は素質が違うと思ってるから。あのね、若いってことでK−

ポテンシャルは僕が一番あるから まだまだ強くなりまっせ〜！

1甲子園出身のコってナメられてるかもしれないけど、やっぱり僕らって小さいときからイヤっていうほど試合してるし、弱いわけがないんですよ。

——そうか、英才教育を受けてるみたいなもんですよね。

紀左衛門 そのなかでも僕は一番ポテンシャルがあるからね！ まだプロ12戦目ですけど、まだまだ伸びしろあるから強くなりまっせ〜（笑）。

——ハハハ。でも3ラウンドでちょっと失速してましたよね？ ファイヤー戦のときもそんな感じでしたけど。

紀左衛門 あぁ、痛いとこ突かれましたわ、フフフ。ちょっとバテちゃいましたね、仕留めきれんかった。でも、試合やるたびにペース配分なんかもわかってきてるし、そんなんすぐに克服ですわ！（自信満々に）。まぁ、そうは言っても、守りに入ったら観てる人もつまらないからね。

——そういうプロ意識は強いですよね、若いのに。

紀左衛門 いや、もう勝つためにつまんない試合してもうたら、K−1がなくなってまうじゃないですか？ 僕はK−1なかったらロクでもない人間になってまうから（笑）。それにやっぱり僕は常に目立って一番じゃないとイヤなんですよ。そりゃキックでチャンピオンになるのも凄いと思いますよ。でも、僕はべつになりたないから。僕がなりたいのはK−1のチャンピオン、そっちのほうが自分にとっては大きなことやから。

——そういえば判定が出た瞬間、石川さんの肩をポンポンって叩いてたのは嫌らしさ爆発でしたよ。

紀左衛門 ハハハハ！ あのね、僕ね、性格悪いんすよ（ニヤリ）。

——よく存じ上げております（笑）。

紀左衛門 よう言いますわ！ まぁ、あのときはやっぱり石川さんを応援してるファンの声とかでムカッときてたから、「これで世代交代や、お疲れさん」って感じでね。

さいが・きざえもん■1989年2月13日、大阪府出身。K-1初登場は『Dynamite!!』でのHIROYA戦。ジャニーズ系の顔立ちからは想像できない毒舌がウリ？ 趣味はファッションで、ピチTにこだわりを持つオシャレさん。持ってる資格は「漢字検定8級（小3レベル）、英検5級（中1レベル）でっせ!」。168cm、60kg。

——試合前には「負けたら引退しろ」みたいなことも言ってましたけど？

紀左衛門 まぁそれはべつに本人が決めることやから。でも、やっぱりこのK−1の63キロは若手で盛り上げたいんですよ。だから、いろんなベテラン選手がこれから出てくるんやったら、「俺が全員倒しにいったろかな」って思いますよ。

——紀左衛門さんは反骨心旺盛ですよね、それこそ小5で村浜さんに噛みつくぐらいだし（笑）。

紀左衛門 ババババ！ あのね、僕は弱いもののイジメはあんましたくないんすよ。上のヤツにどんどん噛みついていかないと。まぁ、学生の頃は上も下も関係なくムカついたらすぐ手え出てたけど（笑）。

——でも、最後には深々と礼をして石川さんの手を挙げてましたね。

紀左衛門 まぁ、試合が終わればノーサイドやし、やっぱり石川さんは昔からリスペクトしてた選手やから。ヒザ蹴りも凄くうまいしね。だから、試合後に「ありがとうございました。試合前はいろいろ言ってすいません。ホンマは凄く尊敬してました。試合前は正直怖かったんです」って素直な気持ちを伝えたんです。そしたら石川さんが「いや、ありがとう。これから頑張って63キロを背負っていって」って言ってくれたから、こっちも「頑張ります」って。

——……。

紀左衛門 どうしたんすか？ 黙りこくって。

——いや、いい話だなと思って。紀左衛門さん、急に人の心を持ったようなこと言わないでください（笑）。

紀左衛門 よう言いますわ！ 僕、悪いヤツやけどそんな悪いヤツやないですよ（笑）。まぁ、石川さんにも認めてもらえただろうし、これからは僕らの時代ですからね。

——で、その次は大和さんとの試合でした。顔の傷は大和戦で？

紀左衛門 いや〜、ホンマに男前が台なしですわ！

——ちなみに大和vs裕樹戦は観てたんですか？

紀左衛門 いや、観ないようにしましたね。観たらビビると思ったから（笑）。まぁ冗談はさておき、こんなん言ったらいいわけやけど、ワンマッチだったら絶対負けないとは思いましたね。もちろん、ワンマッチなら向こうも同じ条件になるけど、なんやろ……今回のトーナメントは凄く自信になりましたね。「意外とこんなもんなんやな」って。

——全然通用するぞ、と。

紀左衛門 そうそう。いまみんなが、この位置におるんやったら、俺の1年後、2年後はもっとはるか先に行けるなって。それは自信というか、確信しましたわ、うん。

——ほ〜。トーナメント前だったらビッグマウスで終わってましたけど、いまはなんだか説得力もありますね。

紀左衛門 いや、ホンマ僕、石川さんにあれだけ言って負けてたら口だけ番長でしょ？ 渡辺一久になってるとこやったわ（笑）。

——ハハハ！ 石川さんが「勝ったらああいうキャラはできないようにしてやる」って言ってましたけど、これからもその"モンちゃんスタイル"は貫く感じですかね？

紀左衛門 僕はもう、ず〜っとこのままで！ あのね、キャラをどうとか言われて、「えっ？ そう言われてもこれが素やからな」って逆に困りましたよ。ハハハ！

——とりあえずトーナメントを終えたばかりでなんですけど、今後のことは何か考えてます？

紀左衛門 僕、10月のK−1 MAXでガイジンとやりたいですわ。世界を知りたい。いまの自分と世界に差があるんか、ないんか、それを知ったら僕はもっと強くなるし。それを知ってる自分と知らん自分じゃ、1年後の強さは全然違うと思うしね。

——そのぐらい先を見据えてる、と。

紀左衛門 だから、「谷川さん、お願いします。世界とやらしてください！」って誌面を通じてアピールさせてください。で、そのあとは大晦日ですよ、ウ〜、ダイナマイッ！（笑）。

——大晦日だよキザえもん！（笑）。

紀左衛門 だって『Dynamite!!』ってお祭りじゃないっすか？ 僕、大阪の堺出身でだんじり祭りの地域やからね。「お祭りになったら俺、凄いよ、お祭り男だよ！」ってね。いやぁ、ホンマにこれからの自分が自分で楽しみですわ！（笑）。

——ハハハ！ その勢いでこれからもK−1を盛り上げてください！

【10年7月6日／都内・某所にて収録】

才賀紀左衛門

MMA & PRO-WRESTLING
kamipro
USTREAM
ターザン山本
「Y2」の禊（みそぎ）
山口日昇

以前、菊地さんが雑談でプロレスデビューをした山口日昇を語った話が凄くおもしろかったので、ターザン山本が暴露本を出したいま、あらためて〝人のY〟を語っていただけないか、と。

菊地　それってまさか、時同じくしてヨゴレを見せたという見立ての、「ヨゴレ」「欲望」のYも含意した、K-1ならぬ「Y-2」みたいな話じゃないでしょうね（笑）。

――「Y-2」ですか！（笑）。

菊地　いやでも、あのですね、コレ（ターザン山本の『金権編集長』は）、いま20分間くらいのあいだに斜め読みしましただけですけど、端的に言って、ここ数年の山本さんの仕事のなかでも屈指の、非常に良い本です。要するにこの人は、ずっと長いあいだ自己炎上してきて、常にハイで書いてたでしょ。だけど、いい仕事するときはローのときです　そもそも『週プロ』絶頂期のときも、よくよく振り返ってみると、書き手としては、ここまでハイではなかったですね。

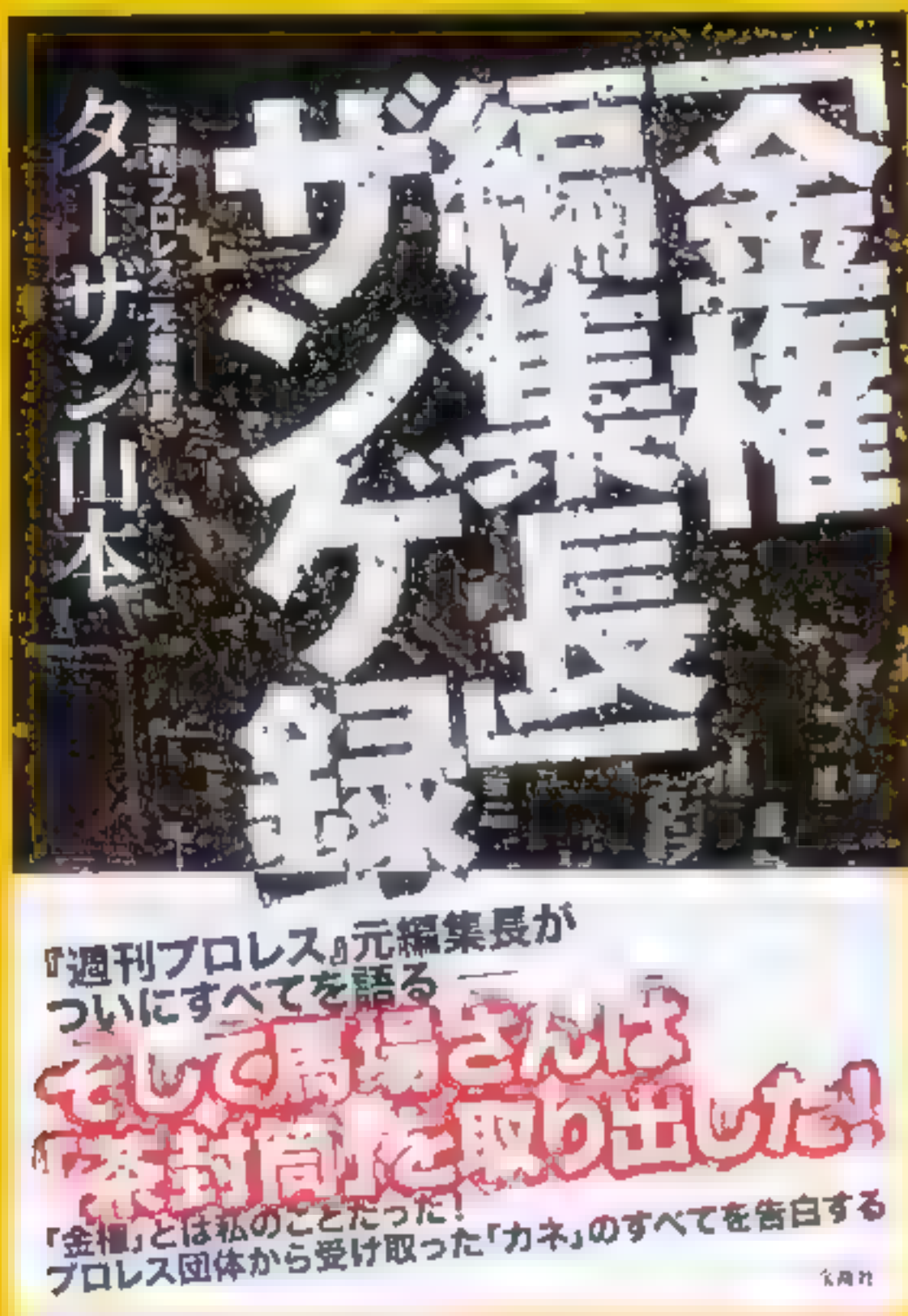
――確かに『週プロ』時代はこんな芸風じゃなかったんですよね。

菊地　主観的にはハイだったと思うけれども、ブレーキかかってた。UWFの絶頂期なんて、本当に心を打たれるような名文を時折書くわけね。そのときはハイが落ちて、ロー＆クールなんです。センチメンタルになると、ちょっと引いてしまいますけど、ローでクールなときに凄い筆力を見せる。今回はそれがまだ健在であることを見せたんじゃないかな。「まだ健在」なんて言うのはさまざまな意味で、どうかと思いますが

――ダハハハハ

菊地　これは前にやった山本特集のときにも言いましたが、あるときから自己炎上依存症になった。ご本人は猪木イズムだとかいうふうに正当化していたと思いますが、

――そっちのほうが楽だったのかもしれないですね。

菊地　ハイ依存は楽で怖い病気ですよね。まあ、ドラッグそのものというか　今回の本は、懺悔しようというコンセプトだから、ということなのか、はたまた単に加齢によって力が自然に抜けたか、いつもみたいに内容の薄さをハイで埋めてしまってる感じがなくて、ちゃんとギッシリと内容が詰まってる。落ち着いて書いてる感があり、染みてきます。スキャンダラスなことを書いてるのにもかかわらず、そんなスキャンダラスな本には見えない。

某女性との共著の100倍以上は売れてるとの噂
最近のターザン本のなかでは売れ行き好調の『金権編集長』。イタチの最後っ屁になるのか、それともよみがえるのか。けっこうどうでもよかったりするがターザンの動向は気になるのである

山本さんは常にハイで書いてきた。だけど、いい仕事するときはローなんです

音楽家にして文筆家
菊地成孔

――ああ、おっしゃるとおりスキャンダル臭がそんなにしないんですよね。

菊地　古き良き時代の神話みたいな感じになってて。ミスター高橋本みたいに「斬ってやる！」というイヤな感じがないんですよ。自分が悪役だという構図ですからね。

――ミスター高橋本のときは「これはプロレス界のためを思って書いてるんです！」という偽善感がありましたから。

菊地　「いまのプロレスがダメだからやってる」という。まあまあ、あれはしょうがない。新日本プロレスがガードマン会社に協力してくれなかったとか、そういう私怨もあったでしょうから。

――「なんで藤波が社長になってんだ⁉」みたいな（笑）。

菊地　まあ、反省と言っても、自己反省なわけで、自分が許せる範囲内でしかしていないし、端から見たら、自分の古傷をうれしそうにさすってるようにしか見えないかもしれないけれども、ワタシは、よしんばほんの微細な、すぐにひっくり返ってふんぞり返っちゃうようなレベルだとしても、「反省を感じましたし、それが現在のこの人に最も足りないことだったからこそ、凄くそれが生きてくるんですね。これはちょっと前に話した「禊の時代」という話にもつながっていますが。

――今年初めの『kamipro』でそんなお話をされてましたね

菊地　うまく禊いだ者だけが蘇生するという　そしてこれはまあ、要するに、行きつくところ「バブルですみませんでした」という本流に帰結するような集合体であって　あのときワタシは、広告代理店の話をしましたが、結局はあらゆる意味での、すべてのバブルのことなんですね。80年代のバブル経済は、それを象徴しているだけであって。しかし、バブル経済は100年前のことではない　「何故で、どうやってバブルと接触したのか？」っていうのは重要なことですね。

――一生のうちどこに、どういうかたちでバブルが来るのか、と。

菊地　「どのぐらい乗ったか？」という、程度の問題もありますが、それ以前に、いくつで遭遇したか、ということですよね。10代で来る場合もあるし、ロストジェネレーション（1970年代生まれ）は10代以下に来てるんだけど、ターザン山本さんも山口日昇さんも、大人になるまでバブルというものを体験したことがなかったはずなんですよ。

――二人とも大人になってからバブルが来た。

菊地　つまり、幼少期は不景気ベースだったわけです。ワタシにしても小学生や中学生の頃がインフレでオイルショックだ

ったから、メチャメチャ不景気な記憶はある。不景気の頃はまだ頭もイガグリ坊主で童貞だったけど、いよいよ東京で遊んだりセックスとかするようになったら、ワーッとバブルになった。

——山口日昇はそういう世代ですか。

菊地 そうですね。ですから、心の故郷はミル・マスカラスとかさ。

——ああ、初期『ハッスル』は70年代カルチャーのイメージが強いですね。

菊地 幼少期の不景気時代に、不景気な時代の暗さとともに、だからこそ光り輝いて見えたサブカルのアイコンを、大人になってから、つまりコドモのままの視点から見れば、バブルな状態になって買い漁る。これが、「大人買い」という言葉の原義だと思いますよ。山本さんが編集長になるのは30代後半でしょ。

——業界入りする前は映画技師やボウリング場の社員をやってて。『ファイト』時代も安月給だったとか。

菊地 そういう不景気時代に青春期をすごして、青年あるいは中年になってからバブルが来た。ターザン山本さんと山口日昇さんの変遷を見てると、そういうバイオグラフに、非常に忠実です。もちろん、バイオグラフに忠実なのは、善でも悪でもないけれども。とはいえいずれにせよ、バブルの経験はじつはいいことばかりではなくて、ヤクザにシャブを打たれたような、あの強烈な経験について、未経験者は嫉妬から悪い感情を持つしかないという構図があり、現在はそれが社会的に蔓延しているわけです。そこで禊の必要性ね。この禊は、一種の過剰な、不必要なサービスみたいなものなのに、あまりの社会不安によって不可欠事項になってしまっている。だって、バブルなんてどうせツケが回ってボロボロになるんだから、本来嫉妬するようなことではないですよね。

　ありがちな転落の構図はかならず起こる。

菊地 赤い靴というヤツで、あの頃はあれはあれで苦しかったというか、シャブそのものですから、気持ちいいんだけど、苦しい。いまエコとかスローライフとか言ってるのはバブルを知ってる人たちなんだよね。あれは提案とか大啓とかではなく、単に反省であって、このまま近代が進んでいったら、みんな発狂して死ぬみたいなことがイヤだ、と。だから静かに静かに、ゆっくりゆっくりして生きていこうという、言っちゃあそれだけです。『ソトコト』の編集長もバブルを知ってる人。

[illegible]活 ハッスル のリングでプロレスデビューをした山口日昇。試合途中に[illegible]骨折してしまうアクシデント。素人をリングに上げ続けて大きな事故を起こしてこなかったが、本人がそんな目に!!

二人とも不景気時代に青春期をすごして青年あるいは中年になってバブルがきた

——『ソトコト』自体が逆バブルなんですね。

菊地 まあ、繰り返しになっちゃうけど、そうやってプレ・バブルの、不景気のノスタルジーが、バブリーな躁病に乗っかってくる。「大人買い」はその症状の一つですが、たとえば『週刊プロレス』の全盛期に、60年代のヨーロッパ映画のことをやたら書いたりするわけじゃない。ああいう、脈絡のない情熱みたいなものが、その人にとっての大切な真実に近いんです。一番いい頃の『ハッスル』も出てくるアイコンが全部70年代。『ハッスル』というあの曲自体が70年代の象徴。しかしあの団体のイメージ中枢が70年代である必然性はとくにない だから初期ハッスルには力があったわけね。映画でいうとタランティーノがそうで、タランティーノもワタシと山口さんと同じ歳なんだけど。

　ちょうど今年で47歳。

菊地 タランティーノも売れることでバブルを味わった。そこで描かれてるものは不景気な時代の低予算映画の記憶ばかりです。しかしタランティーノはちょっと前に苦しい時期を迎え、最新作の『イングロリアス・バスターズ』が再びバカ売れしたからね。この先どうなるのかっていうのはあるけれども、いま少なくとも転落したかたちじゃない。まあ『キル・ビル2』が禊だという話もあるんだけど。

——そんな印象がありますか（笑）。

菊地 そういった意味で、山本さんのこの本は、予想以上に奇麗に禊いだとは思うんです。山口さんはリングに上がって腕を折ったとかさ、その経緯は見ていないからわかんないけれども。世論的にはどうとらえられているんですか？

　う〜ん、プロレスデビューをしたこと、腕を折ったということは瞬間的に注目されましたけど、いまはあまり気に留める人がいないんですね。山口さんの動向を気にしているのは債権者と、『ハッスル』でひどい目に遭った人くらいで。

菊地 そんななのか（笑）。

　ただ、ターザンと比べて山口さんのほうがおとなしくしているぶん、禊感はあるのかな、普通の人から見れば。

菊地 前に取材とは別の雑談で話したのは、ターザン山本化の過程を見せてしまっているということでしたね。リングに上がること自体が躁病的というか、ある種の炎上でしょうから。

——菊地さんが雑談で言っていたのは、山口日昇はターザン山本を反面教師にして取り除いたからこそ、ターザン山本化していったという。

菊地 まあ、シンプルなフロイディズムですけれども。逃げてもうしろ向きに近づくわけね。

——「ターザン山本になりたくない、なりたくない」と言いながら。

菊地 ただ、山口さんのほうがはるかに頭のいい人だから。

　そこは客観的に演者としてどう振る舞うのかというのは考えてますよね。山本さんの場合はそこらへんが無邪気な・

面があって。

菊地　単純に山本さんのほうがかわいくて愛嬌のある人じゃない。山口さんのほうが頭のいい子なので、かえって苦しいかなっていう。『紙のプロレス』の創刊から読んでますが、山口さんは糸井重里に進もうとして進めず、ターザン山本に進まないようにして進んでいるという現状だと思うんです。腕を折る。という行為が炎上なのかどうか、完全否定は難しいですよね。

　そうですね。

菊地　問題はそれが、禊になっているかどうかだと思いますが、ただ、世の中、禊がずにバンバン突っ走る、それこそ大仁田厚とかね、ああいうデモーニッシュな人もいるわけで。大仁田は、一度も禊がずに「バブル、バブル、バブル!!」というふうにずーっと乗っかってるでしょ。最後には禊ぐかもしれないけど、とはいえ畳の上で笑って死にそうな感じもするという意味で、大仁田みたいな人は日本人では凄く珍しいキャラクターですよね。ヒザを壊してからFMWを立ち上げるまでの屈辱を、何百、何千倍にしたのか、もはや数えようもない。

　そういえば、そうですね。たとえば前田日明はどうなんですか？

菊地　いやあ、バブルでもデモーニッシュでもないでしょう。きれいな感じですよね。リングスの、志し半ばでなくなってしまう感じとか、長い沈黙を守るとか。

　そこで同情を誘いますもんね。

菊地　髙田延彦のほうが、バブルの爪痕っぽいですよね。

　そうですね（笑）。ちょっと前に誰の暴露本が読みたいかという話になって、いろんな名前は出たんですが、やっぱり前田の暴露本が読みたいという話になったんですけど。

菊地　なるほど。

　前田ってけっこう自分本位に情報を組み立てていくから、はたしてそれは真実なのかどうなのかわからない本になって、逆におもしろいんじゃないかって。

山本さんの今回の本は汚さがちょうどいいというか。気持ち悪い汚さじゃない

発売当初は怯えて漏らしていたターザンだったが、優しい言葉に騙されて本誌のUST配信に登場！　調子に乗って大騒ぎしてバカをさらけ出したのであった。その模様は携帯サイト「kamipro Move」で配信されてるからチェック！

菊地　まあ、いい意味で自己正当化が強い人だから（笑）。でも暴露本なんて、強く自己正当化しないと書けないですよね。

――前田が絡むスキャンダルっていまだに謎が多いというか。

菊地　舌鋒鋭い、怖いイメージや、実際に舌禍事件を起こしたりするけど、大切なことでは軽々しく口は割らないですもんね。

――UWFの解散にしても、田中先生との関係も。

菊地　田中正悟？

――はい（笑）。どこまでホントなんだろうという。

菊地　いやあ、もう誰にもわからないでしょう。そもそも暴露本を書くような、ダーティなモチベーションにならないでしょ。結果や周囲の人々の思惑は別として、本人はずっと凄くきれいに、美意識にのっとってやってるわけですよね。憂国の士だしね。だから暴露本は書かない。

菊地　悪魔のささやきというか、ブラックなとこには乗んないんじゃない。やっぱり暴露本を書く人って、お金がほしいということと、あいつの悪口が言いたいというのと、2大ブラック欲望に飲み込まれてしまっているわけじゃないですか。そのリスクを忘れちゃうんだよね、自己正当化はいくらだってできるし、書いてるあいだはハイになるから。読んでるほうは、「あーあ、やっちゃった」と。ねえ。

――2大ブラック欲望が見透かされてしまう。

菊地　コーヒーじゃないけど、ブラックの味わいというか、味比べというか、佐竹（雅昭）の本なんかもう、かなり汚いと思うわけよ（笑）　山本さんの今回の本は、汚さがちょうどいいというか。

――ちょうどいい汚さ（笑）。

菊地　なまなましく、気持ち悪い汚さじゃないから。そういうなまなましい気持ち悪さをさんざん出ていた。さっぱりした極地、境地というか。

――汚さの局地をさんざん見てきましたからね

菊地　20年間ぐらい見てきた。「もうこの人は気持ち悪い、汚い！」ということを言うことにも飽きたところまできて。まあ、こうなったわけだよね

――なんか山口日昇の暴露本も読みたいなあ……。

菊地　途中で言いましたが、反面教師は、結果として正面教師である側面を持ってしまうんですよね。山口さんは部分的で微弱とはいえ、山本さんをそうしてしまっており、その意味では、山本さんを正面から尊敬することで、自分のなかから完全に消してしまった谷川さんと逆走しているわけで、シーンのなかの役割分担という、拘束力的な力学さえ感じないでもないですが、今後どうなるんでしょうね。

――どうなんですかねえ……。昨日も大事な打ち合わせがあったんですが、1時間前に「今日はいったんバラしてください」というメールが来たきり音信不通で（笑）。もう上司でもなんでもないから、こっちからせかすことでもないので返信もしないで放ってるんですけど。

菊地　もし指摘することがあるとすれば、山口さんは山本さんと比べて、具体的な空腹感、ああ腹が減ったという欲望をあまり感じないということです。これは世代とも関係ありますが、たとえや見立てじゃないですよ。本当に山本さんは腹がペコペコに減ってたわけです。その欲が落ちたんじゃないかな。

【10年7月某日　都内・某所にて収録】

椎名基樹のサムライ三昧

第51回

「山口日昇社長の滑稽、悲惨ショー」

©平工幸雄

ホントに腕を骨折しているのに、柔道着を着ていたこともあり、観客だけでなくガイジンレスラーさえも気づかずいたぶられる山口日昇社長。ファンタジーであるハッスルだけに骨折が信じてもらえない姿は、狼少年以上の悲劇だ!

やっと観ることができた。笑いすぎて腹がよじれた。山口日昇社長のプロレスデビュー戦。山口さん目当ての試合であるから、長い坂田亘のローンバトルは、集中することなしに、雑誌読みながら、鼻くそほじりながら観ていた。

が、試合終盤の一発のラリアットで、坂田のやられっぷりが尋常じゃないことに気づいた。そこからしだいに試合に引き込まれていく。この試合が山口社長&ハッスル軍への制裁マッチであるというアングルは、ガイジン側に伝わっていただろうが、いったいなんと言って含ませたのだろ？　そんな疑問が湧き起こるほど、ガイジンレスラーたちは、気持ちよく坂田をいたぶる。どの技ものすごくエグい。坂田は相当身体を張っている。

そしてたまりかねて、山口さんがいよいよファイトに参加！　ガイジンレスラーの胸板に躊躇なく袈裟切りチョップを浴びせる。そして、一番マッチョなヤツの胸板に、チョップを浴びせた瞬間、山口さんの細い腕が折れるのが、まざまざと映像で確認できた。蔦のように細い腕の打ちつけた部分が、ぞうきん絞りの要領でねじれ、手のひらがありえない方向に向く。思わず、あっ、声が漏れる。

肉を切らせて骨を断つとはいうが、肉は切れずに、骨が断つというのがあることを初めて知る。しかし、肉より骨が必ずしも強いわけではないなんて、あらためて考えれば当然だ。二人の肉体を見比べりゃすぐわかるってもんだ。だが固定観念ってヤツは恐ろしい。

山口さんの骨折など気づくはずもないガイジンたちは、いやこの時点で会場で骨折に気づいた人は皆無だろう、コーナーに山口さんを張りつけにする。ロープからダラリと垂れる、山口さんの右手はあきらかに力が入っておらず、心なしか変色している。洗濯せずに干された片方だけの軍手みたいなそれを見ていると、さらに笑えてしかたがない。極わめつけは、中村カントクが、張りつけにされた山口さんのTシャツを引きちぎって、バチーンといい音させて、おもいっきりチョップ。どんな感情で殴ったんだー!?　この時点で涙がちょちょぎれ、腹が痛てえ！

試合後、マイクを取る坂田、息切れで何を言ってるのかわからないが、話し続ける。おしゃべりが好きな男だ。その間も山口さんは、リングの下にうずくまって動けない。激痛の中で、仮病疑惑の冷たい視線の中で！

バックステージで記者に囲まれながら、今度は息も整った坂田のおしゃべりは止まらない。自分の言葉に酔って、テンションが上がっていくのがわかる。つくづくおしゃべりな男だ。そこに、腕を吊って、真っ青な顔をした山口さんが、やっと合流。そのボロボロぶりがもう最高。自身の骨折を伝えるも、皆半信半疑。「ご迷惑かけた方に、恩返していきたい」とかなんとか、とんちんかんなことを言う。迷惑かけた方に恩を返してどーすんだ。同等か！　返すのは恩じゃなくてお金だろ。

山口さんの短いコメントを遮って、坂田の独演会は続く。そこに、前田日明がパイプ椅子を持ってゆらりと登場、なんて妄想を抱くが、もちろんかなわず。気持ちよくなって話続ける酔っぱらいの横で黙って座る、幽霊のような山口さん。きっと吐き気がするほど、腕が痛むだろう。病院に行きたくても行けやしない。さらに、誰も怪我を信じちゃいない！

これが「トニオ・クレーゲル」の言うところの「滑稽と悲惨」というやつか。高校生のとき、意味もよくわからないまま読んだ、内容もすっかり忘れてしまった、文学作品のフレーズを思い出す。まさに目の前で繰り広げられる「滑稽と悲惨」。トーマス・マンはこーゆーことを言っていたのかと、山口さんに教えられる。

ところで、坂田は「山口をリングに上げることはありません」と言うが、それじゃダメだろ。ハッスル唯一の話題ではないか。いまさらカッコつけてどーすんだ。次は「山口日昇vs泰葉」などどーであろう？

同じ試合中の骨折でも、カッコ良かったのが、チャック・リデルを倒した、UFCの〝エース〟こと、リッチ・フランクリン。試合中、ミドルキックのガードで腕を折られながらも、チャンスと見て仕留めにくるリデルを、カウンターのショートパンチで失神させる。倒れたところを、折れたほうの腕でトドメのパウンド。

同じくUFCの、全MMA中上半期最高のカードであろう、ブロック・レスナーvsシェーン・カーウィン。予想にたがわぬド迫力。予想を超えたフィニッシュ！　ただ、レスナーは、顔面にパンチをもらうと、下を向くクセがあるね。それがものすごーく気になる。矯正しづらいクセだろう。もっとも端的に打撃の才能がわかる部分に思えてならない。こうなると、MMAのヘビー級選手で、史上最も素晴らしい打撃をすると思わずにいられない、ケイン・ヴェラスケスとの対戦が、が然楽しみだ。

川尻をアキレス腱固めで破った、青木。すごいアキレスだった。相手の動きに合わせて、いろんな方向に足首をひねる。達人とはこのことだ。これを見ちゃうと、いまさら言っても遅いが、あらためてメレンデスにも、いきなりの片足タックルから寝技にいってほしかったなあ。

そして、ヒョードル皇帝の歴史的な敗戦。

と、よくよく振り返れば、とんでもなく濃い、MMAの一ヵ月であった。だがそんな歴史的な試合の数々を抑え、何はなくとも語りたいと思えた、山口さんの、悶絶、滑稽と悲惨ショーであった。いやしかし、繰り返しますがホント、腸よじれて、涙がチョチョシビリでしたよ。

「私事ですが、僕、結婚します」な読者プレゼント

kamipro PRESENTS

応募要項

ハガキに応募券を貼り、1～8の質問の答えをご明記のうえ、下記の宛先まで郵送してください。応募多数の場合はそれぞれ抽選で決定いたします。ただし、雑誌公正競争規約の定めにより、懸賞に当選された方は、この号の他の懸賞に当選できない場合がありますのでご了承ください。なお、当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。商品は2010年8月26日(木)頃発送予定です。

【質問事項】1 郵便番号・住所・電話番号 2 氏名 3 年齢・職業 4 希望商品 5 おもしろかった記事&その理由 6 つまらなかった記事&その理由 7 あなたが好きな「闘う映画」は? 8 あなたがkamiproに望むことは?

【宛先】〒162-0805
東京都新宿区矢来町41-1 ザ・フタカミハウスNo.1
(株)ツー・スリー内 kamipro 編集部
「不況なんかクソッタレ!」係まで

※応募締切は2010年8月12日(木)当日消印有効

PRESENT*01

1名様

空手バカ一代 子とも用 ビーチサンダル
[闘道館]
マニアにはたまらない「空バカ」の未使用ビーチサンダル!(サイズ19.5cm)。足裏には「KODANSHA」のシールつき! チェスト～!

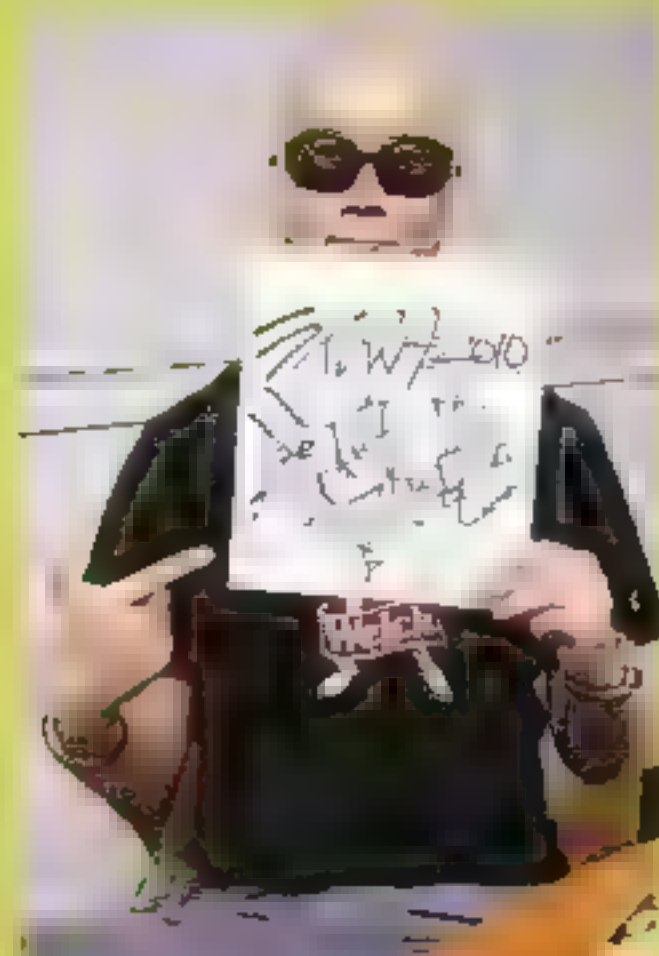
PRESENT*02

1名様

ライムスター
宇多丸直筆 サイン色紙
[非売品]
今号に登場した宇多丸さんのサイン色紙! 宇多丸師匠の映画批評は「ライムスター宇多丸のウィークエンド・シャッフル」(TBSラジオ)で聴けちゃうぞ

PRESENT*03

1名様

FRONT
BACK

怨霊Tシャツ
[暗黒プロレス組織666/¥3,150(税込)]
666で活躍する怨霊のキモかっこいいオリジナルTシャツ! サイズはS。次回の666は8月14日に新木場1st RINGで開催されちゃいます!

PRESENT*04

1名様

FRONT
BACK

NNNプリントTシャツ(グラフィック)
[NO NEED NEW/¥3,150(税込)]
シンプルなデザインがカッコいいNNNのグラフィックTシャツ! サイズはSからXLまで取り揃っているので女性から格闘家まで着用可能! プレゼントはS。
NO NEED NEW http://www.no-need-new.com/index2.html

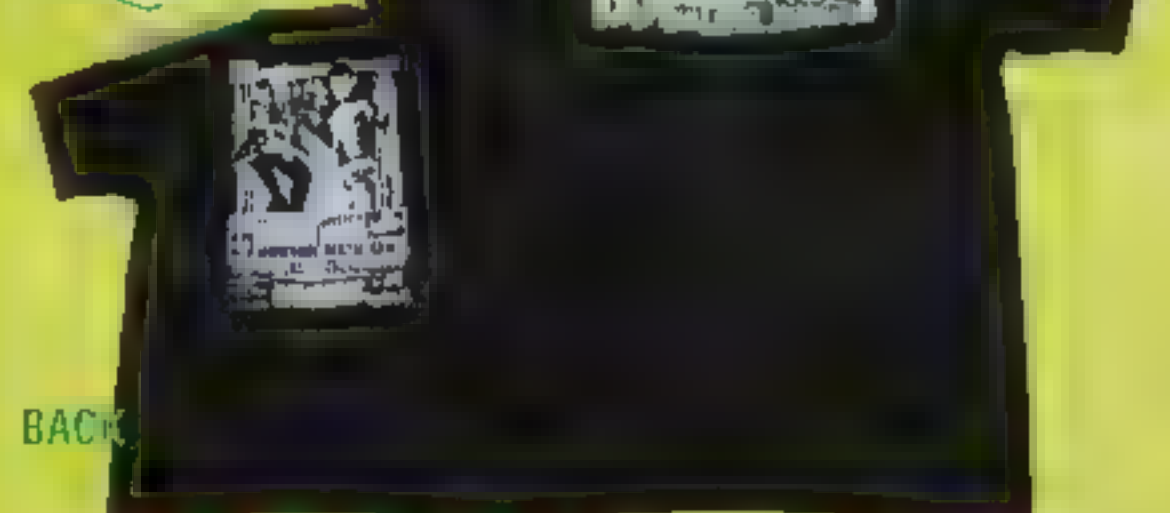
PRESENT*05

1名様

船木誠勝直筆 サイン色紙
[非売品]
格闘家、俳優、そして映画監督の顔を持つ船木誠勝のサイン色紙! 船木が所属する全日本プロレスは7/25から「サマーアクションシリーズ」が開幕
船木誠勝オフィシャルブログ「REDZONE」

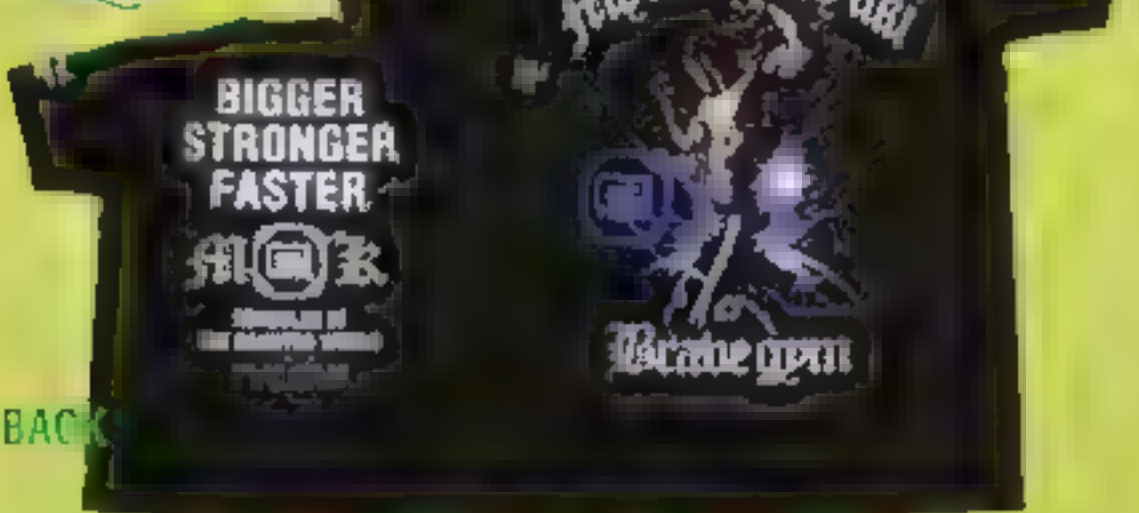
PRESENT*06

1名様

FRONT
BACK

バトルコンタクト BATTLE-2Tシャツ
[ハードコアチョコレート/¥3,885(税込)]
格闘探偵団バトラーツの若頭・澤宗紀とコアチョコのコラボTシャツ! 映画「裸の銃を持つ男」のレジェンドスターと夢の競演 サイズはL。

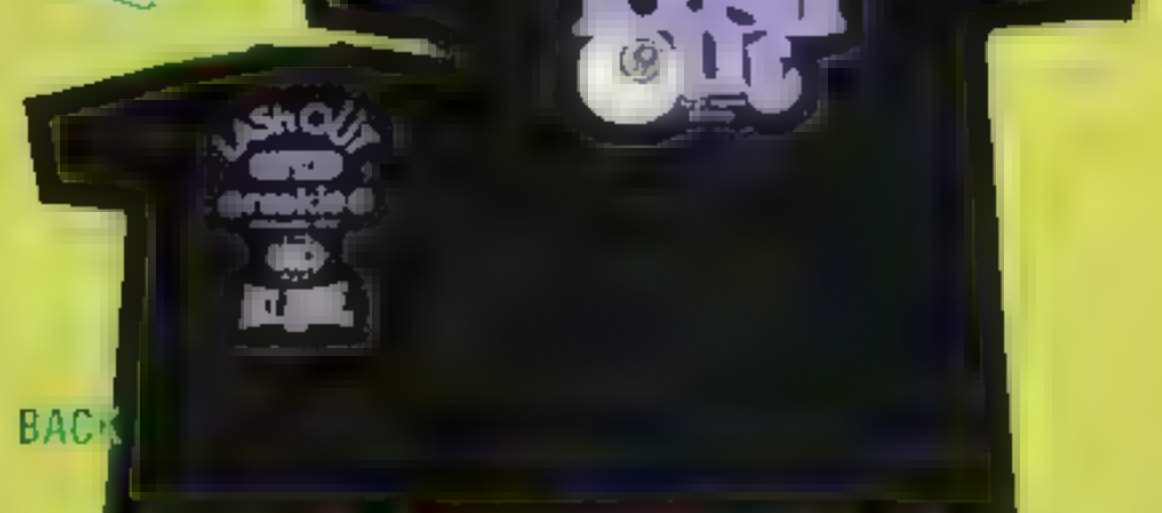
PRESENT*07

1名様

FRONT
BACK

宮田和幸 モデルTシャツ
[リバーサル/¥5,040(税込)]
ダビデ像のような筋肉美がまぶしい宮田和幸モデル、その名も「HERCUKES」Tシャツ! これを着てキミも真夏のマッチョバディを目指せ! サイズはM。

PRESENT*08

1名様

FRONT
BACK

大塚隆史Tシャツ
[アートシャンキー/¥3,990(税込)]
ビッグマウスキャラでおなじみの元DEEPフェザー級王者、大塚隆史とアートシャンキーのコラボTシャツ。黒に紫のデザインが激シブ! サイズはXL。

PRESENT*09

1名様

DVD
プロレス スーパースター列伝
「ドリー・ファンクJr.& ダン・ミラー」
[クエスト/¥5,040(税込)]
スーパースターの往年の勇姿と現在の素顔に迫った感動のドキュメント。今回は"若馬"ドリー・ファンクJrと"タンパの正統派"ダン・ミラー。

PRESENT*10

1名様

DVD
空中殺法 ルチャ伝説
[クエスト/¥10,500(税込)]
伝説のルチャドールが続々登場! 明るく、楽しく、激しい攻防、息をのむ空中殺法。日本プロレス界に新しい潮流を作ったユニバーサルがDVDでよみがえる!

PRESENT*11

1名様

DVD
内田康弘
キックボクシング パーフェクトテクニック
勝つ為の方程式 タイプ別攻略法 vol.2
[クエスト/¥5,880(税込)]
ルールに合わせた闘い方や、対戦相手のスタイル別に基本的な傾向と対策方法を教えた第1弾に続き、より実戦に即した攻略法を教える第2弾!

kamipro149 応募券 塩漬け

ちぎって持ってっちゃダメだ!

こちらでも毎週プレゼント実施中!! http://kamipro.com/

kamipro 紙のプロレス

No.149
2010年8月6日 発行

発行人
浜村弘一

編集人
斉藤慎一
青柳昌行

編集統括本部長
ジャン斉藤

編集スタッフ
堀江ガンツ
松下ミワ
スズキィ
八木賢太郎（EURO2012予想のため非番）

終身名誉バイザー
吉田 豪

助っ人
ジャイ子

編集次長（サマージャンプ!?）
松林 貴

デザインGM
出田 一（TwoThree）

デザイン班長
金井ヒサくん（TwoThree）

デザイン
松坂マツくん
廣田ブンちゃん
野口ノグッチー
鎚田やっちゃん
白木みのる（以上、TwoThree）

カメラマン
乾 晋也
菊池茂夫
平工幸雄
吉場正和
山口比佐夫
戸成嘉則
タイコウクニヨシ
梅木麗子
金山フヒト
丸山剛史

決勝ゴール!
イリエスタ（TwoThree）

雑誌営業
堂前秀隆
中村宣忠

業務部
櫛本"書籍待ち"義之

編集庶務
原 正典
山内ユリコ

編集チアガール
金川"ナツコ"奈津子
安部"クリン"悠子

ワイレアマダム
廣橋久美子

発行所
株式会社エンターブレイン
〒102-8431
東京都千代田区三番町6-1
☎0570-060-555（代表）

発売元
株式会社角川グループパブリッシング
〒102-8177
東京都千代田区富士見2-13-3

印刷
図書印刷株式会社

協力
BUSHIDO KOVOTOJO KELIAS
FightSport

■広告掲載のお問い合わせは下記まで
株式会社エンターブレイン
スポーツ企画編集部 ☎03-3265-7166

本書の内容、不良品交換等についてのお問い合わせは下記の窓口までお願いいたします。なお、内容につきましては記載以上の詳細につきましてはお答えできませんので、あらかじめご了承ください。

[カスタマーサポート]
☎0570-060-555
（受付時間／土日祝祭日を除く 12:00～17:00）
メールアドレス support@ml.enterbrain.co.jp

●個人情報の取り扱いについて
本書にお寄せいただいたハガキ、各種のお問い合わせに関連してご提供いただいた個人情報につきましては株式会社ダブルクロス、および株式会社エンターブレイン（URL: http://www.enterbrain.co.jp/）、それぞれのプライバシー・ポリシーの定めるところにより、取り扱わせていただきます。

NEXT ISSUE

"黒のファンタジスタ" アンデウソン・シウバ
8.7『UFC117』に登場!!

No.150は8月23日（月）発売予定!

※地域によっては多少発売日が遅れることがあるでござる!

kamipro 2010 149 闘う映画に殴られたい!! 燃えよ格闘技アチョー!!
2010年8月6日
発行人／浜村弘一　編集人／斉藤慎一、青柳昌行
発行所／株式会社エンターブレイン　〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555(代表)
発売元／株式会社角川グループパブリッシング　〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3
enterbrain

特別定価 : 本体895円 +税
雑誌61971-97 Ⓗ2010.11
Printed in Japan 図書印刷株式会社

ISBN978-4-04-726665-0
C9476 ¥895E

木真也vs川尻達也 徹底解剖!!

mipro

MAGAZINE

紙のプロレス

enterbrain MOOK

大会速報、選手ブログは携帯で! kamiproMove

2010
149
特別定価940yen

技

画に殴られたい!

格闘技

アチョー!!

M.15』総括
格闘技ワールドカップ決勝戦!

木真也
川道大
ット・コーカー
貞治／笹原圭一

10th thanks! eb!

kamipro 2010 149 「クソ雑誌!!」(青木真也)

kamipro 2010 149 闘う映画に殴られたい! 燃えよ格闘技アチョー!!

2010年8月6日
発行人／浜村弘一 編集人／斉藤伸一、箕和昌行
発行所／株式会社エンターブレイン 〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555(代表)
発売元／株式会社角川グループパブリッシング 〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3

eb! enterbrain

特別定価：本体895円＋税

雑誌61971-97 Ⓡ2010.11

Printed in Japan 図書印刷株式会社